

昭和57年度浪岡城跡発掘調査報告書

# 浪岡城跡 VI



浪岡町教育委員会

昭和57年度浪岡町城跡発掘調査報告書「浪岡城跡Ⅵ」正誤表

頁	行	正	誤
18		Fig.7 スケール単位→m	
23	29	鉄	鉄
37	11	出土遺物	出土遺物
39		Fig. 21のセクションポイント	
55		Fig. 32のセクションポイント	
64	10	直接構木	直接構木
71	14	(『浪岡城跡Ⅴ』P92)	(『浪岡城跡Ⅴ P92』)
76	2	底に「叶」の文字	底に叶の文字
83	4	小柄小刀	小柄小刀
#	30	鉄	鉄
91	13	短軸14.7cmの方形	短軸14.7cm 方形
105		Fig. 56 美濃・唐津等実測図	Fig. 56 美濃・唐津実測図
106	23	浪岡城落城	城跡落城
120	4	花崗岩製	花崗岩製
120	32	重複のため32行削除	
123	13	花崗岩製	花崗岩製
123	21	溝は磨耗のため、若干	溝は磨耗のため、若
133	9	Ⅱ類) る呈する。	Ⅱ類を呈する。
178	3	Castle	castle
#	19	the Japanese sword	the sword

昭和57年度浪岡城跡発掘調査報告書

# 浪岡城跡 VI

浪岡町教育委員会

## 序

浪岡城跡の発掘調査事業も昭和53年度から数えて5年目を終了し、このたび昭和57年度調査分の報告書を刊行できますことは、城跡に対する歴史的意義と文化財価値の高まりがあったからこそと思われます。これも町民各位ならびに、発掘を御支援いただきました関係各位の浪岡城跡への熱い声援があったからこそと、深く感謝申し上げる次第です。

発掘調査によって検出されました遺構や遺物は、浪岡城跡が北畠氏居城として津軽に君臨した中世という時代を反影して、多種多様な生活の痕跡を私たちに教えてくれます。このことは、遠く祖先の遺産を受け継ぐ現代の私たちにとって、貴重な文化財としての認識を再発見させてくれます。

今後は、浪岡城跡を「史跡公園」として整備し、長く後世に伝える作業も発掘調査と併行して進めなければなりません。関係各位の旧に倍しての御指導を賜りますれば幸甚に存じます。

昭和59年3月

浪岡町教育委員会

教育長 村上良民

## 例 言

1. 本書は、史跡浪岡城跡環境整備計画策定のため昭和57年度に実施した発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、国・県の補助を受け、総事業費 12,000,000 円で浪岡町・浪岡町教育委員会がおこなった。
3. 本書は、本文 6 項目、挿図 (Fig.) 68 枚、図版 (PL.) 60 枚、表 (Ch.) 77、付図 3 枚で構成し、編集は工藤清泰がおこなった。執筆は V を三辻利一氏が、他は工藤がおこなった。
4. 遺構の略称は次による。掘立柱建物跡 (SB)、竪穴遺構 (ST)、井戸跡 (SE)、土塁跡 (SA)、溝跡 (SD)、性格不明遺構 (SX)、焼上遺構 (SF)
5. 表 (Ch.) 中の遺物記号は、P (陶磁器類)、F (金属製品)、S (石製品)、M (木製品)、C (古銭) であり、発掘年度、グリッド名、遺構名、層位または覆土・床面等の出土層、遺物ナンバーの順序で記載するよう努めた。
6. 挿図の中で方位を示すものは、すべて磁北を示している。
7. 本書では、遺構別の出土陶磁器類を写真で載せるように努め、遺物の項目では実測図を主体に報告した。陶磁器については「浪岡城跡Ⅲ～Ⅴ」を参照ねがいたい。
8. 奈良教育大学三辻利一氏から「浪岡城遺跡出土珠洲系土器の胎土分析」という玉稿を賜った。記して感謝申し上げる次第である。
9. 遺物の整理、写真撮影、図版・挿図・表・付図の作製にあたっては下記の補助員によるところが多大であった。記して感謝申し上げる次第である。  
斎藤とも子、常田紀子、唐牛芳光、伊藤圭子、有馬千枝子、坂本里見、成田和佳子、対馬桂子
10. 英文説明については浪岡町立病院勤務棟方牧人氏の協力に拠るところが大きかった。記して感謝申し上げる次第である。
11. 本書を作製するにあたり、下記の関係機関、協力機関、各位から御指導を賜った。記して感謝申し上げる次第である。(敬称略)

文化庁記念物課、青森県教育委員会文化課、青森県埋蔵文化財調査センター、八戸市教育委員会、弘前市教育委員会、東北歴史資料館、上ノ国町教育委員会、福井県立朝倉氏遺跡資料館、瀬戸市立歴史民俗資料館、三上次男、矢部良明、藤沼邦彦、大橋康二、高嶋幸男、鈴木重治、戸沢武、西田宏子、垣内光次郎、青柳洋治、昆野靖、吉岡康輔

# 本文目次

序	1. 陶磁器類	98
例言	2. 鉄製品	110
I 調査に至る経緯(調査要項)	3. 銅製品	115
II 調査経過(調査日志より)	4. 石製品	119
III 検出遺構と主な遺物	5. 古銭	125
1. 掘立柱建物跡	6. その他の遺物	126
2. 竪穴遺構	V 浪岡城遺跡出土珠洲系 土器の胎土分析	129
3. 井戸跡	VI まとめ	131
4. その他の遺構	付 表	137
IV 出土遺物	英文説明	177

## 図版(PL.)目次

PL. 1 浪岡城跡航空写真	1	PL. 14 ST 167 (a)全景(内側から)(b)出土陶磁器類	34
PL. 2 児童による発掘調査	5	PL. 15 ST 170 (a)全景(東側から)(b)出土陶磁器類	36
PL. 3 掘立柱建物跡(a)SB20全景(西側から)(b)SB21全景(北側から)(c)SB23全景(北側から)	11	PL. 16 ST 171・173・179 (a)全景(南側から)(b)全景(東側から)	38
PL. 4 ST 153 (a)全景(西側から)(b)出土陶磁器類	22	PL. 17 (a)ST 171 出土陶磁器類 (b)ST 173 出土陶磁器類 (c)ST 179 出土陶磁器類	40
PL. 5 ST 155 (a)遺物出土状態(南側から)(b)全景(東側から)(c)SX93と共に(東側から)	23	PL. 18 ST 172 全景(東側から)	41
PL. 6 ST 155 出土陶磁器類	25	PL. 19 ST 175 (a)全景(北側から)(b)出土陶磁器類	42
PL. 7 ST 156 (a)全景(南側から)(b)出土陶磁器類	26	PL. 20 ST 176 (a)全景(北側から)(b)出土陶磁器類	42
PL. 8 ST 157 (a)全景(南側から)(b)出土陶磁器類	27	PL. 21 ST 177 (a)全景(南側から)(b)出土陶磁器類	45
PL. 9 ST 158 全景(南側から)	27	PL. 22 ST 178 (a)全景(東側から)(b)出土陶磁器類	46
PL. 10 ST 161 (a)ST 161 A 全景(西側から)(b)ST 161 B 全景(南側から)(c)ST 161 出土陶磁器類	29	PL. 23 ST 180・182 (a)全景(東側から)(b)ST 180 出土陶磁器類	47
PL. 11 ST 163 全景(東側から)	31	PL. 24 ST 181 全景(北側から)	49
PL. 12 ST 164 (a)全景(西側から)(b)出土陶磁器類	32	PL. 25 ST 183 (a)全景(北側から)(b)周出入口部分(炭化物出土状態)(c)出土陶磁器類	50
PL. 13 ST 166 (a)全景(北側から)(b)出土陶磁器類	33	PL. 26 ST 184 (a)全景(東側から)(b)同全景(南側から)(c)出土陶磁器類	52

PL.27	ST 185 (a)全景(東側から)(b)出土陶磁器類……………	54	(c)同文字拡大(d)e)f)出土漆器……………	83	
PL.28	ST 186 (a)全景(西側から)(b)出土陶磁器類……………	54	PL.44	SX 121出土陶磁器類……………	84
PL.29	ST 188・189, S D58, 59, SX 138・139 (a)全景(東側から)(b)同(北側から)……………	56	PL.45	(a)SX 122出土陶磁器類(b)SX 123出土陶磁器(c)SX 124出土陶磁器……………	86
PL.30	ST 190 (a)全景(北側から)(b)出土屋鉢……………	58	PL.46	SX 125 (a)全景(南側から)(b)同遺物出土状態(c)同出土陶磁器……………	87
PL.31	SE60 (a)全景(北東側から)(b)同築石状態(c)出土陶磁器類……………	61	PL.47	SX 129 (a)全景(南側から)(b)同遺物出土状態(c)出土陶磁器類……………	89
PL.32	SE61(a)断面層序b)灰付皿出土状態(c)完掘状態(d)同出土模文土製品(e)同出土木製品……………	62	PL.48	(a)SX 132出土須恵器1(c)SX 133全景(西側から)(c)SX 135全景(西側から)d)同出土白磁小杯……………	90
PL.33	SE61出土陶磁器……………	63	PL.49	(a)SX 136全景(東側から)(b)SX 137全景(東側から)(c)SX 139全景(北側から)……………	91
PL.34	SE67 (a)完掘状態(b)焼鉢出土状態(c)同出土陶磁器……………	67	PL.50	(a)SX 142出土土目鉢(b)SX 144全景(南側から)(c)同鉄鍋出土状態(d)SX 145全景(北側から)……………	92
PL.35	SE68 (a)発掘状況(b)同出土陶磁器類……………	69	PL.51	(a)SD55全景(東側から)(b)SD58, 59全景(北側から)(c)SD61発掘作業風景(南側から)……………	94
PL.36	SX81 (a)完掘状態(b)出土土師器等……………	72	PL.52	SA 05 (a)全景(東側から)(b)全景(南側から)……………	95
PL.37	(a)SX 89全景(東側から)(b)SX 90全景(南側から)(c)SX 93出土陶磁器……………	73	PL.53	遺構外出土陶磁器……………	96
PL.38	SX 95出土土師器……………	75	PL.54	鉄製品(1)……………	112
PL.39	(a)SX 96出土陶磁器類(b)SX 97出土遺物(c)SX 100全景(南側から)……………	76	PL.55	鉄製品(2)……………	113
PL.40	(a)SX 104全景(北側から)(b)SX 107出土耳皿(c)SX 109全景(南側から)(d)SX 109出土漆椀……………	78	PL.56	銅製品(1)……………	116
PL.41	SX 111 (a)奉礼出土状態(b)石製品出土状態(c)出土陶磁器(d)出土草札……………	79	PL.57	銅製品(2)……………	118
PL.42	SX 120 (a)全景(西側から)(b)出土陶磁器(c)小刀出土状態……………	81	PL.58	石製品(1)……………	122
PL.43	SX 121 (a)全景(南側から)(b)出土漆器類……………		PL.59	石製品(2)……………	124
			PL.60	鋳型・土師器・須恵器……………	127

## 挿図(Fig.)目次

Fig. 1	浪岡城跡全体図……………	3	Fig. 12	ST 156 実測図……………	26
Fig. 2	グリッド配属図と発掘区……………	5	Fig. 13	ST 157・158 実測図……………	28
Fig. 3	S B 20 実測図(折込)……………	9・10	Fig. 14	ST 161 A・161 B 実測図……………	30
Fig. 4	S B 21 実測図(折込)……………	12	Fig. 15	ST 163 実測図……………	31
Fig. 5	S B 23 実測図……………	13・14	Fig. 16	ST 164 実測図……………	32
Fig. 6	S B 24 実測図(折込)……………	15・16	Fig. 17	ST 166, SX 124 実測図……………	34
Fig. 7	S B 25 実測図(折込)……………	17・18	Fig. 18	ST 167 実測図……………	35
Fig. 8	S B 26 実測図(折込)……………	19・20	Fig. 19	ST 169 実測図……………	36
Fig. 9	S B 27 実測図……………	21	Fig. 20	ST 170 実測図……………	37
Fig. 10	ST 153 実測図……………	22	Fig. 21	ST 171・173・179 実測図……………	39
Fig. 11	ST 155, SX 93 実測図……………	24	Fig. 22	ST 172 実測図……………	41

Fig.23	ST175、SX125・127 実測図	43	Fig.45	SX100 実測図	77
Fig.24	ST176 実測図	44	Fig.46	SX114 実測図	77
Fig.25	ST177 実測図	44	Fig.47	SX119・131 実測図	80
Fig.26	ST178 実測図	46	Fig.48	SX120 実測図	82
Fig.27	ST180・182、SE69 実測図	48	Fig.49	(a)SX121 実測図 (b)SX122 実測図	85
Fig.28	ST181 実測図	49	Fig.50	SX129 実測図	88
Fig.29	ST183 実測図	51	Fig.51	柱格不明遺構実測図 (a)SX123 (b)SX133 (c)SX134 (d)SX135 (e)SX136 (f)SX137	93
Fig.30	ST184 実測図	53	Fig.52	SA05 実測図	95
Fig.31	ST186 実測図	55	Fig.53	青磁実測図	99
Fig.32	ST186 実測図	55	Fig.54	白磁・赤絵・染付実測図	101
Fig.33	ST188・189、SX138・139、SD58 59 実測図	57	Fig.55	尖付実測図	103
Fig.34	ST190 実測図	58	Fig.56	美濃・香津等実測図	105
Fig.35	ST193 実測図	59	Fig.57	天口・鉄輪臺等実測図	107
Fig.36	SE60 実測図	60	Fig.58	樽鉢等実測図	109
Fig.37	SE61 実測図 (a)平面図 (b)断面図 (c)木枠 実測図	64	Fig.59	鉄製品実測図	111
Fig.38	SE65 実測図	65	Fig.60	銅製品実測図	115
Fig.39	SE66 実測図	66	Fig.61	石製品実測図	121
Fig.40	SE67 実測図 (a)平面図 (b)遺物出土状態 (c)木枠実測図	68	Fig.62	古銭重量別分布図	125
Fig.41	SE68 実測図	70	Fig.63	須惠器・土師器実測図	128
Fig.42	柱格不明遺構実測図 (a)SX80 (b)SX80(c)S X98 (d)SX99 (e)SX102 (f)104 (g)SX111	74	Fig.64	浪岡城跡出土球系土層分析図	130
Fig.43	SX94 実測図	75	Fig.65	竪立柱建物跡配置図	131
Fig.44	SX95 断面図	75	Fig.66	竪立柱建物跡様式図	132
			Fig.67	竪穴遺構様式図	133
			Fig.68	竪穴遺構分類別規模分布図	134

## 付 図

付図1 発掘調査A区全体図

付図2 発掘調査B区全体図

付図3 発掘調査C区全体図

## 付 表 (Ch.) 目 次

Ch.1	SB20柱穴計測表	137	Ch.10	ST156 注記表	140
Ch.2	SB21柱穴計測表	137	Ch.11	ST157・158 注記表	141
Ch.3	SB23柱穴計測表	137	Ch.12	ST161 注記表	142
Ch.4	SB24柱穴計測表	138	Ch.13	ST163 注記表	143
Ch.5	SB25柱穴計測表	138	Ch.14	ST164 注記表	143
Ch.6	SB26柱穴計測表	138	Ch.15	ST166、SX124 注記表	143
Ch.7	SB27柱穴計測表	139	Ch.16	ST167 注記表	144
Ch.8	ST153 注記表	139	Ch.17	ST169、SD61 注記表	145
Ch.9	ST155 注記表	140	Ch.18	ST170 注記表	145



Ch. 19	ST 171-173-179 注記表	145	Ch. 48	S X 98 注記表	159
Ch. 20	ST 172 注記表	147	Ch. 49	S X 99 注記表	159
Ch. 21	ST 175, S X 125-127 注記表	147	Ch. 50	S X 100 注記表	160
Ch. 22	ST 176 注記表	148	Ch. 51	S X 102 注記表	160
Ch. 23	ST 177 注記表	148	Ch. 52	S X 104 注記表	160
Ch. 24	ST 178 注記表	148	Ch. 53	S X 107 注記表	160
Ch. 25	ST 180-182, S E 69 注記表	149	Ch. 54	S X 109 注記表	160
Ch. 26	ST 181 注記表	150	Ch. 55	S X 111 注記表	160
Ch. 27	ST 183 注記表	150	Ch. 56	S X 114 注記表	161
Ch. 28	ST 184 注記表	151	Ch. 57	S X 119-131 注記表	161
Ch. 29	ST 185 注記表	152	Ch. 58	S X 120 注記表	161
Ch. 30	ST 186 注記表	153	Ch. 59	S X 121 注記表	162
Ch. 31	ST 188-189, S X 138-139, SD 58-59 注記表	153	Ch. 60	S X 122 注記表	164
Ch. 32	ST 190 注記表	153	Ch. 61	S X 123 注記表	164
Ch. 33	ST 193 注記表	154	Ch. 62	S X 124 注記表	165
Ch. 34	S E 60 注記表	154	Ch. 63	S X 125 注記表	165
Ch. 35	S E 61 注記表	154	Ch. 64	S X 129 注記表	165
Ch. 36	S E 65 注記表	155	Ch. 65	S X 132 注記表	166
Ch. 37	S E 66 注記表	155	Ch. 66	S X 134 注記表	166
Ch. 38	S E 67 注記表	155	Ch. 67	S X 135 注記表	166
Ch. 39	S E 68 注記表	156	Ch. 68	S X 136 注記表	167
Ch. 40	S X 81 注記表	157	Ch. 69	S X 142 注記表	167
Ch. 41	S X 89 注記表	157	Ch. 70	S A 05 注記表	167
Ch. 42	S X 90 注記表	158	Ch. 71	遼陽外出土陶磁器注記表	167
Ch. 43	S X 93 注記表	158	Ch. 72	陶磁器出土區一覽表	167
Ch. 44	S X 94 注記表	158	Ch. 73	鉄製品注記表	168
Ch. 45	S X 95 注記表	159	Ch. 74	銅製品注記表	169
Ch. 46	S X 96 注記表	159	Ch. 75	石製品注記表	170
Ch. 47	S X 97 注記表	159	Ch. 76	古錢計測葉針表	171
			Ch. 77	鍍型・須惠器・土師器注記表	176

PL.1 浪岡城跡航空写真



# I 調査に至る経緯

本年度の調査は下記の調査要項に従って実施した。

## 昭和57年度史跡浪岡城跡発掘調査要項

### 1. 調査の目的

浪岡城跡は、北畠氏居館として浪岡町民の精神的柱石となっている中世城館である。浪岡町では、将来「史跡公園」として整備する計画に拠って昭和53年から発掘調査を継続、環境整備における基礎資料を得るための調査である。

### 2. 調査期間

発掘作業 昭和57年6月1日～10月30日

整理作業 昭和57年11月1日～昭和58年3月25日

### 3. 調査対象区域と面積

青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字五所（浪岡城跡北館）

3,000 ㎡

### 4. 調査員等

調査顧問	尾尾 俊哉	(前)弘前大学教育学部教授(現国立歴史民俗博物館教授)
〃	村越 潔	弘前大学教育学部教授
〃	佐々木達夫	金沢大学文学部助教授
〃	高島 成信	八戸工業大学助教授
調査員	宇野 栄二	浪岡町文化財審議委員
〃	葛西 善一	常盤小学校教諭
〃	佐藤 仁	弘前高等学校教諭
〃	奈良岡洋一	藤崎岡芸高等学校講師
〃	三浦貞栄治	浪岡高等学校教諭

### 5. 調査協力員等

調査協力員	永井治、三浦寿徳、間山祐司、対馬幸彦、中村真理子、三橋容子、羽沢多鶴子、小倉睦子、相田陽子、伊藤康子、宮城恵美、浜中鶴美、阿部禎子、天内俊英、津川賢、斎藤豊
調査補助員	唐牛芳光、坂本里見、有馬千枝子、斎藤とも子、成田和佳子、常田紀子、葛西静枝、伊藤圭子、伊藤フサ、佐藤美美子、木村美代子、雪田朝彦
調査作業員	石沢ムツ、工藤初江、山内ヤエ、常田節子、長谷川春雄、津川百合子、工藤ツツ、木村栄子、猪股みつえ、三浦秋子、山平リエ、古村光子

小笠原昭子、長谷川ちよ、奈良岡英子、奈良岡きぬ、鎌田アサ、長利ミツ  
村岡せい子、奈良岡昭江、山田ヒロ子、斎藤カチ子、佐藤ヒサ、太田勝朗

6. 調査主体者

浪岡町 青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村 101 の 1

7. 調査担当者（事務局）

浪岡町教育委員会 社会教育課

教育長 村上 良氏

社会教育課長 中畑 康一

社会教育係長 常田 典昭

主 事 工藤 清泰（主担）

” 長谷川 理

” 成田 和子

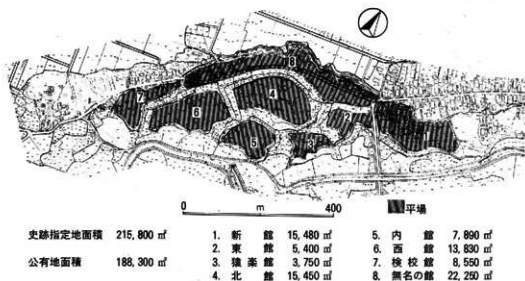
8. 調査方法

平場はグリッド方式による平面調査とし、掘跡はトレンチ方式による規模確認調査とする。

9. 報告書の刊行

浪岡町教育委員会が作製、刊行する。

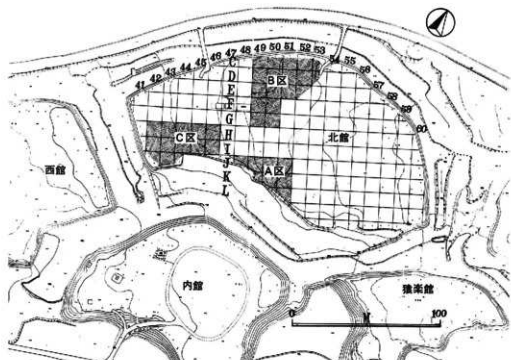
Fig. 1 浪岡城跡全体図



## II 調査経過（調査日誌より）

- 5・25 発掘調査員打ち合せ会。本年度の調査にあたって、遺構検出時の注意事項や年間調査計画を確認する。
- 6・1 発掘作業開始。雨のため、作業に必要な器具・器材の準備をする。
- 6・2 仮グリッド設定。J・K・L-50区の表土剥ぎ開始。J・K・L-48・49・50・51区をA区とする。
- 6・9 遺構の検出が多くなる。（SB21・ST 153～157・SX93など）
- 6・15 完掘した遺構から実測、レベリングを始める。（A区）
- 6・22 F・G-49・50区の表土剥ぎ開始。C・D・E-49・50・51・52区を加えB区とする。
- 7・1 A区SE61の木枠内より染付皿(PL.33-1)が出土。取り上げて接合するとはほぼ完成となる。
- 7・5 SE61の実測を終了し、木枠を取り上げる。この頃から暑さが続く。
- 7・13 A区の実測、レベリングが終了し、発掘の主体はB区に移る。C50区から土塁・櫓列状の遺構(SA05)、E51・52区からSB12の未調査部分柱穴を検出、E・F50区では白色粘土とともに黒漆塗りの葺札が出土し、一部に金箔が認められた。
- 7・28～30 児童による発掘調査。（PL.2）小学校5・6年生を対象にした体験学習。
- 8・2 H・I・J-42・43・44・45・46区の調査も始める。C区とする。
- 8・3 夏休み中とあって弘前大学学生の応援も得て、作業は順調に進む。
- 8・10 B区・C区における各種遺構の掘り下げ、実測が続く。
- 8・15 I44区のSE67より木枠を検出したが、遺物はたいして多くない。
- 8・16 H43区SX121を掘り下げる。各種陶磁器、石製品、鉄製品の他に床面に近い部分から、鶴文様の漆器片や「大上」「叶」の文字がある漆器碗も出土した。
- 8・19 SE67木枠の取り上げ終了。C区を主体に調査を進める。
- 8・26 H・I-42・43・44区で検出した柱穴から掘立柱建物跡の推定をおこなう。SB23・26は5間×7間と同規模であったが長軸に相違がみられた。他にも2～3棟確認。
- 9・8 C区の各種遺構は、ほぼ掘り下げが終了し一部は実測も始める。
- 9・14 B区を縦断するSD61（平安時代末期）の掘り下げを開始。中世の遺構面との重複が激しいため、遺物の取り上げは慎重にならざるを得ない。
- 9・15～10・11 現場担当の工藤が総理府青年海外派遣団員として中国を訪問。この間、実測作業を中心に進める。
- 10・26 現場説明会を開催。
- 10・29 現場作業を終了し、整理事業を始める。
- ※出土遺物・実測図面・写真等は、浪岡町教育委員会が保管している。

Fig. 2 グリッド配置図と発掘区



PL. 2 児童による発掘調査



### Ⅲ 検出遺構と主な遺物

本年度の調査で検出した遺構には、掘立柱建物跡・竪穴遺構・井戸跡・溝跡・土塁状遺構・性格不明遺構などがあり、明確にその遺構の性格を理解できるものは掘立柱建物跡・井戸跡以外困難な状況にある。特に、竪穴遺構の場合、遺構確認から掘り下げの段階で出土遺物を識別しなければならないため、遺構番号を付して掘り下げるのであるが（たとえばST）、柱穴を有せず上部構造がはっきりしない遺構になった場合、本調査で意図している竪穴遺構（ST略称）とは認定されない場合もある。本報告にあっても、遺構別の概念を明確にして対処すべきであろうが、遺構・遺物の整理が事務的に煩雑になるため、遺構略称の通し番号順に報告し、まとめの段階で整理してみたいと思う。

また、遺構の中では構造上の特色、出土遺物の特色、その他特記事項のあるものを中心に報告し、他の遺構については検出区・規模等を述べるにとどまることをご容赦いただきたい。

#### 1. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、A・B・C区あわせて7棟以上検出した。しかし、調査によって検出された柱穴群からすれば、建物跡として配列できる柱穴はあまりにも少なく、城内での明確な遺構把握が困難な状況にあることを暗示している。今回、掘立柱建物跡として認定したものは、規模が2間×3間以上のものに限定し、遺構の重複によって柱穴が消滅している場合でも存在した可能性を考慮して報告する。

S B20 (PL. 3・Fig. 4・Ch. 1)―E・F 49・50・51区検出。長軸7間、短軸5間の規模を有し、長軸方向はE-17°-Nである。付属する柱穴は、ほぼ方形の掘り方を呈し一辺50cm前後、深さは50~60cmぐらいのものが多い。東側および西側に底状の部分があり、2間×3間の部屋が2つ、3間×3間の部屋が1つ配置されるようであり、また南側西部に1間×2間の張り出しが存在し、出入口部分と考えられる。柱穴間の寸法は、平均201.8cmである。柱穴からの出土遺物としては、埴輪・羽口・銚型・鉄釘・染付皿・不明製製品等があり、本建物跡の範囲に含まれるSX 111出土の革札等も関係ある遺物と考えることもできる。重複する遺構にはS B12（新旧不明）SX 104（新）が存在する。

S B21 (PL. 3・Fig. 4・Ch. 2)―J・K 51区検出。長軸4間、短軸2間の規模を有し、長軸方向はN-5°-Wである。柱穴の形状は方形基調であるが一部円形を呈し、大きさは一辺40cm前後、深さ40~60cmぐらいのものが多い。柱穴配置は北半が2間×2間の中央に柱穴（Pit 5）を配するのに対し、南半はみられず、偶然かもしれないがST 155がその中にすっかりおさまっている。柱穴間の平均寸法は、210.8cmである。柱穴から鉄釘が1点出土し

ている以外遺物はなく、重複する遺構 S X 93・S X 81 (共に旧) は本遺構より古い時期のものである。

S B 23 (Pl. 3・Fig. 5・Ch. 3) - H・I・J 42・43区検出。長軸 7 間、短軸 5 間の規模を有し、長軸方向は N-20°-W である。柱穴の形状は方形であり、一辺 65cm ぐらいの大きさ、深さは 50~20cm ぐらいと格差があるものの、それは遺構確認面が後世削られていたため、平均すれば 30cm 前後が多い。柱穴配置は、南側の 4 間にて東・南・西側に一間の庇を廻らしている以外、北側部分では遺構の重複等によって明瞭に配置を確認できなかった。柱穴間の寸法は平均 195.0cm である。重複する遺構としては S X 120・S X 121 (新) と S T 170・S X 138 (旧) があり、柱穴内から青磁・染付・鉄釘・銅製品・銅滓・古銭等が 1~2 点出土している。

S B 24 (Fig. 6・Ch. 4) - I・J 43・44区検出。長軸 (東西方向) 5 間、短軸 (南北方向) 5 間の規模を有すると考えられるが、明確に確認できなかった。東西方向は 6 間ぐらいになる可能性もある。東西方向は E-28°-N であり、柱穴配置も最小単位 1 間×2 間が東西 4、南北 2 の集合によって構成されていることから、建築上住居的なものではないと推定される。柱穴は方形基調であり、一辺 50cm クラスのもの一辺 35cm のものに区別でき、深さもそれぞれ対応がみられる。柱穴間の寸法は平均 196.8cm である。出土遺物はない。

S B 25 (Fig. 7・Ch. 5) - I 44区検出。長軸 6 間、短軸 4 間の規模を有し、長軸方向は E-35°-N である。柱穴は方形基調で削られているが一般に不整形を呈するものが多く、平均一辺 42.1cm、深さ 48.2cm を示す。Pit 16~19、Pit 21~27 の 2 間×3 間の構造をベースに規模を拡大したような建物跡であり、南側に庇状の部分が存在する。柱穴間の寸法は平均 197.5cm。柱穴内から鉄砲玉 (PL. 56-2) と古銭が 1 枚出土している。

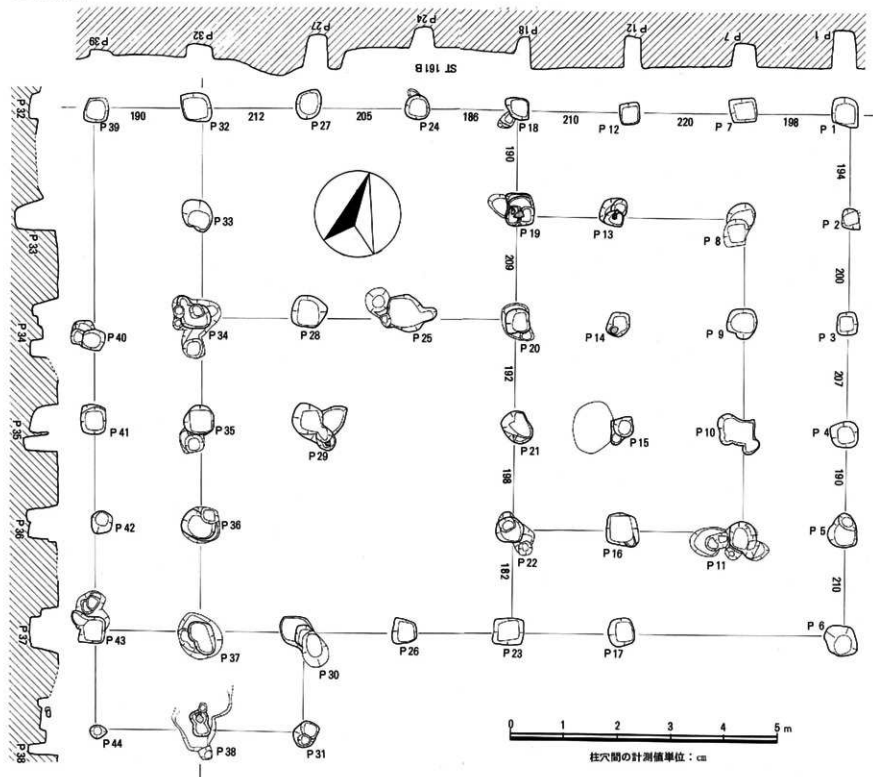
S B 26 (Fig. 8・Ch. 6) - H・I 43・44区検出。長軸 7 間、短軸 5 間の規模を有し、長軸方向は N-30°-W である。柱穴は方形基調であり、一辺 43.9cm、深さ 41.4cm が平均である。柱穴配置から、東西南北に庇を有し、3 間×5 間の母屋に 2~3 の部屋割りが存在するようである。柱穴間の寸法は平均 197.8cm であり、柱穴内から青磁・染付・鉄釘等が出土している。重複する遺構として S B 23、S X 123 (新旧不明) があり、特に S B 23 は長軸方向だけが相違するだけで、規模・柱穴配置は近似しており注目される。

S B 27 (Fig. 9・Ch. 7) - H・I 45区検出。長軸 4 間、短軸 2 間の規模と考えられる。長軸方向は N-24°-W であり、柱穴間の平均寸法は 198.1cm である。柱穴の形状は方形基調であり、一辺あたりの平均 50.3cm、深さは 48.1cm を示し、柱痕と考えられる掘り込み部分が半数近く存在する。重複する遺構としては、S X 119・131 (新旧不明) がある。

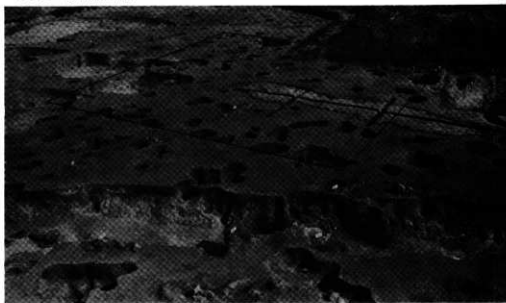


以上の掘立柱建物跡以外に、柱穴の配列および建物跡等の存在が推測される地域は、H・I  
44・45区の区域とE・F・G49・50区などがあり、さらに検討を加える必要がある。

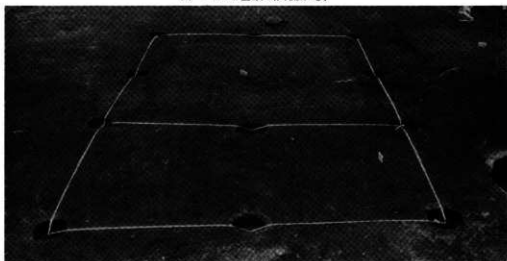
Fig. 3 SB20実測図



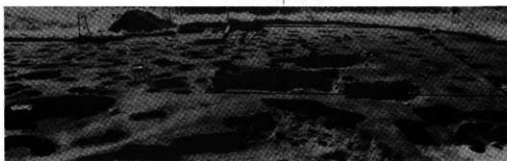
PL. 3 掘立柱建物跡



(a) S B 20全景 (西側から)



(b) S B 21全景 (北側から)



(c) S B 23全景 (北側から)

Fig. 4 SB21実測図

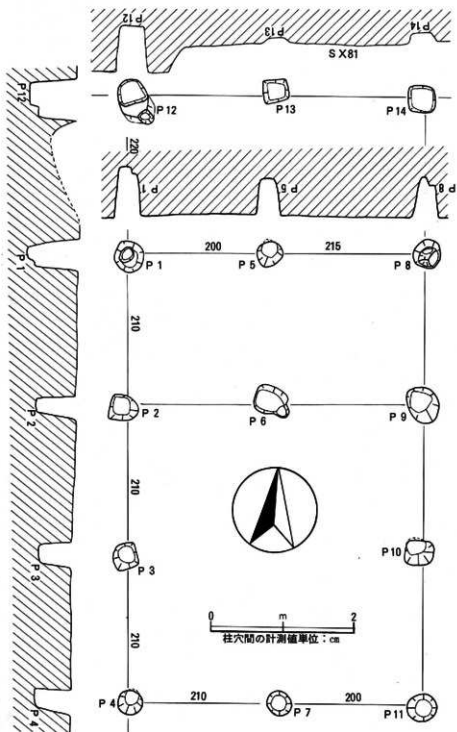


Fig. 5 S B23実測図

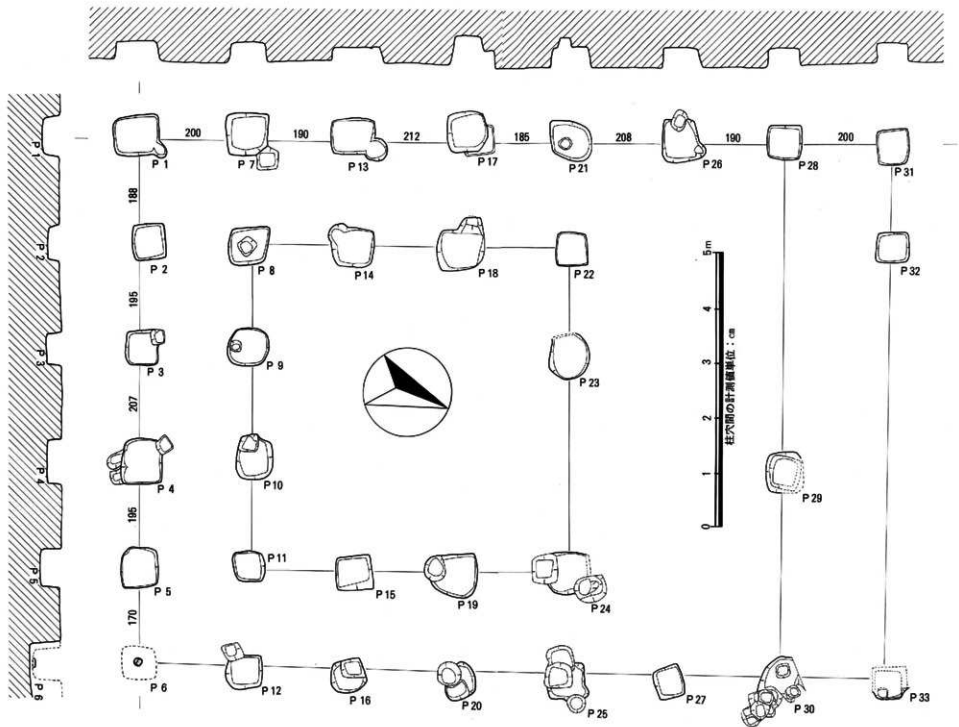


Fig. 6 S B 24実測図

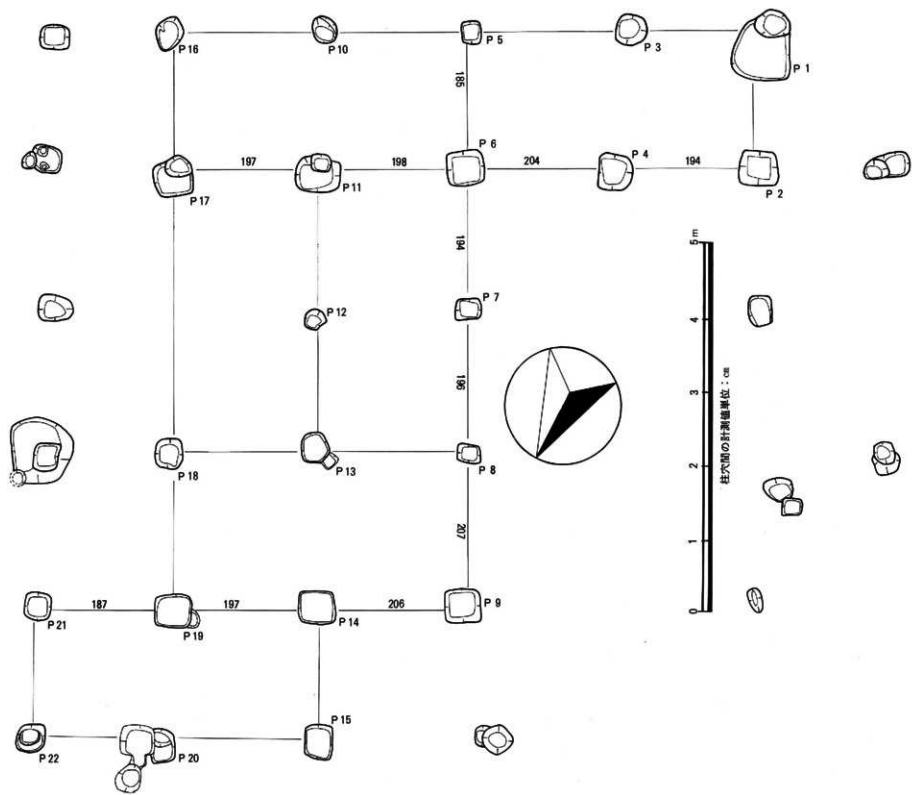


Fig. 7 SB 25 実測図

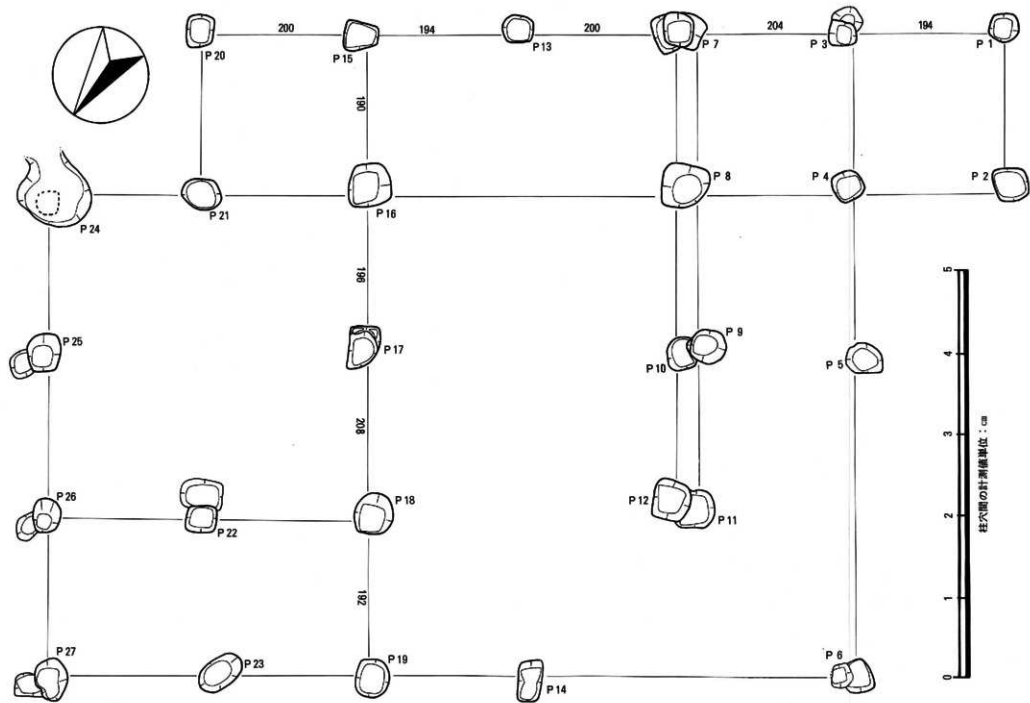


Fig. 8 S B 26実測図

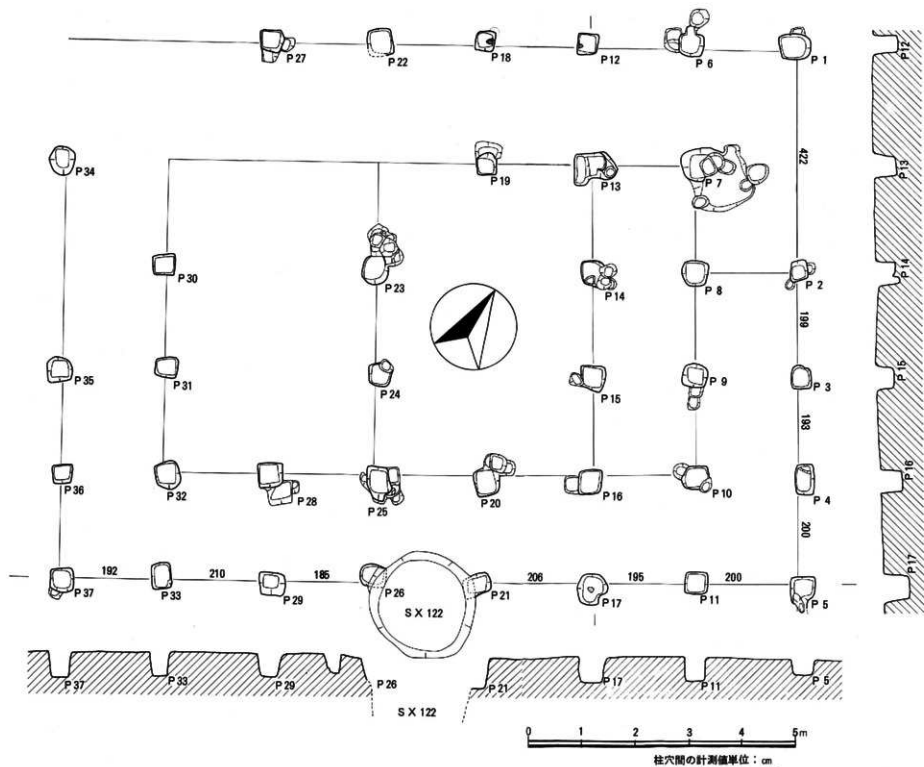
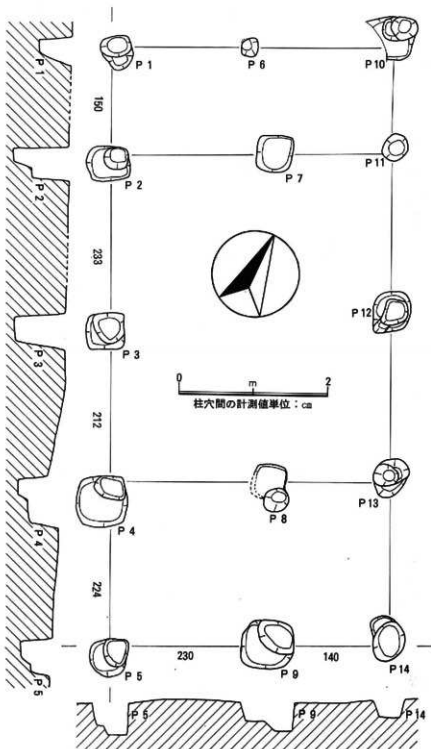




Fig. 9 S B27実測図



## 2. 竪穴遺構

ST 153 (PL. 4・Fig. 10・Ch. 8) - J・K51区検出。長軸 307 cm、短軸 282 cm、深さ 51.2 cm。柱穴は Pit 1～Pit 6 までが基本配置であり、東西壁端に 3 個ずつ並ぶ。S X81 (旧) と重複し、覆土は自然堆積の状態を呈する。

出土遺物には、青磁 (2～5・7) 染付 (8～10・13) 白磁 (14～16) 唐津 (11・12) 瓦器 (1・6) 美濃灰釉 (24) 美濃褐釉 (20) 天目 (18) 埴塙 (23) の他鉄鐵 (PL. 54-35, PL. 55-14)、鉄釘、鉄砲玉 (PL. 56-4) などの鉄

製品も多くある。

本遺構の特徴は、陶磁器の中で唐津皿の出土と、染付碗 (9) および染付菴筒底皿 (13・Fig. 55-1) の見込み文様が現在まで出土したものの中には見あたらないという点である。

ST 154 → S E60へ変更。

## PL. 4 ST 153

(a) 全景 (西側から)

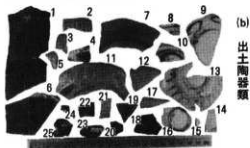
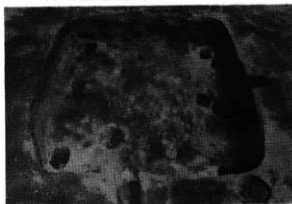
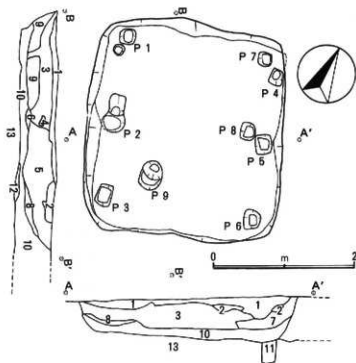


Fig. 10 ST 153 実測図



ST 156 (PL.5・Fig.11・

Ch. 9)

K51区検出。長軸 333 cm、短軸 322 cm、深さ 66.5 cm のほぼ正方形プランを呈する。Pit 1～Pit 8 までが付属する柱穴と考えられ、南北中央部の Pit 4 と Pit 8 が比較的規模が小さいため、他の 6 個が主柱穴になるであろう。S X 93 (旧) と重複し、さらに S B 21 (Fig.11 のスクリーントーンの柱穴) が周囲をめぐる。新旧関係は不明である。覆土中間には粘土を含んだ土層が認められ、その中からの出土遺物も多い (PL. 5-1a)。

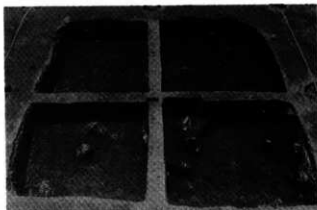
出土遺物は多量に存在する。

陶磁器については、青磁皿 (16) が 1 点、白磁皿 (19～21) 同小坏 (22)、染付碗 (10) 同皿 (11・12・14)、美濃灰軸皿 (17・18) 同褐軸皿 (2・3・8) 瀬戸鉄軸茶入 (7)、天目碗 (4)、唐津皿 (9・13・15・23・24)、播鉢 (1・6) などがあり、青磁の量が少ないのに対して染付はいわゆる万暦タ

イプのものが入り、唐津の量が多いという特徴が存在する。

金属製品には、鉄釘、鉄 (PL.54-18)、鎌 (PL.55-2)、木質部が付着している鉄製品 (PL.54-34)、小柄 (PL.56-7)、不明鉄製品、不明銅製品、鉄滓、銅滓があり、石製品には石鉢、硯 (PL.58-3, Fig.61-3)、火打石、古銭は総計 13 枚 (元豊通宝・元祐通宝・無文銭など)、漆器被膜などが出土している。

PL. 5 ST 156



(a) 遺物出土状態 (南側から)

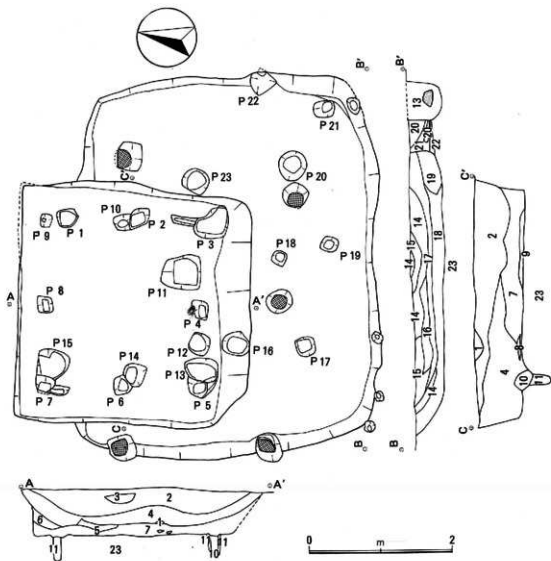


(b) 完掘状態 (東側から)

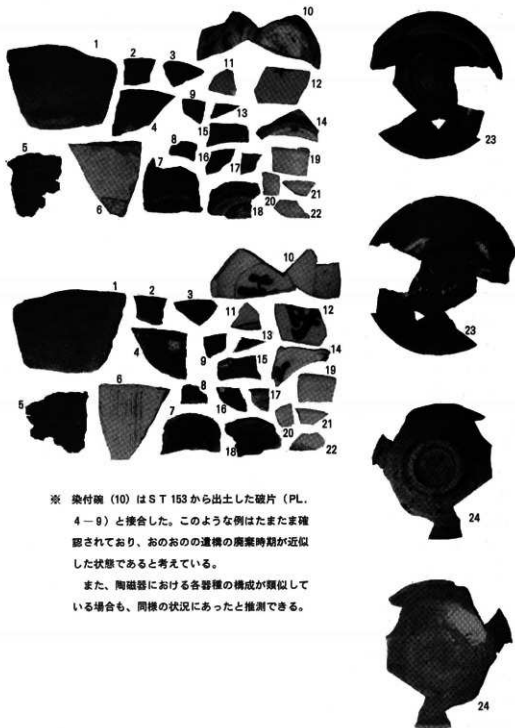


(c) S X 93 と共に (東側から)

Fig. 11 ST 155・S X93実測図



ST 155の覆土堆積と遺物の出土状態をみると、隣接するST 153やSE61との類似が認められる。それは、16世紀最終末期の特徴とされる唐津および万暦タイプの染付が共存して出土するという点である。現状では、鉄製品・銅製品・石製品等による年代区分は無理な状況にあるため、必然的に陶磁器主体の年代観を優先させている。その中で、注意すべき点は、陶磁器が伝世的要素を強く含んでいるということであり、このような遺構出土の陶磁器片は廃棄の時点でそれ以前の特徴を有する陶磁器片をかなり数多く包含している事実を考慮しなければならない。その上で、廃棄時期を特徴づける器種・器形を充分に把握する必要がある。



※ 染付碗 (10) は ST 153 から出土した破片 (PL. 4-9) と接合した。このような例はたまたま確認されており、おのおの遺構の廃棄時期が近似した状態であると考えている。

また、陶磁器における各器種の構成が類似している場合も、同様の状況にあったと推測できる。

Ch. 10) - J・K 50区検出。長軸 246 cm、短軸 240 cm、深さ 55 cm で正方形プランを呈する。

Pit 1 ~ Pit 4 の柱穴が四隅に配置されており、Pit 1 に隣接して 8 個の川原石が床面直上で集石している。覆土は自然堆積の状態を呈し、他の遺構との重複関係はみられない。

出土遺物としては、青磁碗 (1~3)、染付碗 (4) 同皿 (5~7)、美濃灰釉皿 (8)、埴塙 (9) 等の陶磁器類の他、鉄製品として鉄釘 6、不明鉄製品 11、鉄滓 3、銅製裝飾品 (PL. 56-12) が床面から、古銭が 2 枚 (判読不能) などがある。

鉄製品については腐蝕が激しいためどのような機能を有するものなのか理解できないものが多く、鉄滓等の出土とあわせて、本遺構を特徴づけている。

ST 157 (PL. 8・Fig. 13・Ch. 11) - J 48・49区検出。長軸 552 cm、短軸 465 cm、深さ 77 cm、南側東部分に階段状の出入口を有し、方向は S-6°-E である。柱穴配置は長軸方向が 5 間、短軸方向が 4 間を呈するが基本配置は 3 間×2 間であり、それぞれ中間に補助的柱穴を配

(a) 全景 (南側から)



(b) 出土陶磁器

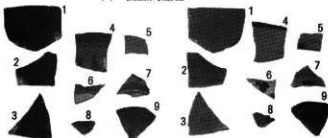
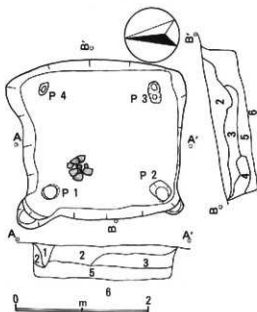
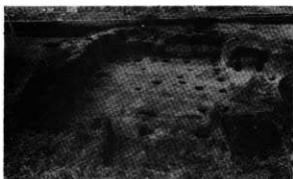


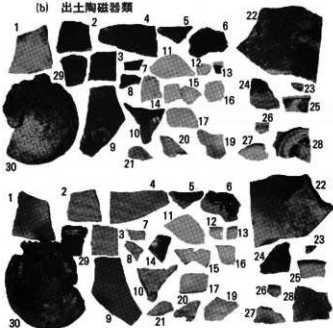
Fig. 12 ST 156 実測図



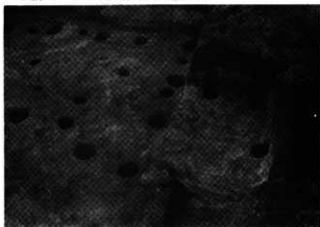


(a) 全景 (南側から)

(b) 出土陶磁器類



PL. 9 S T 158 全景 (南側から)



したものであろう。すなわち、出入部分に関連する柱穴がPit 1とPit 2、短軸がPit 3、Pit 5、Pit 8、Pit 14、Pit 18、Pit 20、長軸方向がPit 8、Pit 10、Pit 12、Pit 14、Pit 20、Pit 22、Pit 25、Pit 3の構成と考えられる。SB 19 (新)、ST 158 (新)との重複関係がみられ、覆土は自然堆積の状態を呈する。

出土遺物には青磁碗(14・19)同香炉(20)、白磁皿(11・12)染付皿(13・25)、中国産と思われる鉄軸壺(2~8・24)、瀬戸壺(9)同甕(10)、美濃灰軸皿(15~17、26~28)唐津皿(21)、播鉢(22)、瓦器手焙り(1)、埴塙(29・30)などの陶磁器類。鉄釘9本(PL. 54-26など)、小札(PL. 54-11・13)、火打金、鉄鍋、不明鉄製品6とともに鉄滓1、銅滓が18も出土している。古銭は治平元宝ただ1枚、石製品では石鉢が1点出土している。

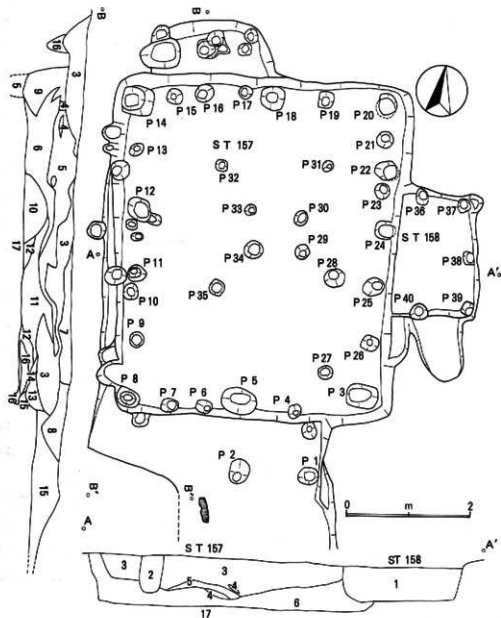
本遺構は、規模の大きさとともに埴塙や鉄滓の出土および中国産と考えられる鉄軸壺(二次焼成痕あり)の出土に特徴がある。

ST 158 (PL. 9・Fig.13・Ch. 11) — J 49区検出。長軸 195 cm、短軸 185 cm、深さ 54 cm、南壁東側に舌状スロープの張り出しを有する。柱穴配置は 2 間×1 間で ST 157 (旧) と重複している。

(ST 159 — D51区検出。規模不明。)

(ST 160 — D51区検出。規模不明。)

Fig. 13 ST 157・ST 158 実測図



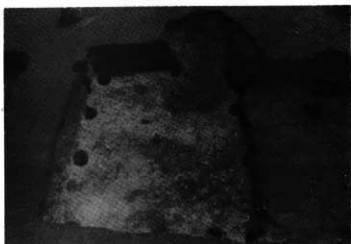


ST 161 (PL.10・Fig.14・Ch.12) —E50区検出。掘り下げ後、2基の竪穴遺構が重複していることがわかりST 161 AとST 162 Bに区分した。

ST 161 A—長軸335cm、短軸273cmの長方形プランを呈し、深さは54cm。東壁南側舌状スロープの張り出しを有し、その方向はE-8°-Nである。柱穴配置は長軸方向3間、短軸方向2間を呈し、Pit 1～Pit 10までが付属する柱穴である。覆土は人為堆積の状態を呈し、ST 161 B(旧)と重複している。

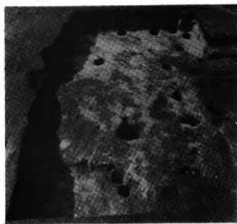
ST 162 B—長軸292cm、短軸(262)cm、深さ40cm。柱穴配置は明確でなく、Pit 16・Pit 18・Pit 19・Pit 21・Pit 22・Pit 24の1間×2間が付属するものであろうか。覆土は暗褐色

PL. 10 ST 161



(a) ST 161 A 全景  
(西側から)

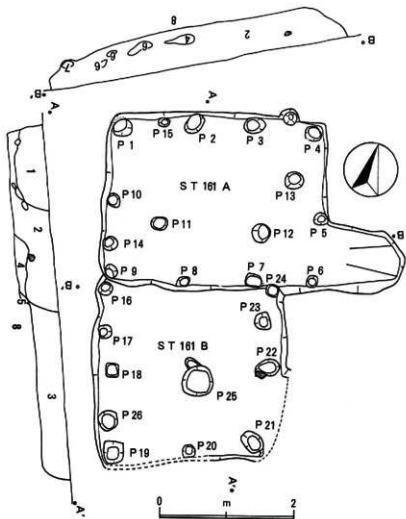
(b) ST 161 B 全景(南側から)



(c) ST 161 出土陶磁器類



Fig. 14 ST 161 A・ST 161 B実測図



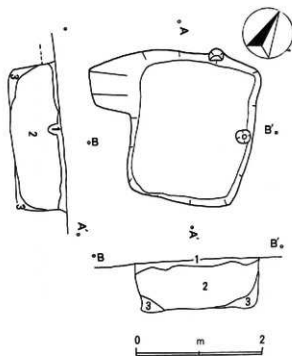
土に黄褐色砂質土を含む単層であり、北側でST 161 A (新) 南側でST 177 (新旧不明) と重複している。また、東壁両側が他の遺構と重複しているため明確でないが、東側に張り出す出入口部分が存在した可能性もある。

ST 161 AおよびST 161 Bから出土した遺物は、分布状態が未整理の段階なので一括して報告する。陶磁器では、青磁碗(4・6) 同皿(5)、染付碗(2) 同皿(1・3)、美濃灰釉皿(7～9)、播鉢(10・11)、越前甕(12)があり、土器では、瓦器手焙り脚部(13)、埴埴(14～16)、溶解物(17～19)がある。鉄製品では、鉄釘14本、鉄滓2があり、銅製品では不明銅製品1、照率元宝1がある。

ST 162 一欠番



Fig. 15 ST 163 実測図



Ch.13) —D50区検出。長軸 236cm、短軸 194cm、深さ79cm。西壁北側に急傾斜を有する張り出しが存在し、その方向はW-19°-Sである。柱穴は東壁中央部に1個存するが、対応する柱穴等がみあたらず、上部構造の有無も疑問な点が多い。覆土はおそらく自然堆積と思われるが、暗褐色土と黄褐色砂質土の混入した単純層であり短時間に埋没した状態である。

出土遺物としては、白磁1、染付2、瓦器1、天槽通室1、判読不能銭5、不明鉄製品1、鉄滓1があった。

〔注意ノート①〕

ST 163や後述するST 164などは規模も小さく、住居的機能や倉庫的機能を推測することは困難である。これら小形の堅穴遺構は土垣あるいはそれに類似する機能を推定した方が合理的と考えられるが、掘立柱建物跡、柱穴を有し上部構造の存在が明確な堅穴遺構、井戸跡な

ど生活空間を構成する主要な構築物とは、一線を画すと把握できる。しかしながら、構築時期は城館期に誤りないことから、中世の人々の生活形態を類推する段階では重要な遺構と言わねばならない。特に、従来考察されることが少なかった、日常生活内での工業生産活動、たとえば鋳造、木器生産手工業など中世城館内での自給活動を考える上での材料となるのではないだろうか。

ST 164 (PL.12・Fig.16・

Ch.14) — D50区検出。長軸234cm、短軸214cm、深さ74cm。S—37°—Eの方向に急傾斜を有する張り出しが存在し、出入口部分と考えられる。付属する柱穴は2個確認され、北壁・南壁の中央部に1個ずつ配置されている。共に深さ50cm以上と極めて深い掘り方をしている特徴がある。おそらく、この2個の柱穴は屋根等をささえるための掘り方として深くしたものであろう。

出土遺物としては、青磁皿(2)、唐津皿(1)、瓦器壺(4)珠洲播鉢(5)と美濃灰粘皿(3)が床面直上から出土している。他に鉄釘が2本、不明鉄製品1の出土があった。

ST 165—E50区検出。平安時代の遺構と重複していたため、明確なプラン、柱穴等を確認するまでに至らなかった。

本遺構の範囲から出土した遺物としては、青磁、白磁、染付、播鉢、鉄釘などの他、鋳型(PL 60—4)や鉄滓、銅滓および増場が出土し、隣接地から焼土痕も検出されていることから鋳造関係の遺構が存在した可能性もある。

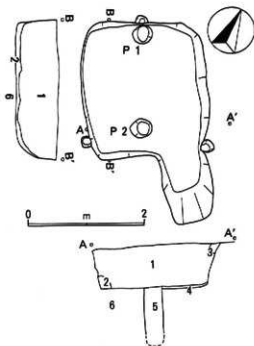
PL.12 ST 164

(a) 全景 (西側から)

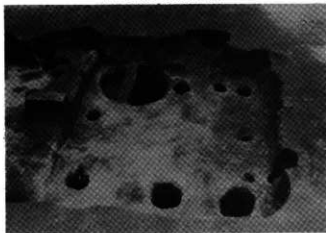


(b) 出土陶磁器類

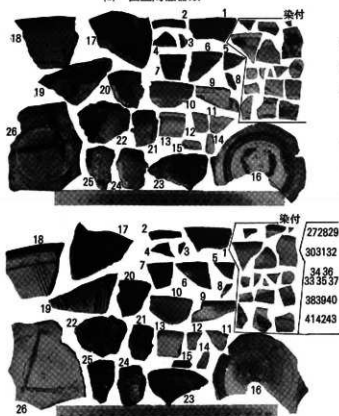
Fig. 16 ST 164 実測図



(a) 全景 (北側から)



(b) 出土陶磁器類



ST 166 (PL. 13・Fig.17・Ch. 15) — E49・50区検出。長軸 344 cm、短軸 296 cm、深さ 49 cm。南壁西側に舌状スロープの張り出しを有し、その方向は S—20°—E である。付属する柱穴は 8 個あったと思われる 2 間×2 間の配置が推定される。すなわち Pit 1～Pit 7 までのものと SX 124 に切られた部分に存在したと思われる 1 個である。

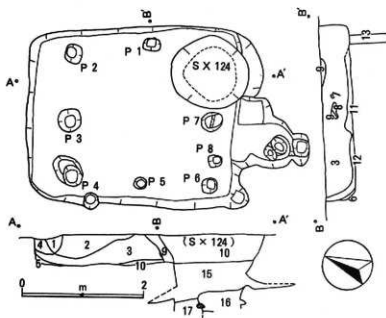
出土陶磁器としては、青磁 (1・3)、中国産と考えられる鉄釉甕 (2)、天目碗 (4)、唐津皿 (5～7・10)、美濃灰釉皿 (8・11～16)、播鉢 (17～19) 産地不詳陶器 (9) の他、染付 (27～43) が細片で出土している。また、埴塼 (20～25)、筒書き記号を有する須恵器坏 (26) がある。鉄製品には鉄釘 1 本、銅製品には銅鈴 (PL 57—10) 不明銅製品、銅洋、石製品には石鉢と火打石が各 1、古銭は判洗不能銭 4 枚が出土している。

本遺構と重複するものとして SX 124 (新)、ST 193 (新旧不明) があり、SX 124 は

井戸跡になる可能性もあり、出土陶磁器の組み合わせも本遺構と同様の傾向を示す。

SX 124 は深さ 150 cm まで掘り下げた。壁の崩壊が激しいため、底まで掘り下げることはできなかったが、おそらく素掘りの井戸跡になるであろう。

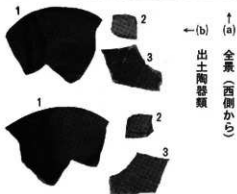
Fig. 17 ST 166・SX 124 実測図



ST 167 (PL. 14・Fig. 18・Ch. 16) — D49・50区検出。明確な規模は不明であるが、長軸 310 cm、短軸 300 cm、深さ 35 cm 程度と推定される。東側の壁面および南東部の区域が平安時代の遺構 S D63 と重複していたため、床面と壁面の検出が難しかった。柱穴は 7 個ほど検出されたが明確に付属すると思われるものではなく、Pit 3・Pit 5 あたりが関連するのであろうか。覆土は、暗褐色土と黄褐色砂質土の混層が大部分で単純層である。

出土遺物には、唐津皿(2) 越前甕(3)があり、須恵器坏(1)も出土しているが、あるいは攪乱による出土かもしれない

PL. 14 ST 167



い。他に不明鉄製品、鉄滓、火打石等もある。

ST 168 - C50区検出。規模、プランは他の遺構との重複によって不明瞭である。

ST 169 (Fig.19・Ch.17) - D49区検出。長軸(370)cm、短軸(270)cm、深さ34cmの規模と推定される。付属する柱穴は検出できず、平安時代の溝S D61と重複している。そのためか床面の部分に一部しまりの強い箇所がみられ(第3層)、重複して構築する場合の軟弱な土層を補強している。

出土遺物には、染付2点、美濃褐釉1点、火箸と考えられる鉄製品が1点あった。

Fig. 18 ST 167実測図

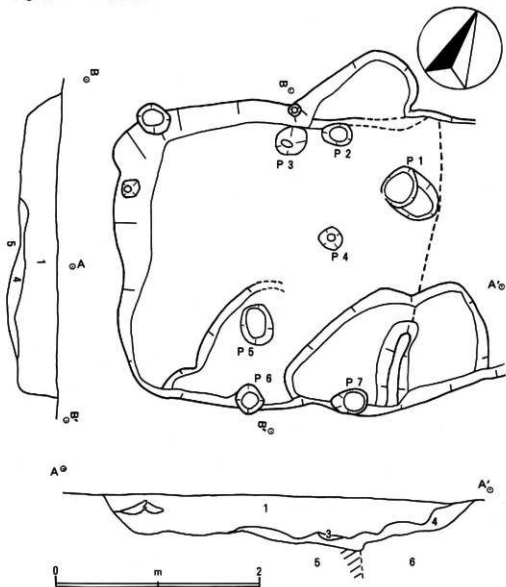
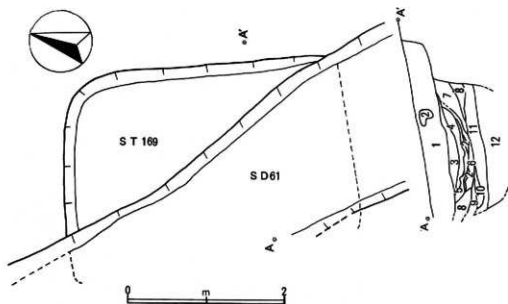


Fig. 19 ST 169 実測図



ST 170 (PL.15・Fig.20・Ch.18) - I 43区検出。長軸 318 cm、短軸 265 cm、深さ 45cm、東壁南側に舌状スロープの張り出しを有し、その方向は  $N-56^{\circ}-E$  である。柱穴は、1間×2間の配置と考えられて建て替えによる二期の配置が推定される。すなわち Pit 1～Pit 6 までが一期、Pit 1～Pit 3 および Pit 7～Pit 9 が二期であり、Pit 10 は掘り方が浅いため付属する可能性は少ない。この建て替えの新旧関係については、覆土堆積状態から二期の方が新しいものと考えることができる。

重複する遺構としては S B26 (旧) がある。

出土遺物としては、青磁碗(3)、白磁皿(1・2)、染付皿(4・5)、美濃灰釉皿(6・7)、瓦器手焙り(8)の陶

PL.15 ST 170



(a) 全景 (東側から)

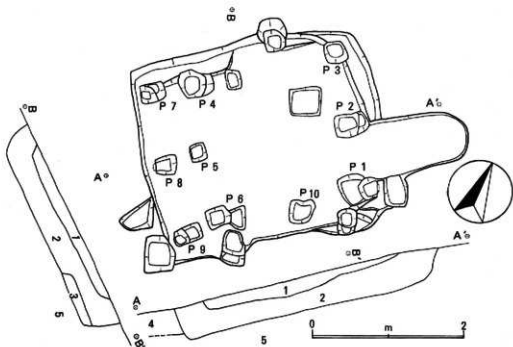


(b) 出土陶磁器類





Fig. 20 S T 170実測図



磁器類、鉄釘 5本、小札 1、不明鉄製品 1の鉄製品、硯 1、古銭 6枚（紹聖元宝・無文銭他）および縄文時代の磨製石斧が 1点出土している。

S T 171 (PL.16・PL.17・Fig. 21・Ch.19) —H43区検出。他の遺構と重複しているため明瞭な規模は確認できないが、柱穴配置等を考慮すると一辺 270 cmの正方形プランを有し、深さ 41cmと推定される。東壁南側に舌状の張り出しを有し、その方向はN-62°-Eである。柱穴配置は 1間×2間を基本とするようで、Pit 7・Pit 8・Pit 9・Pit 11・Pit 12・Pit 13が付属する柱穴と考えられ、Pit 15・Pit 14などは補助的なものであろうか。前者は深さの平均が 56cmであるのに対し、後者は 14cmと浅い掘り方を呈していることから理解できる。覆土堆積から埋没は人為的様相を呈し、重複関係は S T 173（新旧不明）S T 179（新旧不明）がある。

出土遺物には、青磁碗（7）同皿（4～6・8）、染付碗（3）同皿（1・2）、瓦器手培り（9）越前甕（10・11）、鉄釘 2、火箸 1、鉄鍋 1、不明銅製品 2、銅滓 1、炭化米などがある。

S T 172—後述（P39）

S T 173 (PL.16・PL.17・Fig. 21・Ch.19) —H43区検出。長軸（275）cm、短軸（272）cmのほぼ正方形プランで深さ 42cmである。張り出し、柱穴配置は明確でなく、Pit 1・Pit 2

・ Pit 3 など四隅に柱穴を配するのであろうか。覆土は単純層であり人為的埋没を示すと考えられ、ST 171 と同様の傾向がみられる。

出土遺物としては、青磁碗（19）同皿（16～18・21）、白磁皿（14・15）、染付碗（12）同皿（13）、美濃灰釉皿（20）同褐釉皿（20）、天目碗（22）、越前甕（24～29）、瓦器手焙り（30～32）などの陶磁器類、鉄釘2本、不明鉄製品5、銅製小柄の柄（PL.56-6）、不明銅製品1、鉄滓1、判読不能古銭1枚がある。

ST 174—SE67に変更

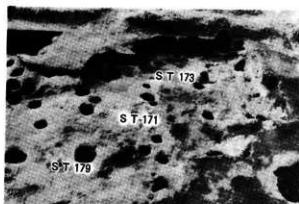
ST 175—後述（P42）

ST 176—後述（P42）

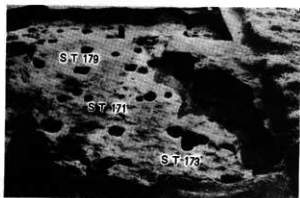
ST 177—後述（P45）

ST 178—後述（P46）

PL.16 ST 171・173・179



(a) 全景（南側から）

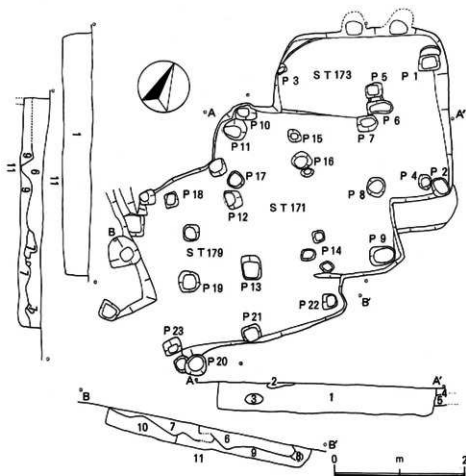


(b) 全景（東側から）

ST 179（PL.16・PL.17・Fig.21・Ch.19）—H43区検出。他の遺構との重複によって規模、柱穴配置は不明瞭である。おそらく、一辺290cm前後、深さ33cmを測る竅穴遺構であり、張り出し等は確認できなかった。床面検出の柱穴の中で付属するものとしては、Pit 16・Pit 17・Pit 18・Pit 20・Pit 21・Pit 22などが推定されるが、四隅に主柱穴を配するものか、1間×2間の柱穴配置を呈するものか確証に乏しい状況である。重複する遺構はST 171（新旧不明）とSX 130（旧）がある。

出土遺物には、越前甕口縁部片（33）が1点ある。

Fig.21 S T 171・173・179 実測図



〔注意ノート②〕

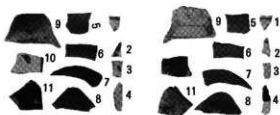
S T 171・173・179のように床面がほぼ同レベルで、覆土堆積も類似した状態の重複関係を把握することはとても難しい。一般に波岡城跡から検出する遺構は、確認面のプランと掘り下げ終了段階のプランが相違する事例が多い。おそらく、短期間に構築がくりかえされるために、重複した遺構でも覆土堆積が類似してくる（人為的に埋め戻す遺構が多いことも原因の一つ）ためであり、覆土堆積の状態から新旧関係を把握できるのは数例しかない。このような場合、遺構の範囲を推定する有効な方法が柱穴配置である。竪穴遺構の柱穴配置は、一見複雑な様相を呈するが、実際はVI章まとめの所でも述べるように、基本パターンがあり、その波生的柱穴配置をするものが多い。つまり、基本柱穴（主柱穴）のパターンが明確になると遺構の外郭線はおおよそ推定できるのである。

また、出土遺物の認定にあたっては遺物の平面位置と標高位置を計測しておくことにより、どの遺構に伴うかを判断してゆく。その時、どちらの遺構に伴うかあいまいな遺物については事実関係のみを記載する場合が多い。ST 171・173・179における遺物の区分は上記の方法に拠ったが、その出土傾向をみると越前臺の破片が多く出土している事に注目できる。観察上では同一個体と考えられ、覆土内から一律に出土することは、最終遺構（現状では判断できない）が廃棄される段階で、覆土が移動・逆転などいわゆる攪乱状態になって検出されたものと考えられる。

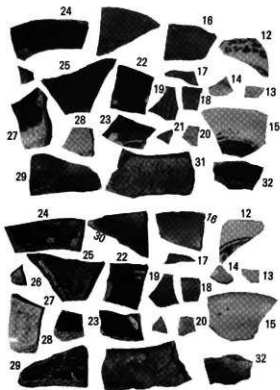
〔注意ノート④〕で示した通り、出土遺物の組み合わせによって遺構の廃棄年代を推定する方法は、ST 171・173・179のように時期的に近似した状態で重複する場合は有効な方法とは言いがたい。それゆえ、ST 171・173・179の重複関係については、ST 171の場合にのみ床面から陶磁器が出土し、その量も多い事から、最も新しい構築であったと推測できるが明確には理解できない。

PL.17 ST 171・ST 173・ST 179

(a) ST 171 出土陶磁器類



(b) ST 173 出土陶磁器類



(c) ST 179 出土陶器



ST 172 (PL. 18・Fig. 22・Ch. 20) — H42・43区検出。長軸368 cm、短軸(225) cm、深さ44 cm、南側に床面と同レベルの張り出しを有する。東壁端に周溝らしい部分が230 cmにわたって認められ、柱穴配置と関連があるのであろうか。その柱穴配置は壁に接する状態で、東壁・南壁の部分に2間ずつみられる。Pit 1～Pit 3が東壁、Pit 3～Pit 5が南壁に付属し、

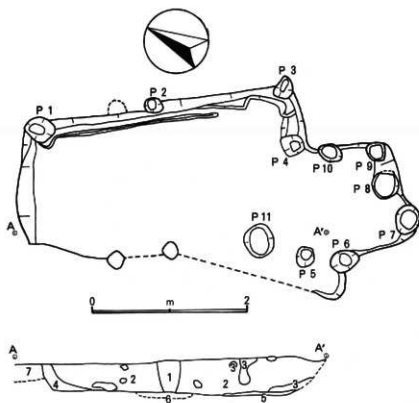
PL. 18 ST 172 全景 (東側から)



Pit 6・Pit 7・Pit 9・Pit 10は張り出し部分に付属するらしい。覆土は自然堆積の状態を呈し、ST 183 (旧)と西側で大きく重複している。

出土遺物としては、青磁3、美濃褐釉皿1、不明陶器2、鉄釘3、不明鉄製品2、不明銅製品1、棒状鉄製品1、溶解物1、判読不能銭2がある。

Fig. 22 ST 172 実測図



S T 175 (PL.19・Fig.23・

Ch.21) —H45・46区検出。明確に竪穴遺構とは言えないが、覆土上層に粘土を貼った部分がありその範囲が長軸440 cm、短軸345 cm、地山までの深さは平均14 cmである。上層構造を推定できる柱穴配置は確認できず、Pit 1からPit 13までは本遺構と重複する柱穴である。

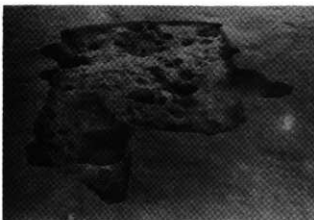
出土遺物としては、青磁碗(3・6・7)、白磁皿(2)、染付皿(1)、唐津皿(4・5)の陶磁器と、小刀1、鉄釘2銅製裝飾品(PL.57-4)、元豊通宝などの古銭3枚がある。S X 125(旧) S X 127(旧)と重複。

S T 176 (PL.20・Fig.24・Ch.22) —H45区検出。長軸293 cm、短軸265 cm、深さ62 cm、南壁西側に張り出し(方向S-30°-Eと推測)を有した可能性がある。柱穴配置は2間×1間であり、Pit 1~Pit 6の6個のうち5個までが重複した柱穴の掘り方を呈する点、および検出時の床面(第6層)が貼り床的であったことから建て替えが推定される。

南壁と北西壁間でピット状遺構と重複しているが新旧関係は不

PL.19 S T 175

(a) 全景(北側から)

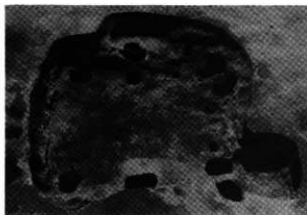


(b) 出土陶磁器



PL.20 S T 176

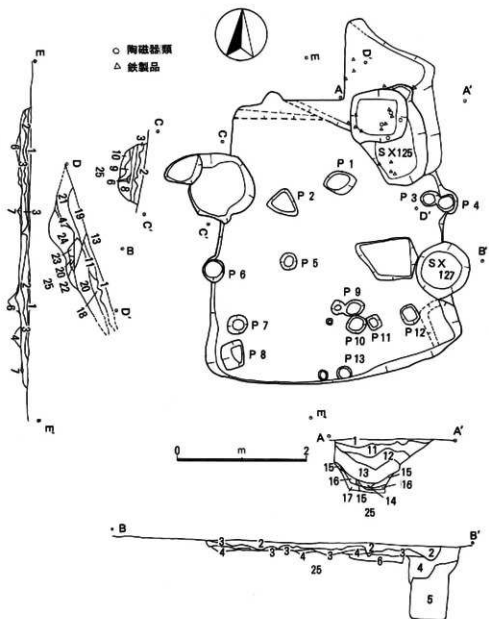
(a) 全景(北側から)



(b) 出土陶磁器



Fig.23 ST 175、SX 125・127 実測図



明である。

出土遺物としては、青磁碗（3・4）、染付碗（1）、美濃灰袖皿（5・6）、瓦器（2）、鉄釘5本、鉄滓1、元豐通宝1、無文銭1、砥石（PL.58-17）、くるみがあつた。

Fig.24 ST 176 实测图

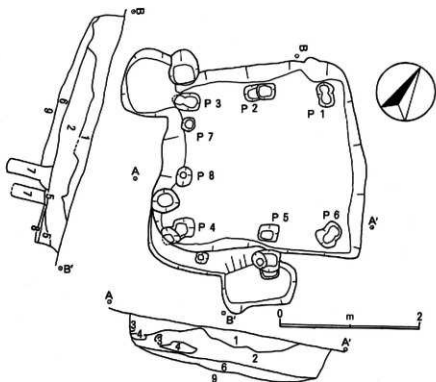
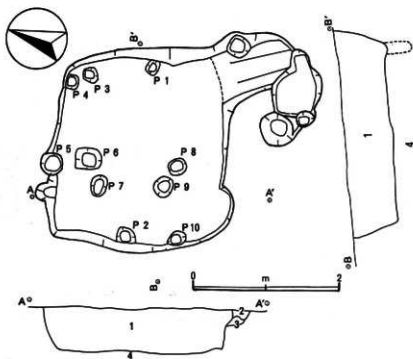
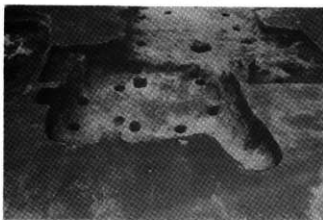


Fig.25 ST 177 实测图

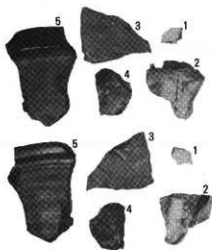




(a) 全景 (南側から)



(b) 出土陶磁器類



## 〔注意ノート③〕

竅穴遺構が廃棄され、覆土堆積がおこなわれる時、自然堆積であるか人為堆積であるか判断することは、従来の縄文時代竅穴住居跡でみられるものとは根本的に違うようである。つまり厳密な意味での自然堆積は平場に構築された遺構にはなく、日常生活空間として使用する部分についてはある程度の整地がなされることが妥当のようである。その整地が不充分であれば自然堆積の状況に近くなり、短時間に実施されれば人為的状況を呈すると考えられ、遺物も、それらの整地作業によって移動・細片化されたものと推定される。

## ST 177 (PL.21・Fig.25・

Ch.23) — E50区検出。長軸 282cm、短軸 246cm、深さ62cm。南壁東側に舌状の張り出しを有し、その方向はS-40°-Eである。柱穴配置は不明瞭であり、Pit 1とPit 2が東壁・西壁中央で対応する以外、規則性をみいだすことはできない。覆土堆積も、暗褐色土と黄褐色砂質土の混層が全体に入っている単純層であり、人為的埋め戻しの結果と考えられる。重複関係は認められないが、床面に存する不規則な柱穴配置は本遺構以前に造られたものであろうか。

出土遺物としては、青磁皿(1)、産地不詳の播鉢(3)、備前の特徴を有する播鉢口縁部片(5)、瓦器手焙り脚(2)、埴埴(4)、鉄釘7本(PL.54-22他)、不明鉄製品3、不明銅製品1、鉄滓1の他、土製鋳型(PL.60-3)が1点ある。

PL.22 ST 178

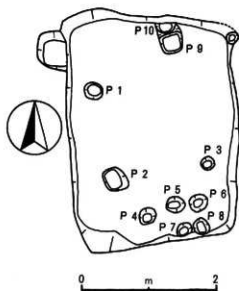
(a) 全景 (南側から)



(b) 出土陶磁器



Fig.26 ST 178 実測図



ST 178 (PL.22・Fig.26・Ch.24) —D52区検出。長軸 341 cm、短軸 253 cm、深さ 30 cm。掘り方プランも不整形であり、付属する柱穴も明確には判断できない。Pit 6・Pit 8・Pit 10 は比較的深い掘り方を呈するが、平面プランでの対応はみられず、上屋構造を推定することは困難である。

出土遺物としては、青磁碗 (2・3)、青磁皿 (4・5)、染付碗 (1)、美濃灰釉皿 (6～9) と鉄釘 2 本がある。青磁碗は蓮弁文を簡略化した細劃線文を有するものであり、同皿はいわゆる稜花皿、美濃灰釉皿は

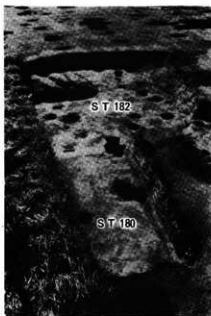
口縁が外反する美濃大窯 I 期ぐらいの製品であり、いずれも 16 世紀前半の特徴を有する遺物ばかりである。

ST 179—前述。(P.38)

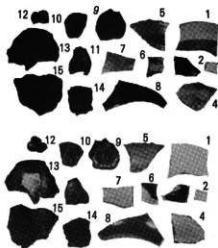
ST 180 (PL.23・Fig.27・Ch.25) —I 45・46 区検出。南半部が未調査のため全体の規模はわからない。検出部分の規模は、長軸 574 cm、短軸 (434 +  $\alpha$ ) cm、深さ 60 cm であり、南北方向が長軸となる可能性もある。柱穴の配置は、4 間  $\times$  2 間 +  $\alpha$  と考えられ、Pit 1～Pit 9 が本遺構に付属するものであろうか。他に Pit 12・Pit 13・Pit 16・Pit 19・Pit 21 も 40 cm 以上の深さを有するところから

PL.23 ST 180・182

(a) 全景 (東側から)



(b) ST 180 出土陶磁器



関連のある柱穴群かもしれない。覆土は全般的に自然堆積の状態を呈し、他の遺構との重複がかなりみられる。東側にはST 182 (新)、北側ではST 181 (新)、西側遺構内ではSE 69 (新)があり、覆土層序図に表れた柱穴の落ち込みなど、本遺構より新しく構築されたものばかりである。先に述べたPit 12等の付属する遺構に北側部分の一部テラス状になった遺構面をあてることも推定される。

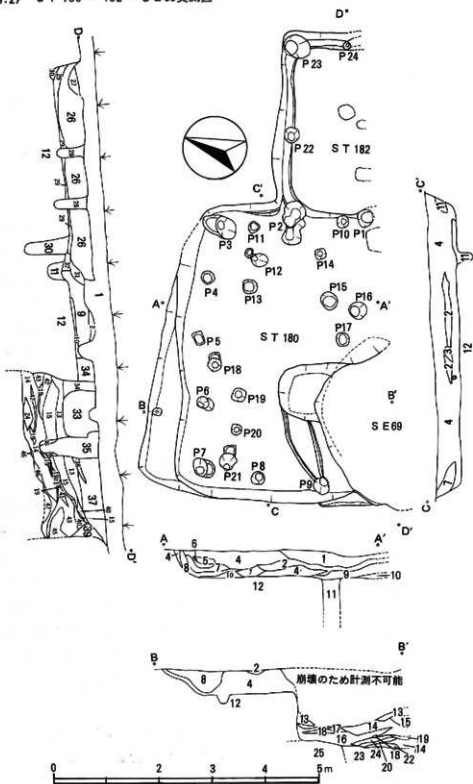
出土遺物としては、青磁碗(6~8)、青磁皿(5)、白磁皿(1・2)、美濃褐釉皿(3)、唐津(4)、羽口(13)、鉄滓(14)、銅製品鑄造時の溶解物(9~12・15)、鉄釘3本、火箸1、鉄鍋1、不明鉄製品3、不明銅製品(PL.57-8他)2、洪武通宝1、皇宋通宝1、判読不能銭3、縄文時代の磨製石斧1がある。

ST 181—後述 (P49)

ST 182 (PL. 23・Fig.27・Ch.25) —I46区検出。南側部分が未調査であり、正確な規模はわからないが検出した部分については、長軸(353)cm、短軸(165+α)cm、深さ50cmを測る。柱穴配置は壁面に接する状態で2間×2間以上のものが推定できる。すなわち、Pit 1・Pit 2・Pit 22・Pit 23がそれであり、東壁と北壁には周溝が確認されている。覆土は自然堆積の状態を呈し、西側で重複するST 180 (新)を切って構築されていることが層序から理解できる。

出土遺物は少なく、瓦器1、插鉢1、銅製盤(PL.57-4)、元豊通宝1がある。

Fig.27 ST 180・182・SE69実測図



PL.24 ST 181 全景 (北側から)

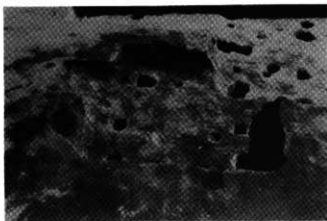
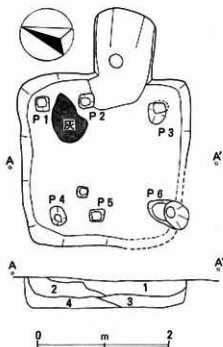


Fig.28 ST 181 実測図



まったくと言っていいほどみられないことから、板敷等を推定できるぐらいであり、竪穴遺構内部での炊事は考え難い面がある。床面から灰や焼土を検出することは、手焙り等の暖房用具に拠ることも考慮しなければならず、今後竪穴遺構の機能を推定するうえで重要な事である。

ST 181 (PL.24・Fig.28・Ch.26) — I 46区検出。長軸 263 cm、短軸 254 cm のほぼ正方形プランを呈し、深さは 41 cm である。東壁南寄りの部分に舌状スロープを呈する張り出しが存在し、その方向は E-12°-N である。柱穴配置は 2 間×1 間であり、Pit 1～Pit 6 が付属するものである。Pit 6 は ST 180 (旧) と重複する部分に位置するため変形しているが、他

の柱穴は形状、深さとも類似した状況にある。

出土遺物としては、白磁、染付、瓦器、鉄釘、砥石、判読不能銭が各 1 点ずつある。

床面北東側に灰の分布が認められた。

〔注意ノート④〕

竪穴遺構の中で、かまどや炉を有するものは現在まで発見されていない。また、平安時代に特有の竪穴住居跡(かまどを付属するもの)は城跡内から土師器・須恵器が大量に出土するにもかかわらず検出されていない。城跡内から検出する中世の竪穴遺構は、平安時代の竪穴住居跡の系統をふむものであるという認識はあっても、明確に住居跡と断言できる所までは至っていない。ST 181 でみられたような床面から灰を検出する例は、浪岡城跡では多くない。また、床面の構築では粘土貼りや三和土によるものは

ST 183 (PL.25・Fig.29・Ch.27) —G・H42区検出。長軸710cm、短軸512cm、深さ34cm、南壁東側に舌状を呈し付属する柱穴が存在する張り出しがあり、その方向はS-25°-Eである。柱穴配置は2間×3間であり、Pit 1～Pit 10までが基本柱穴、Pit 11～Pit 16が張り出し出入口部分に関連する柱穴と考えられる。Pit 1～Pit 10に関して柱穴間の寸法は平均200cmで統一されているようで、孤立柱建物跡との類似性が指摘できる。覆土は単層の堆積で、全般に炭化物を包含していたり、部分的に集中していたりするため焼失した結果とも考えたが、明確な根拠はない。ST 172(新)との重複関係は層序にて新旧を確認した。張り出し部分にも、多量の炭化物がみられ(PL.25-(b))、Pit 8とPit 9の間には溝状の落ち込みがある。

出土遺物としては、青磁碗(1)、越前甕(2～5)、美濃灰釉皿、染付、鉄釘8本(PL.54-29)不明鉄製品2、不明銅製品、元祐通宝、洪武通宝他古銭4枚、炭化米などがあつた。

ST 184 (PL.26・Fig.30・Ch.28) —H・I41・42区検出。2ないし3基の壘穴遺構が重複(建て替えとも考えられる。)している。外郭の規模は、長軸567cm、短軸527cm、深さ42cmである。それぞれの遺構は張り出しと柱穴配置によって区分が可能でありA・B・Cとする。

ST 184 A—Pit 1～Pit 14の柱穴配置と考えられ(スクリーントーンA)、3間×3間の規模を有し、東壁北側にN-50°-Eの舌状スロープを呈する張り出しが存在する。

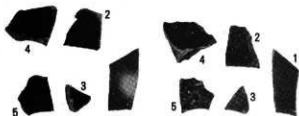
PL.25 ST 183



(a) 全景(北側から)

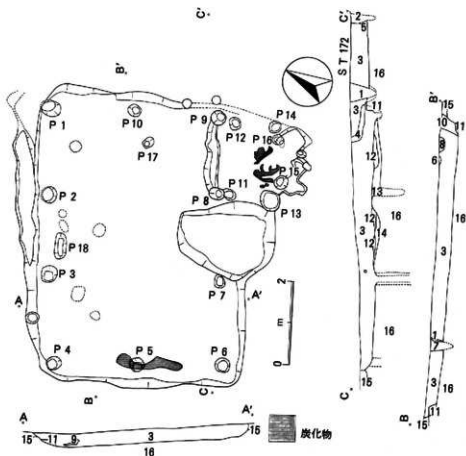


(b) 同出入口部炭化物出土状態



(c) 出土陶磁器

Fig.29 ST 183 実測図



ST 184 B—Pit 15～Pit 28までの柱穴配置で、規模4間×2間を呈し、東壁南側にE-20°  
—Nの方向の張り出しを有するもの。

ST 184 C—明確な柱穴配置ではないが、Pit 15・Pit 17・Pit 29・Pit 30・Pit 31・Pit  
32の6個の柱穴が2間×1間の規模を有するもの。

以上の3基他に、いずれにも付属しない柱穴があり、柱穴配置が変更される可能性もある。  
覆土は単純層の人為堆積であり、遺構間の新旧関係は不明である。

出土遺物には、青磁碗(6・7・9～15・17・18・20) 同皿(8・16・19)、白磁皿(4)  
染付皿(1・3) 同角形鉢(2)、美濃灰釉皿(21・22)、越前甕(25～33)、瓦器(23)、  
擂鉢(34・35)、土師器環(36)などの陶磁器類、鉄釘16本、小刀2、火箸1、不明鉄製品4、  
鉄鍋(PL.55-4)、不明銅製品3、銅滓1、元祐通宝1、判読不能銭2、火打石2、くるみな

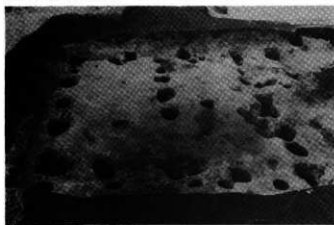
どがある。

出土遺物からは、16世紀前半の構築と推定されるが、本遺構の占地在北館西端であり東側に出入口部を有する点から、SB23あるいはSB26と関連する可能性がある。特に、青磁・越前の出土が多いことは、北館西半部の堅穴遺構の一部に多い特徴であり、今後の精査を要求される所である。

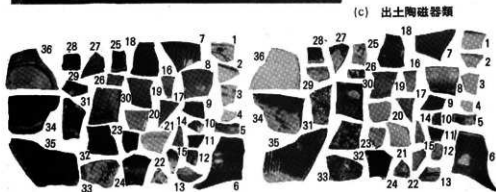
PL.26 ST 184



(a) 全景 (東側から)



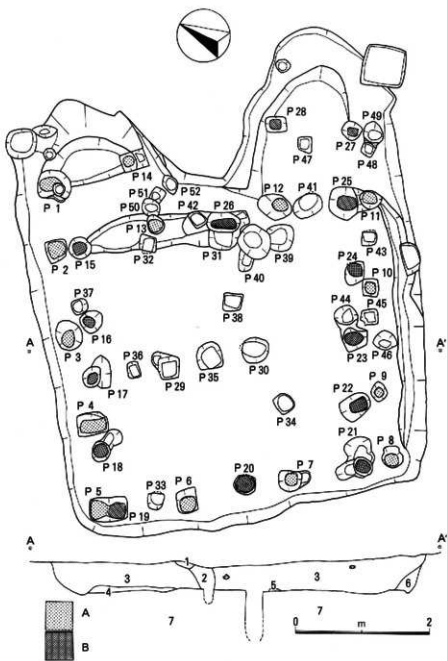
(b) 全景 (南側から)



(c) 出土陶磁器類



Fig. 30 ST 184 実測図



ST 185 (PL.27・Fig.31・

Ch.29) — I 45・46区検出。長軸 323 cm、短軸 298 cm、深さ 34 cm、東壁南側あるいは南壁西側に張り出しの痕跡を有するが明確ではない。柱穴配置の基本は、2間×2間 (Pit 1・Pit 4・Pit 5・Pit 8・Pit 10・Pit 11・Pit 13・Pit 15) であり南北方向のみ補助柱穴 (Pit 7・Pit 9・Pit 14・Pit 16) ようである。

出土遺物には、青磁碗 (2) 同鉢 (1)、美濃灰釉皿 (3～5)、染付皿 (6)、越前薬 (8) 瓦器 (9)、播鉢 (7・10)、溶解物 (11)、鉄釘 4、不明鉄製品 1、不明銅製品 1、銅滓 1、判読不能銭 1、硯 1 がある。

ST 186 (PL.28・Fig.32・Ch.30) — H・I 46区検出。長軸 395 cm、短軸 366 cm、深さ 24 cm。床面上に新旧の柱穴が重複しているため、柱穴配置は明確でない。おそらく、Pit 1・Pit 2・Pit 4・Pit 6 の四隅に存する柱穴が基本で Pit 3・Pit 5 なども付属するものらしい。SX 136 (旧) と重複している。

出土遺物には、染付碗 (1・

PL.27 ST 185

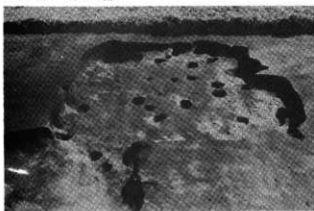


(a) 全景 (東側から)

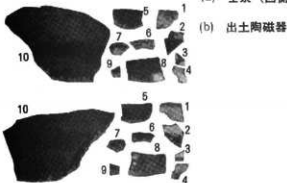


(b) 出土陶磁器類

PL.28 ST 186



(a) 全景 (西側から)



(b) 出土陶磁器

Fig.31 ST 186 実測図

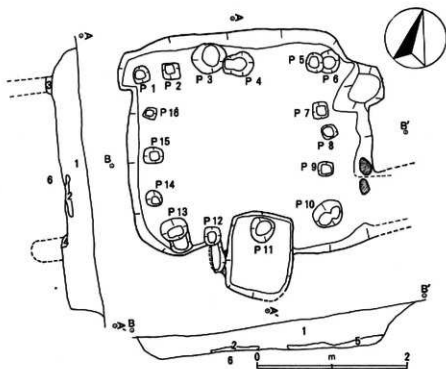
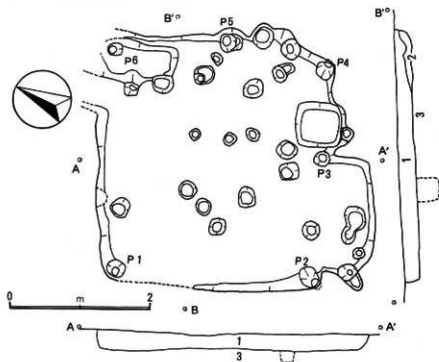


Fig.32 ST 186 実測図



2) 同皿(3・4)青磁碗(5・7・8)同皿(6・9)、播鉢(10)、鉄釘(4)、不明鉄製品3、鎌1、不明銅製品1、無文銭1、判読不能銭1がある。

**ST 187**—H・I46区検出。  
 ブラン不明確。青磁・白磁(Fig. 54—5)、美濃灰釉・鉄釘の出土がある。

**ST 188** (PL.29・Fig. 33・Ch.31) 一東・南側が未調査であるため全形は確認できない。検出部分は、南北(400)cm、東西(140)cm、深さ35cmであり、Pit 6・Pit 7が付属する柱穴らしい。おそらく四隅に柱

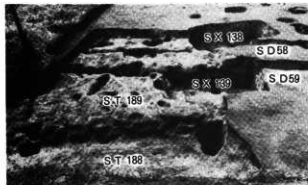
穴を配置するものであろう。覆土は1層のみの堆積で、ST 189(旧)よりは新しい構築である。

出土遺物には、青磁皿、染付碗、美濃灰釉皿、無文銭、判読不能銭が各1点ずつある。

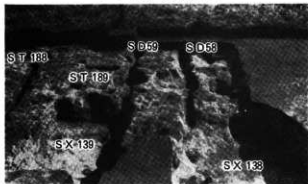
**ST 189** (PL.29・Fig.33・Ch.31) —J43区検出。南側に一部未調査部分がある。検出部分の規模は東西(450)cm、南北(390)cm、深さ17cmであり、柱穴配置はPit 1・Pit 2・Pit 3・Pit 5・Pit 6・Pit 7など2間×2間あるいはそれ以上の配置を考えると考えられる。北壁直下には、若干ではあるが周溝状の部分がみられ、SX 139等と重複しているため明瞭ではない。覆土は単純層の堆積であり、ST 188(新)、SX 139(新)、SX 138(新旧不明)、SD 58(新旧不明)、SD 59(新)等の遺構と重複している。

出土遺物には、白磁、唐津皿、鉄鍋、鉄釘が各1点、不明鉄製品2点がある。

PL.29 ST 188・189 SD58・59 SX 138・139

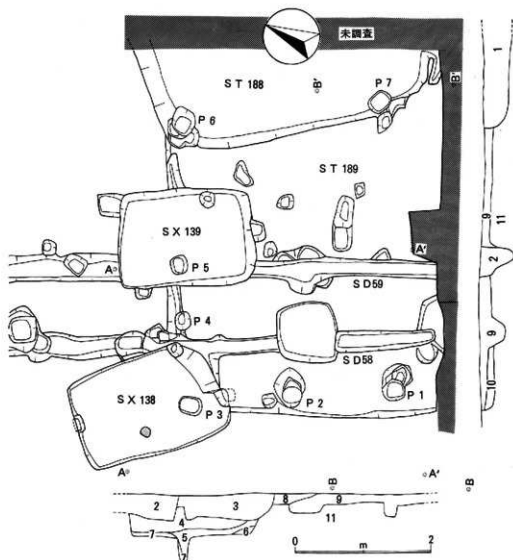


(a) 全景 (東側から)

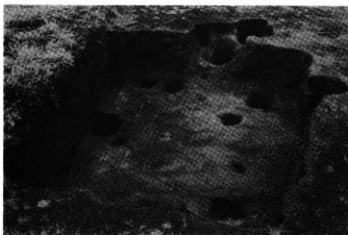


(b) 全景 (北側から)

Fig.33 ST 188・189、SX 138・139、SD 58・59実測図



(a) 全景 (北側から)



(b) 出土播鉢



ST 190 (PL.30・Fig.34・Ch.32) - I46区検出。東側の一部が未確認であり、検出部分の長軸303cm、短軸(200)cm、深さ74cmである。南壁西側に舌状スロープの張り出しを有し、その方向は、S-0°である。柱穴配置は2間×1間の規模と推定され、Pit 1~Pit 4と東側部分(未調査部分)2個の計6個であろう。覆土は人為的堆積を呈し、床面に表われた柱穴以外重複する遺構はない。

出土遺物には播鉢(1)、美濃灰釉皿、鉄釘、不明鉄製品、至大通宝が各1点ずつあった。

ST 191 - G42区検出。次年度にて報告の予定。

ST 192 - G・I42区検出。西側の一部のみ掘り下げたため全形はわからない。次年度の報告にて詳細を述べる予定。覆土から、刀の茎にも似た鉄製品(PL.54-1・Fig.59-1)が出土しており、注目される。

Fig.34 ST 190 実測図

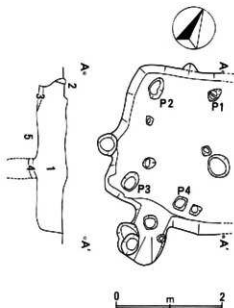
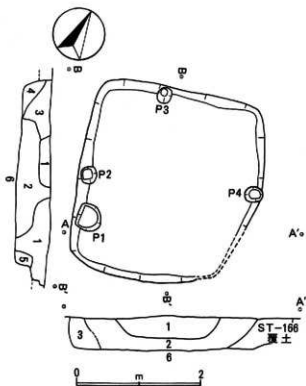


Fig. 35 ST 193 実測図



ST 193 (Fig. 35・Ch. 33)

—E49区検出。長軸314cm、短軸291cm、深さ56cmの規模を有する。柱穴配置は、Pit 2とPit 4が同レベルの深さで対応するのに対し、他のPit 1、Pit 3は対応する柱穴を見い出せない。覆土は自然堆積の状態を呈し、ST 166 (田) と重複関係がある。

出土遺物には、青磁碗、美濃灰釉皿、不明鉄製品2、不明銅製品、漆器被膜がある。

### 3. 井戸跡

井戸跡の中には木杵が残存していたもの、および素掘りの二形態があり、廃棄が短時間でおこなわれたためか遺物の出土状態に特徴的なものが多い。

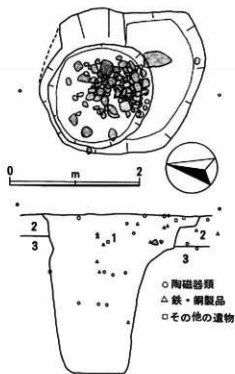
SE 60 (PL.31・Fig.36・Ch.34)-K50・51区検出。上端掘り方規模 250 cm×228 cmのやや不整形のプランを有し、深さ 252 cmである。確認面から 100 cm 以内のレベルに川原石が多量に捨てられており、集石状態をなしていた。覆土の堆積も人為的状态であるため、埋め戻された井戸跡と考えることができる。

出土遺物には、青磁碗 (8・10) 同皿 (9)、白磁皿 (5・6)、染付碗 (1・2・4) 同皿 (3・7)、美濃灰釉皿 (12)、天目碗 (14)、唐津 (13)、瓦器 (15)、不明陶器 (11)、溶液物 (16) などの陶磁器類、鉄釘 6、不明鉄製品 2、鉄滓 2、不明銅製品 1、無文銭 1、寛永通宝 1、石鉢 1 点があった。

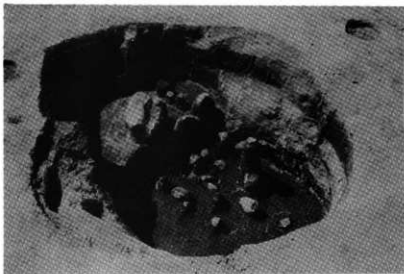
SE 61 (PL.32・PL.33・Fig.37・Ch.35)-K51区検出。上端掘り方規模 220 cm×205 cm、深さは 360~370 cm であった。深さ 240 cm まで掘り下げた段階で、木杵が存在することを確認し、層序 (PL.32-(a)) でもわかる通り上層まで木杵が存在していたと推定された。残存する木杵は、これまで検出した両柱横棧の形態と相違し、独特の構築を示す。第 1 に、外側の板に横棧を組み合わせた部分と、それらとは構築上関連のないと考えられる両柱横棧部分に分割できる。第 2 に、横棧は東西が上、南北が下が位置し、側板の一部に枘穴状の部分を作ってはめこむ形態で組み立てている。(詳細は後述)

この木杵内から出土した遺物には、木製柄 (PL.32-(e))、榎状木製品 (PL.32-(d))、染付皿 (PL.33-1) などがある。特に染付皿は、出土した時には大小 5~6 片の破片であったが、取り上げて接合したらほぼ完形の状態になった。口径 19.3 cm、高さ 3.8 cm を測り、これまで出土した染付の中では最大のものであり、見込みに垣根越しにみる花を具象化した文様を描いている。日本国内出土の染付にはあまり見られない意象であり、東南アジア方面で出土していると思われる。

Fig 36 SE 60実測図



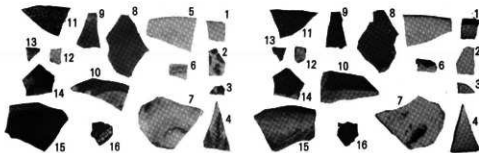




(a) 全景（北側から）



(b) 同集石状態



(c) 出土陶磁器類



(a) 断面層序



(b) 梁付出土状態



(c) 完掘状態



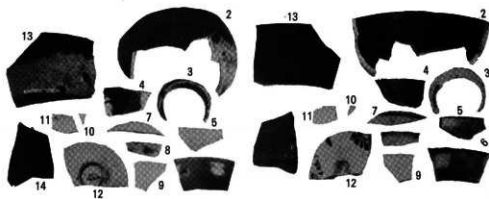
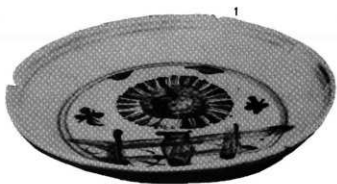
(d) 出土楔状木製品



(e) 出土木製柄



(e)



他の出土遺物には、青磁碗（2～5）同皿（6）、白磁皿（11）、染付皿（7～9・12）、瀬戸堀輪壺（14）、摺鉢（13）、鉄釘4（PL.54-21など）、不明鉄製品1、鉄滓1、元豊通宝1、聖宋通宝1点がある。

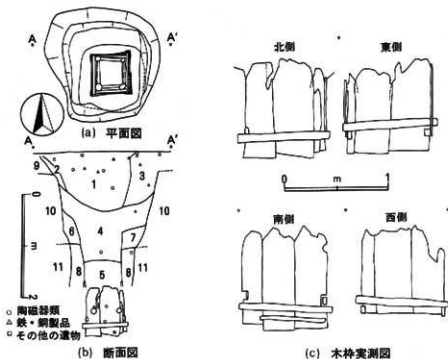
S E 61から検出した木枠の構築にあたっては、以下の方法が考えられる。

- (1) 北・南の側板と東西の横棧をそれぞれ組み合せたもので方形を整える。横棧の長さも四方とも90cmなのでこの場合は正方形となる。側板は平均3枚を縦位に組み合わせる。
- (2) 組み合せた木枠を掘り上げた井戸の底に入れ、外側から土圧をかけて固定する。側板に接する外側の土が黒色土であることから、木枠の外に土を入れ圧したことがわかる。
- (3) 井戸の底および木枠の底には白色粘土が貼られてあり、側板下部もそれによって固定されている。
- (4) これらの枠の中に隅柱と横棧だけの部分を入れる。

木枠実測図の中には表現できなかった、隅柱横棧だけの部分は、どのような機能を有するのか問題のある点である。側板に直接横棧を組み込む形態では、あえて不用な部分であり、これを入れることによって側板の補強をしたとも考えられるし、または木枠を建て替えたための所産とも考えられるところである。

出土遺物の中で、本遺構の廃棄時期のメルクマールとなるのは前述した染付皿であるが、現在のところ時期決定は困難である。また青磁碗の中でも蓮弁文の簡略化した文様と雷文帯の簡略化した文様が伴出していることは、陶磁器の伝世幅を100年単位で考えた方が妥当性を有するようである。

Fig. 37 S E 61実測図



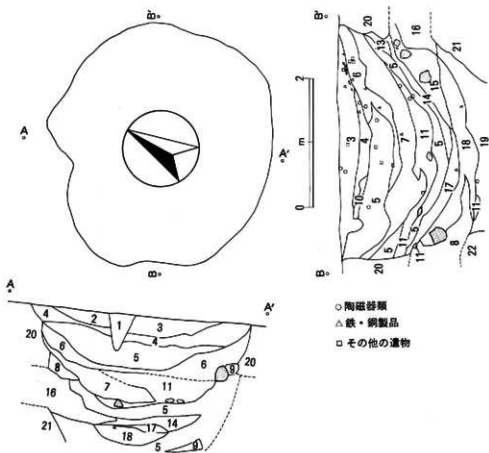
SE 62 - F50区検出。SE68に変更。

SE 63 - K50区検出。遺構を確認したのみで掘り下げていない。

SE 64 - 欠番。

SE 65 - (Fig. 38・Ch.36) - D・E50区検出。掘り方上端規模 370 cm × 300 cm、深さ約 230 cm まで掘り下げた。覆土は自然堆積の状態を呈し、壁面の崩壊によって黄褐色砂質土が互

Fig. 38 SE 65実測図



層になっている。掘り下げ直下30cm以内で、東側に小形の川原石が集中して落ち込み、下層になると大形の川原石が散在して検出された。

出土遺物には、青磁、染付、天目、瓦器、志野、不明鉄製品、鉄釘、銅滓、開元通宝古銭6枚、炭化米、不明石製品などがある。

SE 66 (Fig. 39・Ch. 37) - H44区検出。掘り方上端の規模は、径200cmの円形を呈し、深さは約200cmまで掘り下げた。覆土は自然堆積の状態を示し、深さ100cmの所から壁面の崩壊が著しい。また堆積土中央には多量の川原石が混入しており、特に深さ100cm前後のところに集中している。

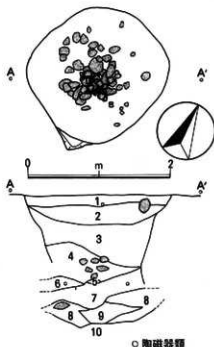
出土遺物としては、青磁、白磁、染付、美濃灰軸、天目、唐津、瓦器、播鉢、鉄釘、不明鉄製品、小柄(PL.56-5)、石臼(PL.59-6)などがある。

SE 67 (PL.34・Fig.40・Ch.38) - I44区検出。掘り方上端の規模は長軸260cm、短軸245cmの方形プランを呈し、深さは332cmであり、また底の規模は195cm×160cmの方形プランである。南壁西側に階段状の立ち上がりが存在し、掘り下げ途中で構築したものであろうか。

覆土の堆積は、木枠の部分と、埋め戻しの部分で明確に分離し、木枠が地表まで存在したことを示している。ところが、遺物の出土状態をみると(Fig.40-b)、木枠内と埋土内の出土状況に差がなく木枠を固定する段階からかなりの遺物が混入していたと考えられる。

出土遺物としては、播鉢(PL.34-b)、青磁碗(4・6・7・10)同皿(5・8)、染付碗(1)、同皿(2・3)、天目碗(11・12)、美濃灰軸皿(13)、朝鮮李朝期と推定される皿(14・Fig.56-17)、鉄釘7本、鉄鍋(PL.55-6他)、小札1、不明鉄製品3、鉄滓1、斧1、不明銅製品1、古銭8枚(判読不能が多い)、硯1、石臼5点があり、平安時代の土師器・須恵器の出土もあった。

Fig. 39 SE 66実測図



S E67から検出した木枠の構築上の特徴を述べると、S E61から検出した木枠構築と類似している点が多い。側板は、平均3枚の縦板によるが中央の板は狭小で両端の板が主力である。南・北の横棧は上、東西の横棧は下の位置で各面の側板端の柄を切ってはめこむ方法で組み立てられ、横棧は各面2段が残っていたため45cm（約1尺5寸）ぐらいの幅で上層に組み立てられていたと考えることができる。側板の幅（木枠の一边）は80～85cmであり、S E61木枠よりは若干狭い。また、側板固定のために外側に小さな板などははさめ込む部分もあり（東側など）側板の固定には特に注意を要したようである。

以上の木枠と別に、木枠外に隅柱と横棧の残存があった。これは、S E61でみられたものとはまったく逆で、機能的に問題がある。隅柱は側板最下部の所から約50cmも上に位置し、しっかりと固定されていたとは考えにくい。側板に柄を穿った木枠を補強するものであるとすれば、S E61のように内側に位置するのが普通であり、この隅柱・横棧の存在は明確に理解し難い。上層の側板が消滅し、隅柱だけが残ったとすれば、本木枠は二重構造になっていたとみなければならぬだろう。

井戸内に入れる木枠の構築は、各井戸跡によって規模、形態が相違している。特に隅柱・横棧に側板を固定するものと、本年度検出したS E61・S E67の側板に柄を穿って横棧を固定する方法には、時期的相違も考えられるところから今後さらに検討を要する所である。

#### PL.34 S E67

(a) 完備状態



(b) 播鉢出土状態

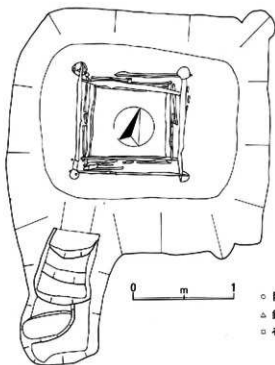


(c) 出土陶磁器

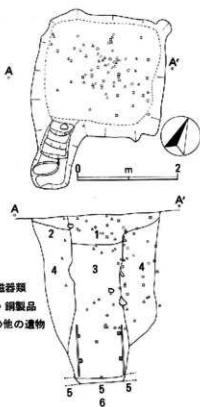


Fig. 40 SE67実測図

(a) 平面図

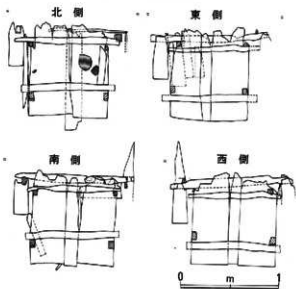


(b) 遺物出土状態



- 陶磁器類
- △ 鉄・銅製品
- その他の遺物

(c) 木枠実測図

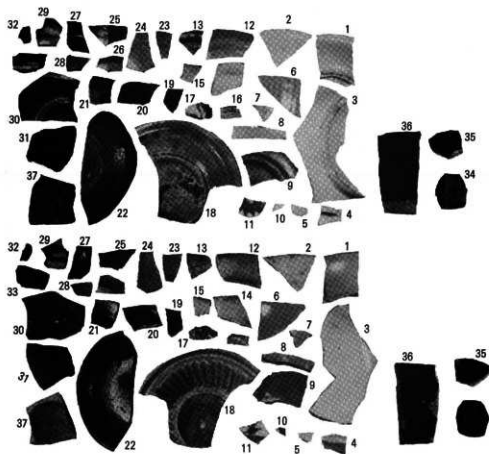




(a) 発掘状況



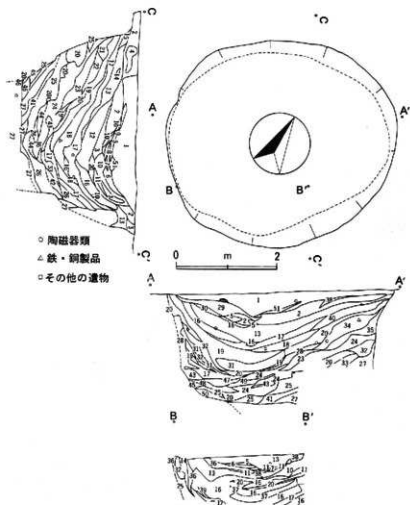
(b) 出土陶磁器類



SE 68 (PL.35・Fig.41・Ch.39) —F・G50区検出。南北410cm、東北455cmの不整円を呈し、深さ260cmまで掘り下げた。層序図でもわかるとおり、薄いレンズ状の土層が幾重にも堆積しており、自然堆積の状態を呈する。木枠は検出できなかった。

出土遺物には、白磁皿(1~5)、青磁碗(6~9)、染付(10)、赤絵(11)、美濃灰釉皿(12~18・23)、天目碗(19)、美濃褐釉・鉄釉皿(20~22)、唐津碗(24)同皿(25~28・30)、播鉢(31)、越前甕(36)、不明陶器(29・35)、埴埴(33・34)、溶解物(32)、土師器環(37)、鉄鍬(PL.54-16)、火打金(PL.55-10)、銅製鉢(PL.56-11)、火打石(PL.58-11)、石臼(PL.59-4)の他、鉄釘2、不明鉄製品3、不明銅製品1、砥石1、

Fig.41 SE68実測図



古銭5枚(判読不能銭が多い)、不明木製品などがある。

〔注意ノート⑥〕

井戸跡の調査は、深さが2～3m以上にもおよぶため非常に困難な作業が要求される。特に湧水が激しい所では、泥土状態の部分を手探りで掘り進めることも多いし、壁面の崩壊が予想される所では土砂の取り上げは慎重な対応をしなければならない。しかし、井戸の底近くから木杵が検出されたり、重要な遺物が出土することも多く、掘り下げを中断するには口惜しさが残るのである。

特に井戸は廃棄される場合、危険なこともあって短時間に埋め戻されることが多いと考えられ、現在まで検出した井戸跡の中には、陶磁器の時期別組み合わせが良好に理解できるものがある。先にも述べた通り、陶磁器の伝世はかなり長期間おこなわれるが、いざ廃棄する段階になると、廃棄時期に近接した時期の遺物が多く出土する傾向をみすと思われる。その意味で、唐津を出土する遺構と、出土しない遺構では数十年以上におよぶ廃棄時期の相違があるのではないかと考えている。

井戸跡の中で、覆土から唐津を出土する典型がSE50(『浪岡城跡V』P92)、SE68などであり、両者は隣接した区域から検出され、大形の掘り方を呈し、木杵を有しないという共通の特徴がある。SE50の陶磁器の組み合わせは美濃灰軸ヒダ皿、同掲軸皿、天目、黄瀬戸手、唐津、備前であり、SE68も黄瀬戸手・備前を除けばほぼ同様の組み合わせとなる。また、SE61で出土した染付皿は、その出土状態から井戸跡廃棄の直前に投げ捨てられたものであるとの推定が可能である。このように、井戸跡から出土する陶磁器については、浪岡城落城の年代(現在天正六年と天正十八年説あり)を解明する糸口として期待されるものがある。

井戸跡から検出される木杵の材質は、ほとんどが檜であり側板および隅柱には手斧による整形痕が明瞭にみられる。側板の厚さは1～3cmぐらいのものが多く、幅は50cm前後、長さは全形の残存するものがなく明確ではないが150cm～200cmぐらいあったろうと推測される。さらに隅柱は四角・六角・八角に成形されるものが多く、地表までのびるとすれば250～300cmも必要だったと思われる。このような木材加工が口常的技術でおこなわれていたと考えると単に木杵だけでなく他の建物構築にあたっての木工技術の一端も理解できる。

現在まで検出した井戸跡に上部構造(覆屋など)が付属していたかどうかははっきりしない。掘立柱建物跡、堅穴遺構などとの関連も明確でない。飲料・炊事用の水を供給するための井戸が建物跡との関連なしに構築するとは考えられないことから、今後は遺構間の配置も考慮して調査を進める必要がある。

#### 4. その他の遺構

これまで、掘立柱建物跡、竪穴遺構、井戸跡を報告してきたが、ここではその他の性格不明遺構を中心に、溝、土塁状遺構を報告する。なお、遺構ナンバーの都合で、本来であれば竪穴遺構と認定できるものも本項で報告しなければならぬため、記述の重複等は御容赦願いたい。

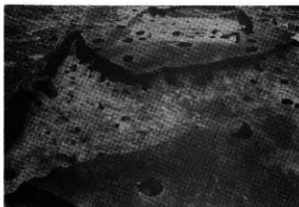
S X 81 (PL.36・Ch.40) - J・K51・52区検出。昭和56年度調査で検出したものから引き続き遺構であり、南側に開いた馬蹄状の溝である。覆土は黒色土を基調とする単純層で、土師器・須恵器が出土する平安時代の構築遺構。重複する遺構としては、S B 21 (新)、S T 153 (新)、S T 156 (新)、S E 60 (新)、S E 61 (新)、S X 194 (新)、S D 55 (新旧不明)があり、S X 106は本遺構の延長上にあるため同一遺構と考えられる。出土遺物には土師器坏(1・2)などがある。

S X 82 ~ 88 一昭和56年度  
発掘調査報告書『浪岡城跡V』  
にて報告済。

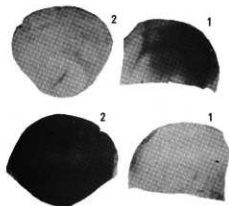
S X 89 (PL.37(a)・Fig.42  
(a)・Ch.41) - J 50区検出。長  
軸 335 cm、短軸 130 cm、深さ 52  
cmの長方形プランを呈する小形  
竪穴遺構である。壁面に接する  
状態で6個の柱穴(Pit 1~Pit  
6)があり、覆土は自然堆積の  
状態を呈する。出土遺物には火  
打石、砥石、石臼、鉄斧、永楽  
通宝他1枚の古銭などがあった。

S X 90 (PL.37(b)・Fig.42(d)  
・Ch.42) - J 50区検出。長軸  
225 cm、短軸 200 cm、深さ 51 cm、  
覆土は自然堆積の状態を呈する  
小形竪穴遺構。美濃灰軸皿、不  
明鉄製品、古銭3が出土してい  
る。

PL.36 S X 81



(a) 完掘状態 (北側から)



(b) 出土土師器

S X 91—J・K49区検出。北館南端にのびる溝状遺構。染付、美濃灰釉が出土。詳細不明。

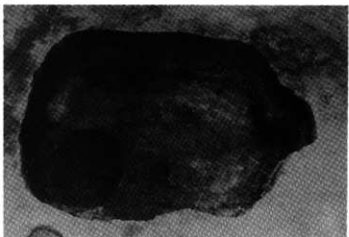
S X 92—S E61に変更。

S X 93 (PL. 5 (e)・Fig. 11・Ch. 43)—K51区検出。長軸 531cm、短軸 420cm、深さ46cmの

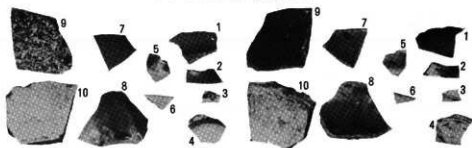
PL.37 S X89・90・93



(a) S X89全景 (東側から)



(b) S X90全景 (南側から)



(c) S X93出土陶磁器

Fig. 42 性格不明遺構実測図

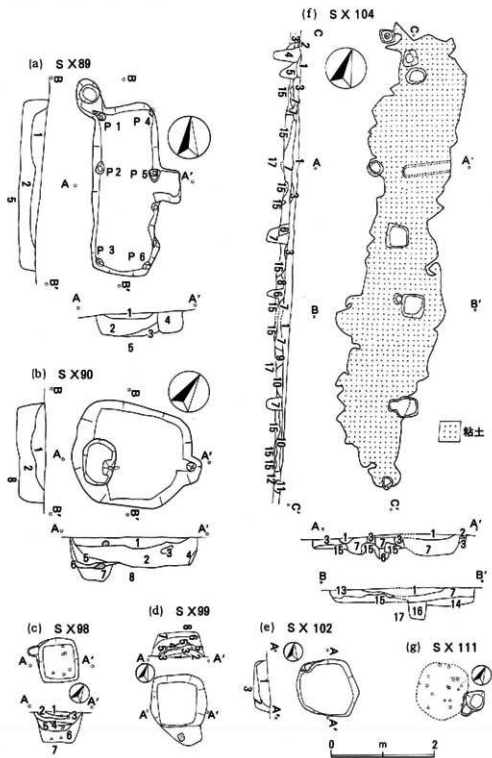
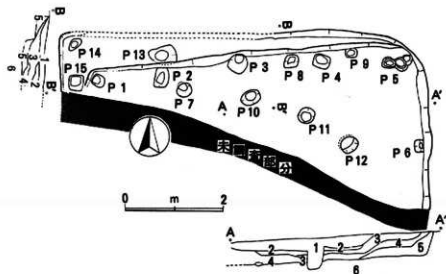


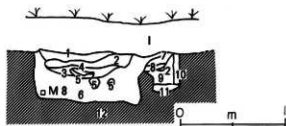
Fig. 43 S X 94実測図



PL.38 S X 95出土漆器



Fig. 44 S X 95断面図

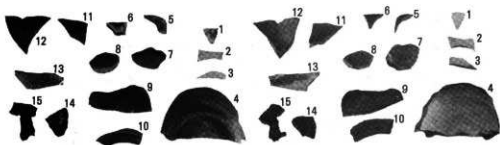


規模を有し、不整形のプランを呈する。柱穴配置は明確でなく、Pit 17・Pit 20などが付属するらしい。出土遺物としては、青磁皿（1・2）、染付皿（3・4）、志野皿（6）、唐津碗（7・8）、越前甕（9）、播鉢（10）、産地不明陶器（5）、鉄釘（PL.54-25）、小柄、小札、溶解物、無文銭、漆器などがある。

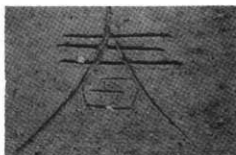
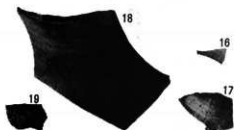
S X 94 (Fig. 43・Ch.44) - L51区検出。南側が未調査である。検出部分では東西方向（690）cm、南北方向（350 + α）cm、深さ50cmの規模で方形プランを呈する。Pit 1～Pit 6までが付属する柱穴であり、Pit 8・9・13・14は重複する遺構のものと考えられる。竪穴遺構である。

出土遺物は、金属器が多く刀（PL.54-2）、小札（PL.54-7・10）、目貫金具（PL.56-9）、八双金具（PL.57-3）、不明鉄製品および銅製品、開元通宝他古銭2枚などがある。

PL.39 S X 96・97・100



(a) S X 96出土陶磁器類



(b) S X 97出土遺物



(c) S X 100 全景 (南側から)

S X 95 (PL. 38・Fig. 44・Ch. 45) - J 48区検出。北側半分を調査。深さ45cmのビット状遺構で内耳鉄鍋 (PL. 55-3)、揺鉢と底に叶の文字を書いた漆器碗が出土している。

S X 96 (PL. 39(a)・Ch. 46) - J 48区検出。上端径130cmの円形フラスコ状ビットで、深さ



Fig. 45 S X 100実測図

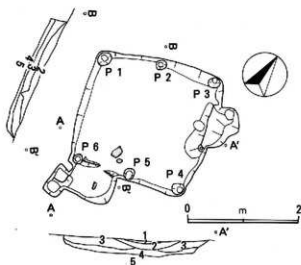
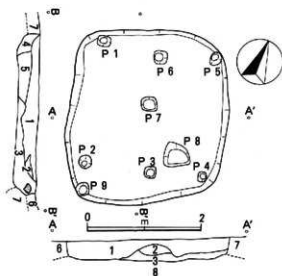


Fig. 46 S X 114実測図



量に含まれ、鉄釘1点の出土があった。

S X 100 (PL.39(c)・Fig.45・Ch.50) — J・K49・50区検出。長軸240cm、短軸231cmのはぼ正方形プランを呈し、深さ34cmの罌穴遺構。東壁北側あるいは南壁西側に張り出し状の部分があり、南壁と北壁端にそれぞれ3個の柱穴(Pit 1～Pit 6)を配置している。出土遺物には染付、不明銅製品、焼けた痕跡のある川原石などがある。

S X 101 — G50区検出。67cm×40cmの不整形を呈するビット状遺構。出土遺物なし。

136cmまで掘り下げた。井戸跡の可能性もある。覆土には多量の灰が包含され、その中から青磁碗・鉢・皿(4～13)、白磁皿(2・3)、染付皿(1)、溶解物(14・15)、永楽通宝、元豊通宝、石臼などに伴って炭化米が検出されている。

S X 97 (PL.39(b)・Ch.47) — J50区検出。最大幅240cm、深さ44cmの平安時代の溝。「春」の監書記号を有する須恵器壺(18)は本遺構に、染付皿(16)朝鮮皿(17)、溶解物(19)は中世の柱穴等に伴う遺物である。S D61と連続する溝である。

S X 98 (Fig.42(c)・Ch.48) — G49区検出。87cm×76cmの方形プランで深さ60cmを測るビット状遺構。覆土に灰を含む部分が多い。染付、美濃灰釉、小札、洪武通宝などが出土している。

S X 99 (Fig.42(d)・Ch.49) — G49区検出。110cm×100cmの方形プランで深さ50cmを測るビット状遺構。覆土には灰が多

S X 102 (Fig.42(e)・Ch.51)

—G49区検出。118cm×110cmの正方形プランを呈し、深さ30cmを測るビット状遺構。覆土には白灰、炭化物が包含され、漆器の被膜が1点出土している。

S X 103 —G49・50区検出。径約90cmの円形ビット状遺構。

S X 104 (PL.40(a)・Fig.42(f)・Ch.52) —E50区検出。南北880cm、東西200cmの規模に厚さ10cm前後の黄白色粘土を貼った遺構。S B20の範囲内にあることから孤立柱建物跡と関連すると考えられ、昭和56年度検出のS B17と類似している。

S X 105 —K50・51区検出。S E60と重複しているため規模等不明。

S X 106 —K50・51区検出。S X81に連続する溝跡である。

S X 107 (PL.40(b)・Ch.

53) —G50区検出。(185)cm×113cmの長方形プランを呈する遺構。須恵器・土師器耳皿(PL.40(b))・不明鉄製品が出土している。

S X 108 —G50区検出。(107)cm×100cmのビット状遺構で、無文銭が1枚出土している。

S X 109 (PL.40・Ch.54) —G50区検出。S D64と重複しているため規模は不明瞭で、周囲に焼土と灰の分布がみられた。赤絵(PL.40(d))、染付、火打石の出土があった。

S X 110 —G50区検出。S D64・S X 109と重複のため規模不明瞭。S X 109と同一遺構の可能性が有る。鉄鏝、不明鉄製品などの出土遺物がある。

S X 111 (PL.41・Fig.42(g)・Ch.55) —E・F50区検出。掘り込みの痕跡はなく、径100cmの中にかかなりの遺物が集中していた。周囲に粘土の範囲があり、草札(PL.41(a)・(d))がその内側から出土している。この草札は、草に黒漆を塗った後表面に金箔を塗付したもので、部

PL.40 S X 104・107・109



(a) S X 104 全景 (北側から)



(c) S X 109 全景 (南側から)



(b) S X 107 出土耳皿

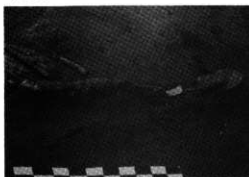


(d) S X 109 出土赤絵

分的には重なり具合がよくわかる状態で出土した。他に、菰編みに使用する用具（津軽地方ではコモと呼ぶ）と類似した石製品（PL.41(b)）、鉄絵文様を施した施釉陶器（1・2）、唐津皿（3）、美濃鉄釉皿（4）、小札、鉄釘、不明鉄製品などの出土遺物がある。検出地区はS B20の範囲にあり、掘立柱建物跡と関連する可能性がある。

S X 112 一欠番。

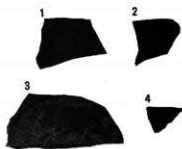
PL.41 S X 111



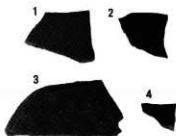
(a) 草札出土状態



(b) 石製品出土状態



(c) 出土陶磁器



(d) 出土草札

S X 113 一欠番。

S X 114 (Fig.46・Ch.56)

—D49区検出。長軸303cm、短軸280cm、深さ37cmを測る竪穴遺構。Pit 1～Pit 6までが付属する柱穴と考えられ、南・北壁端に3個ずつ配置し、南側には張り出しの痕跡もみられた。鉄釘、鉄滓の出土があった。

S X 115 —S E68に変更。

S X 116 —S E68の北側にあるピット状遺構。F50区検出。

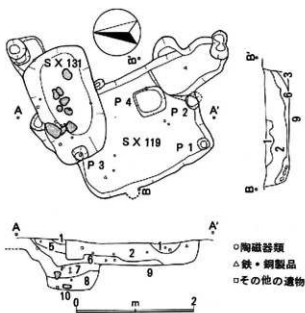
S X 117 —S E68に変更。

S X 118 一欠番。

S X 119 (Fig.47・Ch.57)

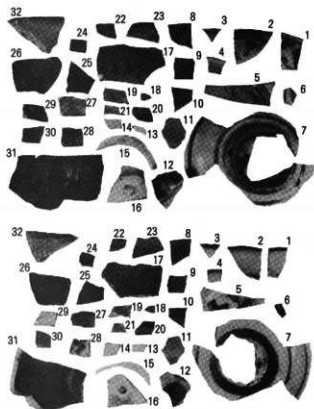
—H・I45区検出。長軸226cm、短軸188cm、深さ40cmの方形プランを呈する小竪穴遺構。付属する柱穴はないと考えられ、南壁東側に張り出しを有する。出土遺物としては、青磁、瀬戸、美濃灰釉、不明鉄製品などがある。

Fig.47 S X 119・131 実測図





(a) 全景 (西側から)

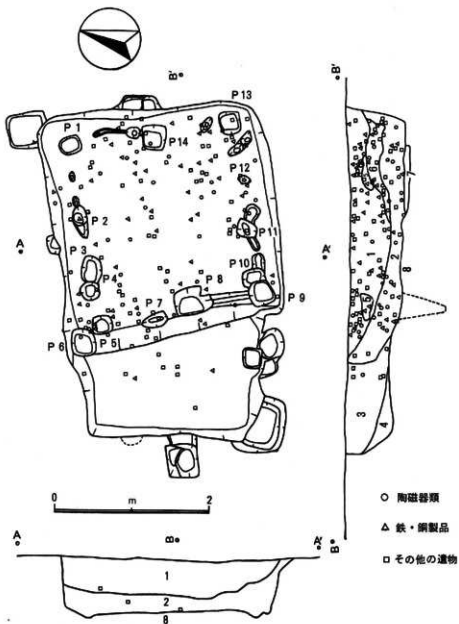


(b) 出土陶磁器

(c) 小刀出土状態



Fig. 48 S X 120 実測図



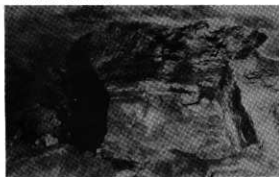
S X 120 (PL. 42・Fig. 48・Ch. 58) —H・I 43区検出。長軸 335 cm、短軸 238 cm、深さ 76 cm の方形プランを呈する竪穴遺構。覆土は自然堆積の状態を呈し、西側にテラス状の張り出し部分を有するが時期的相違があると考えられる。柱穴は 2 間×3 間の配置と推定され、Pit 1・Pit 2・Pit 3・Pit 5・Pit 8・Pit 9・Pit 11・Pit 12・Pit 13・Pit 14 が基本柱穴、他は補助的なものであろう。

出土遺物は覆土全体から多量に検出されている。染付碗（4）、同皿（1～3・5～7）、青磁碗（8・9）同皿（10・11）同鉢（12）、白磁皿（13～15）、美濃灰釉皿（17・20・21）、志野皿（16）、唐津皿（22・23）、美濃褐釉皿（24）、天目碗（25・26）、越前壺（27～30）瀬戸壺（31）、播鉢（32）などの陶磁器類。小柄小刀（PL.42(e)・PL.54-3・4）、字引金（PL.55-13）、火箸、鎌、鉄釘20本などの鉄製品。銅細棒（PL.56-13）、ケセル（PL.57-11）、銅滓などの銅製品。古銭は無文銭を主体に36枚、漆器碗の被膜、桃と思われる種子などが出土した。

S X 121（PL.43・PL.44・Fig.49・Ch.59）—H42・48区検出。長軸237cm、短軸195cm、深さ130cmの規模を有する方形竈穴遺構である。柱穴は四隅（Pit 1～Pit 4）に、覆土中間には厚い灰の層が存在し、遺物はこの灰層直下を中心に出土した。S B 23・S B 26と重複しているがその新旧関係は不明である。

出土遺物の中で特徴的なのは漆器碗の被膜である。PL.43(b)は、碗がつぶれた状態で出土し、内面朱塗り、外面黒塗りの地で、胴部には丸に「叶」という文字、底には「大上」という文字

PL.43 S X 121



(a) 全景（南側から）



(b) 出土漆器碗



(c) 同文字拡大



(d) 出土漆器



(e) 出土漆器



(f) 出土漆器

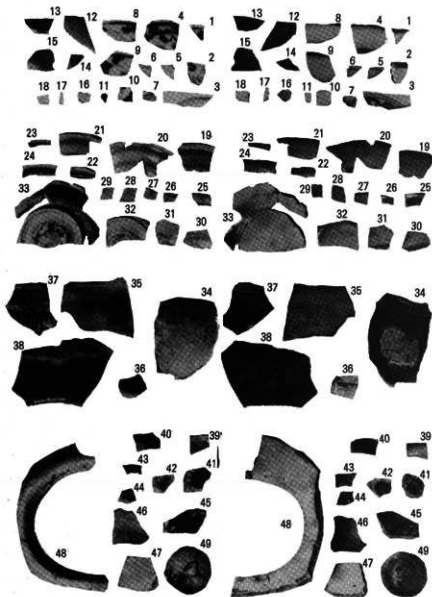
が朱筆で書き込まれていた。（PL.43(c)）また、胴部外面に鶴の文様をめぐるすもの（PL.43(d)）、胴部外面に丸に「大」という文字を書き込んだもの（PL.43(e)）、胴部外面に丸に「吉」あるいは「？」の文字を書き込んだもの（PL.43(f)）がある。

陶磁器類には、染付碗（2・5・6・10・11）同皿（1・3・4・7～9）、青磁碗（12～15）、白磁皿（16～18）、美濃灰釉皿（19～33・39）、天目碗（40）、越前壺（41～47）、瓦器手焙り（35～38）、不明陶器（48）、増埴（49）、羽口（34）があり、鉄製品には、鉄（PL.54-17）、鉄釘（PL.54-30・36・37）、鉄鍋、火打金、火箸、

鉄滓、その他があり、銅製品には装飾品（PL.57-5）が、石製品には火打石（PL.58-9）、  
 砥石、硯、古銭は元聖元宝・皇宋通宝・治平通宝他16枚があった。さらに灰層の直下からは漆  
 器の被膜とともに粉状になった骨片が出土している。

このように多量の遺物を出土したと、竪穴自体の規模が小形であること、覆土中間に存  
 在した灰層は人為的所産とも考えられるところから、墓所の性格も考慮しなければならないで  
 あろう。

PL. 44 S X 121 出土陶磁器類





S X 122 (PL.45(a)・Fig.49(b)・Ch.60) — I・J 43区検出。径 200 cm の円形プランを呈し、深さ 180 cm まで掘り下げた井戸跡である。100 cm 以下の深さでは壁面の崩壊が激しく掘り下げは困難であった。重複する遺構としては、S B 26 (旧) があり、南側に傾斜を有する溝 (S D 59) は排水路的機能があるのかもしれない。

出土遺物としては、青磁碗 (1~5)、白磁皿 (7)、美濃灰釉皿 (6)、瓦器 (8)、播鉢 (10)、溶解物 (11)、須恵器壺 (9)、鉄釘 6、銅滓 (PL.56-27)、砥石 4、石臼 (PL.59-11)、ヒエあるいはアワとみられる炭化物などがある。

S X 123 (PL.45(b)・Fig.51(a)・Ch.61) — H 44区検出。長軸 145 cm、短軸 130 cm、深さ 210 cm まで掘り下げた方形プランの井戸跡。深さ 160 cm 付近から壁面の崩壊が激しく、層序は自然堆積の状況を示す。

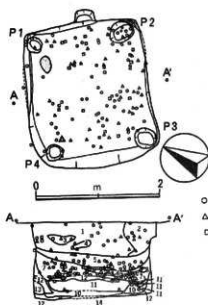
出土遺物としては、青磁碗 (15・16)、白磁皿 (12)、染付皿 (13・14)、播鉢 (17)、不明鉄製品 1 点がある。

S X 124 (PL.13(a)・PL.45(c)・Fig.17・Ch.15・Ch.62) — E 49区検出。長軸 126 cm、短軸 120 cm の円形プランを呈する井戸跡と考えられ、深さ 140 cm まで掘り下げた。深さ 70 cm ~ 80 cm の所で壁面の崩壊がみられ、覆土堆積は人為的な状況を示し、S T 166 (旧) との重複関係がみられる。

出土遺物として、染付皿 (18)、美濃灰釉皿 (19~21)、唐津皿 (23)、不明陶器 (22)、銅滓、洪武通宝、漆器被膜などがあつた。

Fig. 49

(a) S X 121 実測図



(b) S X 122 実測図



- 陶磁器類
- △ 鉄・銅製品
- その他の遺物

S X 125 (PL. 46・Fig. 23・Ch. 21・Ch. 63) —H46区検出。二基の小竪穴が重複しているようで、北側部分が89cm×80cmの方形プランで深さ80cm、南側部分が(130)cm×95cmの楕円形プランで深さ40cmの遺構である。どちらも覆土全般に灰を多量に包含し、部分的には焼土・炭化物が集中している箇所もあり、かまどあるいは屋外炉的な機能を有する遺構とも考えられる。

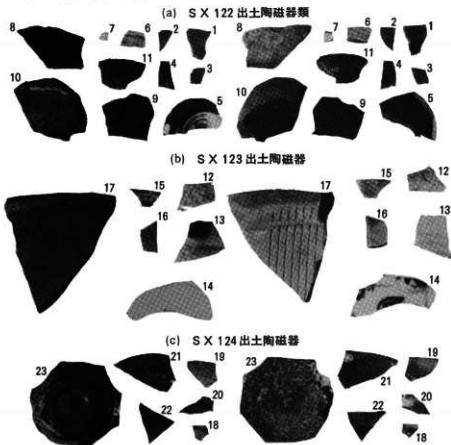
出土物はかなり集中して出土しており(PL. 46(b))、青磁(1・2)、美濃灰釉皿(3)、越前甕(4)などの陶磁器の他、鉄釘12本、鎌状鉄製品(PL. 55-1)、火箸(PL. 55-15)、縄文土器片などがある。S T 175(新)との重複関係がある。

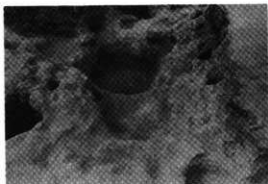
S X 126 —E50区検出。S B 20、S T 161 B、S X 149と重複しており完掘できなかつたためプランは不明確である。青磁、埴埴、小札、開元通宝の出土があった。

S X 127 (Fig. 23・Ch. 21) —H46区検出。90cm×80cmの円形プランを呈し、深さ115cmを測るピット状遺構。S T 175と重複し、層序関係から(Fig. 23 S P B)本遺構が古いことを確認した。

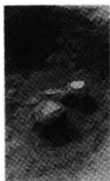
出土物には、染付が1点あった。

PL. 45 S X 122・123・124

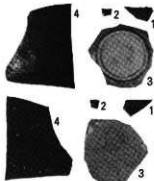




(a) 全景 (兩側から)



(b) 遺物出土状態



(c) 出土陶磁器

S X 128 — F 50区検出。規模は不明瞭で S B 20に伴う柱穴と考えることもできる。ただし、床面直上から未炭化状態の木板と、覆土から大平通宝、無文銭等の古銭 6 枚、鉄鍋片が出土しており、明確な機能はわからない。

## 〔注意ノート⑥〕

S X の略称を使用している遺構の中には、竪穴遺構、井戸跡、土坑的遺構、かまど・炉跡的遺構、柱穴に近い遺構、特殊な遺物出土する遺構など、統一の基準を有しない遺構が多い。

これは、掘り下げ開始の段階で遺構の性格を把握できなかった

めと、他の遺構を掘り下げている段階で重複しているものが検出された時、仮に S X の略称記号を用いて掘り下げることが多いことによる。特に浪岡城跡の場合、遺構確認面の遺構把握は土層による相違が顕著でなく、わずかに 1 cm 以内の土層の中で 2～3 基の遺構重複は普通であり、発掘調査の主旨があくまで城館期最終末の遺構を中心にした調査であり、遺構の破壊を極力さける方針で進めているため、このような事になるのである。

浪岡城跡で検出される遺構の大部分は、いわゆる掘り下げ構築を基本とする遺構であり、礎石や版築等の遺構確認面より上部で検出されるものは皆無に等しい。そのため、調査自体が検出された遺構の廃棄行為のみに終始する傾向があり、なかなか構築行為・使用行為にまで踏み込めないのが現状である。

東北地方北部における城館での各種遺構は、他の地方における城館遺構の構成とは大きな相違がみられ、各種遺構の解釈をめぐって意見統出の段階にある。そのような中で、機能不明のまま調査されている遺構について、現状では基本的事項を把握しておくことが最低の条件であり、今後各種類例の機能考察のために、充実した資料整理が必要と痛感している。

S X 129 (PL.47・Fig.50・Ch.64)

—H43・44区検出。方形基調の小竪穴部分の規模は250cm×250cm、深さ52cmであり、井戸跡あるいは貯蔵穴と考えられる部分の規模は径120cm、深さ230cmまで掘り下げている。前者と後者の覆土層序から、同時期あるいは後者が古い構築と考えられる。

方形竪穴部分には柱穴が2個みられたが、上部構造を推定するまでには至らなかった。

覆土から多量の遺物が出土しており(PL.47(b))、一個体となるものが少ないことから破壊された後の廃棄と考えられる。

出土陶磁器類には、染付皿(1~5)、青磁皿(6~25・31・32)同碗(26~30)、美濃灰釉皿(33)、天目碗(34)、

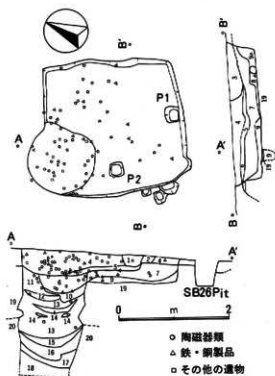
越前甕(35~38)、播鉢(40~43)、瓦器(46・47)、不明陶器甕(39)、埴塙(44)、溶解物(45)がある。青磁皿の出土量が圧倒的に多いことに特徴がある。他の出土遺物としては、鉄鍋、鉄釘、不明鉄製品(PL.54-33)、銅細棒(PL.56-15)、不明銅製品(PL.56-16)、硯(PL.58-4)、炭化米、骨片などがあつた。

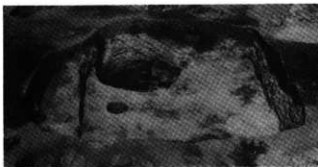
S X 130 —H43区検出。幅180cmで南北に走る溝と考えられる。时期的には土師器の出土が多いことから平安時代と思われるが、全体の規模が不明瞭のため再考の必要がある。S T 179(新)、S T 187(新旧不明)との重複がみられた。

S X 131 (Fig.47・Ch.57) —H45・46区検出。長軸195cm、短軸108cm、深さ85cmで楕円状を呈する土拡の小竪穴遺構。S X 119(新)と重複し、覆土下層には川原石の分布がみられた。出土遺物には、珠洲播鉢、染付、美濃灰釉、越前、鉄釘、火打石などがあつた。

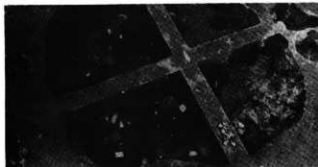
S X 132 (PL.48(a)・Ch.65) —H42区検出。規模は不明瞭であるが、覆土は黒色土が主体であること、出土遺物に土師器・須恵器が多いことなどから平安時代の遺構と考えられ、南北500cm、東西200cmぐらいの範囲が推定できる。S T 183(新)とS T 184(新)と重複しており、火ダスキと籠書き記号を有する須恵器坏(PL.48-1・2)が出土している。

Fig. 50 S X 129 実測図

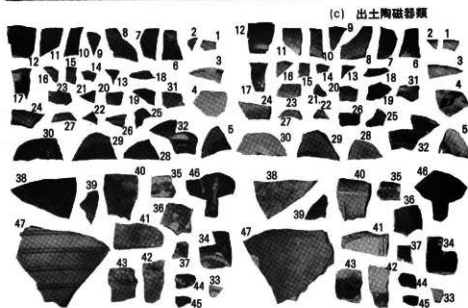




(a) 全景 (南側から)



(b) 遺物出土状態



(c) 出土陶磁器類

〔注意ノート⑦〕

S X 129のように多くの陶磁器片が出土するにもかかわらず、まったくと言ってよいほど一  
 個体として復元可能なものがない。このことは、城館内における廃棄行為が長期に渡って行な  
 われていること、遺構の重複が激しいため土層の移動があって遺物は廃棄時期の原位置を示し

ていない事によると考えられる。

PL.48 S X 132・133・135

S X 133 (PL.48(b)・Fig.51(b))—E51区検出。長軸190cm、短軸170cm、深さ55cmの不整形を呈する小竅穴遺構。床面直上に3個の川原石が存在し、S B 12(旧)、S B 20(旧)と重複している。床面から検出した柱穴はいずれも掘立柱建物跡に付属するものである。

出土遺物には鉄釘2本がある。

S X 134 (Fig. 51(c)・Ch.66)—H44区検出。長軸158cm、短軸140cm、深さ50cmを測る不整形方形プランのピット状遺構。覆土は全般に炭化物を含み、自然堆積の状態を呈する。

出土遺物としては、青磁、天目、鉄釘、不明鉄製品、くるみなどがある。

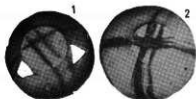
S X 135 (PL.48(c)(d)・Fig.51(d)・Ch.67)—H45区検出。

155cm×155cmの不整形プランを呈し、深さは25cmであった。他の柱穴と重複しているため、明確なプランが検出されなかったと考えられる。

出土遺物として、白磁小坏(PL.48(d))が1点だけ存在した。

S X 136 (PL.48(a)・Fig.51(e)・Ch.68)—H・I 46区検出。長軸280cm、短軸210cmの方形プランを呈し、深さ28cmの規模を有する。覆土は暗褐色土と黄褐色砂質土の混層の単層であり、人為的埋め戻しと考えられ、S T 186(斬)と重複している。

出土遺物には、青磁、染付、鉄釘、鉄滓があった。



(a) S X 132 出土須恵器坏

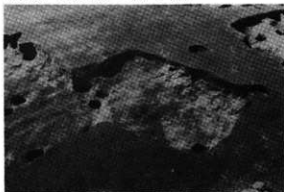


(b) S X 133 全景 (西側から)

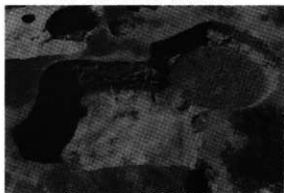


(c) S X 135 全景 (西側から) (d) 同出土白磁小坏

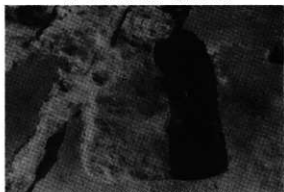




(a) S X 136 全景 (東側から)



(b) S X 137 全景 (東側から)



(c) S X 139 全景 (北側から)

物には越前甕の破片が1点ある。

S X 140—H45区検出。152 cm × 150 cmの円形プランを呈し、深さ100 cmまで掘り下げた小形の井戸状遺構。掘り下げを途中で中止したため全体の規模は不明であるが、覆土から、美濃灰土、染付、播鉢、不明銅製品、判読不能銭などが出土している。

S X 141—G49区検出。S D61 (旧) の上部に存在し、175 cm × 150 cm以上の範囲に灰を分布する遺構。天目、鉄釘、鉄滓が出土している。

S X 137 (PL.49(b)・Fig.51 (f))—H44区検出。長軸214 cm、短軸189 cmの方形プランを呈し、深さ58 cmの規模を有する小竪穴遺構。S E66 (新) と重複しているが、上部構造を推定する柱穴等は検出されていない。

出土遺物としては、鉄釘、不明鉄製品、洪武通宝、無文銭、炭化米等があった。

S X 138 (PL.29・Fig.33・Ch.31)—J 43区検出。長軸216 cm、短軸147 cm 方形プランを呈し、深さ62 cmを測る小竪穴遺構である。S B23 (新)、S D58 (新旧不明) と重複している。

出土遺物には染付1点があった。S X 139 (PL.29・Fig.33・Ch.31)—J 43区検出。長軸195 cm、短軸145 cmの方形プランを呈し、深さ44 cmを測る小竪穴遺構。S D59 (新)、S T 189 (新旧不明) と重複しており、床面から検出された柱穴は他の竪穴遺構に付属するものらしい。出土遺

S X 142 (PL.50・Ch.69)

—E・F49区検出。S D61 (旧)と重複しているため明確な規模は不明であるが、おそらく(300)cm×(140+α)cmぐらいの方形プランを呈し、深さ25cmを測る竪穴遺構であろう。

出土遺物には天目(PL.50—1)、判読不能銭、炭化米などがあり、近接した地点の出土遺物にも本遺構に伴うものがあるらしい。

S X 143 —C49区検出。北館北縁に存する遺構であるが、規模、機能等は不明である。出土遺物もない。

S X 144 (PL.50(b)(c)) —F42区検出。昭和59年度調査にて実測予定のため規模等は不明である。出土遺物としては鉄鍋(PL.50(c))、美濃褐釉皿、皇宋通宝、判読不能銭がある。

S X 145 (PL.50(d)) —F42区検出。昭和59年度調査にて実

測予定のため規模等は不明。東壁・西壁中央に対応する柱穴があり、東南隅に舌状スロープの張り出しを有する。美濃褐釉皿が1点出土している。

S X 146 —F42区検出。昭和59年度調査にて実測予定のため規模不明。覆土から越前壺、青磁、不明鉄製品、炭化米などが出土している。

S X 147 —F42区検出。規模不明。竪穴遺構となる可能性あり。美濃灰釉・白磁の出土。

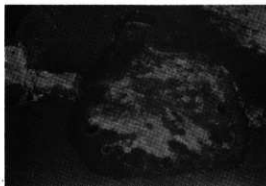
S X 148 —F42区検出。未調査部分が多く、覆土から染付2点が出土している。

S X 149 —E50区検出。210cm×200cmの範囲は確認したが、明確な規模は不明である。S B20・S X 126 (新旧不明)と重複している。青磁、白磁、埴埴、溶解物が出土している。

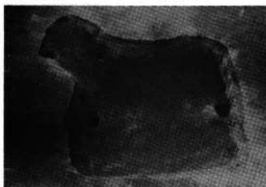
PL.50 S X 142・144・145



(a) S X 142 出土天目碗 (c) S X 144 鉄鍋出土状態



(b) S X 144 全景 (南側から)



(d) S X 145 全景 (北側から)

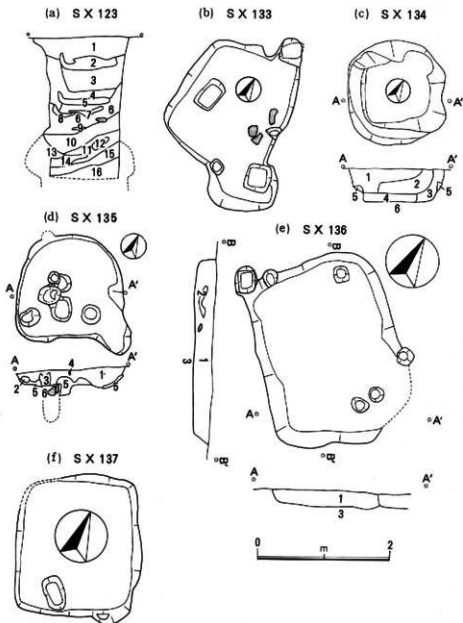


S X 150—E50区検出。S E65の南側に位置し、土師器等を主として出土する遺構であるが明確なプランは不明である。

S X 151—F・G42区検出。昭和59年度調査予定。

S X 152—F・G42区検出。昭和59年度調査予定。

Fig. 51 性格不明遺構実測図



溝跡 (SD) は前年度検出のものから連続するものもあり主要なもののみ記述する。

SD 53—J 49区。幅約30cm、長さ450cm、深さ10cm。N-50°-Wの方向に走る。

SD 54—J 49区。幅約40cm、長さ540cm、深さ20cm。N-6°-Wの方向に走る。

SD 55 (PL. 51(a))—J 50・51区。幅100cm前後、長さ1400cmまで確認、深さ35cm~50cm、W-0°-Eの方向に走り東から西へ傾斜している。美濃灰釉・茶白・不明鉄製品など出土。

SD 56—E 49区。幅100cm、長さ600cm、深さ不明。N-21°-Wの方向に走る。

SD 57—S E 61に変更。

SD 58—J 43区。幅35cm、長さ750cm、深さ25cm。N-27°-Wの方向に走る。

SD 59—J 43区。幅25~40cm、長さ750cm、深さ17cm、N-26°-Wの方向に走る。

SD 60—F・G 50区。幅40cm、長さ1000cm、深さ30cm前後。方向は不明であるがS E 68に傾斜するらしい。

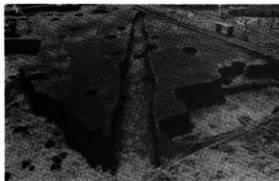
SD 61 (PL. 51(c))—G・D・E・F・G 49、G 50区。幅約200cm、長さ100m以上、深さ80cm。N-46°-Wの方向に走り、ほぼ北館を横断する。鉄皿 (PL. 55-5)、鉄砲玉 (PL. 56-3)、磁石 (PL. 58-15) の他、土師器・須恵器の出土が多い。

SD 62—G 42区。

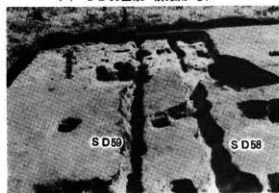
SD 63—D 52区。幅240cm、長さ1000cmまで確認、深さ45cmである。南側に開く馬蹄状の形状を示すと考えられる。

SD 64—G 50区。幅65cm、長

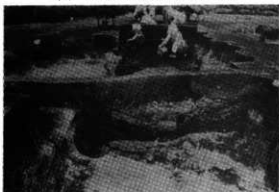
PL. 51 SD 55・58・59・61



(a) SD 55全景 (東側から)



(b) SD 58・59全景 (北側から)



(c) SD 61発掘作業風景 (南側から)

PL. 52 SA 05

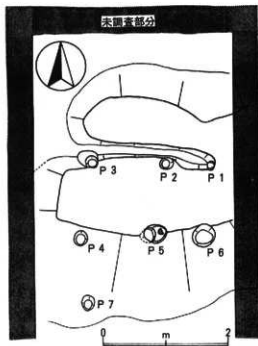
(a) 全景 (東側から)



(b) 全景 (南側から)



Fig. 52 SA 05 実測図



さ約 600 cm、深さ 50~80 cm。E-10°-N の方向に走り、土師器・須恵器を主体に出土する。

SD 65-G50 区。幅約 50 cm、長さ約 600 cm、深さ 26~30 cm であり、東側から西側へ傾斜を呈する。南東に開く弧状の形状を示すらしい。

土器状遺構 (SA) は 1 基のみの検出であった。

SA 05 (PL. 52・Fig. 52・Ch. 70) - C52 区検出。北館北辺に位置し、上端幅 220 cm、下端幅 411 cm を測る三和土遺構であり、土器的機能と柵列あるいは門的機能も推定される。

柱列は 2 列になっており、Pit 1~Pit 3 (北側) の北側には幅 25 cm の溝があり Pit 4~Pit 6 (南側) は傾斜部分に位置している。南北の柱列の幅は 115~125 cm の範囲にあり、深さは形状に比して深い傾向にあるため打ち込んだものとも考えられる。

浪岡城跡の平場辺縁には現在までのところ明確な土器の痕跡はない。しかしながら、このような三和土遺構が、内部土器を破壊した後の痕跡と言えるかもしれない。今後検討を要する遺構である。出土遺物はない。

以上、検出遺構とそれに伴う主な出土遺物を述べた。しかし出土遺物の中で、遺構に伴うものと、それ以外（たとえば表土や遺構確認面まで掘り下げる段階で出土したもの）のものとの価値に差異はみられない状況がある。

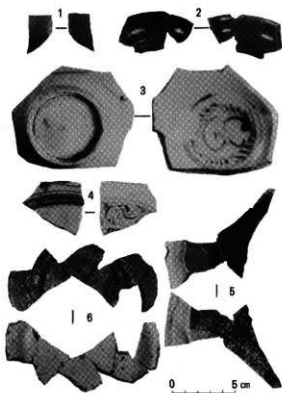
PL. 53で示した陶磁器類は、明確に遺構に伴うものではないが浪岡城跡の陶磁器を考える上で捨ておけない資料である。

白磁皿（1）は、内面に細かい櫛目文を有するもので13～14世紀の製作年代と推定され、伝世的製品と考えられる。青磁小皿（2）は、本年度初現の発掘資料でありH44区から出土している。本例と類似する青磁小皿が

ST 184（H42区）、SX 129（H43区）から出土しており、近接した地点からの出土であるのに対し出土遺構が相違するという興味ある現象がみられる。3と4の染付はいずれも柱穴の中から出土したものであるが、見込文様は浪岡城跡では出土例の少ない類のものである。碗（3）の外面はアラベスク状の連鎖文、内面は花文様等を具象化した文様があり、高台つけ根の部分は施軸のムラがみられる。皿（4）はかなり大型のもので底径12cmを計り、見込部分はおそらく獅子文と考えられる。国産陶器の中でも、美濃・瀬戸の製品は最も多く搬入されているものであるが、その中で御皿（5）などは15世紀前半の製品と考えられ、多量に出土する灰軸皿（16世紀の製品）と年代幅がみられる。そして、志野皿（6）は城跡最終末期の製品と考えられるもので、一般には唐津と同時期に搬入されているようである。

このような遺構外出土の陶磁器については、遺構考察の場合には重要視できないが、浪岡城跡の成立過程や遺跡存続時期、落城時期等を考える上では重要な資料と言え、城跡の主体時期と対比して遺物伝世の風習を理解することも可能である。

PL. 53 遺構外出土陶磁器



## IV 出土遺物

本年度の調査で出土した遺物を材質別に分類すると以下のようになる。

- |         |       |                             |
|---------|-------|-----------------------------|
| I 陶磁器類  | I-1   | 舶載品（青磁・白磁・染付・赤絵・朝鮮・鉄釉壺・鉄釉碗） |
|         | I-2   | 国産品（美濃・瀬戸・唐津・越前・珠洲・信楽？備前？）  |
|         | I-3   | 国産産地不詳品（瓦質土器・施釉陶器・無釉陶器）     |
|         | I-4   | 地元産品（須恵器・土師器）（埴埴・鑄型・かわらけ等）  |
| II 鉄製品  | II-1  | 武具（刀・小柄・小札・槍・鉄鐵）            |
|         | II-2  | 農具・工具（鎌・寺引金）                |
|         | II-3  | 建築具（釘）                      |
|         | II-4  | 発火具（火打金）                    |
| III 銅製品 | III-1 | 仏具（仏像・香炉・鈴・盤）               |
|         | III-2 | 武具（鐙・小柄・鞍・鉄砲玉）              |
|         | III-3 | 工業（銅滓）                      |
|         | III-4 | 商業・交易（銅銭・おもり）               |
| IV 石製品  | IV-1  | 工具（砥石・Fl）                   |
|         | IV-2  | 文具（硯）                       |
|         | IV-3  | 発火具（火打石）                    |
|         | IV-4  | 貯蔵具（鉢）                      |
|         | IV-5  | 縄文遺物（石斧・石鐵）                 |
| V 木製品   | V-1   | 養蠶具（漆器椀）                    |
|         | V-2   | 工具・武具（柄）                    |
|         | V-3   | 生活（井戸木杵）                    |
| VI 自然遺物 | VI-1  | 骨                           |
|         | VI-2  | 種子・堅果・穀                     |

このような材質別による分類では、残存度の良好な陶磁器類が量的に多くなるが、機能的にみた場合は養蠶・貯蔵等の生活の一部を充足しているにすぎない。鉄・銅製品の出土では、武具・宗教具の機能を有するものが多く、浪岡城という城館に起居した人々の生活程度を理解するうえで有効な資料であり、石製品・木製品についてはその材質から地域の生産程度を考える時に有効である。ただし、陶磁器類は歴史資料として年代の決定、交易・経済活動の隆衰、文化活動を知る上では現在のところ特出した価値を有しており、紙数の多くを陶磁器類に費やすことをおとことわりしておく。

## 1. 陶磁器類

### (a) 青磁 (Fig. 53)

青磁の器形としては、碗・皿・小鉢・香炉などがあり、破片数 446 点の出土があった。

碗の中では、外面に蓮弁文がくずれて線描きの状況を呈するものが圧倒的に多く (1・2・3・4・5・6・11) 口縁部付近の葉先を簡略化した線描きで丸珠を有するもの (1・2・6) と剣先状を呈するもの (4・5) および省略しているもの (3・11) に大別できる。これらの碗は口縁が直行して立ち上がる形態である。底部は例が少ないけれども豊付も含めて全体に施軸しているもの (4) が一般的である。

雷文を有するものには、外面口縁部に線描き状のくずれた雷文を有するもの (7) とスタンプ状の雷文帯を外門口縁部および内面胴部上端にめぐらすもの (9) の 2 例があり、後者は両面雷文帯の下に劃花文も描いているようである。

無文の碗には、口縁が外反するもの (10)、外面口縁に一条の劃線を有するもの (19)、口径 12.9 cm、高さ 6.3 cm を計り二次焼成のため軸が剥落しているもの (8) がある。8 については加熱が激しいため胎土にも変化を及ぼしており青磁以外の可能性も考慮し注意を要する。

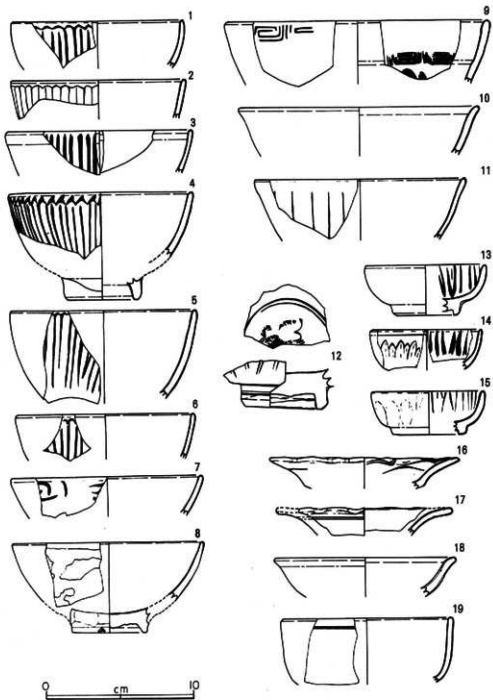
皿はいわゆる稷花皿と言われる製品が多く、内門口縁部に線描文を有するもの (16) と無文のもの (17) がある。また、口縁が外反する無文のもの (18) があり、透明度の高い青緑色の軸調を呈している。

本年度初めて出土した小皿がある。口径 7~8 cm、器高約 3 cm を計る製品で、外面に複葉状の蓮弁文を有し内面に縦位の劃線を入れているもの (14)、内面だけに縦位の劃線を入れるもの (13)、外面に蓮弁文の痕跡がかすかに残るもの (15) がある。本例は、青森県出土品の中では類例の少ないものである。

外面に 2 本 1 対の劃線を縦位に施し、見込にスタンプ文を有する底部片 (12) があり碗の器形と考えられ、豊付部および底は施軸がなされていない。

青磁は、舶載品全体の 48% の出土率を示し、全陶磁器類の中でも 24.9% と高率である。また青磁の中では碗が 48.8%、皿 43.2% の比率であり、その他 8% である。(陶磁器類出土率表参照 P 135)

Fig. 53 青磁実測図



(b) 白磁 (Fig. 54)

白磁は総破片数 121 点出土しており、器形としては皿、小坏、碗などがある。

浪岡城跡から出土する白磁の80%以上は、薄手硬質の整形で口縁が端反りするタイプである。その中には、施釉に薄厚があるため表面が凹凸を呈するもの(2)、高台疊付部に施釉されないもの(3)、乳白色の釉調で高台内面のケズリが鋭角的なもの(4)、高台内面に砂等が付着しているもの(6)、とても薄手に整形しているもの(7)他(5)がある。

皿の中には上記以外に、口縁が内湾気味に立ち上がり高台部に施釉しないタイプがある。一般には軟質で黄白色の色調を早するものが多いけれども、本年度出土のものは硬質感があり青灰色に近い釉調のものである。内湾度が大きいもの(8)と高台底に弧状のケズリを入れない高台部(10・11)などがある。

小坏としては、疊付部に釉を施さず極めて硬質感の強いもの(12)の見込みが蛇の目状を呈し、高台内側のケズリが垂直に近い状態を呈すもの(13)がある。

また、白磁の中で内面に櫛描きによる文様を施した破片があり(1)、13~14世紀の製品と推定されるところから、伝世的意味の強い製品と考えられる。

このような白磁の出土率は、舶載品の中で 13.09%、全陶磁器類の中では 6.6%であり青磁よりかなり低い数値を示している。

(c) 赤絵 (Fig. 54)

皿の破片 2 点の出土があった。(14)は見込み部分に 2~3 条の圏線を施し、内部に赤色・緑色顔料による花の文様、外面にも同種の文様を施し、高台外面には疊付上端に一条の赤色圏線を施している。疊付部は素地が露出してケズリ整形痕が明瞭であり、付け高台の痕跡が断面からも明瞭にわかる。白磁に類似する釉が施されているが全般にムラがみられる。(15)は細片のため器形も明瞭でなく、内・外面に赤色・緑色顔料による文様のみみられるだけである。

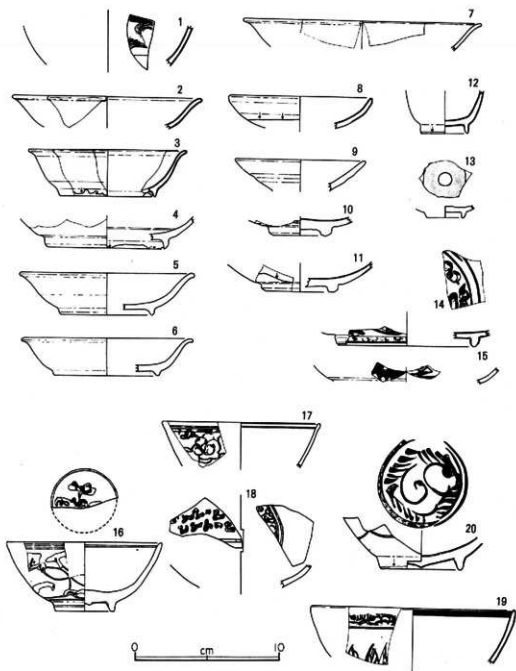
(d) 染付 (Fig. 54・Fig. 55)

染付は総破片数 343 点の出土があった。器形としては皿が 265 点で最も多く、碗 72 点、その他 7 点である。

碗の中で全形を推定できるものは 1 例だけで、口縁が直行気味に立ち上がり底部が肉厚な器体を呈するもので、外面文様は口縁部に一条の圏線と唐草草花文、内面は口縁部に一条の圏線と、見込みに一輪の花を描いたような文様のあるもの(16)である。器形上の特徴についてはすでに他の報告書(「浪岡城跡Ⅲ~Ⅴ」)に記載しており、それらの範囲を越えるものは本年度は出土していない。文様上の特徴として、外面胴部に草花文のあるもの(17)、丸を三つ重ねにしたような文様のあるもの(18)、口縁部に波濤文帯、胴部に芭蕉葉文を有するもの(19)胴部にアラベスク風の連鎖状文、見込みに花を具象化したような文様を有するもの(20)など



Fig. 54 白磁・赤絵・染付実測図



がみられる。(20)は、高台量付部に施釉せず、底中央がケズリ残りのためか凸状になり、付高台的な施釉ムラがみられる。(以上Fig.54 対応)

皿には基本的に三つのタイプが存在する。一つは、いわゆる蕃筒底のもの。二つめは、口縁が端反して高台を有するもの。三つめは口縁が内湾して立ち上がり高台を有するものである。

蕃筒底を有するものには、一般的に軟質な製品が多い中で、本年度出土のものはすべて硬質感の強い製品であり、見込みに捺花文、外面胴部に芭蕉葉文を有するもの(1)、見込みに花鳥文を有するもの(2・3)、外面胴部に梵字文を有するもの(4)などがある。

口縁が端反りするものは、外面胴部には牡丹唐草文を施すものが多く(9・10・11・12)、見込みの文様は王取獅子文(13)、羯磨文(6)が一般的である。浪岡城跡から出土する染付皿の中では最も量的に多い。

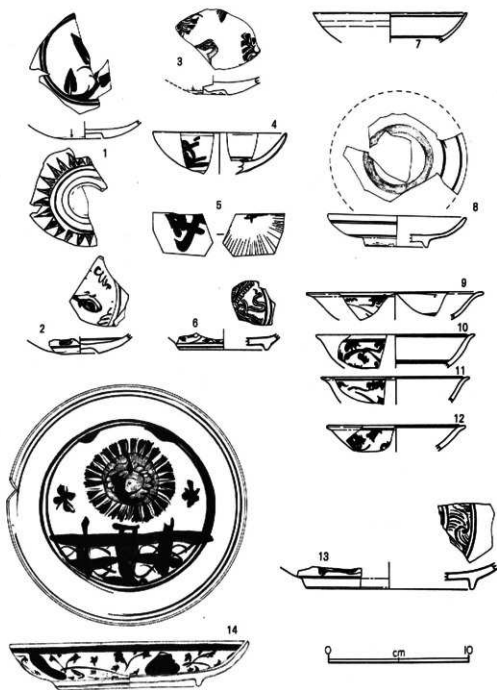
口縁が内湾するものには、主文様がなく圏線だけのもの(7・8)があり、見込みが蛇の目状を呈するもの(8)もある。本タイプの皿は、底に放射状のケズリ痕がみられるものが多く、見込みに「壽」底にも「壽」という文字を描いているもの(5)もある。また、SE61の出土品に、口径19.3cm、底径11.3cm、高さ3.8cmを測る最大の製品(14)が存在する。本製品はほぼ完形品であり、全体の色調は暗緑灰色で、呉須の発色も濃い緑色を呈している。全体に貫入がみられるものの、8片に破壊された接合線の部分で貫入の大きさが異なるという現象があり、土中に埋もれた段階で何らかの変化が生じたものと考えられる。口縁の立ち上がりは鋭角的にすどくケズりこまれ、高台量付部は釉が施されず面取りしたケズリの痕跡が顕著である。また底には同心円状のケズリ痕がみられる。

文様は特色ある文様である。内面口縁部に二条の圏線、見込み外郭も二条の圏線があり、その中に放射状の花弁を有する花が具象的に描かれ、両側に一對の鳥がいるようである。それらの手前は垣根あるいはテラス状の図案で中央に高さのある臺が配置されている。外面口縁部は二条の圏線、胴部には5つの牡丹を配した牡丹唐草文を描いている。牡丹唐草文はかなり簡略化された描き方であり、高台上端にも二条の圏線がめぐっている。

胎土は、景德鎮窯産でみられる精緻な白色ではなく、荒目の黄白色を呈し、呉須の発色も深緑色を呈するところから、福建省など景德鎮より南の窯で生産されたと推定される。なお、類似する製品は東南アジア方面から出土していると聞いている。

染付の出土率は舶載品の中では37.12%、全陶磁器類の中では18.7%であり、陶磁器の中では青磁に次ぐ出土量がある。ところが、器形別に見た場合、染付皿は全陶磁器に対する比率が14.5%、青磁皿は10.5%、青磁碗が11.9%、染付碗が3.9%となり、碗は青磁を主体に皿は染付を主体に使用していたと考えることができる。なお、この数値は時代的变化を表わすものとも考えられる。

Fig. 55 染付実測図



(e) 中国鉄軸 (Fig. 57-8)

中国製品と推定される鉄軸のものには、四耳壺・天目茶碗などがあり、天目茶碗は現在まで明確に日本製品と区別できていないため、別の機会に報告することとし四耳壺について述べる。

四耳壺 (耳部の存在から四耳があったと考えた) は、復元推定口径 15.0 cm、胴幅 22.2 cm、高さ 25 cm +  $\alpha$ 、厚さ 4 ~ 6 mm を計る。口縁はやや外反気味になり、肩部は胴部上端で張る形状を示すと考えられ、底部は存在しないため不明である。S T 157 を中心に出土しており、外面釉が凸凹して二次焼成があったことを理解できる。内面のロクロ痕は、胎土が精緻なためかシャープな状態で残っており、耳部上端に貼り付けている。

(f) 朝鮮 (Fig. 56-17・Fig. 54-9)

S E 67 と S X 97 出土の皿であり、全体の色釉は青灰色で唐津にはみられない良質の整形・焼成がおこなわれている。施軸は光沢のある透明釉が全体になされ、見込み内にトチ痕が残っている。

(g) 美濃・瀬戸 (Fig. 56・Fig. 57)

美濃・瀬戸の製品には灰釉系のもと鉄軸・褐釉系のもが存在する。

(i) 灰釉系 (Fig. 56)

器形としては皿が圧倒的に多く、総破片数 285 点の出土があった。口縁が外反し見込みに印花文を有するもの (1)、底に輪ドチ痕が残り底が肉厚になっているもの (2)、ガラス質のきれいな黄緑色の釉が施されているもの (4)、いわゆる黄瀬戸手に近い無光沢の黄白色の釉調を呈するもの (5)、内面口縁部を折りかえし一段を有し、胴部内面にヒダ状のケズリを入れたもの (3) などがある。また製作時期が古くなると考えられる御皿 (7) は、口縁上端が溝状にくぼみ、施軸は胴部中央まで、底は糸切痕を残している。

灰釉ではないが志野皿 (6) も灰釉系の器形と同類の特徴を有する。

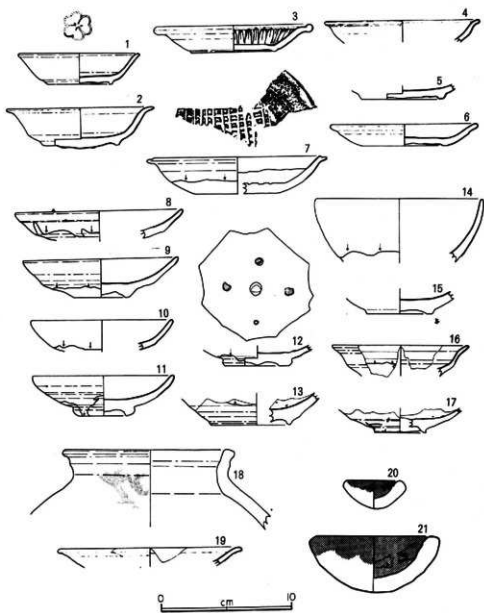
(ii) 鉄軸系 (Fig. 57)

鉄軸系の製品としては碗、皿、壺などがあり、天目碗 59 片、皿 13 片、他 5 片が出土している。天目碗は口縁が「く」の字状にびれるものが多く、推定口径は 14 ~ 11 cm ぐらいである。(1・2・4・5) 内面施軸は全体に及ぶものの外面は胴部下半で止まり若干の軸溜りがみられる。底は高台部畳付部を残して内部がへこむもの (6) と中央が肉厚にケズリ込まれているもの (3) がある。

皿には、碁碁底状を呈し口縁が内湾気味に立ち上がる形状が多く (9・10)、軸は褐色の斑ら釉で見込みにトチ痕を残すもの (10) もみられる。

四耳壺と考えられるもの (7) には、胎土が精緻な暗灰色を呈し軸調は光沢のある黒褐色を呈すものであるが、内面ロクロ整形痕は前述中国製四耳壺に比してするとさに欠ける状態がみ

Fig. 56 美濃・康津等実測図



られる。

小鉢・小壺の類としては、灰白色の堅緻な胎土に、光沢のある黒褐色釉が全面に施されているもの(12)、同様の胎土に褐色の強い釉を内面および胴部中央まで施しているもの(11)がある。前者は、ロクロ整形痕がかなり明瞭に残り、外面には幅の狭い沈線がめぐっている。前者、後者ともに底は糸切り痕がはっきり残っている。

美濃・瀬戸の製品は全陶磁器類の中で26.7%の比率を示し、陶産品の中では最も多い出土量を示す。特に灰釉皿は染付皿の量と同程度であり、全陶磁器の中で使用度が高かったものである。また、御皿、四耳壺、小壺、小鉢など他の製品にはみられない器形の豊かさがあり、使用時期の幅があることと東日本の陶器生産の中心地であるという特徴がよく表われている。

#### (h) 唐津 (Fig. 56)

唐津は調査地区によって出土量の相違がみられる。本年度は、皿、碗等153点が出土し単年度の調査としては最大の出土があった。

碗は丸味のある胴部に口縁が直行して立ち上がり、外面は胴部下半で釉止まりがあり、素地を露呈する部分は鉄分によって赤褐色を呈するところがある(14)。

皿は口縁が内湾気味に立ち上がり、高台のケズリも粗雑なものが多く一例だけ外反する(16)。施釉は一様に胴部下半で中断し、高台部は素地が露呈している。見込みにトチ痕を残すものも多いが、すべて胎土目技法によるものである。釉調は赤灰色(8)、青灰色(9)、暗緑色(10)、薄い黄緑色(11)、深緑色と灰色の斑らを呈するもの(12)、黄緑色(13・15・16)と各種存在し、胎土にも相違がみられることから、同一窯の製品ではないらしい。

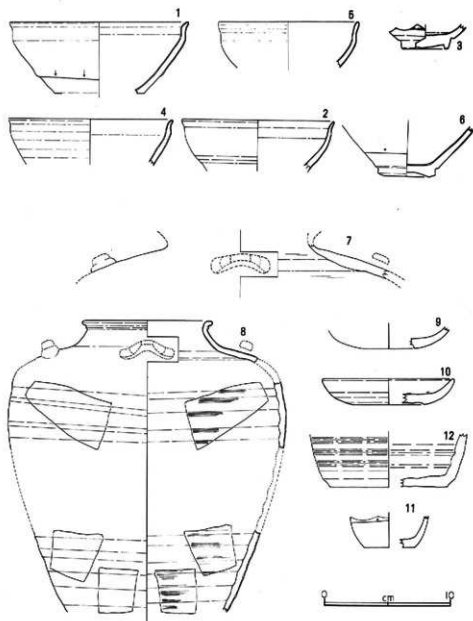
唐津の出土が調査地域によって差異があることは述べたが、一般に北館中央部から西側の地域で多数出土する。全陶磁器類に対する出土比率は8.3%と例年の調査で示す5%前後よりかなり高率である。唐津の製品は、現在その製作年代と流通年代をめぐって若干の議論があり、城跡落城の年代とともに今後に残された課題である。

#### (i) 越前 (Fig. 56・Fig. 58)

越前の製品には甕と播鉢の器形があり、本年度は甕の破片が186点と多量に出土した。播鉢については後述するため甕だけを述べる。

越前の甕は、暗褐色の色調に白砂と黒砂が若干混入した胎土を呈し、鉄分の多い内外面に灰釉の流れを認められる例が多い。(Fig. 58-1・2・3)口縁の形態は、内面に一条の段を有してくびれた形状のものが多く外反度は比較的少ないと考えられる。底部は平底気味であるが(Fig. 58-4)残存度が少ないため明確に理解できない。口径50cm以上の大甕から口径17~18cmの小甕まで多種あるようである。Fig. 56-18で示した壺は、釉が二次焼成のため剥げ落ち、ほとんど素地だけとなっているが越前の可能性が高い。

Fig. 57 天目・鉄軸壺等実測図



(j) その他の不明施釉陶器 (Fig. 56—19)

胎土は赤味のある灰色を呈し、青灰色の釉を斑点状に施している皿で、産地不詳である。

(k) 瓦器 (Fig. 58)

瓦器（本来であれば中世瓦質土器と言うべきものであるが、浪岡城跡の調査では従来からの呼称で統一しているため、あえて瓦器という呼称を採用し、普遍的意味で使用していないことをおとわりする）は総破片数52点が出土しているが全形のわかるものは1点もない。

本年度出土したものには算木状の部分に6～7花のスタンプ文を押した製品（11）、鶴が羽を広げた文様を彫り込んだ製品（12）、5条以上の隆帯がめぐる製品（13）があり、いずれも円形の形状を呈すものである。12と13は出土地点、器形状の特徴から同一製品の可能性もある。器種としては手焙り、火鉢の類が多いと考えられ、香炉・壺形のものも若干存在する。

(l) 播鉢 (Fig. 58)

すでに「浪岡城跡Ⅳ・Ⅴ」にて、胎土、成形、技法上の特徴から分類済であるため、特色あるものについて述べる。播鉢の総出土破片数は125点であり、全陶磁器類の中では6.8%を占める。

口縁内面に櫛目波状文を施す例（5）は、いわゆる珠洲系のもんとして考えてきたが、今回三辻先生の分析（P129 参照）によって浪岡城跡出土の珠洲系播鉢は珠洲窯産の可能性が高くなったという結果がでており、今回は珠洲窯の製品として報告しようと思う。

口縁が外面に段を有して直角に立ち上がり、強い焼き締めの結果赤褐色の素地を呈し硬質感豊かな製品となった播鉢（6・7）は、備前系のもんと考えている。内面の櫛目は縦位にだけでなく、斜めに入れる状況がみられ、7の場合は口縁部と胴部で色調が相違し窯詰め段階で重ね焼きしたかあるいは窯道具のあて方で違ったものと考えられる。

口縁部内面に一条の凹を有し7～10条の櫛目を施す例（8・10）は、いわゆる越前系のもんと考えている製品であり個体によって色調・焼成度はかなりバラつきがみられる。焼成温度はそれほど高いものでなく、軟質な胎土構成で白砂がかなり混入している。

胎土が赤褐色を呈し、全体の色調は黒灰色を呈す製品（9）は産地不詳製品と考えている。櫛目はかなりシャープに入り込み9条左回りで施している。底部の整形も調整はみられず、若干指ナデ痕がみられる程度である。

播鉢については、産地不詳製品が多いことから科学的分析等を駆使して整理してゆく必要性を痛感している。

(m) 埴埴 (Fig. 56)

浪岡城跡から多量の埴埴（溶解物付着土器）が出土する。小形のもの（20）から大形のものまで各種存在し、銅製品製作に使用したと推定されるところから鑄型（Pl. 60）と併せて考え

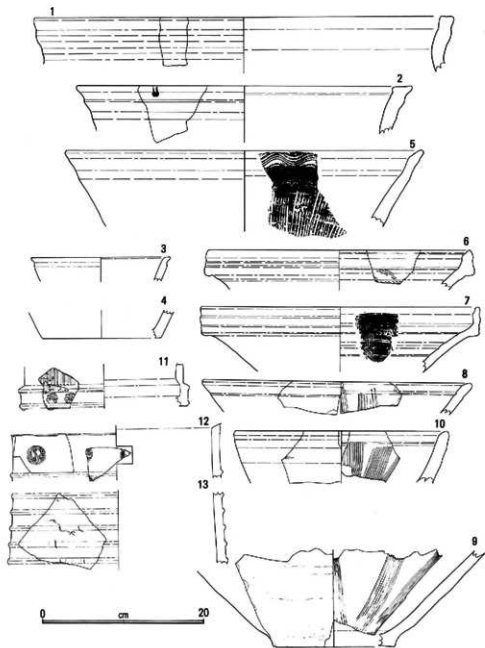


える必要がある。

(n) かわらけ

本年度は明確にかわらけ（中世土師質土器）と認定できるものは出土していない。

Fig. 58 摺鉢等実測図



## 2. 鉄製品

鉄製品・銅製品等の金属器は総数1,154点の出土があった。しかし時間的都合によって、すべての鋳取り・注記作業はできなかったため、今回は主要な製品の紹介にとどめたい。

鉄製品は、前述したように機能によって武器・工具等に分類できるが、整理が終了していない段階であり、名称等の明確なものの記述に終止する。

### (a) 刀 (PL.54-2・Fig.59-2)

全長26cm、茎に木質部の残存がみられ、目釘穴と推定される部分がある。反りはほとんどなく、刃部の長さ18cm(約6寸)で切先が幅広になっている。小刀である。

### (b) 小柄小刀 (PL.54-3・4・Fig.59-3・4)

3は全長19.7cm、刃部11.2cmを計り、茎に木質部の付着が認められる。4は先端部を欠損しており全長18.4cmを、茎部分は9cmを計る。刃部の長さも4の方があるため、3より若干大型の小柄小刀と考えられる。

### (c) 鐿 (PL.54-5・Fig.59-5)

上下幅5.65cm、左右幅5.42cmのほぼ円形を呈する鉄鐿である。錆化が激しいため、レリーフ状の文様および茎槽孔などが原形のままであるかは疑問であるが、斧槽孔、小柄槽孔、耳の厚みが認められる典型的丸鐿である。地にレリーフした文様は明確でない。

### (d) 小札 (Fig.59-8~15)

小札は上端が斜めにカットされるもの(9・12)とそれ以外のものがある。長さは5~6cm幅1.8~2.5cmぐらいのものが多く、本年度出土のものはすべて2列に穿孔されているものであった。中には表面に漆を付着しているもの(12~15)もあり、SX 111出土の金箔塗り革札との関連も重要な問題である。

### (e) 鉄鏃 (Fig.59-6・7)

6は中が空洞になっているため、簡単に装着できる形態。7は茎を有し、断面が丸あるいは六角を呈する鉄鏃であり、先端部は欠損している。本年度は鉄鏃の出土が少なかった。

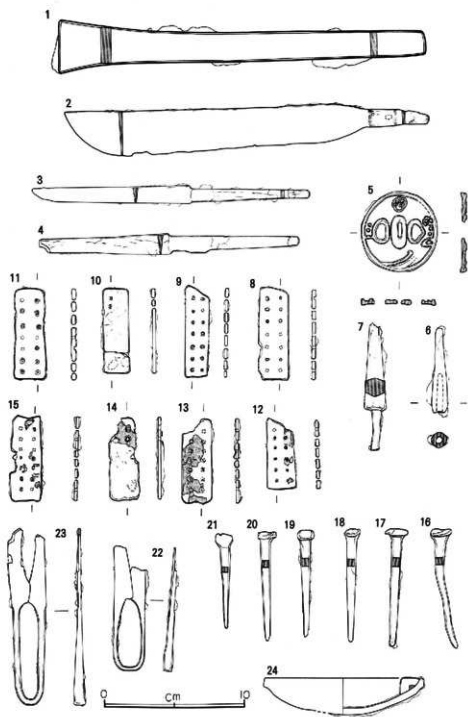
### (f) 鉄 (Fig.59-22・23・PL.55-8)

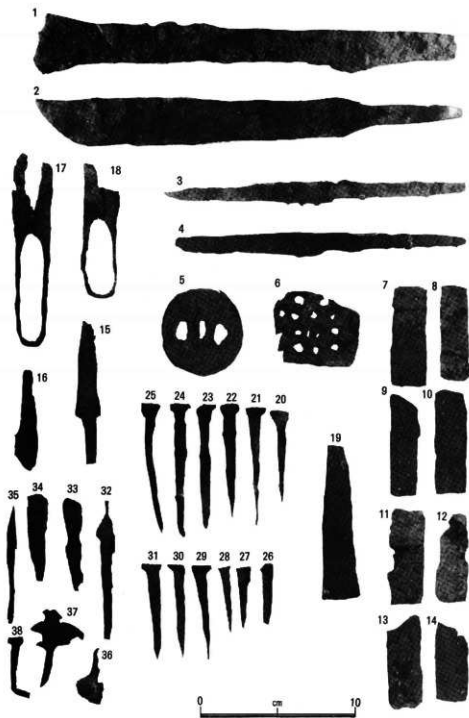
長さ12.5cmのもの(Fig.59-23・PL.54-17)と先端が欠損している長さ8.9cm(Fig.59-22・PL.54-18)、片側しか残存していない長さ13.9cm(PL.55-8)があり、いずれも遺構内からの出土である。

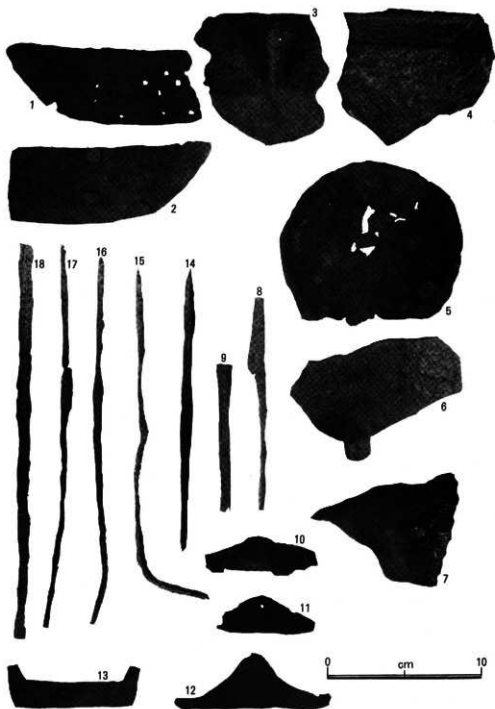
### (g) 釘 (PL.54-20~31・36~38)

欠損しているものを除いて長さ3.5~8.5cmぐらいまで多数出土している。おそらく鉄製品の半数近くが釘であろうと思われ、木質部に打ち込んだ状態で出土するものもある。(PL.54

Fig. 59 鉄製品実測図







—36—38) 頭部が鋸杵型を呈する未使用のもの (Fig. 59—21) は少なく、ほとんどが折れ曲った使用後のものである。

(h) 鎌 (PL. 55—2)

基部が欠損したもので、反りはまったくない。PL. 55—1 も鎌の形状を呈するが、穿孔を施しているため用途は不明である。

(i) 鍋 (PL. 55—3・4・6・7)

いわゆる内耳を有するもの (3)、段を有しながら外反する口縁部 (4)、足がみられる底部 (6・7) があり、全形がわかるものはまったくない。

(j) 皿 (PL. 55—5・Fig. 57—24)

器高 2.6 cm、径 11.3 cm の丸い皿で、内側口縁部に 3 箇所の内耳が認められた。

(k) 火打金 (PL. 55—10—12)

両端のかえしがあるもの (12) から、上部の二辺がゆるいカーブを呈するもの (10)、辺が直線的になりかえしが認められないもの (11) まで、3 点が出土している。

(l) 引金 (PL. 55—13)

長さ 8.4 cm を計り、本部に装着する部分は鋭角的になっていない。刃部中央は磨耗のため刃こぼれ状を呈し凹凸している。

(m) 火箸 (PL. 55—15—18)

長さ 22—26 cm ぐらいのものが多く、断面形が丸あるいは四角を呈するものがあり、後者は上端にねじれを入れているもの (15・18) がある。遺構に伴うことは少ない。

(n) その他の不明鉄製品

刃あるいは何らかの工具と推定されるもの (Fig. 59—1・PL. 54—1) がある。刀とすれば大刀の茎部分と考えられ、幅広い先端部が欠損ないしは切断されたものか肉眼では理解できなかった。長さは 26.1 cm もあり、単なる工具と考えるよりも新たに製品を作るための地金と考えるのがよいのであろうか。

PL. 54—6 は、幅 5 × 6 cm 前後の鉄板に無作為に穿孔したものである。

PL. 54—19 は、長さ約 10 cm で楔状の形を呈し、地金あるいは楔として使用したものであろうか。

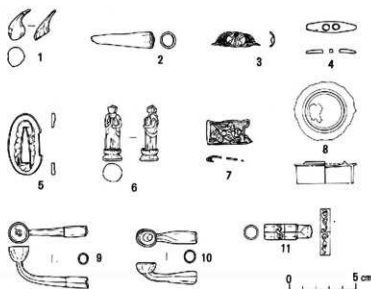
PL. 55—1 は、鎌の形状を呈すが無作為な穿孔がみられ、用途不明である。

PL. 55—9 は、一見した所、毛抜鉄の片側部分らしい。

PL. 55—14 は、木質部の付着している部分に小孔が穿たれており、火箸あるいは武器的なものにでも使用したのであろうか。

PL. 54—32—35 は、全形をとどめているものがなく用途は不明である。

Fig. 60 銅製品実測図



### 3. 銅製品

銅製品は、武具・仏具、装飾具など多種多様にわたっており、発掘区内で出土する銅製品製造のための増埒、鋳型などから、城内で製造されたものと搬入されたものに区別する必要がでてきた。従来はすべて搬入品と考えてきたが自家生産のものもかなりの数にのぼると考えられるし、武具等の自家生産、仏具、装飾具は搬入品と、用途別にも考えてゆかねばならない。

#### (a) かえしかえりづの(返角) (PL.56-1・Fig.60-1)

鞘に装着し、鞘が刀と一緒に抜けるのをふせぐ部品。前年度まで出土したものは内側が空洞であったが、本年度出土のものはすべて地金で成形されている。

#### (b) 鉄砲玉 (PL.56-2~4)

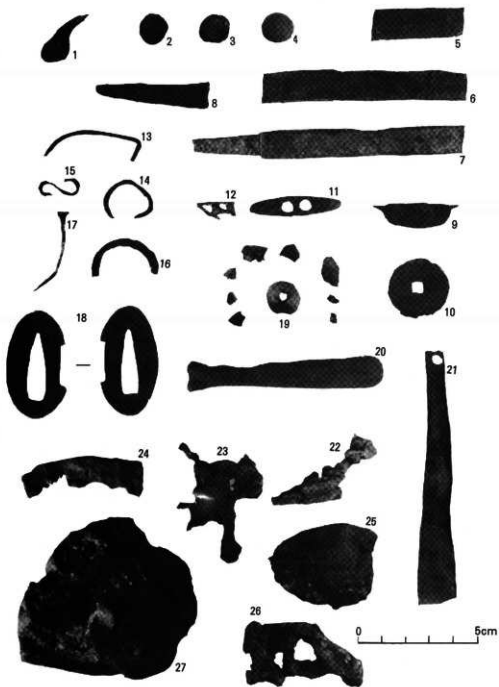
径1.3cm前後の球状を呈し、重さは6.3g(3)、9.2g(4)、11.4g(2)とバラつきがある。

#### (c) 小柄 (PL.56-5~7)

地板に横位の沈線文がみられるもの(5)以外文様を有するものはなく、鉄製刃部が残存していたもの(7)が一例あるだけである。

#### (d) 目貫金具 (PL.56-9・Fig.60-3)

牡丹あるいは椿などの花文様を具象化したらしく、表面にはかすかに金箔の付着を認める。





(e) 鍔型銅製品 (PL. 56-10)

外径 2.6 cm、内径 4 cm を計り、外縁部が若干端反りした形状で、端反りした外面はヒダ状に整形され金箔の認められる部分もある。家具等の取手部に関係する金具であろうか。

(f) 釦 (PL. 56-11・Fig. 60-4)

釦紐を止めるための金具で長さ 3.8 cm、幅 0.8 cm、二個の孔がある。

(g) 鐔 (PL. 56-18・Fig. 60-5)

長さ 4.7 cm、幅 2.5 cm の小型楕円形を呈する鐔である。側辺片側に切れ込みを入れ、茎襷穴の周囲にはえぐられた痕跡が明瞭にみられる。小刀の類に使用したものだろう。

(h) 仏像 (PL. 57-1・Fig. 60-6)

高さ 4.2 cm、重さ 22.4 g の極めて小型の仏像であり、頭部が半分ほど欠損している。蓮華の台座に立ち、右手は中央で掌を合せ、左手には仏具らしいものを持っている。背に、突起状の部分があるため他のものに付着して使用したらしい。浪岡城跡では初めての出土である。

(i) 八双金具 (PL. 57-3・Fig. 60-7)

武具につける装飾金具であり、七七五状の地に草花文を彫り込んだ文様がある。金の付着が認められる。

(j) 金付着装飾品 (PL. 57-2・4・5)

2 は銅の地金の片面全般に金箔が塗られ、4 はドーナツ形の上に放射状に細沈線を施し、その中に金の付着が若干認められ、5 は貝殻状の形で全体に金を鑄込んでいるような状態である。

(k) 高台 (PL. 57-6・Fig. 60-8)

二次焼成を受けているためか、破損度が激しく上部の外縁が欠落している。高台部は直立して立ち上がり、上部接地面に一条の隆帯が円形にめぐっている。

(l) 針 (PL. 57-7)

先端部は欠損しているが、頭部に糸や紐を通すための孔が存在する。

(m) 鈴 (PL. 57-9・10)

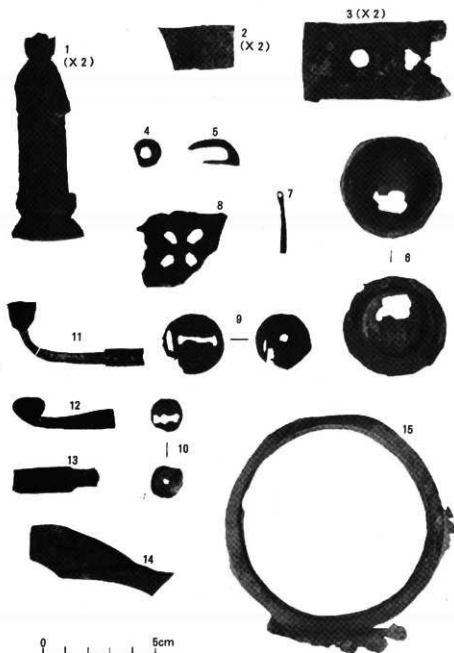
9 は直径 2.8 cm の球体をしており、上部と下部が接合する状態で製作されている。10 は直径 1.4 cm の球体で、中に別の金属球らしいものが存在している。「チリン」という音色である。

(n) キセル (PL. 57-11~13・Fig. 60-9~11)

Fig. 60-9・10 は受け皿を有する雁首の部分、Fig. 60-11 は吸い口の部分であり x 字状の連結する彫り込み文様を施している。雁首についても、9 の方はラウとの装着口がやや幅広になっているのに対し、10 はそれが認められない。

(o) 盤 (PL. 57-14)

香炉の上部片かもしれないが、推定径 30 cm 以上になるため盤の破片と考えた。



(p) 香炉 (PL.57-15)

直径9.8cmの円筒状の香炉と考えられる。上端部だけが残っている。

(q) その他の銅製品

PL.56-8 (Fig. 60-2) は円錐状の銅製品で中が空洞になっている。類似する製品がこれまで3~4個出土しているが用途は不明である。

PL.56-13・14・15は、細い棒状のものを成形したものであり、他の部品を接合したりする時に使ったものであろうか。特に15は逆S字型を呈し接合部品のようにも見える。

PL.56-16は、内側が肉厚になり、外側が刃先のような断面形を呈し、本来は円筒になっていたものと考えられる。用途不明。

PL.56-17は、長さ3.6cmの銅釘である。

PL.56-19は、明確に銅製品とは言えないが、穿孔した土製球の周囲を覆うかたちで銅片が付着していたもので、取り上げた時にこわれたものである。

PL.56-20は、長さ8.0cm、幅1.4cmの筒状のものであるが、用途は不明である。

PL.56-21は、長さ10.7cm、幅1.7cmで幅の狭い部分に一孔があり、幅広の部分は押しつぶされた状態になっている。本来は円筒形になっていたらしい。

PL.56-22~27は、出土した銅滓である。

PL.57-8は、銅板に種子状の孔を四つ菱形に配置したものであり、用途不明の製品である。

以上の銅製品について、本年度は仏具関係の製品と金の付着（鍍金と考えた方が良くもしれない）した装飾品が多く出土した。特に小型仏像は、背の止具から懸仏やそれに類似した使用機能があることなどから、室町時代頃の製作と考えられ、城館期と符号する。また、鈴・香炉・盤・高台などから、密教系の法具を推測できるかもしれない。

金の付着した製品は、銅製品に限らず葦札（SX 111出土）などにもみられることから、かなり一般的に使用していた可能性が高く、漆工・金工の両面から追求することが必要であろう。

#### 4. 石製品 (Ch. 75)

石製品は約150点の出土があり、硯、火打石、砥石、臼、鉢など材質等によって製品に相違がみられる。

(a) 石菰 (PL.58-1・2・Fig. 61-1・2)

石菰という名称を使用するのが最適かどうかは疑問もあるが、板状の上端中央に一孔を穿ち二個一対で出土したことから、現在むしろう篋等を編み上げる時に使用するこしづち篋（津軽地方では一般にコモとだけ呼ぶ）に類似したものと考えた。この石菰を使って実際に篋を編んでみたところ、

木製の蓋箱に比べて重量があるため締まりのきつい筵が出来上がり、筵のように軟質なものではなく簾などの竹製品を造るためには適していることがわかった。また、本製品が出土したSX 111からは金箔を塗った革札が出土しているため、これらのおもりとして使用した可能性もあり今後さらに検討を必要とする製品である。二個とも灰緑色を呈する花崗岩製である。

(b) 硯 (PL. 58-3~8・Fig. 61-3~7)

硯は小型のものが多く出土しており、粘板岩製のものが多く。

PL. 58-3は、幅5cmを計り海の部分を含む両端が欠落している。また陸の部分は磨り込んだためにかなりへこんだ状態になっており、上下方向の擦痕がかなり多くみられる。暗灰色。

PL. 58-4は、海の部分が丸形の形状を呈すもので、大部分は欠落している。部分的に墨痕が認められる。底もややえぐられ上底気味になっており従位の擦痕が認められる。赤灰色を呈す。

PL. 58-5は、海に落ち込む部分の破片である。灰白色を呈す。

PL. 58-6は、表面が研磨され光沢を有する優品である。海に落ち込む部分で黒灰色を呈す。

PL. 58-7は、幅2.5cmの小型品で陸の部分は欠落している。海からの立ち上がりはやや傾斜を有しており、墨痕も残存している。黄灰色を呈す。

PL. 58-8は、幅3.5cmの製品で海の部分である。底には放射状の擦痕がみられ、灰緑色を呈す。

(c) 火打石 (PL. 58-9~13)

火打石は火打金と一对の発火具であり、実際に火打石として使用したものかどうかは、それ自体では見分けにくい。一般に、硬質の石質であれば発火機能は充足し、今回報告するものは火打金として使用可能なものまで含めている。めのう質のものがほとんどである。

PL. 58-9は、唯一明確な打撃痕がみられる製品であり、稜線部に剥離痕が多数存在する。火打石としても適当な大きさと思われる。

PL. 58-10~13は、火打石の可能性を有する製品で、10は原石のまま、11は水晶質の剥離原石、12は両側に風化面のみられる原石、13は稜線剥離が認められることから製作途中のものかと思われるものである。

(d) 砥石 (PL. 58-14~20・Fig. 61-9~14)

砥石は、遺構の覆土や遺構確認面から出土することが多いようである。

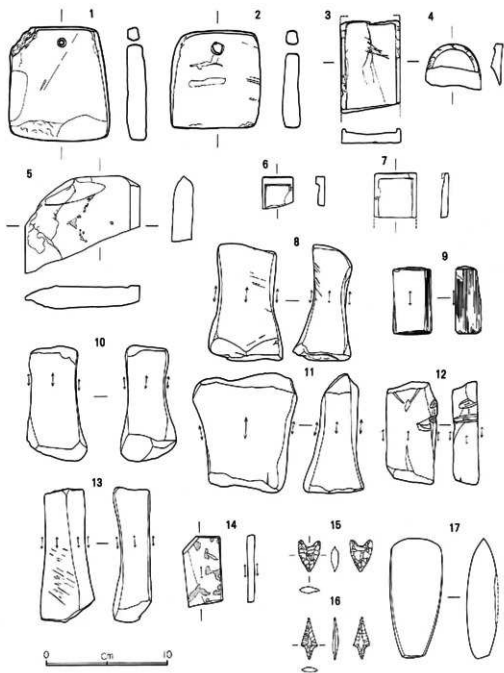
PL. 58-14は、長さ5.6cmと小型のもので、砥面が一面で水平面であることから小刀等に使用したものであろう。黄赤色の色調を呈する。

PL. 58-15は、砥石が四面、いずれも中央部がえぐられた状態になっている。黄白色を呈する。

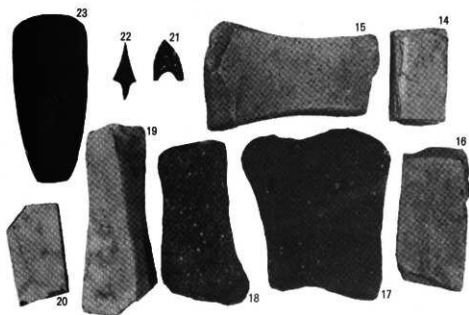
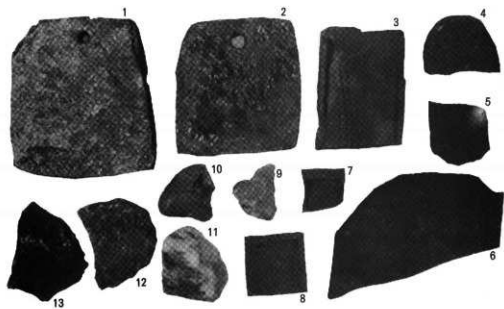
PL. 58-16は、砥石が四面と一部丸い溝状になった部分があり、多種類の器具に使用したと考えられるものである。青灰色の色調を呈し、石質は粗い状態である。

PL. 58-17は、石臼等に使用する砂岩系の石質であり、幅広の砥面と幅狭の砥面が2面ずつ

Fig.61 石製品実測図



PL. 58 石製品 (1)



PL.58-17は、石臼等に使用する砂岩系の石質であり、幅広の砥面と幅狭の砥面が2面ずつみられる。粗砥である。

PL.58-18は、前者と同様の石質であり、4つの砥面を有する小壺品である。

PL.58-19は、中央をえぐられた砥面が2と、平面部が2つある製品で風化部分までも砥面として使っている。黄白色の色調を呈する。

PL.58-20は、薄い板状の砥石であり、表裏になめらかな砥面がみられる。赤灰色を呈する。

(e) 臼 (PL.59)

臼には穀臼と茶臼がある。全形を理解できるものはほとんどないため主な特徴について述べる。

PL.59-1は、穀臼の上部であり、八分割主溝に7~8本の副溝がみられ、溝の彫り込みは曲った状態で直線的でないため製作時の粗雑さが目につく。また側面に砥石として使用したような二次的整形面もみられることから再利用の点も注意しなければならない。安山岩製。

PL.59-2は、受け皿部部分があるため茶臼の下部であり芯の穴は角形を呈している。雲母を多量に含んだ花崗岩質の素材である。

PL.59-3は、茶臼の上部であろう。残存している表面は磨きを入れているが、溝は単に放射状の主溝だけであり副溝は認められない。安山岩製。

PL.59-4は、穀臼の上部であろう。幅1.5cm前後の粗い副溝がある。

PL.59-5は、加熱のため地露が黒くなっており、6本の副溝がみられる穀臼で、上白か下臼かわからない。

PL.59-6は、表面の風化が激しいため凹凸になっており、かすかに溝の痕跡が残っている。

PL.59-7は、加熱のため黒く変色している部分があり、磨耗のためか溝は認められない。

PL.59-8は、茶臼の上部と考えられ取手孔が横位に認められる。溝は磨耗のため、若痕跡が認められるだけである。

PL.59-9は、8と同様に取手孔が存在することから茶臼の上部と考えられる。主溝・副溝とも磨耗のため消滅している。

PL.59-10は、芯の孔だけが残り、他の部分は破損が激しいためどの部分かわからない。

PL.59-11は、底に高台状のケズリ痕が認められるところから茶臼の下臼であろう。

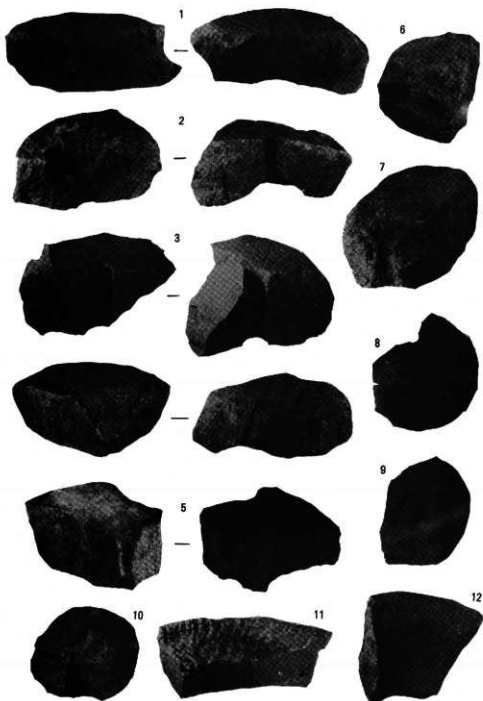
PL.59-12は、内部が朝顔状に開く鉢であり、口径30cm、高さ15cmを推定できるものである。内面に炭化物状の付着物が認められることから、シデ鉢等の灯明に使われた可能性がある。

(f) 縄文石器 (PL.58・Fig. 61)

PL.58-21は、黒曜石製無柄石鏃である。

PL.58-22は、頁岩製有柄石鏃である。

PL.58-23は、緑色泥岩製磨製石斧である。





## 5. 古 銭 (Ch.76参照)

本年度の古銭出土総数は343枚であり、その内訳は下表の通りである。唐・宋・明銭とともに寛永通宝や一・十・五十銭も出土していることから、城跡は落城以後昭和に至るまで生活空間として活用されていたことが知られる。

古 銭 名 称 別 出 土 表

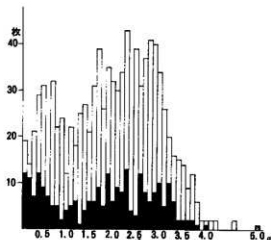
名 称				名 称			
	名 称	個 体 数	出 土 率 (%)		名 称	個 体 数	出 土 率 (%)
1	開元通宝	9	2.62	20	紹聖元宝	1	0.29
2	元祐通宝	1	0.29	21	元符通宝	1	0.29
3	太平通宝	1	0.29	22	聖宋元宝	4	1.16
4	淳化元宝	1	0.29	23	政和通宝	2	0.58
5	至道元宝	1	0.29	24	淳祐元宝	1	0.29
6	咸平元宝	2	0.58	25	玉大通宝	2	0.58
7	景德元宝	4	1.16	26	洪武通宝	27	7.87
8	祥符元宝	4	1.16	27	永樂通宝	6	1.74
9	祥符通宝	2	0.58	28	大定通宝	1	0.29
10	天禧通宝	4	1.16	29	朝鮮通宝	1	0.29
11	天聖元宝	3	0.87	30	寛永通宝	3	0.87
12	景祐元宝	1	0.29	31	一 銭	3	0.87
13	皇宋通宝	6	1.74	32	十 銭	1	0.29
14	至和元宝	3	0.87	33	五 十 銭	1	0.29
15	嘉祐元宝	1	0.29	34	鉄 銭	1	0.29
16	治平元宝	4	1.16	35	無 文 銭	118	34.40
17	熙寧元宝	4	1.16	36	判 読 不 能	99	28.86
18	元豊通宝	11	3.20				
19	元祐通宝	9	2.62				
					総 計	343	100

Fig.62は、現在まで出土した古銭のうち、唐・北宋・南宋・明・朝鮮および無文銭の中から、欠損部分がなく、全体の重量を計れるものを抽出して表わした図である。スクリーントーン部分が本年度分、白スキが過年分である。

この図では、重量ピークが0.5g付近と2.5g付近の二つが認められ、前者は無文銭あるいは鉄銭と言われるグループ、後者は中国本銭に近いもののグループと考えられる。

古銭は、当時の経済・交易活動と不可分に結びついていたものとされるが、考古資料としては備蓄銭・養銭等の機能論からアプローチする必要がある。

Fig. 62 古銭重量別分布図



## 6. その他の遺物

その他の出土遺物としては、漆器・革製品・骨・堅果類があり、これらは各遺構の項目で記述済のため割愛し、鑄型について述べたい。

### (a) 鑄型 (PL.60-1~5)

城跡内で多量に出土する土製埴埴や銅滓などから、銅製品の製作をおこなっていたことは推測されているが、土製鑄型の出土によってそれは明確なものとなった。鑄型は、埴埴と同様に粉などを混入した粘土で作られ、現在まで判明しているものでは刀の鑄・切羽の類の鑄型が多くみられる。PL.60-4は透し鑄の鑄型と考えられるもので、直径7cmほどの丸鑄である。PL.60-1~3・5もまた鑄・切羽の鑄型と考えられる。これらの鑄型は現在のところ工房的遺構に伴うことは少なく、散発的に出土している。

浪岡城跡が城館期として成立していた時期の遺物以外に、平安時代のものとして土師器・須恵器が多く出土する。そのほとんどは細片として分布しているにすぎないが、本年度検出のものではS D61・S X81など遺構に伴って出土する例もあり、ここで概略を述べる。

### (b) 須恵器 (PL.60・Fig.62)

須恵器の器形としては、甕・壺・坏があり、甕は復原可能なものがないため壺と坏について報告する。

壺は、焼成の良好な青灰色を呈するものから酸化状態のため赤褐色を呈するものまでみられるが、口縁部の形態から前田野目窯の製品と考えられ、胴部上半に「春」(Fig.63-4)や「有」(Fig.63-5)という文字の描かれたものがある。

坏は、暗灰色を呈する硬質のものから、火ダスキを有して底部上端に籠書き記号を有するものがあり、後者には口縁がやや外反するもの (Fig.63-7・11)と直行気味に立ち上がるもの (Fig.63-6・8・12)がある。火ダスキを有するものの籠書き記号には「井」(Fig.63-6・12)「I」(Fig.63-7)、「十」(Fig.63-8)、「V」(Fig.63-11)がみられ、土師器と区別して須恵器坏の製作に関係する記号と考えられる。

### (c) 土師器 (PL.60・Fig.63)

土師器の器形としては甕と坏があり、甕は復原推定できるものは1点もない。坏については、皿形を呈するもの (Fig.63-1)、内黒で内面に放射状のナデ痕を有するもの (Fig.63-2)、いわゆる耳皿 (Fig.63-3)と呼ばれるもの、その他 (Fig.63-9・10)がある。

土師器の出土量は、相当の数に達するけれども城館期における整地、建物跡等の建て替えによって土砂の移動が激しかったため細片になっているものも多く、明瞭に残存しているものはほとんどないと言ってよい。

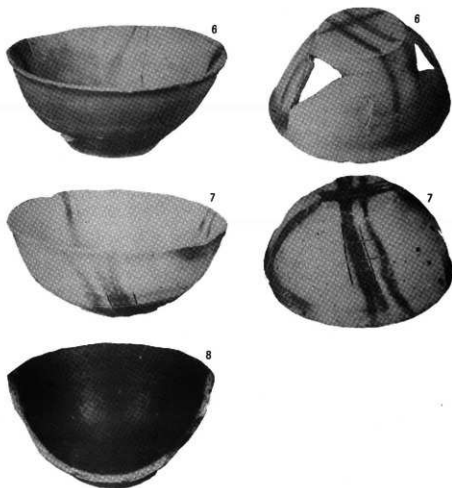
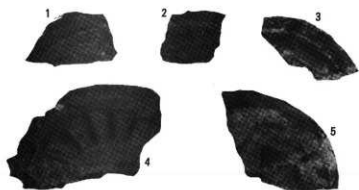
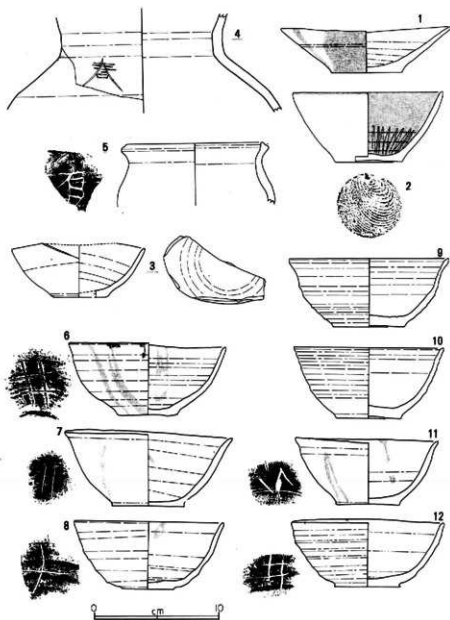


Fig. 63 須恵器・土師器実測図



## V 浪岡城遺跡出土珠洲系土器の胎土分析

奈良教育大学 三 辻 利 一

浪岡城遺跡から出土した珠洲系土器のうち任意に10点を選択し胎土分析を行った。分析データから珠洲焼か否かの判定を行った。

胎土分析の方法は蛍光X線分析法である。土器片資料は一旦200メッシュ程度に粉砕した。粉末試料は10トンの圧力を加えてコイン状のペレットにし、X線を照射した。定量元素はK(カリウム)、Ca(カルシウム)、Fe(鉄)、Rb(ルビジウム)、Sr(ストロンチウム)の5元素である。分析値は岩石標準試料JG-1で規格された値で表示された。 $\overline{\text{Fe}}$ 、 $\overline{\text{Rb}}$ 、 $\overline{\text{Sr}}$ などは規格化値を示す。規格化値は濃度的一种であり、規格化値が大きい程、その元素の含有量も多い。

はじめに、石川県産の珠洲焼と、青森県の五所川原窯跡群出土須恵器の化学特性を調べておかなければならない。そのため、裏割板1号、法住寺2号、馬糞、法住寺3号、西芳寺3号、西芳寺2号、西芳寺1号窯から出土した珠洲焼、70余点が分析された。これらの資料は石川県立郷土資料館、吉岡康暢氏から提出されたものである。また、五所川原窯跡群のうち数基の窯から出土した20余点の須恵器が分析された。この結果、Rb-Sr分布図とFe因子で珠洲焼と五所川原窯跡群の須恵器との相互識別はできることが判明した。K、Ca因子は余り有効ではなかった。また、秋田県下に茂谷窯、大畑窯、新潟県下に狼沢窯など珠洲系土器の窯跡が発見されている。珠洲焼と大畑焼、狼沢窯の土器とは胎土分析で相互識別されるが、珠洲焼と茂谷窯のものとの相互識別は部分的にしかできないことが分かった。この両者の識別は考古学的方法も加えて今後の問題であるが、本報告では珠洲焼か五所川原窯産の須恵器かという観点で分析データは解説された。(珠洲焼の胎土分析の詳細なデータについては近い将来、吉岡氏と共著で公表する予定である)

まず、浪岡城遺跡出土珠洲系土器のRb-Sr分布図を図1に示す。試料番号16130、16131、16132の3点は珠洲領域に、試料番号16123、16124、16126、16128、16129の5点は五所川原窯領域に分布するが、試料番号16125は珠洲焼と五所川原窯の境界線上に、また、試料番号16127は五所川原窯領域に近いが少しはみ出した位置に分布する。

次に、Fe因子のデータを図2に示す。五所川原窯の須恵器はFe量が多いのに対し、珠洲焼はFe量が少ないのが特徴である。珠洲領域、五所川原窯領域は、各々、それらの土器の分析データを全部包含するようにして決められている。そうすると、浪岡城遺跡出土珠洲系土器のうち、試料番号16123、16124、16126、16127、16128、16129の6点は五所川原窯領域内

に分布するが、試料番号 16130、16131、16132 の 3 点は Fe 因子でも珠洲領域内に分布する。ところが、試料番号 16125 は Rb - Sr 分布図のみならず Fe 因子でも珠洲焼領域と五所川原窯領域の境界線上に位置し、どちらに帰属するのか判定はできない。

以上のように、Rb - Sr、および Fe 因子より、試料番号 16123、16124、16126、16128、16129 の 5 点は五所川原窯産と判定できる。また、試料番号 16127 は Rb - Sr 分布図では五所川原窯領域より少しはずれたが、珠洲領域には全く入らず、また、Fe 因子を考慮に入れると五所川原窯と推定する方が妥当であろう。試料番号 16125 は Rb - Sr、Fe 因子とも境界線上に分布し、どちらとも判定できない。他の因子による判定を今後待ちたい。試料番号 16130、16131、16132 の 3 点は両因子とも珠洲焼であることを示す。

以上の結果、浪岡域には地元の五所川原窯須恵器のみならず、珠洲焼が搬入されていたことが明らかになった。ただし、秋田県産の須恵器は検出されなかった。青森県内の遺跡出土須恵器の産地を求めることによって、当時の政治・社会状況を知る手掛りが得られ、今後、興味ある問題として発展しよう。

(編者の注意書き) 今回の分析資料のうち珠洲領域に入るとされた 3 点の試料は以下の通りである。

試料番号	遺物番号	出土区	掲載報告書
16130	79P 4759	ST31覆土	「浪岡城跡Ⅲ」P 106 ~ 108
16131	79P 2262	K60区Ⅱ層	「浪岡城跡Ⅲ」P 106 ~ 108
16132	78P 307	SD0   盛直上	「浪岡城跡Ⅱ」P 70・71・111

Fig. 64 浪岡城出土珠洲系土器分析図

図 1 浪岡城出土珠洲系土器の Rb - Sr 分布図

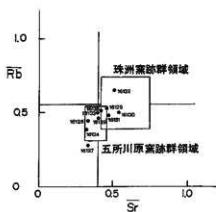
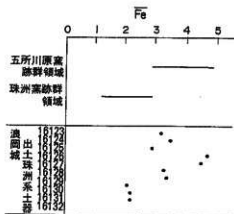


図 2 浪岡城出土珠洲系土器の Fe 量



## VI ま と め

本年度の調査および現在までのまとめをする。浪岡城跡北館は、城跡全体の位置から主郭に準ずる館であるとの認識のもとに調査を実施してきた。現在まで検出されき遺構および出土遺物から、浪岡城跡のアウトラインとでも言うべき以下の事実関係を理解できるに至った。

### 1. 遺構と居住形態

検出遺構の中で最初に取り上げなければならないのは掘立柱建物跡である。掘立柱建物跡の中では、4間×5間以上の規模を有するものと2間×3間クラスのものに大別でき、同規模の建物跡については2期以上の重複関係を把握できた。その事は、掘立柱建物跡の建て替えが同一地域で行われた結果と推定され、各建物跡の機能が地域によって分化していたためとも考えられる。

本年度の調査区C区で検出された、SB23とSB26は長軸方向に相違はあるものの平面規模はほぼ同じで、同程度の機能を有する建物であったことは推測にかたくない。また、B区におけるSB12（昭和56年度検出）とSB20の関係は、長軸方向が近似した形で移動した配置を呈し、5間×7間の規模はほぼ同様である。このように構築時期を違えた同規模の建物跡群が北館全体ではどのような配置をするかというのがFig. 65に示したものである。まだ全域の調査が終了しない段階で早急な結論はだせないにしても、一部の建物跡を除いて構築方向は、館の形状に左右されず磁北方向を意識して造られているようであり、前述した如く建物跡を分散して地域特性を意識しているような状況がみられる。

Fig. 65 北館掘立柱建物跡配置図

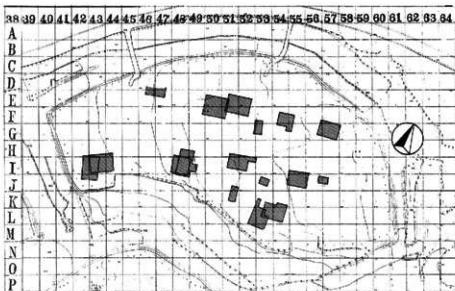
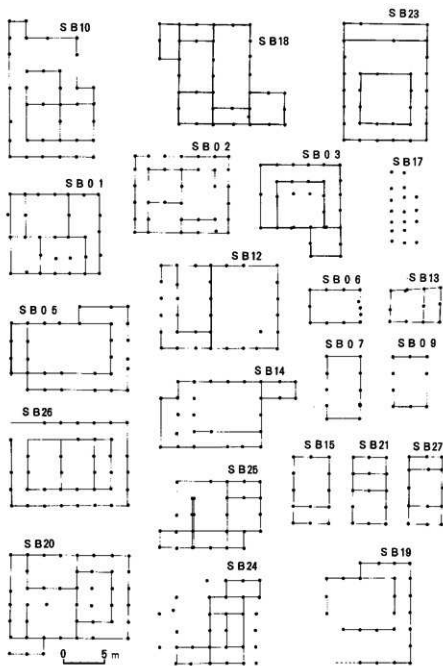


Fig. 66 獨立柱建物跡模式圖





また、居住の主体が掘立柱建物跡とすれば、その上部構造を推定する柱穴配置には注目すべき点がある。Fig. 66において現在まで検出した掘立柱建物跡の柱穴配置を示しておいた。今後さらに詳細に整理して報告する予定である。

掘立柱建物跡と並んで重要な遺構に堅穴遺構がある。機能については今後の課題として詳述を割愛し、形態および配置上の特徴を述べたい。

Fig. 67で示した堅穴遺構模式図は、すべての堅穴遺構が6つのパターンに含まれるものではなく、一般的な傾向を抽出したものである。浪岡城跡から検出する堅穴遺構の中では、I類とII類に位置づけられるものが最も多く、それぞれ柱穴配置が2間×2間（I類）、2間×1間（

II類を呈する。II類は、Fig. 68で規模別分布をみるとすべてI類の範囲に含まれるところから、I類の構築意識と同一の意識がはたらいていたと考えられる。

III類は長方形プランに2間×3間の柱穴配置を呈するものであり、比較的大型の構築をするものが多い。I類とIV類の中間形態と考えられる。

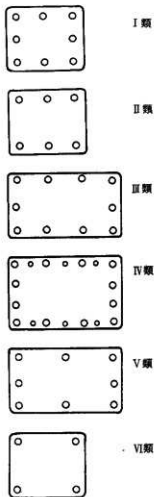
IV類は長方形プランに3間×3間の基本柱穴配置を有し、長軸方向に補助柱穴を配する堅穴遺構であり、最大規模の分布を示す。本類に分類した堅穴遺構からは、刀や櫓など特徴的な遺物出土する例が多い。

V類は、長方形プランを呈するが柱穴配置は2間×2間であり、例は少ない。

VI類は、正方形プランで四隅に柱穴を配置するもので小型のものが多い。

このような堅穴遺構の類別は、構築時期・分布状態を調べる時に有効な基準となるものと考えられ、掘立柱建物跡に対する機能を判断する基礎資料となるものである。現在まだ詳細部分の整理を進めている段階であり、多くは語れないが、I類・II類の中で張り出し（いわゆる出入口部分）を有するものの方向を調べると、その位置によってある程度の統一性が存在することがわかってきた。すなわち、北館平場においてはその堅穴遺構が占地する所により、館の中央部に向かって張り出しを有するものが多いという点である。さらに、覆土および床面から出土する陶磁器類をみ

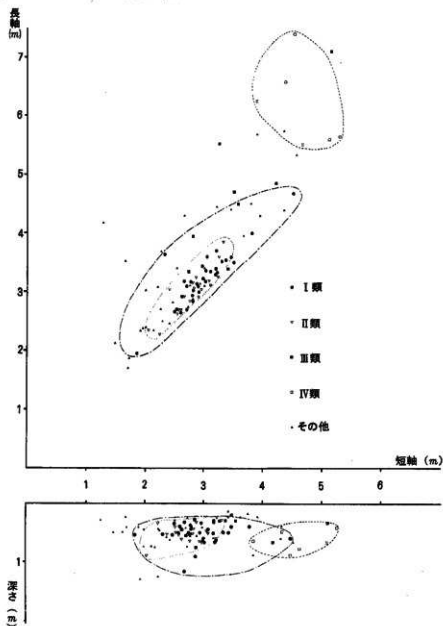
Fig. 67 堅穴遺構模式図



ると、その組み合わせによって時期的差異（廃棄時期）が存在する可能性が高く、現在その作業を進行中である。

それらによって竪穴遺構が構築された目的、機能、用途を理解できるならば、波岡城跡における基本的居住形態、生活のあり方が解明されてゆくと考えている。

Fig. 68 竪穴遺構分類別規模分布図



## 2. 出土遺物と当時の生活

出土遺物から当時の生活形態を考える場合、陶磁器、鉄製品、銅製品、木製品、石製品など多種多様な遺物を対象としなければならない。これらのうち、陶磁器類は個体数、器種がよく理解できるため、資料価値は高い。下表がその出土率を示した表である。

陶磁器類出土率表

調査地域	調査年度	調査内容											調査結果												
		青銅				白銅				鉛付			中国産品	高麗産品(高麗)		朝鮮産品		その他	小計						
		銅	錫	鉛	小計	銅	錫	鉛	小計	銅	錫	鉛		高麗	朝鮮	高麗	朝鮮			高麗	朝鮮				
13 高麗	遺物	2			2								4									12			
	重量	18.83			23.0								32.2				5.33	18.68							
53 高麗	遺物	44	28	8	18	1	1	42	17	2			83	6	8	8	3	1	32	1	8	213			
	重量	14.95	7.36	1.97	4.78	0.21	0.31	28.48	8.43	0.31			16.97	2.85	1.91	0.95	0.31	15.61	0.31	1.97	0.31	87			
54 北朝	遺物	102	74	74	8	2	144	6	2		2		104	7	26		5	26		60	58	451			
	重量	22.99			5.41			23.22					18.84												
56 北朝	遺物	173	180	13	123	8	1	149	36	4	2		261	13	32	24		1	27		111	163	8	1,138	
	重量	15.9	8.48	1.18	15.68	0.26	3.08	12.95	8.38	0.34	0.17		13.56	1.30	7.77	3.00		0.08	2.34		9.62	14.13		0.28	87
58 北朝	遺物	339	148	37	167	10	39	274	20	20	1	1	370	23	39	52	4	6	71	4	149	97	37	5,187	
	重量	2.76	1.86	1.96	1.20	0.61	5.38	8.73	1.38	1.86	0.59	0.06	16.87	1.40	2.38	1.80	0.34	0.24	4.33	0.24	3.10	3.48	2.39	0.18	87
57 北朝	遺物	218	193	35	104	4	11	263	71	5	2	4	8	260	19	89	18	8	12	147	13	128	92	186	2,180
	重量	11.3	10.8	1.9	6.7	0.2	0.7	14.6	3.8	0.2	0.1	0.2	0.4	15.6	1.5	3.2	3.7	0.1	0.8	7.6	0.7	6.8	2.8	10.1	0.21
計	遺物	748	544	60	427	18	84	683	180	30	11	7	8	883	70	170	60	13	33	246	17	499	331	238	10,812
	重量	13.4	8.7	1.9	7.8	0.7	1.0	28.2	2.6	0.7	0.3	0.1	0.1	15.9	1.7	3.0	1.2	0.2	4.4	0.2	8.4	6.0	4.0	2.0	12.06
		86.4				26.6				20.0															
		52.7				25.9				16.1															

上記の表から、陶磁器（搬入されたもの）の50%以上が中国を主体とする舶載品であること器種によって使用器形の頻度が相違することを指摘できる。また、調査地域によって出土数の増減のみられる器種もあり、使用者の居住区による相違がもたらした結果とも考えられる。

陶磁器以外の製品で、鉄製品については武器、生活用具、銅製品については武器、仏具、木製品については鬘髻具、石製品については文具、工具、生産具第の機能分化がみられる。

特に、木製品の中で漆器は、平場のためか被膜で出土する例が多いけれども文様や文字の類別によって使用する者が違っていたのではないかと考えられる。たとえば「叶」という文字、「大上」という文字がそれであり、たとえば鶴文などの描写は、浪岡城成立期間内で広く使用されたようで、掘跡等の調査でも同種のもので出土している。

金属器の中に武具が多いのは、城館という性格上当然のように考えられるが、銅製品の中で鐔、切羽などは鋳型の出土などから自家製作していたと考えられ、その製品も存在しなければならぬが現在まで同形のもので出土していない。うがった考え方をすれば、城内で製作した鐔などは交易の代償として使用され、自らが使うものは極めて少なかったと言えないだろうか。陶磁器搬入に対するみかえりが何であったか、諸氏の見解もさまざまであるが、発掘調査から知り得る範囲の当地生産物としては、鉱業的製品、鉄・銅によるものではなかったかと考えている。その場合、技術的には低いレベルにあっても、優品を写して代替品としての製品をつくるのが多かったのではないだろうか。東北北半から多量に出土する鋳銭・無文銭のあり方はそのことを物語っているようにも思う。

以上、雑なまとめになったが、浪岡城跡発掘調査から理解できる点、想像できる点を一緒に述べまとめにかえる次第である。

### 《 参 考 文 献 》

1. 八戸市教育委員会 1980・1982・1983・1984 史跡根城跡発掘調査報告書Ⅱ～Ⅵ
2. 上ノ国町教育委員会 1981・1982・1983 史跡上之國勝山館跡Ⅱ～Ⅳ
3. 日本貿易陶磁研究会 1981・1982 貿易陶磁研究No.1・No.2
4. 斎藤忠編 1983 中世の考古学—遺跡発掘の斬資料 名著出版
5. 小学館 1976 世界陶磁全集 14 明
6. 小学館 1977 世界陶磁全集 3 日本中世

付 表 ( ch. )

Ch. 1 SB-20 柱穴計測表

Pit No.	形状	長さ/短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	56 × 50	68	
2	方	38 × 32	61	
3	方	43 × 40	59	
4	方	51 × 48	62	
5	方	53 × 50	59	
6	方	56 × 56	66	
7	方	50 × 45	46	
8	方	55 × 50	49	
9	方	56 × 55	66	
10	方	70 × 58	(27)	
11	方	55 × 51	59	
12	方	41 × 36	55	
13	方	35 × 28	71	
14	方	47 × 38	50	
15	方	38 × 37	56	
16	方	58 × 58	55	
17	方	52 × 48	64	
18	方	41 × 38	50	
19	方	57 × 47	29	
20	方	46 × 46	60	
21	方	62 × 50	65	
22	方	52 × 48	62	
23	方	58 × 48	46	
24	方	47 × 45	35	
25	不	95 × 65	50	
26	方	47 × 44	55	
27	方	53 × 48	63	
28	方	60 × 60	46	
29	方	57 × 57	62	
30	方	40 × 35	50	
31	方	50 × 42	58	
32	方	53 × 42	58	
33	方	54 × 50	78	
34	方	58 × 46	47	
35	方	55 × 53	50	
36	方	70 × 65	54	
37	不	63 × 47	55	
38	方	49 × 35	35	
39	方	45 × 38	21	
40	方	40 × 40	38	
41	方	53 × 48	55	
42	方	44 × 40	67	
43	方	50 × 50	56	
44	方	30 × 25	48	

Ch. 2 SB-21 柱穴計測表

Pit No.	形状	長さ/短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	43 × 40	71	
2	方	40 × 37	55	
3	方	37 × 35	45	
4	円	35 × 34	49	
5	方	35 × 33	51	
6	方	45 × 38	42	
7	円	35 × 32	46	
8	方	40 × 38	57	
9	不	50 × 42	60	
10	方	39 × 45	53	
11	円	40 × 40	56	
12	方	40 × 37	64	
13	方	35 × 32	52	
14	方	38 × 36	60	

Ch. 3 SB-23 柱穴計測表

Pit No.	形状	長さ/短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	84 × 74	31	
2	方	66 × 62	22	
3	方	63 × 60	28	
4	方	83 × 76	25	
5	方	74 × 68	31	
6	方	(62 × 60)	57	
7	方	77 × 77	35	
8	方	74 × 70	24	
9	方	75 × 71	14	
10	方	72 × 68	14	
11	方	58 × 37	34	
12	方	68 × 60	30	
13	方	80 × 65	23	
14	方	75 × 70	40	
15	方	65 × 63	34	
16	方	64 × 59	36	
17	方	74 × 74	51	
18	方	88 × 73	51	
19	方	86 × 80	23	
20	方	63 × 55	18	
21	方	78 × 70	37	
22	方	63 × 57	28	
23	不	82 × 73	21	
24	方	(78 × 76)	14	
25	方	77 × 66	25	
26	方	75 × 67	33	
27	方	56 × 52	37	
28	方	63 × 62	30	
29	方	(75 × 70)	31	
30	方	(72 × 65)	21	
31	方	(65 × 58)	32	
32	方	60 × 57	35	
33	方	(63 × 58)	27	

Ch. 4 SB-24 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	(83 × 75)	23	
2	方	55 × 45	58	
3	方	44 × 40	34	
4	方	50 × 46	55	
5	方	31 × 25	35	
6	方	50 × 47	44	
7	方	35 × 28	30	
8	方	32 × 25	29	
9	方	50 × 46	62	
10	方	36 × 30	34	
11	方	62 × 48	45	
12	方	30 × 30	34	
13	方	42 × 38	27	
14	方	50 × 45	38	
15	方	45 × 37	35	
16	方	42 × 40	28	
17	方	54 × 48	44	
18	方	42 × 38	31	
19	方	52 × 45	42	
20	方	45 × 32	27	
21	方	38 × 35	39	
22	方	40 × 39	34	

Ch. 5 SB-25 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	38 × 35	62	
2	方	41 × 41	36	
3	方	35 × 30	62	
4	方	37 × 36	48	
5	方	46 × 33	38	
6	方	41 × 36	47	
7	不	70 × 43	61	抜き取り板
8	方	55 × 53	61	
9	方	48 × 40	34	
10	方	40 × 35	32	
11	方	51 × 45	40	
12	方	50 × 46	54	
13	方	38 × 35	54	
14	方	52 × 31	40	
15	方	42 × 35	53	
16	方	52 × 52	48	
17	方	42 × 36	53	
18	方	50 × 47	45	
19	方	48 × 41	52	
20	方	43 × 33	43	
21	方	43 × 41	45	
22	方	37 × 33	59	
23	楕	59 × 37	53	
24	不	(90 × 60)	40	
25	方	46 × 42	50	
26	方	40 × 35	59	
27	方	41 × 40	35	

Ch. 6 SB-26 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	58 × 48	42	
2	方	38 × 30	53	
3	方	45 × 38	48	
4	方	58 × 37	33	
5	方	46 × 45	31	
6	方	47 × 42	56	
7	方	(60 × 51)	48	
8	方	48 × 48	39	
9	方	46 × 45	44	
10	方	53 × 45	35	
11	方	43 × 42	44	
12	方	40 × 37	46	
13	不	46 × 40	41	
14	方	45 × 45	36	
15	方	46 × 45	30	
16	方	45 × 43	39	
17	不	58 × 56	49	
18	方	36 × 35	48	
19	方	41 × 37	39	
20	方	53 × 48	44	
21	方	(40 × 35)	54	
22	方	50 × 47	55	
23	方	52 × 50	33	
24	方	43 × 40	30	
25	方	63 × 45	54	
26	方	50 × 43	46	
27	方	45 × 40	34	
28	方	47 × 46	52	
29	方	47 × 42	42	
30	方	42 × 40	54	
31	方	42 × 36	54	
32	方	53 × 46	40	
33	方	48 × 37	44	
34	方	53 × 50	50	
35	方	46 × 45	46	
36	方	40 × 35	44	
37	方	45 × 45	48	

Ch. 7 SB-27 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	47 × 41	43	
2	方	58 × 48	72	
3	方	52 × 50	67	
4	方	79 × 78	41	
5	方	50 × 50	43	
6	方	25 × 23	107	
7	方	50 × 47	65	
8	方	48 × 44	16	
9	方	72 × 66	39	
10	方	(58 × 60)	36	

Ch. 8 ST-153 注記表

(a) 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土が粒子状に混入。
2	黄褐色砂質土に火山灰が混入。
3	暗褐色土に粒子状の黄褐色砂質土と炭化物が混入。
4	粘土。
5	暗褐色土にブロック状の黄褐色砂質土と炭化物が混入。
6	粘土。
7	1層より黄褐色砂質土が少ない為弱い。
8	暗褐色土にブロック状の黄褐色砂質土と炭化物を多量に含む。
9	暗褐色土。3層より混入物が少なく明るい。
10	暗褐色土に炭化物が混入している。
11	ブロック状の黄褐色砂質土を多量に含む明褐色土。
12	黒色土。
13	黄褐色砂質土(地山)

(b) 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	23 × 23	33.1	
2	方	34 × 24	44.0	
3	方	31 × 20	40.4	
4	方	23 × 19	38.6	
5	方	28 × 23	32.8	
6	方	30 × 28	30.7	
7	方	20 × 20	—	
8	方	26 × 20	21.1	
9	方	43 × 22	19.4	

(c) 出土陶磁器類注記表

PL. No.	Fig. No.	遺物 No.	出土層	器種	器形	釉調・色調	胎土	文様	特徴	備考
4-1	—	P 195	フク土	瓦器	手焙り	—	青灰色	—	外面黒色研磨	
4-2	—	P 61	フク土	青磁	碗	青緑色	灰白色	蓮弁文	—	
4-3	—	P 65	フク土	青磁	皿	淡緑色	灰白色	蓮弁文	—	
4-4	—	P 194	フク土	青磁	鉢	暗青緑色	灰白色	—	—	
4-5	—	P 74	フク土	青磁	碗	緑青色	灰白色	—	—	
4-6	—	P 166	フク土	瓦器	手焙り	—	青灰色	—	外面黒色研磨	
4-7	53-16	P 203	フク土	青磁	皿	青緑色・緑褐色	灰白色	椀目状流水文	—	
4-8	—	P 260	フク土	染付	碗	青白色	白色	外: 蓮文内: 蓮葉	—	
4-9	—	P 68	フク土	染付	碗	白白色	白色	外: 蓮文内: 蓮葉	—	
4-10	—	P 193	フク土	染付	皿	緑白色	灰白色	外: 蓮文内: ?	—	
4-11	56-8	P 256	フク土	磁津	皿	鈍褐色	褐色	—	—	
4-12	—	P 62	フク土	磁津	皿	鈍褐色	褐色	—	—	
4-13	56-1	P 204	フク土	染付	皿	青白～緑白色	灰白色	外: 蓮文内: 蓮葉	—	藤原氏
4-14	—	P 63	フク土	白磁	皿	灰白色	淡灰白色	—	—	
4-15	—	P 73	フク土	白磁	—	灰白色	灰白色	—	—	
4-16	54-13	P 69	フク土	白磁	小杯	白	白色	—	—	見込の器 胎土の純粋
4-17	—	P 255	フク土	黄津	皿	淡緑灰色	灰白色	?	—	
4-18	—	P 66	フク土	天目	碗	赤褐～黒褐色	黄白色	—	—	
4-19	—	P 80	フク土	香津	皿	暗緑色	茶灰色	—	—	
4-20	—	P 167	フク土	文様陶物	碗	茶褐色	灰白色	—	—	
4-21	—	P 59	フク土	唐津	皿	緑白色	褐色	—	—	
4-22	—	P 60	フク土	青磁	皿	茶褐色	茶灰色	—	—	
4-23	—	P 71	フク土	岩焼	—	—	—	—	—	
4-24	—	P 72	フク土	美濃焼胎	—	緑灰色	黄白色	—	—	
4-25	—	P 164	フク土	胎解物	—	—	—	—	—	



Ch. 9 ST 155 注記表

## (a) 覆土層序

1	焼土。
2	暗褐色土に焼土・炭化物・黄褐色砂質土を若干含む。全体的に粘土を含む。
3	暗褐色土に多量の焼土と若干の炭化物を含む。
4	暗褐色土に炭化物・黄褐色砂質土・礫を若干含む。全体的に粘土を含む。
5	暗褐色土に炭化物を若干含む。全体的に粘土質である。しまりあり。
6	暗褐色土に黄褐色砂質土を多量に含む。
7	暗褐色土に黄褐色砂質土と礫を少々含む。
8	黄褐色砂質土と暗褐色土の混成。しまりあり。
9	黒灰。炭化物を多量に含む。
10	暗褐色土。しまりなし。
11	黄褐色砂質土。しまりなし。(柱穴覆土)
12	暗褐色土。しまりあり。

## (c) 出土陶磁器類注記表

PL. No	F. No. Na	遺物 No.	出土層	器種	器形	胎土	釉	文様	特徴	備考
6-1	—	P 242	フク土	無銘陶器	鉢	黒	色	黄褐色	—	越前系
6-2	—	P 239	フク土	丸底陶器	印	赤	黒	色	灰白色	—
6-3	—	P 191	フク土	丸底陶器	皿	赤	黒	色	褐色	—
6-4	57-5	P 225	フク土	天目	碗	黒	黒	色	褐色	—
6-5	—	P 215	フク土	溶解物	—	—	—	—	—	—
6-6	—	P 192	フク土	無銘陶器	加	淡	黄	褐色	黄褐色	—
6-7	57-11	P 287	フク土	配	酒	樽	赤	褐色	灰白色	8条の扉目 糸切の底
6-8	—	P 240	フク土	丸底陶器	皿	赤	赤	褐色	灰白色	—
6-9	—	P 218	フク土	唐津	皿	青	緑	灰色	灰白色	—
6-10	54-16	P 226	フク土	染付	碗	白	白	色	白色	内書文・内附線
6-11	—	P 282	フク土	染付	皿	青	白	色	灰白色	内書文・内附線
6-12	55-5	P 283	フク土	染付	皿	青	白	色	灰白色	「寿」字文 高台内に「虎」
6-13	—	P 219	フク土	唐津	皿	青	緑	色	赤褐色	—
6-14	—	P 214	フク土	染付	皿	青	白	色	灰白色	内書文・内附線
6-15	—	P 213	フク土	唐津	皿	淡	緑	灰色	黄白色	—
6-16	—	P 217	フク土	青磁	皿	青	緑	色	灰白色	型線文
6-17	—	P 243	フク土	丸底陶器	皿	黄	緑	色	赤褐色	—
6-18	—	P 281	フク土	丸底陶器	皿	黄	緑	色	赤褐色	—
6-19	—	P 286	フク土	白磁	皿	白	白	色	白色	—
6-20	—	P 233	フク土	白磁	皿	青	白	色	白色	—
6-21	—	P 220	フク土	白磁	皿	白	白	色	白色	—
6-22	—	P 237	フク土	白磁	小杯	白	白	色	白色	見込み純の目?
6-23	56-9	P 199	フク土	唐津	皿	青	灰	色	灰白色	—
6-24	56-11	P 223	フク土	唐津	皿	緑	灰	色	黄白色	—

Ch. 10 ST-156 注記表

## (a) 覆土層序

1	暗褐色土。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土がブロック状に混入。
3	黒褐色土に6層の土をブロック状に若干含む。
4	暗褐色土にブロック状の黄褐色砂質土と炭化物が混入。
5	暗褐色土にブロック状の黄褐色砂質土を多量に含む。2層より明るい。
6	黄褐色砂質土(地山)。

## (c) 出土陶磁器類注記表

PL. No	F. No. Na	遺物 No.	出土層	器種	器形	胎土	釉	文様	特徴	備考
7-1	53-9	P 247	フク土	青磁	碗	青	灰	色	灰白色	外書文内;内文
7-2	—	P 243A	フク土	青磁	碗	青	緑	色	灰白色	外書文内;内文?
7-3	—	P 246	フク土	青磁	碗	青	緑	色	灰白色	蓮弁文
7-4	54-19	P 289	フク土	染付	碗	青	灰	色	灰白色	.....
7-5	—	P 152	フク土	染付	皿	青	白	色	白色	?
7-6	—	P 291	床面	染付	皿	青	白	色	白色	外書文内;内文?
7-7	—	P 151	フク土	染付	皿	青	白	色	白色	外書文内;内文?
7-8	—	P 149	フク土	丸底陶器	皿	青	緑	色	灰白色	—
7-9	—	P 227	フク土	埴	埴	—	—	—	—	—

(b) 柱穴計測表

Pl. No	形状	長さ×幅径[cm]	深さ[cm]	備考
1	方	29 × 26	31.6	—
2	方	30 × 25	46.0	—
3	方	49 × 43	37.5	—
4	方	26 × 21	36.4	—
5	方	27 × 24	56.0	—
6	方	26 × 26	53.0	—
7	方	27 × 22	54.1	—
8	方	34 × 21	32.8	—
9	方	19 × 15	30.6	—
10	方	23 × 21	51.4	—
11	方	55 × 48	9.4	—
12	方	30 × 29	52.9	—
13	方	45 × 35	40.9	—
14	方	32 × 31	41.6	—
15	方	45 × 40	34.6	—

(b) 柱穴計測表

Pl. No	形状	長さ×幅径[cm]	深さ[cm]	備考
1	円	20 × 20	23.0	—
2	方	33 × 24	30.0	—
3	方	18 × 16	11.0	—
4	方	18 × 12	22.0	—

Ch. 11 ST-157・158 注記表

(a) 掘土層序

1	黄褐色砂質土と暗褐色土の混層に細かい礫と中ブロック状の黄褐色砂質土を多量に含む。(ST-158 掘土)
2	暗褐色土に黄褐色砂質土を若干と細かい礫を多量に含む。(柱穴掘土)
3	暗褐色土に黄褐色砂質土を部分的に含み全般に炭化物・細かい礫を多量に含む。しまりなし。
4	黒色土。
5	黄白色砂質土と暗褐色土の混層に細かい礫を多量に含む。
6	黄褐色砂質土と暗褐色土の混層に細かい礫を多量に含む。
7	暗褐色土しまり強い。
8	暗褐色土しまりなし。
9	黄褐色砂質土に小ブロック状の黄褐色砂質土を少量含む。しまりなし。
10	6より黄褐色砂質土が多い。しまりなし。
11	暗褐色土に黄褐色砂質土が少めの混層に小ブロック状の黄褐色砂質土を少量含む。
12	黄褐色砂質土に暗褐色土の混層。下部に黒色土がはいりこんでくる。
13	12より黄褐色砂質土がつよい混層。
14	暗褐色土に少量の黄褐色砂質土を含む。
15	暗褐色土に小ブロック状の黄褐色砂質土を少量含む。
16	黄褐色砂質土。粘性有。
17	黄褐色砂質土(堆土)。

(b) 柱穴計測表

Pit No.	形状	径×埋径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	32 × 28	50.2	ST-157
2	方	39 × 33	42.8	"
3	方	51 × 38	42.2	"
4	方	21 × 20	51.9	"

5	方	57 × 43	58.0	ST-157
6	方	27 × 23	46.3	"
7	方	28 × 22	53.0	"
8	方	39 × 30	37.9	"
9	円	26 × 23	27.8	"
10	方	27 × 25	47.3	"
11	方	31 × 29	31.1	"
12	方	38 × 35	38.6	"
13	方	22 × 21	19.3	"
14	方	50 × 48	52.7	"
15	方	27 × 25	44.7	"
16	円	31 × 29	45.5	"
17	円	22 × 21	23.5	"
18	方	39 × 39	35.2	"
19	方	27 × 25	31.0	"
20	方	36 × 30	72.0	"
21	円	28 × 27	10.3	"
22	方	37 × 31	59.8	"
23	円	26 × 23	40.0	"
24	方	29 × 29	47.4	"
25	方	36 × 27	42.5	"
26	方	27 × 26	51.4	"
27	円	23 × 23	33.9	"
28	円	33 × 30	38.4	"
29	円	24 × 23	31.9	"
30	方	26 × 22	14.0	"
31	円	19 × 18	15.0	"
32	方	20 × 20	-	"
33	方	19 × 17	11.9	"
34	円	31 × 27	30.8	"
35	円	26 × 25	38.0	"
36	方	25 × 20	38.0	ST-158
37	方	22 × 22	37.2	"
38	方	20 × 19	22.9	"
39	方	22 × 20	42.1	"
40	方	30 × 27	52.1	"

(c) 出土陶磁器類注記表

PL. No.	Fig. No.	遺物 No.	出土層	器種	器形	軸調・色調	胎土	文様	特徴	備考
8-1	-	P 270	床面直上	瓦器	手埴り	黒	色 青灰色	-	外面研磨	
8-2	57-8	P 208	フク土	中国鉄胎	壺	黒	色 灰色	-	二次焼成	
8-3	57-8	P 254	フク土	中国鉄胎	壺	黒	色 灰色	-	二次焼成	
8-4	57-8	P 201	フク土	中国鉄胎	壺	黒	色 灰色	-	二次焼成	
8-5	57-8	P 294	フク土	中国鉄胎	壺	黒	色 灰色	-	二次焼成	
8-6	57-8	P 253	フク土	中国鉄胎	壺	黒	色 灰色	-	二次焼成	
8-7	-	P 303	フク土	中国鉄胎	壺	黒	色 灰色	-	二次焼成	
8-8	-	P 302	フク土	中国鉄胎	壺	黒	色 灰色	-	二次焼成	
8-9	57-7	P 202	フク土	中国鉄胎	壺	黒	色 褐色	-	耳有り	
8-10	-	P 545	床面直上	磁胎	壺	黒	色 褐色	-		
8-11	-	P 209	フク土	白磁	皿	白	色 白色	-		
8-12	-	P 211	フク土	白磁	皿	灰白	色 灰白色	-		
8-13	-	P 179	フク土	薬付	皿	青白	色 白色	凡：?内：黒線		
8-14	-	P 252	フク土	青磁	碗	水色	色 緑色	?		
8-15	-	P 197	フク土	美濃灰胎	皿	黄	色 黄白色	-		
8-16	-	P 198	フク土	美濃灰胎	皿	黄	色 黄白色	-		
8-17	-	P 206	フク土	美濃灰胎	皿	黄	色 緑色	灰白色	-	
8-19	-	P 344	フク土	青磁	碗	青	色 緑色	灰白色	器文?	
8-20	-	P 196	フク土	青磁	香炉	青	色 緑色	灰白色	?	
8-21	-	P 2490	フク土	唐津	皿	青	色 灰色	灰白色		
8-22	-	P 186	フク土	瀬物陶器	播鉢	黒	色 褐色	-		

8-23	—	P 185	フク土	染付	皿	青白	色白	色?		
8-24	57-8	P 182	フク土	中国灰釉	壺	黒	色灰	色	—	蓋あり、二次焼成
8-25	—	P 180	フク土	染付	皿	青白	色白	色	※: 別冊数頁参照	
8-26	—	P 183	フク土	美濃灰釉	皿	緑	色灰白	色	—	
8-27	—	P 181	フク土	美濃灰釉	皿	黄緑	色灰白	色	—	
8-28	—	P 134	フク土	美濃灰釉	皿	黄緑	色灰白	色	—	表面に龜の目模様
8-29	—	P 200	フク土	埴場	—	—	—	—	—	
8-30	56-21	P 207	フク土	埴場	—	—	—	—	—	

Ch. 12 ST-161 A・B 注記表

(a) 覆土層序

1	暗褐色土と少量の黄褐色砂質土の混層に若干の黒色土が入っている。
2	暗褐色土に少量の黄褐色砂質土混入。
3	暗褐色土に若干の黄褐色砂質土混入。
4	1層より黄褐色砂質土が若干少ない層。
5	暗褐色土。
6	黒色土。
7	暗褐色土と若干の黄褐色砂質土と黒色土の混層。
8	黄褐色砂質土(地山)。

(b) 柱穴計測表

Pit.No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	28 × 26	38.6	ST-161A
2	方	34 × 23	28.0	〃
3	円	29 × 26	34.8	〃
4	方	25 × 23	29.7	〃
5	方	22 × 19	35.4	〃
6	方	19 × 17	35.8	〃
7	方	24 × 21	36.8	〃
8	方	18 × 16	39.3	〃
9	円	21 × 18	53.5	〃
10	円	20 × 20	42.2	〃
11	方	25 × 20	24.8	〃
12	円	29 × 26	50.0	〃
13	円	28 × 26	47.3	〃
14	川	22 × 21	40.1	〃
15	方	17 × 15	21.3	〃
16	円	20 × 20	28.4	ST-161B
17	方	20 × 20	46.8	〃
18	方	22 × 20	13.0	〃
19	方	35 × 29	51	〃
20	方	20 × 20	26.4	〃
21	方	37 × 27	44.3	〃
22	方	38 × 25	58.4	〃
23	方	26 × 25	32.1	〃
24	方	20 × 18	48.3	〃
25	方	48 × 46	34.3	〃
26	方	31 × 31	52	〃

(c) 出土陶磁器類注記表

PL.No	Fig.No	遺物No	出土層	器種	器形	釉薬・色調	胎土	文様	特徴	備考
10-1	—	P 969	フク土	染付	皿	青白	色白	外?内:陶線		
10-2	—	P 967	フク土	染付	碗	青白	色灰白	外:?		
10-3	—	P 1480	床面直上	染付	皿	青白	色灰白	※: 別冊数頁参照		
10-4	—	P 1384	フク土	青磁	碗		冬灰内	? (浮彫)		
10-5	—	P 1386	フク土	青磁	皿	青緑	色灰	割縁		
10-6	—	P 1391	フク土	青磁	碗	青白	色白	—		
10-7	—	P 971	フク土	美濃灰釉	皿	黄緑	色黄白	—		
10-8	—	P 1385	フク土	美濃灰釉	皿	黄緑	色黄白	—		
10-9	—	P 1393	床面直上	美濃灰釉	皿	黄緑	色黄白	—		
10-10	—	P 1387	フク土	鉄粉陶器	漆鉢	灰~黒	色黒	—		
10-11	—	P 935	フク土	鉄粉陶器	漆鉢	灰~	色黒	—		
10-12	—	P 2476	フク土	越前	壺	黒	色灰	—		
10-13	—	P 970	フク土	瓦器	手焙り	橙	色橙~灰	—	研磨	脚
10-14	—	P 936	フク土	埴場	—	—	—	—		
10-15	—	P 937	フク土	埴場	—	—	—	—		
10-16	—	P 968	フク土	埴場	—	—	—	—		
10-17	—	P 1392	フク土	溶解物	—	—	—	—		
10-18	—	P 938	フク土	溶解物	—	—	—	—		
10-19	—	P 1390	フク土	溶解物	—	—	—	—		

## Ch.13 ST-163 注記表

## (a) 覆土層序

1	暗褐色土。
2	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層に小ブロック状の黄褐色砂質土・黒色土・炭化物を含む。
3	暗褐色土に炭化物を少量含む。酸性あり。

## Ch.14 ST 164 注記表

## (a) 覆土層序

1	黄褐色砂質土・暗褐色土・粘土・黒色土の混層。
2	黒色土に若干の黄褐色砂質土混入。
3	黒色土。
4	灰色と黄色の粘土層。
5	暗褐色土、しまりなし。
6	黄褐色砂質土(地山)。

## (b) 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	円	34 × 32	88.1	
2	円	36 / 34	57.0	

## (c) 出土陶磁器類注記表

Pl. No	Fig. No	遺物No	出土層	器種	器形	釉調・色調	胎土	文様	特徴	備考
12-1	-	P 1394	フク上	陶罐	圓	黄緑灰色	黄灰色	-		
12-2	-	P 1396	フク上	青磁	圓	青緑色	灰白色	-		
12-3	-	P 1481	灰磁土	陶器(片)	皿	黄緑色	灰白色	-		
12-4	-	P 2528	フク土	瓦器	壺	黄褐色	褐色	-	研磨	
12-5	58-5	P 1008	フク上	陶輪(底)	楕圓鉢	青灰～黒色	青灰色	-	6条の彫目(縁部に楕圓状文)	

## Ch.15 ST-166 SX-124 注記表

## (a) 覆土層序

1	暗褐色土に少量の黄褐色砂質土が混入。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土と少量の炭化物が混入。
3	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層に少量の黒色土と炭化物が含まれる。
4	黄褐色砂質土に暗褐色土が混入。
5	黄褐色砂質土、しまりなし。
6	乳白色粘土に暗褐色土混入、しまりあり。
7	黄褐色粘土、しまりあり。
8	黄色粘土、しまりあり。
9	灰色粘土に暗褐色土混入、しまりなし。
10	暗褐色土。
11	暗褐色土に多量の灰と少量の黄褐色砂質土を含む。
12	暗褐色土に多量の黒色土と少量の黄褐色砂質土を含む。
13	暗褐色土に若干の黄褐色砂質土混入。
14	黄褐色砂質土(地山)。
15	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層に若干の炭化物混入。
16	15層より黄褐色砂質土が多く含む。酸性あり。
17	暗褐色土に多量の砂質土が含まれる。

## (b) 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	29 × 21	48.4	
2	方	31 × 27	60.1	
3	方	38 × 38	69.9	
4	方	37 × 31	60.4	
5	方	20 × 20	30.3	
6	方	26 × 25	56.1	
7	方	35 × 33	65.1	
8	方	23 × 21	41.0	

## (c) 出土陶磁器類注記表

Pl. No	Fig. No	遺物No	出土層	器種	器形	釉調・色調	胎土	文様	特徴	備考
13-1	-	P 1425	フク上	青磁	碗	暗青緑色	灰色	非文		珠洲系
13-2	-	P 1115	フク上	中位鉄輪	蓋	黒	灰色	-	二次焼成	
13-3	-	P 1119	フク上	青磁	一	青緑色	灰白色	-		
13-4	-	P 1423	フク上	天目	碗	黒	灰色	褐色		
13-5	-	P 1463	フク上	唐津	圓	暗灰色	褐色	-		
13-6	-	P 1472	フク上	唐津	圓	暗灰色	褐色	-		
13-7	-	P 1420	フク上	唐津	皿	暗緑色	灰色	-		

13-8	-	P 1517	フク土	瓦葺天輪	皿	緑	灰	色	淡赤灰色	-		
13-9	-	P 1471	フク土	陶器	小鉢	茶	灰	色	淡赤灰色	-		産地不詳
13-10	-	P 1470	フク土	唐津	皿	青	灰	色	灰~褐色	-		
13-11	-	P 1120	フク土	瓦葺天輪	皿	黄	緑	色	黄白色	-		
13-12	-	P 1117	フク土	瓦葺天輪	皿	緑		色	黄白色	-		
13-13	-	P 1416	フク土	瓦葺天輪	皿	黄	緑	色	黄白色	-		
13-14	-	P 1417	フク土	瓦葺天輪	皿	淡	黄	褐色	黄白色	-		
13-15	-	P 1409	フク土	瓦葺天輪	皿	緑		色	黄白色	-		
13-16	-	P 1465	フク土	瓦葺天輪	皿	緑		色	黄白色	-		高台内に輪ノナ履
13-17	-	P 2495	フク土	細輪陶器	蜜鉢	黒		色	灰	色	-	越前系
13-18	-	P 1401	フク土	細輪陶器	蜜鉢	茶	灰	色	褐色	-		越前系
13-19	-	P 2494	フク土	細輪陶器	蜜鉢	灰	~	黒	色	灰~褐色	-	越前系
13-20	-	P 1415	フク土	埴埴	-	-	-	-	-	-	-	
13-21	-	P 1422	フク土	埴埴	-	-	-	-	-	-	-	
13-22	-	P 1473	フク土	埴埴	-	-	-	-	-	-	-	
13-23	-	P 1426	フク土	埴埴	-	-	-	-	-	-	-	
13-24	-	P 1413	フク土	埴埴	-	-	-	-	-	-	-	
13-25	-	P 1533	フク土	埴埴	-	-	-	-	-	-	-	
13-26	-	P 2534	フク土	須恵器	環	-	-	-	-	-	-	火ダスキ。館 書き記号(V)
13-27	-	P 1460	フク土	染付	皿	黄	緑	色	灰白色	外：陶線 内：陶線		
13-28	-	P 1516	フク土	染付	皿	青	白	色	灰白色	外：陶線 内：陶線		
13-29	-	P 1406	フク土	染付		青	白	色	白色	外：陶線 内：陶線		
13-30	-	P 1405	フク土	染付	碗	青	白	色	白色	外：唐草文 内：陶線		
13-31	-	P 1408	フク土	染付	皿	青	白	色	灰白色	外：陶線 内：陶線	二次焼成	
13-32	-	P 1118	フク土	染付	碗	青	白	色	白色	外：唐草文 内：陶線		
13-33	-	P 1424	フク土	染付	-	青	白	色	白色	?		
13-34	-	P 1404	フク土	染付	-	青	白	色	白色	?		
13-35	-	P 1410	フク土	染付	-	青	白	色	白色			
13-36	-	P 1411	フク土	染付	-	黄	白	色	黄灰色			
13-37	-	P 1461	フク土	染付	-	青	白	色	灰白色	波 瀾 文		
13-38	-	P 1412	フク土	染付	-	青	白	色	灰白色	外：? 内：陶線		
13-39	-	P 1414	フク土	染付	-	青	白	色	灰白色	外：陶線 内：陶線		
13-40	-	P 1116	フク土	染付	-	黄	緑	色	黄灰色	外：陶線 内：陶線		
13-41	-	P 1464	フク土	染付	皿	青	白	色	灰白色	外：陶線 内：?		
13-42	-	P 1114	フク土	染付	皿	青	白	色	白色	外：唐草文 内：唐草文		
13-43	-	P 1462	フク土	染付	皿	青	白	色	灰白色	外：陶線 内：陶線		

Ch. 16 ST-167 注記表

(a) 覆土順序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土と炭化物を若干含む。
2	黒色土、しまりなし。
3	暗褐色土に黄褐色砂質土を少量含む、しまりあり。
4	暗褐色土に黄褐色砂質土と黒色土と灰を全体的に含む、しまりあり。
5	黄褐色砂質土(埴山)。
6	茶褐色砂質土(埴山)。

(b) 柱穴計画表

Pit No	形状	径×径(cm)	深さ(cm)	備考
1	不整	40 × 35	62.0	
2	方	31 × 22	29.5	
3	方	30 × 28	36.5	
4	方	22 × 21	13.2	
5	方	40 × 32	50.0	
6	方	28 × 25	41.5	
7	方	36 × 25	11.5	

## (c) 出土陶器類注記表

PL.No	Fig.No	遺物No	出土層	器種	器形	軸測・色図	胎土	文様	特徴	備考
14-1	—	P 2366	フタナ	須恵器	杯	—	—	—	—	ズグスト、底面が欠損した。
14-2	—	P 2500	フタ土	唐津	皿	茶 灰 色	橙 色	—	—	—
14-3	—	P 1397	フタ土	越前	甕	暗 赤 褐色	灰 色	—	—	—

## Ch. 17 ST-169・SD-61 注記表

(a) 覆土層序  
ST-169

1	暗褐色上に少量の黄褐色砂質土が含まれる。
2	黒色土。
3	暗褐色土と黒色土と黄褐色砂質土の混層、し まりあり。
4	上層部が灰色粘土で下層にいくにしたがい暗 灰色粘土。

## SD-61

5	暗褐色土と少量の暗灰色粘土と少量の褐色砂 質土の混層。
6	多量の暗灰色粘土と少量の暗褐色土、褐色砂 質土が混入。
7	明暗褐色土と褐色砂質土の混層。
8	暗褐色土と褐色砂質土の混層。
9	暗褐色土と黒色土の混層に少量の褐色砂質土 混入。
10	明暗褐色土・黒色土・黄褐色砂質土の混層。
11	褐色砂質土と黄褐色砂質土の混層。
12	黄褐色砂質土。

## Ch. 18 ST-170 注記表

## (a) 覆土層序

1	暗褐色土と小ブロック状の黄褐色砂質土の混 層、しまりなし。
2	暗褐色土と大ブロック状の黄褐色砂質土の混 層、炭化物を若干含む、しまりなし。
3	暗褐色土に黄褐色砂質土を若干含む、しまり あり。
4	暗褐色土に黄褐色砂質土を少量含む、しまり なし。
5	黄褐色砂質土（地山）。

## (b) 柱穴計測表

Plt.No	形状	長径×短径×高	深さ(cm)	備考
1	方	31 × 24	53.3	
2	方	33 × 31	55.8	
3	方	29 × 29	70.0	
4	方	43 × 38	67.3	
5	方	24 × 22	47.7	
6	方	34 × 26	39.3	
7	方	27 × 20	54.9	
8	方	28 × 26	44.8	
9	方	21 × 19	55.5	
10	不	31 × 31	8.8	

## (c) 出土陶器類注記表

PL.No	Fig.No	遺物No	出土層	器種	器形	軸測・色図	胎土	文様	特徴	備考
15-1	—	P 1811	フタ上	白磁	皿	白 色	白 色	—	—	—
15-2	—	P 1809	フタ土	白磁	皿	灰 白 色	灰 白 色	—	—	—
15-3	—	P 1374	フタ土	青磁	碗	緑 青 色	灰 白 色	?	—	—
15-4	—	P 1373	フタ上	染付	皿	青 白 色	白 色	?	—	—
15-5	—	P 1810	フタ土	染付	皿	青 白 色	白 色	?	—	—
15-6	—	P 1376	フタ上	美濃灰輪	皿	黄 緑 色	灰 色	—	—	湯付茶
15-7	—	P 1375	フタナ	美濃福輪	皿	赤 褐 色	黄 白 色	—	—	—
15-8	—	P 1372	フタナ	瓦 器	手焼り	明黄褐色～黒色	灰 色	—	—	外周研磨

## Ch. 19 ST-171・173・179 注記表

## (a) 覆土層序

1	暗褐色土にブロック状の黄褐色砂質土を中央 に部分的に含み粒状の黄褐色砂質土と炭化 物を全体的に若干含む、しまりありなし。
2	黄白色粘土
3	暗褐色土に黄褐色砂質土と黒色土を全体に含 む、しまりなし。
4	暗褐色土。
5	” と黒色土の混層。
6	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に含 む、微量の炭化物混入。

7	黄白色粘土にブロック状の黄褐色砂質土を 含む、しまりあり。
8	灰色粘土。
9	暗褐色土に少量の暗褐色砂質土を含む。
10	暗褐色土と7の混層、黄褐色砂質土を少量含 む。
11	黄褐色砂質土（地山）。

(b) 柱穴計測表

Pl. No.	形状	直径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	34 × 25	29	ST-173
2	方	31 × 25	17	"
3	方	16 × 14	20	"
4	方	25 × 21	13	"
5	方	27 × 22	38	"
6	方	41 × 21	19	"
7	方	33 × 24	62	ST-171
8	方	31 × 29	51	"
9	方	41 × 30	47	"
10	方	33 × 23	9	"
11	方	36 × 33	64	"

12	方	28 × 25	70	ST-171
13	方	38 × 30	44	
14	方	14 × 12	8	
15	方	22 × 19	20	
16	円	32 × 26	17	ST-179
17	方	25 × 25	5	"
18	方	22 × 22	36	"
19	方	33 × 33	14	"
20	円	33 × 33	50	"
21	方	29 × 26	46	"
22	方	22 × 22	53	"
23	方	27 × 24	30	"

(c) 出土陶磁器類計表

Pl. No.	Fig. No.	遺物 No.	出土層	器種	器形	胎土・色別	胎土	文様	特徴	備考
17-1	—	P 1621	フク土	染付	皿	黄白	白色	外: 雲文; 内: 雲文		ST 171
17-2	—	P 1791	フク土	染付	皿	青白	白色	外: 内: 雲文		"
17-3	—	P 1613	フク土	染付	碗	青白	白色	?		"
17-4	—	P 1612	フク土	青磁	皿	黄白	灰色	—	二次焼成	"
17-5	—	P 1352	フク土	青磁	皿	緑青	灰色	—		"
17-6	—	P 1351	フク土	青磁	皿	緑青	灰色	—		"
17-7	—	P 1357	フク土	青磁	碗	緑青	灰色	—		"
17-8	—	P 1622	フク土	青磁	皿	緑青	灰色	—		"
17-9	—	P 1356	フク土	瓦器	手焙り	明黄褐~褐色	灰色	—	外面研磨	"
17-10	—	P 1353	フク土	越前	甕	緑青	灰色	—	二次焼成	"
17-11	—	P 1822	フク土	越前	甕	緑~黒色	灰色	—	二次焼成	"
17-12	54-18	P 1684	床面	染付	碗	青白	白色	丸を二つ結合した文		ST 173
17-13	—	P 1804	床面	染付	皿	青白	灰白色	?	断面に漆付着	"
17-14	—	P 1736	フク土	白磁	皿	灰白	灰白色	—		"
17-15	54-6	P 1664	フク土	白磁	皿	灰白	灰白色	—	底に砂が多量に付着	"
17-16	—	P 1685	床面	青磁	皿	緑青	灰色	楕円状流水文		"
17-17	—	P 1651	フク土	青磁	皿	緑青	灰色	—		"
17-18	—	P 1655	フク土	青磁	皿	緑青	灰白色	蓮弁文		"
17-19	53-6	P 1682	フク土	青磁	碗	暗緑	灰白色	蓮弁文		"
17-20	—	P 2442	フク土	美濃瓦輪	皿	黄緑	灰色	—		"
17-21	—	P 1666	フク土	青磁	皿	青緑	灰白色	—		"
17-22	57-4	P 1798	フク土	天目	碗	黒	黒~黒	—		"
17-23	57-9	P 1492	フク土	美濃瓦輪	皿	暗褐	灰白色	—		"
17-24	58-3	P 1735	フク土	越前	甕	緑~暗褐色	灰色	—	二次焼成	"
17-25	—	P 2444	フク土	越前	甕	暗褐色	灰色	—		"
17-26	—	P 1663	フク土	越前	甕	暗青緑	灰色	—		"
17-27	—	P 1794	フク土	越前	甕	黄緑~暗褐色	灰色	—	二次焼成	"
17-28	—	P 1737	フク土	越前	甕	暗褐色	灰色	—	二次焼成	"
17-29	58-4	P 1793	フク土	越前	甕	緑~暗褐色	灰色	—		"
17-30	58-12	P 1807	フク土	瓦器	手焙り	灰~黒色	灰~黒色	鶴文、亀甲文		"
17-31	—	P 1792	フク土	瓦器	一	緑~黒色	黒~黒色	—		"
17-32	—	P 1803	フク土	瓦器	手焙り	緑~黒色	灰色	—		"
17-33	58-2	P 2105	フク土	越前	甕	暗緑~暗褐色	灰色	—		ST 179

Ch. 20 ST-172 注記表

(a) 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土を若干含む、しまりあり。
2	暗褐色土にブロック状の黄褐色砂質土を部分的に、全体的に少量の黄褐色砂質土を含み、炭化物をも若干含む、しまりなし。
3	暗褐色土に粘質土を全体的に含み、黄褐色土を若干含む。
4	暗褐色土。
5	黒色土と粘質土の混層。
6	黄・白色砂質土。
7	暗褐色土に黄褐色砂質土を若干含む、しまりなし。
8	黄褐色砂質土(地山)。

(b) 柱穴計測表

Pit No	形状	長さ×幅(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	35 × 30	69	
2	方	24 × 20	66	
3	方	28 × 23	74	
4	方	28 × 26	36	
5	円	27 × 24	39	
6	円	38 × 28	45	
7	円	35 × 33	67	
8	円	34 × 34	57	
9	方	26 × 24	64	
10	円	31 × 23	52	
11	方	41 × 40	33	

Ch. 21 ST-175・SX-125・127 注記表

(a) 覆土層序

1	暗褐色土。
2	暗褐色土と粘土の混層。
3	乳白色粘土。
4	黒色土に黄褐色砂質土が含まれる。
5	黄褐色砂質土に黒色土が含まれる。
6	灰。
7	黒色土、しまりなし。
8	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層、しまりあり。
9	暗褐色土に黄褐色砂質土が少量含まれる。
10	灰と暗褐色土の混層。
11	暗褐色土に若干の灰を含む。
12	暗褐色土に少量の灰を含む、しまりなくもろい。
13	暗褐色土に多量の灰を含む、しまりあり。
14	暗褐色土にブロック状の黒色土混入。
15	黄土。
16	炭化物。
17	暗褐色土に若干の炭化物が含まれる。
18	黄褐色粘土に若干の灰と炭化物が含まれる。
19	黒色土を多量に含む暗褐色土、しまりあり。
20	黒色土に暗褐色土が含まれ、灰と炭化物も少量含まれる。
21	黒色土に少量の暗褐色土を含む、しまりなし。
22	黄土に若干の灰を含む。
23	黄土に少量の暗褐色土と灰を含む。
24	黄褐色砂質土に少量の黒色土と暗褐色土を含む。
25	黄褐色砂質土に少量の黒色土と暗褐色土を含む(地山)。

(b) 柱穴計測表

Pit No	形状	長さ×幅(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	42 × 37	34	
2	不	46 × 31	17	
3	円	26 × 26	14	
4	円	32 × 26	36	
5	方	26 × 26	11	
6	円	37 × 33	29	
7	円	31 × 30	22	
8	方	41 × 35	34	
9	方	31 × 28	20	
10	方	30 × 28	30	
11	方	20 × 20	11	
12	方	30 × 26	26	
13	円	29 × 20	47	

(c) 出土陶器注記表

Fig. No	PL. No	遺物No	出土層	器種	器形	胎面・色調	胎土	文様	特徴	備考
19-1	-	P1347	フク土	染付	皿	青白	白色	外縁		
19-2	-	P1348	フク土	白磁	皿	白	白色	-		
19-3	53-10	P1349	フク土	青磁	碗	青緑	暗灰色	-		
19-4	-	P1488	フク土	唐津	皿	青灰	橙色	-		
19-5	-	P1350	フク土	唐津	皿	暗緑	灰色	-		
19-6	53-8	P1454	フク土	青磁	碗	緑	橙色	-	二次製成	
19-7	53-8	P1609	フク土	青磁	碗	緑	橙色	-	二次製成	



## Ch. 22 ST-176 注記表

## (a) 覆土層序

1	暗褐色土に少量の黄褐色砂質土・炭化物・灰色灰が混入。
2	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層に多量の灰を含み、炭化物も混入している。
3	黒色土。
4	灰色灰に少量の黄褐色砂質土と炭化物混入。
5	暗褐色土に多量の灰と少量の黄褐色砂質土と炭化物を含む。
6	暗褐色土にブロック状の黄褐色砂質土が混入し、多量の灰色灰と微量の炭化物も含まれる。
7	黄褐色砂質土に暗褐色土が混入。
8	灰色灰。
9	黄褐色砂質土(地山)。

## (b) 柱穴計測表

Pit No.	形状	長さ×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	不	36 × 23	48	
2	方	26 × 23	59	
3	不	35 × 26	57	
4	不	31 × 28	55	
5	方	28 × 24	52	
6	不	37 × 28	64	
7	円	20 × 18	17	
8	円	28 × 22	11	

## (c) 出土陶器注記表

PL. No.	Fig. No.	遺物No.	出土層	器種	器形	希顔・色調	胎土	文様	特徴	備考
20-1	—	P 1439	フク土	染付	碗	青白色	白色	外? 内: 内線		
20-2	—	P 1441	フク土	瓦器	—	黄灰色	灰色	巴文		
20-3	—	P 1440	フク土	青磁	碗	緑青色	灰白色	圓	線	
20-4	—	P 1442	フク土	青磁	—	青緑色	灰色	—		
20-5	—	P 1438	フク土	黄磁灰釉	皿	緑色	黄白色	—		
20-6	56 1	P 1443	フク土	黄磁灰釉	皿	黄緑～緑色	灰白色	御花文		

## Ch. 23 ST-177 注記表

## (a) 覆土層序

1	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層に少量の炭化物と黒色土が含まれ、黄褐色砂質土がブロック状に入っている。
2	黒色土。
3	黄褐色砂質土に若干の暗褐色土が混入。
4	黄褐色砂質土(地山)。

## (b) 柱穴計測表

Pit No.	形状	長さ×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	20 × 16	32	
2	方	26 × 22	31	
3	方	21 × 20	26	
4	方	19 × 17	24	
5	方	32 × 30	33	
6	方	35 × 29	52	
7	方	30 × 22	12	
8	不	25 × 23	26	
9	不	28 × 25	12	
10	方	23 × 20	36	

## (c) 出土陶器注記表

PL. No.	Fig. No.	遺物No.	出土層	器種	器形	希顔・色調	胎土	文様	特徴	備考
21-1	—	P 1478	フク土	青磁	皿	緑青色	灰色	—		
21-2	—	P 2488	フク土	瓦器	手焙り	緑色	灰色	—	研邊	脚
21-3	—	P 1479	フク土	加釉陶器	碗	青灰色	青灰色	—		
21-4	—	P 1509	フク土	地膚	—	—	—	—		
21-5	58 7	P 1483	フク土	加釉陶器	碗	暗赤褐色	灰-緑釉	—		横前系

## Ch. 24 ST-178 注記表

## (a) 柱穴計測表

Pit No.	形状	長さ×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	円	28 × 26	23	
2	円	36 × 35	34	
3	方	21 × 21	21	
4	方	26 × 25	4	
5	円	28 × 25	21	
6	方	25 × 23	40	
7	方	24 × 20	36	
8	方	25 × 23	40	
9	方	34 × 32	15	
10	円	33 × 28	54	

(b) 出土陶磁器注記表

Pl. No	Fig. No	遺物No	出土層	器種	器形	輪郭・色調	胎土	文様	特徴	備考
22-1	—	P 1634	フタ土	飛付	碗	白色	白色	外：？ 内：面線		
22-2	53-5	P 997	フタ土	青磁	碗	青褐色	灰白色	蓮弁文		
22-3	—	P 1631	フタ土	青磁	碗	緑青色	灰色	—		
22-4	—	P 1632	フタ土	青磁	皿	緑青色	灰色	—		
22-5	—	P 1635	フタ土	青磁	皿	緑青色	灰色	—		
22-6	—	P 1633	フタ土	美濃灰胎	皿	黄緑色	黄白色	—		
22-7	—	P 1629	フタ土	美濃灰胎	皿	黄緑色	黄白色	—		
22-8	—	P 1628	フタ土	美濃灰胎	皿	黄緑色	黄白色	—		
22-9	—	P 1630	フタ土	美濃灰胎	皿	黄緑色	黄白色	—		

Ch. 25 ST-180・182 SR-69注記表

(a) 覆土層序

1	明暗褐色上に炭化物・白灰色と若干の黄褐色砂質土を含む。
2	1に多量の灰色灰と白色灰が混入している。
3	乳白色粘土と暗褐色土との混層。
4	暗褐色土に少量の炭化物と小ブロック状の黄褐色砂質土が混入。
5	暗褐色土に若干の黒色土混入。
6	黄褐色粘土。
7	暗褐色土に若干の炭化物と黄褐色砂質土混入。
8	明暗褐色上に黄褐色砂質土が中ブロック状に混入。
9	1より黄褐色砂質土が多い。
10	暗褐色土に若干の黄褐色砂質土が混入。
11	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。
12	黄褐色砂質土(地山)。
13	暗褐色土に若干の黄褐色砂質土・炭化物・黒色灰・灰色灰が混入している。
14	暗褐色土と灰色灰の混層。
15	黄褐色砂質土。
16	暗褐色土に少量の黄褐色砂質土が含まれる。
17	黄褐色砂質土に多量の暗灰色灰が含まれる。
18	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。
19	黒灰色灰と灰色粘土の混層。
20	14より灰が多く含まれている。
21	20より若干黄褐色砂質土が多い。
22	暗褐色土に黄褐色砂質土が大ブロック状に含まれている。
23	黄褐色砂質土、きめが粗い。
24	17より暗灰色灰が少ない。
25	乳黄色砂質土(地山)。
26	明暗褐色土に若干の黄褐色砂質土混入。
27	26に多量の灰色灰を含む。
28	26に少量の灰色灰を含む。
29	暗褐色土。
30	黄褐色砂質土に暗褐色土が含まれる。
31	1に多量の黄褐色砂質土がブロック状に混入。
32	1に黄褐色砂質土がブロック状に混入。
33	明暗褐色土にブロック状の黄褐色砂質土が少量含まれる。
34	暗褐色土に若干の黄褐色砂質土と多量の灰を含む。
35	明暗褐色土に若干の黄褐色砂質土を含む。しまりなし。
36	35より黄褐色砂質土が若干多い混層。
37	35より黄褐色砂質土が少ない。

38	35に多量の黒色灰・白色灰を含む。
39	乳黄色砂質土。
40	暗褐色土、しまりなし。
41	暗褐色土と灰色灰と若干の黄褐色砂質土の混層に少量の灰色粘土を含む。
42	明暗褐色土に多量の乳白色砂質土を含む。
43	暗褐色土に黄褐色砂質土との混層に若干の暗褐色土混入。
44	白色灰。
45	黄褐色砂質土と褐色砂質土との混層に若干の暗褐色土混入。
46	暗褐色土に若干の黒色土混入。
47	46と黄褐色砂質土との混層。

(b) 柱穴計測表

Pit No	形状	長さ×幅(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	32 × 29	73	ST-180
2	不	48 × 44	76	"
3	方	41 × 40	68	"
4	円	25 × 24	38	"
5	方	26 × 19	41	"
6	方	28 × 23	64	"
7	方	32 × 25	69	"
8	円	25 × 25	63	"
9	円	33 × 26	—	"
10	円	23 × 23	17	"
11	方	22 × 20	11	"
12	円	30 × 27	45	"
13	方	27 × 26	42	"
14	方	21 × 21	11	"
15	円	35 × 29	80	"
16	円	32 × 33	54	"
17	円	26 × 26	5	"
18	方	25 × 26	15	"
19	方	25 × 25	43	"
20	円	21 × 19	10	"
21	円	31 × 27	51	"
22	円	31 × 29	52	ST-182
23	円	51 × 41	84	"
24	円	17 × 15	5	"

(c) 出土陶磁器類注記表

PL. No.	Fig. No.	遺物No.	出土層	器種	器形	輪割・色調	胎土	文様	特徴	備考
23-1	54-8	P 1844	フク上	白磁	皿	白	灰白色	—	—	
23-2	—	P 1828	フク土	白磁	—	青白	白色	—	—	
23-3	—	P 1827	フク土	美濃焼胎	皿	赤褐色	黄白色	—	—	
23-4	—	P 1836	フク土	古津	皿	青灰	褐色	—	—	
23-5	—	P 1840	フク土	青磁	皿	緑青	灰色	割花文	—	
23-6	—	P 1843	フク土	青磁	碗	暗緑	灰白色	—	—	
23-7	—	P 1826	フク土	青磁	碗	淡青	黄白-褐色	—	—	
23-8	—	P 1943	フク土	青磁	碗	暗緑	灰白色	—	—	
23-9	—	P1826A	フク土	浴解物	—	—	—	—	—	
23-10	—	P 1829	フク土	浴解物	—	—	—	—	—	
23-11	—	P 1842	フク土	浴解物	—	—	—	—	—	
23-12	—	P 1870	フク土	浴解物	—	—	—	—	—	
23-13	—	P 1906	フク上	羽口	—	—	—	—	—	
23-14	—	P 1177	フク土	洗淨	—	—	—	—	—	
23-15	—	P1826B	フク土	浴解物	—	—	—	—	—	

Ch. 26 ST-181 注記表

(a) 覆土層序

1	暗褐色上にブロック状の黄褐色砂質土混入、しまりあり。
2	暗褐色上にブロック状の黄褐色砂質土が多量に混入、炭化物も含まれる。
3	暗褐色上にブロック状の黄褐色砂質土が少量混入、炭化物も含まれる。
4	3より黄褐色砂質土が若干多く含まれている、しまりなし。

(b) 柱穴計測表

Pit No.	形状	長さ×幅径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	23 × 21	30	
2	方	23 × 23	38	
3	方	33 × 28	47	
4	方	30 × 24	33	
5	方	23 × 20	30	
6	方	40 × 37	68	

Ch. 27 ST-183 注記表

(a) 覆土層序

1	暗褐色上に黄褐色砂質土を若干含む、しまりあり。
2	暗褐色上に黄褐色砂質土を少量含む、しまりなし。
3	暗褐色上にブロック状の黄褐色砂質土を部分的に含む炭化物も若干含まれる、しまりなし。
4	暗褐色上に小ブロック状の黄褐色砂質土を全体的に含む、しまりなし。
5	黄褐色砂質土と暗褐色土の混層。
6	暗褐色上に粘質土を全体的に含む、黄褐色砂質土を若干含む、しまりなし。
7	暗褐色上に粘質土を多量に黄褐色砂質土を若干含む、しまりあり。
8	暗褐色上に焼土を少量、粘質土を多量に含む黄褐色砂質土を若干含む、しまりなし。
9	暗褐色上に焼土を少量と黄褐色砂質土と炭化物を若干含む。
10	暗褐色上に粘土と黄褐色砂質土を若干含む、しまりあり。
11	黄褐色砂質土、しまりなし。
12	黄褐色砂質土と黒色土の混層、しまりあり。
13	黄褐色砂質土に暗褐色土を少量含む、しまりなし。
14	黒色土に黄褐色砂質土を少量、炭化物を若干全体的に含む、しまりあり。
15	暗褐色上に黄褐色砂質土を若干含む、しまりなし。
16	黄褐色砂質土(地山)。

(b) 柱穴計測表

Pit No.	形状	長さ×幅径(cm)	深さ(cm)	備考
1	円	36 × 33	83	
2	方	40 × 37	59	
3	不	39 × 35	84	
4	不	47 × 38	109	
5	円	31 × 28	42	
6	円	37 × 36	84	
7	方	38 × 28	77	
8	方	30 × 27	75	
9	円	37 × 36	76	
10	円	35 × 34	47	
11	方	28 × 21	11	
12	方	32 × 27	19	
13	方	48 × 47	20	
14	方	35 × 31	26	
15	方	28 × 28	27	

(c) 出土陶磁器注記表

PL. No	Fig. No	遺物No	出土層	器種	器形	胎土・色調	胎土	文様	特徴	備考
25-1	—	P1931	フタ上	舟形	鉢	暗緑色	灰白色	—		
25-2	—	P2000	フタ上	鉢形	鉢	褐色・黄褐色	灰色	—		
25-3	—	P1930	フタ上	鉢形	鉢	緑色・黄褐色	灰色	—		
25-4	—	P1934	体部底上	鉢形	鉢	暗緑色・黒褐色	灰色	—		
25-5	—	P1929	フタ上	鉢形	鉢	暗黄緑色・褐色	灰色	—		

Ch. 28 ST-184 注記表

## (a) 覆土層序

1	層白色の焼土。
2	暗褐色土に少量の層白色の焼土を全体的に含む。しまりあまりなし。
3	暗褐色土に黄褐色砂質土と炭化物を全体的に若干含む。しまりあり。
4	暗褐色土に多量の黄褐色砂質土と若干の白色の灰を層状に含む。しまりあり。
5	黄褐色砂質土に暗褐色砂質土を若干含む。しまりあり。
6	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層に黒色土を少量含む。しまりあり。
7	黄褐色砂質土(地山)。

## (b) 柱穴計測表

Pit No	形状	長さ×幅(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	49 × 42	59.6	ST-184 A
2	方	33 × 32	74.5	"
3	円	45 × 41	57.1	"
4	方	48 × 36	77.1	"
5	方	37 × 30	64.9	"
6	方	37 × 31	72.7	"
7	方	35 × 32	66.4	"
8	円	33 × 31	66.4	"
9	方	25 × 22	31.3	"
10	方	27 × 25	33.0	"
11	方	33 × 28	48.7	"
12	方	48 × 41	73.6	"
13	方	28 × 24	49.6	"
14	方	28 × 24	66.5	"
15	円	33 × 33	55.1	ST-184 B
16	円	35 × 31	95.5	"
17	方	30 × 26	51.0	"
18	円	30 × 29	43.4	"

19	方	37 × 32	54.7	ST-184 B
20	円	33 × 30	66.1	"
21	円	28 × 28	81.0	"
22	方	48 × 35	69.6	"
23	方	37 × 36	74.5	"
24	方	33 × 30	67.6	"
25	方	51 × 44	78.0	"
26	方	50 × 32	52.8	"
27	方	29 × 27	58.2	"
28	方	33 × 23	48.8	"
29	方	34 × 33	85.0	"
30	方	42 × 38	80.0	"
31	方	43 × 33	27.8	"
32	方	26 × 24	57.1	"
33	方	26 × 25	56.5	"
34	方	32 × 28	7.5	"
35	方	41 × 39	66.1	"
36	方	23 × 19	32.3	"
37	方	29 × 23	20.7	"
38	方	29 × 27	17.4	"
39	方	42 × 40	18.6	"
40	方	50 × 45	29.0	"
41	方	47 × 33	6.9	"
42	方	27 × 22	67.5	"
43	方	23 × 22	47.8	"
44	方	35 × 30	34.8	"
45	方	27 × 25	24.4	"
46	方	30 × 30	47.8	"
47	方	23 × 22	24.3	"
48	方	21 × 20	33.9	"
49	円	32 × 31	42.2	"
50	円	28 × 26	47.2	"
51	方	27 × 20	17.3	"
52	方	24 × 22	56.2	"

(c) 出土陶磁器類注記表

PL. No	Fig. No	遺物No	出土層	器種	器形	胎土・色調	胎土	文様	特徴	備考
26-1	—	P1939	フタ上	染付	皿	青白色	白色	外:牡丹唐草文内:蘭梅		
26-2	—	P2108	フタ上	染付	鉢	白色	白色	—	同量の可能性もある。	
26-3	—	P1952	フタ上	染付	皿	淡黄緑色	黄白色	?		
26-4	—	P1910	フタ上	白磁	皿	白色	白色	—		
26-5	—	P1938	フタ上	白磁	皿	灰白色	黄灰色	—		
26-6	53-19	P1954	体部底上	青磁	碗	暗緑色	灰色	割	縁	
26-7	53-1	P1944	フタ上	青磁	碗	青緑色	灰色	蓮弁文		
26-8	53-14	P1946	フタ上	青磁	皿	緑青色	灰色	蓮弁文		
26-9	—	P1953	フタ上	青磁	碗	暗緑色	灰白色	蓮弁文		
26-10	—	P1963	フタ上	青磁	碗	暗緑色	灰白色	蓮弁文		
26-11	—	P1950	フタ上	青磁	碗	暗緑色	灰色	—		
26-12	—	P1913	フタ上	青磁	碗	青緑色	灰白色	—		

26-13	—	P 1945	フク土	青磁	碗	青	緑色	灰白色	—		
26-14	—	P 1941	フク土	青磁	碗	緑	青色	灰白色	蓮弁文		
26-15	—	P 1940	フク土	青磁	碗	黄緑	・黄緑色	灰白色	—		
26-16	—	P 2449	フク土	青磁	皿	緑	青色	灰白色	欄目文		
26-17	—	P 1968	フク土	青磁	碗	緑	青色	灰白色	—		
26-18	—	P 1965	フク土	青磁	碗	黄	緑色	灰白色	割線	繪	
26-19	—	P 1911	フク土	青磁	皿	緑	青色	灰白色	欄目文		
26-20	—	P 1915	フク土	青磁	碗	緑	青色	灰白色	—		
26-21	—	P 1912	フク土	美濃灰釉	皿	黄	緑色	灰白色	—		
26-22	—	P 2111	フク土	美濃灰釉	皿	暗	黄緑色	灰白色	—		(輪ノ子痕)
26-23	—	P 2113	フク土	瓦器土器	—	黒	—	灰—褐色	割線文		
26-24	—	P 1964	フク土	天目	碗	黒	—	灰色	—		
26-25	—	P 2109	フク土	越前	壺	青	緑・暗褐色	灰色	—		二次焼成
26-26	—	P 1914	フク土	越前	壺	暗	褐色	灰色	—		二次焼成
26-27	—	P 1948	フク土	越前	壺	緑	灰・暗褐色	灰色	—		二次焼成
26-28	—	P 1936	フク土	越前	壺	緑	灰・暗褐色	灰色	—		
26-29	—	P 1951	フク土	越前	壺	黄	緑・暗褐色	灰色	—		
26-30	—	P 1961	フク土	越前	壺	暗	褐色	灰色	—		二次焼成
26-31	—	P 2110	フク土	越前	壺	緑	灰・暗褐色	灰色	—		
26-32	—	P 2159	フク土	越前	壺	緑	灰・暗褐色	灰色	—		
26-33	—	P 1937	フク土	越前	壺	緑	灰・暗褐色	灰色	—		
26-34	—	P 2492	フク土	無釉陶器	鉢	黒	—	褐色	—		口縁内側に欄目。越前系
26-35	—	P 2493	フク土	無釉陶器	鉢	黒	—	褐色	—		越前系
26-36	—	P 2450	フク土	土器	杯	—	—	—	—		底書き有り

Ch. 29 ST-185 注記表

(a) 覆土層序

1	暗褐色土にブロック状の黄褐色砂質土が混入。若干の炭化物と灰色灰も含まれる。
2	暗褐色土に多量の黒色土と少量の灰色灰も含む。
3	黄褐色砂質土に多量の暗褐色土混入。
4	黄褐色砂質土に少量の暗褐色土混入。
5	暗褐色土と多量の褐色砂質土の復層に若干の炭化物を含む、しまりあり。
6	黄褐色砂質土(地山)。

(b) 柱穴計測表

Plt No	形状	長さ×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	23 × 21	50	
2	方	23 × 22	54	
3	円	43 × 41	16	
4	円	34 × 30	63	
5	方	26 × 26	46	
6	円	31 × 31	21	
7	方	23 × 21	24	
8	方	21 × 19	29	
9	方	23 × 20	19	
10	円	35 × 30	40	
11	方	35 × 30	55	
12	方	25 × 22	36	
13	方	35 × 29	55	
14	不	22 × 21	37	
15	方	27 × 22	36	
16	方	17 × 16	15	

(c) 出土陶磁器類注記表

PL. No	Fig. No	遺物No	出土層	器種	器形	釉色・色調	胎土	文様	特徴	備考
27-1	—	P 1991	フク土	青磁	鉢	暗	緑色	灰白色	—	二次焼成
27-2	—	P 1995	フク土	青磁	碗	緑	青色	灰白色	—	
27-3	—	P 2053	フク土	美濃灰釉	皿	黄	緑色	黄白色	—	
27-4	—	P 1997	フク土	美濃灰釉	皿	黄	緑色	黄褐色	—	
27-5	—	P 2054	フク土	美濃灰釉	皿	緑	—	灰白色	—	
27-6	—	P 1992	フク土	染付	皿	白	—	灰白色	?	
27-7	—	P 1993	フク土	無釉陶器	鉢	黒	—	褐色	—	口縁に波状欄目。越前系
27-8	—	P 1996	フク土	越前	壺	緑	褐色	灰色	—	
27-9	—	P 2052	フク土	瓦器	手取り	黄	褐色	黄白色	—	龜甲文
27-10	—	P 1994	フク土	無釉陶器	鉢	黒	—	黒色	—	
27-11	—	P 2185	フク土	陶器	—	—	—	—	—	

## Ch. 30 ST-186 注記表

## (a) 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土を小・中ブロック状に少量含む。炭化物若干有り。
2	暗褐色土に乳白色粘土を多量に含む。
3	黄褐色砂質土（地山）。

## (b) 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	円	31 × 25	57	
2	方	22 × 22	19	
3	方	25 × 25	38	
4	方	26 × 25	43	
5	方	27 × 24	50	
6	方	22 × 22	26	

## (c) 出土陶磁器注記表

PL.No	Fig.No	遺物No	出土層	器種	器形	軸面・色調	胎土	文様	特徴	備考
28-1	—	P 1983	フタ土	染付	碗	青白	白色	外：？ 内：潮粉		
28-2	—	P 1967	フタ上	染付	碗	白	白色	？	二次焼成	
28-3	—	P 1974	フタ土	染付	皿	白	白色	？		
28-4	—	P 1982	フタ上	染付	皿	青白	白色	？		
28-5	—	P 1984	フタ上	青磁	碗	暗緑	灰色	—		
28-6	—	P 1985	フタ上	青磁	皿	青緑	灰白色	—		
28-7	—	P 1973	フタ土	青磁	碗	青緑	灰白色	—		
28-8	—	P 1972	フタ土	青磁	碗	青緑・暗緑	灰白色	？		
28-9	—	P 1980	フタ土	青磁	皿	青緑	灰白色	—		
28-10	—	P 1971	フタ土	加納焼	漆鉢	鈍黄緑～褐色	鈍黄褐色	—	11条の樋目	越前系

## Ch. 31 ST-188・180 SX-138・139 SD-58・59注記表

## (a) 覆土層序

1	暗褐色土。
2	“に少量の黄褐色砂質土を全体的に含む。
3	2に白灰色灰泥入。
4	暗褐色土と多量の黄褐色砂質土との混層に若干の炭化物混入。
5	暗褐色土に若干の黄褐色砂質土混入。
6	黄褐色砂質土に少量の暗褐色土が混入。
7	黒色土。
8	暗褐色土に黄白色砂質土を全体的に少量含む。
9	明暗褐色土。
10	“に褐色砂質土と黄褐色砂質土を含む。
11	黄褐色砂質土（地山）。

## (b) 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	34 × 30	50	
2	方	50 × 45	73	
3	方	36 × 27	8	
4	方	28 × 23	7	
5	方	27 × 26	47	
6	方	38 × 35	58	
7	方	36 × 28	66	

## Ch. 32 ST-190注記表

## (a) 覆土層序

1	暗褐色土と黄褐色砂質土。黄白色砂質土の混層に若干の炭化物、黒色灰と微量の黒色土が混入。
2	明暗褐色土と多量の黄褐色砂質土の混層。
3	暗褐色土、黒色土と少量の黄褐色砂質土の混層。
4	暗褐色砂質土。
5	黄褐色砂質土（地山）。

## (b) 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	不	23 × 22	50	
2	不	42 × 28	34	
3	方	38 × 28	40	
4	方	26 × 23	44	

## (c) 出土陶磁器注記表

PL.No	Fig.No	遺物No	出土層	器種	器形	軸面・色調	胎土	文様	特徴	備考
30-1	—	P 2161	フタ上	加納焼	漆鉢	赤褐色	褐色	—	9条の樋目	

## Ch. 33 ST-193 注記表

## (a) 覆土層序

1	暗褐色土に少量の黄褐色砂質土と若干の炭化物を全体的に含む、ややしまりあり。
2	暗褐色土と黄褐色砂質土と黒色土の混層、1よりしまりなし。
3	暗褐色土に少量の黄褐色砂質土と黒色土を含む、しまりなし。
4	暗褐色土と黄褐色砂質土と黒色土の混層に褐色粘土を少量含む、しまりなし。
5	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層に黒色土を少量含む、しまりなし。
6	黄褐色砂質土(絶山)。

## (b) 柱穴計測表

PItNo	形状	底径×底径(cm)	深さ(m)	備考
1	木	46 × 44	19	
2	方	27 × 25	36	
3	方	27 × 23	11	
4	方	30 × 26	35	

## Ch. 34 SE60 注記表

## (a) 覆土層序

1	暗褐色土に若干の炭化物が含まれる。
2	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。
3	黄褐色砂質土、粒子が細かい、硬と黄褐色砂質塊を多量に含む、しまりあり。

## (b) 出土陶磁器類注記表

PL.No	Fig.No	遺物No	出土層	器種	器形	胎土・色割	胎土	文様	特徴	備考
31-1	—	P266	フク土	染付	碗	青白	灰白色	内; 藍線		
31-2	—	P266	フク土	染付	碗	青白	灰白色	大を二つ結合した文		
31-3	—	P317	フク土	染付	皿	青白	灰白色	?		
31-4	—	P326	フク土	染付	碗	青白	灰白色	外; 色面文		
31-5	54-7	P305	フク土	白磁	皿	灰白	灰白色	—		
31-6	—	P307	フク土	白磁	皿	青白	灰白色	—		
31-7	55-2	P320	フク土	染付	皿	青白	灰白色	草花文		
31-8	—	P156	フク土	青磁	碗	緑青	灰白色	—		
31-9	—	P265	フク土	青磁	皿	青灰	灰白色	?		
31-10	—	P267	フク土	青磁	碗	黄緑・暗緑	灰白色	—		
31-11	56-19	P229	フク土	不明陶器	皿	青灰・暗灰色	茶灰色	—		
31-12	—	P221	フク土	美濃灰釉	皿	黄白	黄白色	—		
31-13	—	P205	フク土	唐津	皿	青灰	橙色	—		
31-14	—	P224	フク土	天目	碗	黒	黄白色	—		
31-15	—	P306	フク土	瓦器	手焙り	黒	灰白色	—	研磨	
31-16	—	P245	フク土	茶碗物	—	—	—	—		

## Ch. 35 SE61 注記表

## (a) 覆土層序

1	暗灰色土、全般に炭化物と黄褐色砂質土を若干含む、しまりなし、下層に空洞あり。
2	黄白色砂質土に部分的に黄褐色砂質土を含む、しまりあり。
3	黄褐色砂質土と暗褐色土と黄白色砂質土の混層。
4	暗褐色土、部分的に炭化物と黄褐色砂質土を含む、しまりなし。

5	黒色土と暗褐色土の混層、しまりなし、粘性多分に強く部分的に硬で炭化物を含む。
6	黄褐色砂質土と暗褐色土の混層。
7	暗褐色土と黒色土の混層。
8	黄白色砂質土。
9	黒色土。
10	黄褐色砂質土。
11	灰白色砂質土。

## (b) 出土木製品注記表

PL.No	Fig.No	遺物No	出土層	製品名	形状	色	調	木地	文様	特徴	備考
32-d	—	M12	フク土	板状木製品	—	—	—	—	—	—	
32-e	—	M9	フク土	木製柄	—	—	—	—	—	—	

(c) 出土陶磁器注記表

P.L.No	Fig.No	遺物No	出土層	器種	器形	胎土・色調	施土	文様	特徴	備考
33-1	55-14	P 581	フク土	染付	皿	緑灰色	灰色			
33-2	53-4	P 586	フク土	青磁	碗	緑黄色	灰白色	蓮弁文	墨付書	
33-3	53-4	P 585	フク土	青磁	碗	緑黄色	灰白色	—	—	
33-4	53-7	P 589	フク土	青磁	碗	緑～褐色	灰色	雷文	墨付書	
33-5	—	P 636	フク土	青磁	碗	黄灰色	黄灰色	蓮弁文	—	
33-6	53-18	P 540	フク土	青磁	皿	暗緑～青緑色	灰白色	—	—	
33-7	—	P 640	フク土	染付	皿	黄白色	灰白色	内：團縁	—	
33-8	—	P 633	フク土	染付	皿	青白色	灰白色	?	—	
33-9	55-7	P 637	フク土	染付	皿	青白色	灰白色	内：渦線	—	
33-10	—	P 644	フク土	染付	—	青白色	灰白色	—	—	
33-11	—	P 539	フク土	白磁	皿	灰白色	灰白色	—	—	
33-12	55-3	P 590	フク土	染付	皿	青白・緑青色	灰白色	草花文	—	
33-13	58-10	P 584	フク土	加飾陶器	椀鉢	黒色	灰色	—	10条の横目	
33-14	—	P 541	フク土	磁・陶器	壺	暗褐色	灰色	—	—	

Ch. 36 SE65注記表

## (a) 覆土層序

1	暗褐色土 (ビット覆土)。
2	暗褐色土に若干の炭化物を含む。
3	暗褐色土に少量の礫と微量の黄褐色砂質土、炭化物を含む、雨壁の裏側下方に小石が散在して埋まっている。
4	暗褐色土に少量の黒色土、灰を含む、多量の炭化物あり。
5	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層、礫を多量に含む。
6	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。5より砂質土が少ない。
7	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。
8	黄褐色砂質土。
9	黄褐色砂質土の塊。
10	上層白色灰、下層青白色灰。
11	黒色土、粘性しまりあり。
12	3と同じ。

13	明褐色土、しまりなし。
14	暗褐色土にごく少量の黄褐色砂質土を含む、粘性あり、石を含む。
15	5より黄褐色砂質土が多い混層、礫を多量に含む。
16	暗褐色土と小ブロック状の黄褐色砂質土との混層、礫を多量に含む。
17	黄褐色砂質土に小ブロックの黒色土と礫状の暗褐色土を含む。
18	暗褐色土に少量の黄褐色砂質土と黒色土を含む。
19	黄褐色砂質土に礫を若干含む。
20	黄褐色砂質土 (地山)。
21	乳白色砂質土に黄褐色砂質土を若干含む (地山)。
22	灰白色砂質土 (地山)。

Ch. 37 SE66注記表

## (a) 覆土層序

1	暗褐色土。
2	暗褐色土に細かい礫を全体的に少量含む、粘性がなく、しまりが強い。
3	暗褐色土に炭化物を若干含む。
4	暗褐色土に黄褐色砂質土を全体的に少量含む、炭化物も若干含む。
5	黒色土に若干の炭化物を含む。
6	黄褐色砂質土と暗褐色土の混層、暗褐色土が少量。
7	4よりも暗褐色土が暗く、中ブロック状の黄褐色砂質土を少量含む。
8	6より砂質土が赤褐色土になっている部分がやや多い。
9	暗褐色土に中ブロック状の黄褐色砂質土を少量全体的に含む。
10	黄乳白色粘質土中央部に若干、黒砂質土が混入している。

Ch. 38 SE67注記表

## (a) 覆土層序

1	暗褐色土に粒状の黄褐色砂質土を全体的に含む、炭化物も若干含む。
2	暗褐色土に小石を多量に含む黄褐色砂質土が、小ブロック状に若干含む、しまり強。
3	暗褐色土に粒状の黄褐色砂質土と炭化物を全体的に含む、1より暗く、しまりなし。
4	暗褐色土に小、中ブロック状の黄褐色砂質土の混層に多量の小石を含む、しまり強。
5	黄白色粘土。
6	青白色砂質土 (地山)。



(b) 出土陶器器注記表

PL.No	Fig.No	遺物No	出土層	器種	器形	釉調・色調	胎土	文様	特徴	備考
34-(b)	—	P 1603	フク土	無袖陶器	鉢	黒色	茶灰色	—	9条の帯目	
34-1	—	P 1380	フク土	染付	碗	青白色	黄白色	雑花文		
34-2	—	P 1498	フク土	染付	皿	青白色	灰白色	?		
34-3	—	P 1627	フク土	染付	皿	青白色	灰白色	内：渦線		
34-4	—	P 1578	フク土	青磁	碗	緑青色	灰白色	蓮弁文		
34-5	—	P 1537	フク土	青磁	皿	緑青色	灰色	流水文		蓮付否
34-6	—	P 1512	フク土	青磁	碗	暗緑色	灰白色	蓮弁文		
34-7	—	P 1503	フク土	青磁	碗	青灰色	灰白色	—		
34-8	—	P 1611	フク土	青磁	皿	暗緑色	灰色	外：蓮弁文 内：菊花文?		
34-9	—	P 2532	フク土	染付	—	青白色	灰白色	—		
34-10	—	P 1379	フク土	青磁	碗	暗緑色	灰白色	—		
34-11	57-2	P 1381	フク土	天目	鉢	褐～黒色	灰色	—		
34-12	57-3	P 1610	フク土	天目	鉢	褐～黒色	灰～褐色	—		
34-13	—	P 1382	フク土	高麗灰胎	皿	黄緑～茶灰色	黄白色	—		
34-14	56-17	P 1489	フク土	朝鮮	皿	緑灰色	暗灰色	—		手刷

Ch. 30 SE68注記表

(a) 覆土層序

1	明褐色土に若干の黄褐色砂質土と若干の黄白色粘土混入。
2	黄褐色砂質土が1より少量混入。
3	“
4	暗褐色土に少量の灰がブロック状に含まれている。
5	1より多量の黄色粘土が含まれている。
6	5より粘土が多く黄白色砂質土が若干含まれている。
7	黄白色砂質土。
8	暗褐色土に砂質土と粘土の混層。
9	黄褐色砂質土に若干の暗褐色土が少ブロック状に混入。
10	暗褐色土と黄褐色砂質土と粘土の混層。
11	7よりきめが細かい。
12	8と同じ、しまりあり。
13	暗褐色土に若干の褐色砂質土が混入。
14	褐色砂質土に若干の暗褐色土が混入。
15	暗褐色土と砂質土の混層。
16	13よりきめが粗い。
17	明灰色の灰と暗灰色粘土の混層。
18	黄褐色砂質土に少量の暗褐色土混入。
19	18より暗褐色土が多量に含まれている。
20	暗褐色土に若干の黄褐色砂質土と少量の炭化物混入。
21	乳白色砂質土きめが粗い。
22	21より割合はなく若干の黒色土混入。
23	褐色砂質土に若干の黒色土混入。
24	暗褐色土と褐色砂質土の混層に若干の黒色土が含まれている。
25	褐色砂質土、きめが粗い。
26	“、黄褐色砂質土、乳白色砂質土、黒色土の混層。

27	乳白色砂質土。
28	暗褐色土に少量の黒色土と灰色粘土混入。
29	暗褐色土に少量の黒色土と若干の黄褐色砂質土、炭化物混入。
30	5よりも少量の暗褐色土混入。
31	19より白色砂質土が多量に混入。
32	暗褐色砂質土。
33	“に褐色砂質土がブロック状に混入。
34	褐色砂質土に暗褐色土と乳白色砂質土がブロック状に混入されている。
35	暗褐色土に少量の褐色砂質土と乳白色砂質土の混層、きめが粗い。
36	黒色土。
37	20より黄褐色砂質土が多い。
38	白色パキス。
39	灰と灰色粘土。
40	乳白色灰と明灰色灰の混層。
41	25と27の混層。
42	濃い褐色砂質土。
43	暗黄色砂質土に少量の暗褐色土と褐色砂質土が混層に含まれている。
44	24層より暗褐色土が多量に含まれている。
45	黄色砂質土。
46	暗黄色砂質土。
47	暗褐色土、若干の黄褐色砂質土、褐色砂質土の混層。
48	“に若干の黒色土と少量の黄色砂質土を含む。
49	“と黄褐色砂質土の混層。
50	黄色パキス。
51	白色砂質土。

(b) 出土陶器類注記表

Pl. No	Fig. No	遺物No	出土層	器種	器形	輪週・色割	胎土	文様	特徴	備考
35-1	54-3	P 1580	フタ土	白磁	皿	灰白色	灰白色	—		
35-2	54-2	P 1520	フタ土	白磁	皿	灰白色	灰白色	—		
35-3	54-4	P 1526	フタ土	白磁	皿	灰白色	灰白色	—		
35-4	—	P 1789	フタ土	白磁	皿	青白色	灰白色	—		
35-5	—	P 1816	フタ土	白磁	皿	青白色	白色	—		
35-6	53-3	P 1575	フタ土	青磁	鉢	緑青色	灰白色	—	瀬 弁 文	
35-7	—	P 1573	フタ土	青磁	碗	緑青色	灰白色	—	?	
35-8	—	P 1519	フタ土	青磁	碗	緑青色	灰色	—		
35-9	—	P 1819	フタ土	青磁	碗	青緑色	灰色	—		
35-10	—	P 1820	フタ土	炎付	—	青白色	白色	—	?	
35-11	54-15	P 1818	フタ土	赤松	皿	灰白色	灰白色	—	?	
35-12	—	P1543A	フタ土	美濃灰釉	皿	緑色	灰白~灰色	—		
35-13	—	P 1542	フタ土	美濃灰釉	皿	緑色	灰色	—	墨付蓋	
35-14	56-4	P 1577	フタ土	美濃灰釉	皿	緑色	灰色	—		
35-15	—	P 1800	フタ土	美濃灰釉	皿	緑色	黄白色	—		
35-16	—	P 1523	フタ土	美濃灰釉	皿	緑色	黄白色	—		
35-17	—	P 1525	フタ土	美濃灰釉	皿	緑色	灰色	—		
35-18	56-3	P 1518	フタ土	美濃灰釉	皿	暗黄緑色	灰白~灰色	—	内面立ち上がり にヒダ状の彫り	
35-19	—	P 1579	フタ土	天目	碗	黒色	灰白色	—		
35-20	—	P 1572	フタ土	美濃樹釉	皿	赤褐~暗褐色	黄白色	—		
35-21	—	P 1817	フタ土	美濃樹釉	皿	褐色	灰色	—		
35-22	57-10	P 1527	フタ土	美濃樹釉	皿	灰褐~暗褐色	灰色	—	高台内にトチ痕	
35-23	—	P 1576	フタ土	美濃樹釉	皿	緑色	灰色	—		
35-24	—	P 1788	フタ土	唐津	碗	緑灰色	灰~褐色	—		
35-25	—	P 1802	フタ土	唐津	皿	暗緑色	茶灰色	—		
35-26	—	P 1786	フタ土	唐津	皿	暗黄緑色	褐色	—		
35-27	—	P 1521	フタ土	唐津	皿	暗緑色	灰色	—		
35-28	—	P 1522	フタ土	唐津	皿	緑灰色	灰~褐色	—		
35-29	—	P1543B	フタ土	不明物	皿	黄緑~灰白色	灰色	—		
35-30	56-13	P 1801	フタ土	唐津	皿	暗緑色	褐色	—		
35-31	—	P 1574	フタ土	無銘物	椀鉢	暗灰~黒色	暗灰色	—		
35-32	—	P 1524	フタ土	新解物	—	—	—	—		
35-33	—	P 1787	フタ土	増減	—	—	—	—		
35-34	—	P 1528	フタ土	増減	—	—	—	—		
35-35	—	P 996	フタ土	陶動陶器	碗	暗赤褐色	灰色	—		
35-36	58-1	P 2433	フタ土	越前	盤	鈍赤褐色	灰色	—		
35-37	—	P 1529	フタ土	土師器	杯	—	—	—		

Ch. 40 SX-81 注記表

出土土師器注記表

Pl. No	Fig. No	遺物No	出土層	器種	器形	輪週・色割	胎土	文様	特徴	備考
36-1	62-1	P 638	フタ土	土師器	皿	—	—	—	糸切り底。	
36-2	62-2	P 542	フタ土	土師器	杯	—	—	—	糸切り底。内 風。	

Ch. 41 SX-89 注記表

(a) 覆土層序

1	暗褐色土と中ブロック状の黄褐色砂質土の混 層、しまりあり、塑性あり。
2	暗褐色土に若干の炭化物が含まれる、しまり なし。
3	暗褐色土に黄褐色砂質土を少量含む混層、塑 性あり。
4	明褐色土。
5	黄褐色砂質土（池山）。

(b) 柱穴計測表

Pit No	形状	長さ×幅値(cm)	深さ(cm)	備考
1	円	15 × 15	9	
2	楕	24 × 16	16	
3	楕	18 × 10	23	
4	楕	17 × 12	8	
5	方	15 × 14	14	
6	円	10 × 10	4	

## Ch. 42 SX-90 注記表

## 覆土層序

1	暗褐色土に炭化物と小ブロック状の黄褐色砂質土を若干含む。しまりあり。
2	暗褐色土に小ブロック状の黄褐色砂質土と小石を多量に含む。
3	暗褐色土。粘土質である。
4	褐色砂質土。しまりあり。
5	暗褐色土。
6	暗褐色土に小ブロック状の黄褐色砂質土を少量含む。
7	黄褐色砂質土(柱穴覆土)しまりなし。
8	黄褐色砂質土(地山)。

## Ch. 43 SX-93 注記表

## (a) 覆土層序

13	SB-21柱穴覆土。暗褐色土と黄褐色砂質土の混層で上層に白色粘土が存在する。
14	灰灰に炭化物と焼土を若干含む。
15	暗褐色土に少量の灰灰を含む。
16	白灰に多量の灰灰を含む。

17	暗褐色土に小ブロック状の黄褐色砂質土を若干と多量の小石を含む。しまりあり。
18	暗褐色土に小ブロック状の黄褐色砂質土と炭・炭化物を少量含む。しまりなし。
19	暗褐色土に中ブロック状の黄褐色砂質土と炭を多量に。炭化物を若干含む。
20	暗褐色土。しまりあり。
21	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層に中ブロック状の黄褐色砂質土を少量含む。
22	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。
23	黄褐色砂質土(地山)。

## (b) 柱穴計測表

Pit No	形状	長さ×短径(cm)	深さ(cm)	備考
16	方	38 × 35	45.5	
17	方	28 × 26	57.7	
18	方	22 × 20	5.0	
19	方	29 × 21	9.5	
20	円	41 × 38	56.0	
21	方	30 × 24	30.5	
22	方	32 × 27	30.7	
23	不整	35 × 33	54.5	

## (c) 出土陶磁器注記表

PL. No	Fig. No	遺物No	出土層	器種	器形	釉割・色調	胎土	文様	特徴	備考
37-1	—	P 342	フク土	青磁	皿	緑青色	灰色	波水文		
37-2	—	P 329	フク土	青磁	皿	緑青色	灰色	割棹文?		
37-3	—	P 328	フク土	染付	皿	青白色	灰白色	外: ? 内: 割棹		
37-4	55-6	P 188	フク土	染付	皿	青白~白色	黄白色	外: 牡丹唐草文 内: 割棹文		
37-5	—	P 343	フク土	不明陶器	皿	緑・灰色	灰色	—		
37-6	—	P 189	フク土	志野	皿	白	黄白色	—		
37-7	—	P 327	フク土	唐津	碗	暗緑色	灰色	—		
37-8	56-14	P 222	フク土	唐津	碗	暗緑色	灰色	—		
37-9	—	P 338	フク土	越前	盤	茶褐・暗緑色	灰色	—		
37-10	—	P 173	フク土	細輪内器	描鉢	黄白・明褐色	黒色	—		

## Ch. 44 SX-94 注記表

## (a) 覆土層序

1	暗褐色土に粒子状の黄褐色砂質土と若干の炭化物を含む。しまり強。
2	灰白色灰。
3	暗褐色土とブロック状の黄褐色砂質土の混層。しまり強。
4	暗褐色土にブロック状の黄褐色砂質土と灰を含む。
5	暗褐色土にブロック状の黄褐色砂質土が含まれる。しまり強。
6	黄褐色砂質土(地山)。

## (b) 柱穴計測表

Pit No	形状	長さ×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	26 × 24	36	
2	方	42 × 27	43	
3	方	38 × 38	58	
4	方	35 × 28	66	
5	方	29 × 25	54	
6	方	27 × 21	48	
7	円	32 × 27	50	
8	方	26 × 27	24	
9	円	34 × 34	32	
10	方	41 × 30	54	
11	円	34 × 32	16	
12	円	35 × 32	70	
13	方	53 × 35	—	
14	方	32 × 18	64	
15	方	32 × 30	66	

## Ch. 45 SX-95 注記表

## (a) 覆土層序

1	暗褐色土、しまり強。
1	暗褐色土 粘性あり。
2	粘上。
3	暗褐色土に炭化物、白色バミス、灰を含む。
4	白色バミス。
5	奇灰色灰。
6	暗褐色土に少量の黄褐色砂質土と炭化物を含む。

7	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層、しまりなし。
8	粘上。
9	暗褐色土に黄褐色砂質土を6より多く、7より少なく含む、炭化物混入。
10	暗褐色土、しまりなし。
11	黄褐色砂質土、しまりなし。
12	黄褐色砂質土(地山)。

## (b) 出土重要注記表

Pl. No	Fig. No	遺物No	出土層	製造名	形状	色	調	木地	文様	特徴	備考
38-1	-	M 8	フク上	漆器	筒	・内面 ・外面	朱 黒	-	-	底に叶の文字あり。	

## Ch. 46 SX-96 注記表

## 出土陶磁器類注記表

Pl. No	Fig. No	遺物No	出土層	器種	器形	胎質・色調	釉上	文様	特徴	備考
39-1	-	P 337	フク土	染付	皿	青 白 色	青白色	?		
39-2	-	P 2139	フク土	白磁	皿	灰 白 色	灰白色	-		
39-3	-	P 310	フク土	白磁	皿	青 白 色	灰白色	-		
39-4	53-12	P 309	フク上	青磁	鉢	青 緑 色	灰白色	外: 系線 内: 円形文		
39-5	-	P 312	フク土	青磁	碗	暗 緑 色	灰白色	-		
39-6	-	P 345	フク上	青磁	大皿	暗 緑 色	灰白色	-		
39-7	-	P 2107	フク土	奇磁	碗	緑 青 色	灰白色	-		
39-8	-	P 325	フク土	青磁	碗	緑 青 色	灰白色	-		
39-9	-	P 323	フク土	青磁	碗	緑 青 色	灰 色	-		
39-10	-	P 2140	フク土	青磁	皿	青 灰 色	灰 色	-		
39-11	-	P 336	フク上	奇磁	碗	緑 青 色	灰白色	-		
39-12	-	P 333	フク上	青磁	碗	緑 青 色	灰白色	-		
39-13	-	P 318	フク土	青磁	碗	緑 青 色	灰白色	-		
39-14	-	P 2163	フク土	浴解物	-	-	-	-		
39-15	-	P 2138	フク土	浴解物	-	-	-	-		

## Ch. 47 SX-97 注記表

## 出土遺物注記表

Pl. No	Fig. No	遺物No	出土層	器種	器形	胎質・色調	釉上	文様	特徴	備考
39-16	-	P 644	フク上	染付	皿	青 白 色	灰白色	-		
39-17	54-9	P 641	フク上	鈷彩磁器	皿	青灰~黄白色	灰 色	-		
39-18	62-4	P 861	フク土	須恵器	壺	-	-	-	混着き(谷)	
39-19	-	P 643	フク土	浴解物	-	-	-	-		

## Ch. 48 SX-98 注記表

## 覆土層序

1	暗褐色土と白灰の混層、粘性強く、しまり強。
2	暗褐色土に少量の白灰を含む。
3	暗褐色土。
4	黒灰、しまりなし。
5	暗褐色土と黒灰と白灰の混層、しまりなし。
6	暗褐色土に少量の黒灰、白灰と若干の炭化物を含む、しまりなし。
7	黄褐色砂質土(地山)。

## Ch. 49 SX-99 注記表

## 覆土層序

1	暗褐色土と白灰の混層。
2	暗褐色土に少量の白灰を余体的に含む。
3	白灰。
4	黒灰。
5	暗褐色土に黄褐色砂質土を少量含む。
6	暗褐色土と黒灰、白灰の混層に中ブロック状の黄褐色砂質土を若干含む。
7	暗褐色土に中ブロック状の黄褐色砂質土を若干含む、しまりなし。
8	黄褐色砂質土(地山)。

## Ch. 50 SX-100 注記表

## (a) 覆土層序

1	暗褐色土。
2	灰を多く含む灰白色土。
3	明褐色土にブロック状の黄褐色砂質土を多量に含む。
4	暗褐色土にブロック状の黄褐色砂質土を含む。
5	黄褐色砂質土(地山)。

## Ch. 51 SX-102 注記表

## 覆土層序

1	暗褐色土と白灰の混層、炭化物も下有り。
2	暗褐色土。
3	黄褐色砂質土(地山)。

## Ch. 52 SX-104 注記表

## 覆土層序

1	黄白色粘土と明暗褐色土の混層に鉄分を多量に、炭化物を若干含む、しまり油。
2	暗褐色土に鉄質の灰白色粘土を含む、しまりあり。
3	暗褐色土に多量の黒色土と少量の粘土を含む、しまり油。
4	暗褐色土に少量の黄褐色砂質土を全体的に、地色の粘土を少量、下方に黒色の灰を少量含む、しまりあり。
5	暗褐色土に黄褐色砂質土を全体的に少量含む、しまりあり。
6	暗褐色土に黄褐色砂質土を全体的に少量含む、しまりなし。

## Ch. 53 SX-107 注記表

## 出土瓦注記表

PL. No	Fig. No	遺物No	出土層	器種	器形	釉調・色調	胎土	文様	特徴	備考
40-1	62-3	P 2453	フク土	土師器	耳	---	---	---		

## Ch. 54 SX-109 注記表

## 出土赤絵注記表

PL. No	Fig. No	遺物No	出土層	器種	器形	釉調・色調	胎土	文様	特徴	備考
40-2	54-14	P 2206	フク土	赤絵	皿	灰白色	灰白色	草花文		

## Ch. 55 SX-111 注記表

## (a) 出土陶器注記表

PL. No	Fig. No	遺物No	出土層	器種	器形	釉調・色調	胎土	文様	特徴	備考
41-1	---	P 976	フク土	陶器	碗	灰色	灰色		鉄粒あり	
41-2	---	P 873	フク土	陶器	碗	灰色	灰色		鉄粒あり	
41-3	---	P 874	フク土	漆器	皿	黄褐色	褐色			
41-4	---	P 977	フク土	陶器	皿	黄褐色	灰白色			

## (b) 出土家札注記表

PL. No	Fig. No	遺物No	出土層	製品名	形状	色調	素材	特徴	備考
41-d	---	M 10	フク土	家札	---	---	革	麻織の地に金塗布	

## (b) 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	円	28 × 23	25	
2	円	20 × 17	9	
3	円	21 × 21	19	
4	方	25 × 22	33	
5	方	22 × 19	8	
6	円	22 × 17	26	

7	暗褐色土に黄褐色砂質土を若干、炭化物を微量、黒色土を少量含む、ややしまりあり。
8	黒色土に多量の黄褐色砂質土を含む、しまりあり。
9	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層に黒色土を若干含む、しまりあり。
10	暗褐色土に黄褐色砂質土と黒色土を多量に含む、ややしまりあり。
11	7と同じ、しまりが強い。
12	明暗褐色土に黒色土を多量に含む、ややしまりあり。
13	暗褐色土に黄褐色砂質土を若干、炭化物を微量、黒色土を多量に含む、ややしまりあり。
14	黄褐色砂質土に暗褐色土を多量、黒色土を若干含む、しまりなし。
15	黄褐色砂質土に暗褐色土を少量、黒色土を若干全体的に含む、ややしまりあり。
16	暗褐色土に黄褐色砂質土を全体的に多量に含む、しまりなし。
17	黄褐色砂質土(地山)。

## Ch. 56 SX-114 注記表

## (a) 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土をブロック状に含む。
2	" と黒色土の混層、しまりなし。
3	暗褐色土に黄褐色砂質土と炭化物を若干含む、しまりあり。
4	" " と黒色土を多量に含む、しまりなし。
5	" " " を含む、しまりあり。
6	" " の混層。
7	" " と黒色土の混層。
8	黄褐色砂質土(地山)。

## (b) 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	24 × 20	20	
2	円	25 × 22	44	
3	方	22 × 21	34	
4	方	19 × 16	23	
5	方	24 × 20	—	
6	方	26 × 24	41	
7	方	28 × 26	12	
8	方	47 × 41	23	
9	方	23 × 23	22	

## Ch. 57 SX-119・131 注記表

## (a) 覆土層序

1	暗褐色土に少量の黄褐色砂質土と多量の灰色灰と少量の炭化物を含む。
2	暗褐色土に多量の黄褐色砂質土がブロック状に混入。
3	" と黄褐色土の混層。
4	" に若干の乳白色粘土混入。
5	" と黒灰色灰の混層。
6	" と若干の黒色土、黄褐色砂質土の混層。
7	" に少量の炭化物と若干の灰、黄褐色砂質土、黄白色粘土が混入。
8	暗褐色土と黄白色砂質土の混層、上部に若干の炭化物混入。
9	黄褐色砂質土(地山)。
10	黄白色砂質土(地山)。

## (b) 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	20 × 20	11	
2	方	25 × 20	86	
3	方	25 × 24	38	
4	方	52 × 47	25	

## Ch. 58 SX-120 注記表

## (a) 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土と炭化物が若干含まれる、しまりあり。
2	1よりも黄褐色砂質土が多く含まれる。
3	暗褐色土に少量の炭化物と多量の黄褐色砂質土がブロック状に含まれる、しまりなし。
4	暗褐色土に黄褐色砂質土がブロック状に含まれる、しまりあり。
5	暗褐色土と灰色灰の混層。
6	黄白色砂質土。
7	灰層。
8	黄褐色砂質土(地山)。

## (b) 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	28 × 24	61	
2	方	25 × 20	3	
3	方	36 × 27	13	
4	方	24 × 24	23	
5	方	27 × 24	49	
6	方	36 × 32	32	
7	方	35 × 18	4	
8	方	49 × 36	51	
9	方	34 × 32	52	
10	方	30 × 25	42	
11	方	26 × 21	14	
12	方	12 × 12	7	
13	方	31 × 27	61	
14	方	34 × 32	61	

## (c) 出土陶器注記表

PL. No	Fig. No	遺物No	出土層	器種	器形	胎土・色調	胎土	文様	特徴	備考
42-1	—	P 1358	フク土	染付	皿	白 色	灰白色	外：牡丹唐草文 内：蘭線		
42-2	—	P 1586	フク土	染付	皿	青 白 色	灰白色	外：唐草文 内：蘭線		
42-3	—	P 1584	フク土	染付	皿	青 白 色	白色	外：蘭線 内：蘭線		
42-4	—	P 1499	フク土	染付	碗	青 白 色	灰白色	内：蘭線		

42-5	—	P 1365	フク土	染付	皿	青	白	色	白	外：玉取跡 内：隠線	
42-6	—	P 1359	フク土	染付	皿	白	色	灰	白	？	
42-7	55-8	P 1604	フク土	染付	皿	青	白	色	黄	白	外：隠線 内：隠線
42-8	—	P 1581	フク土	青磁	碗	暗	緑	色	灰	白	瀬 井 文
42-9	—	P 1364	フク土	青磁	碗	緑	青	色	灰	白	？
42-10	—	P 1559	フク土	青磁	皿	暗	緑	色	灰	白	—
42-11	—	P 1371	フク土	青磁	皿	緑	青	色	灰	白	—
42-12	—	P 1367	フク土	青磁	鉢	暗	緑	色	灰	白	スタンプ文
42-13	—	P 1564	フク土	白磁	皿	白	色	白	色	—	
42-14	—	P 1593	フク土	白磁	皿	青	白	色	灰	白	—
42-15	—	P 1585	フク土	白磁	皿	青	白	色	白	色	—
42-16	—	P 1568	フク土	志野	皿	灰	白	色	黄	白	—
42-17	—	P 1360	フク土	美濃灰釉	皿	緑	灰	色	暗	灰	—
42-18	—	P 1733	フク土	青磁	—	青	灰	色	黄	白	—
42-19	—	P 1571	フク土	瀬戸灰釉	—	緑	灰	色	灰	白	—
42-20	—	P 1595	フク土	美濃灰釉	皿	暗	緑	色	灰	白	—
42-21	—	P 1559	フク土	美濃灰釉	皿	緑	灰	色	灰	白	—
42-22	—	P 1362	フク土	唐津	皿	緑	灰	色	灰	白	—
42-23	—	P 1361	フク土	唐津	皿	緑	～	灰	色	黄	白
42-24	—	P 1562	フク土	美濃灰釉	碗	茶	褐	色	黄	白	—
42-25	—	P 1567	フク土	天目	碗	暗	褐	色	灰	白	—
42-26	—	P 1734	フク土	天目	碗	暗	褐	～	黒	色	暗
42-27	—	P 1590	フク土	越前	盤	黄	褐	～	黒	色	灰
42-28	—	P 1370	フク土	越前	盤	緑	～	茶	褐	色	灰
42-29	—	P 1563	フク土	越前	盤	茶	褐	色	灰	色	—
42-30	—	P 1560	フク土	越前	盤	緑	～	茶	褐	色	灰
42-31	57-12	P 1570	フク土	瀬戸	碗	暗	緑	～	暗	褐	色
42-32	—	P 1566	フク土	加刺陶器	指	淡	褐	色	淡	黄	白

Ch. 59 SX-121 注記表

## (a) 覆土層序

1	明暗褐色土に少量の炭化物と褐色砂質土が、小ブロック状に混入、しまりあり。
2	暗褐色土。
3	明暗褐色土に乳褐色焼土と白色灰と微量の炭化物混入。
4	明暗褐色土に黄白色粘土と少量の炭化物と微量の白色灰が混入。
5	暗灰色土に黄白色焼土と炭化物と灰色灰の混入、微量の黄褐色砂質土を含む、しまりあり。
6	暗褐色土に茶褐色土が多量に含まれる。
7	暗褐色土に微量の炭化物と黄褐色砂質土が混入、しまりあり。
8	暗褐色土に白色灰を多量に含む。
9	灰色灰。
10	暗褐色土と黄白色砂質土の混入、しまりなし。
11	黄白色砂質土に少量の暗褐色土混入、しまりなし。
12	、しまりなし。
13	黄褐色砂質土に微量の暗褐色土混入、しまりなし。
14	明褐色砂質土、混雑あり(地山)。

## (b) 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	25 × 24	14	
2	方	42 × 35	18	
3	方	36 × 33	49	
4	方	28 × 27	18	

(c) 出土漆器注記表

PL.No.	Fig.No.	遺物No.	出土層	製品名	形状	色調	木地	文様	特徴	備考
43-b	-	M22	フタ土	漆器	碗	・内面 ・外面 朱黒	-	-	②、底に大上文字あり	
43-d	-	M23	フタ土	漆器	碗	・内面 ・外面 朱黒	-	鶴文		
43-e	-	M20	フタ土	漆器	碗	・内面 ・外面 朱黒	-	-	②文字あり	
43-f	-	M35	フタ土	漆器	碗	・内面 ・外面 朱黒	-	-	②か③の文字あり	

(d) 出土陶磁器注記表

PL.No.	Fig.No.	遺物No.	出土層	器種	器形	釉薬・色調	土色	文様	特徴	備考
44-1	-	P 1652	フタ土	染付	皿	青白	白色	外：牡丹唐文 内：團縁		
44-2	-	P 1773	フタ土	染付	碗	青緑	明黄褐色	外：牡丹唐文 内：團縁		
44-3	-	P 1777	フタ土	染付	皿	青白	白色	外：西縁 内：紋散文		
44-4	55-10	P 1790	フタ土	染付	皿	青白	白色	外：唐草文 内：團縁		
44-5	-	P 1493	フタ土	染付	碗	青緑	明黄褐色	内：團縁		
44-6	-	P 1623	フタ土	染付	碗	青緑	明黄褐色	外：團縁 内：西縁		
44-7	-	P 1653	フタ土	染付	皿	青白	白色	外：團縁		
44-8	55-11	P 1645	フタ土	染付	皿	青白	白色	外：牡丹唐文 内：西縁		
44-9	55-12	P 1494	フタ土	染付	皿	青白	白色	外：牡丹唐文 内：團縁		
44-10	-	P 1681	フタ土	染付	碗	青白	白色	-		
44-11	-	P 1606	フタ土	染付	碗	青白	白色	-		
44-12	-	P 1644	フタ土	青磁	碗	青灰	灰白色	-		
44-13	-	P 1659	フタ土	青磁	碗	青緑	灰白色	蓮弁文		
44-14	-	P 1774	フタ土	青磁	碗	青緑	灰白色	外：蓮弁文 内：團縁		
44-15	-	P 1625	フタ土	青磁	碗	青緑	灰白色	-		
44-16	-	P 1602	フタ土	白磁	碗	灰白	灰白色	-		
44-17	-	P 1597	フタ土	白磁	皿	白	白色	-		
44-18	-	P 1598	フタ土	白磁	皿	白	灰白色	-		
44-19	-	P 1637	フタ土	美濃灰胎	皿	緑灰	黄白色	-		
44-20	-	P 1785	フタ土	美濃灰胎	皿	緑灰	黄白色	-		
44-21	-	P 1643	フタ土	美濃灰胎	皿	緑灰	黄白色	-		
44-22	-	P 1782	フタ土	美濃灰胎	皿	緑灰	黄白色	-		
44-23	-	P 1658	フタ土	美濃灰胎	皿	緑灰	黄白色	-		
44-24	-	P 1656	フタ土	美濃灰胎	皿	緑灰	黄白色	-		
44-25	-	P 1673	フタ土	美濃灰胎	皿	緑灰	黄白色	-		
44-26	-	P 1676	フタ土	美濃灰胎	皿	緑灰	黄白色	-		
44-27	-	P 1693	フタ土	美濃灰胎	皿	緑灰	黄白色	-		
44-28	-	P 1655	フタ土	美濃灰胎	皿	緑灰	黄白色	-		
44-29	-	P 1670	フタ土	美濃灰胎	皿	緑灰	黄白色	-		
44-30	-	P 1700	フタ土	美濃灰胎	皿	緑灰	黄白色	-		
44-31	-	P 1675	フタ土	美濃灰胎	皿	緑灰	黄白色	-		
44-32	-	P 1778	フタ土	美濃灰胎	皿	緑灰	黄白色	-		
44-33	56-2	P 1780	フタ土	美濃灰胎	皿	緑灰	黄白色	-		
44-34	-	P 1648	フタ土	須口	一	黄緑	緑灰色	-		
44-35	58-12	P 1594	フタ土	瓦器	手埴り	緑	黄色	鶴文		
44-36	-	P 1775	フタ土	瓦器	手埴り	黒・黄緑	黄色	亀甲文		研磨
44-37	58-11	P 1601	フタ土	瓦器	手埴り	緑	灰色	印花文		器木状の帯文
44-38	-	P 1607	フタ土	瓦器	手埴り	黒	灰黄褐色	-		黒色研磨
44-39	-	P 1650	フタ土	美濃灰胎	皿	緑灰	黄灰色	-		



44-40	—	P 1779	フク土	人	口	碗	黒	色	灰色	—		
44-41	—	P 1619	フク土	越	前	鑿	緑	～	暗褐色	灰色	—	
44-42	—	P 1614	フク土	越	前	鑿	緑	～	茶褐色	灰色	—	
44-43	—	P 1649	フク土	越	前	鑿	暗	緑	～	黒色	灰色	—
44-44	—	P 1620	フク土	越	前	鑿	緑	～	暗褐色	灰色	—	
44-45	—	P 1624	フク土	越	前	鑿	緑	～	暗褐色	灰色	—	
44-46	—	P 1618	フク土	越	前	鑿	灰	～	暗褐色	暗灰色	—	二次焼成
44-47	—	P 1605	フク土	越	前	鑿	黄	緑	～	灰色	—	二次焼成
44-48	56-18	P 1596	フク土	不明	陶	鑿	緑	～	黄褐色	灰色	—	二次焼成
44-49	56-20	P 1654	フク土	埴	埴	—	—	—	—	—	—	

Ch. 60 SX-122 注記表

(a) 覆土層序

1	暗褐色土、しまりあり。
2	暗褐色土、しまりなし。
3	暗褐色土に小ブロック状の黄褐色砂質土と若干の炭化物を含む。
4	3に小ブロック状の乳黄色粘土と砂質土を含む。
5	暗褐色土に若干の炭化物と砂質土を含む。
6	黄褐色砂質土。
7	暗褐色土と乳黄色粘土の混層。
8	3に若干の乳黄色粘土を含む。
9	3に小ブロック状の乳黄色粘土と少量の炭化物を含む。
10	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層、若干の炭を含む。
11	白色と黒色の炭層。

12	暗褐色土に少量の白色パミスを含む。
13	黒色土、しまりあり。
14	焼土。
15	暗褐色土に黄褐色砂質土を粒子状に含む、炭化物が多い。
16	黄褐色砂質土に暗褐色土を含む。
17	暗褐色土と白色パミスの混層。
18	暗褐色土に少量の黄褐色砂質土と黒色土を含む。
19	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。
20	暗褐色土に少量の黄褐色砂質土と炭化物、礫を含む。
21	白色パミス。
22	暗褐色土に部分的に白色パミスが含まれている。

(b) 出土陶器類注記表

PL. No.	Fig. No.	遺物No.	出土層	器種	器形	輪軸・色澤	粘土	文様	特徴	備考
45-1	—	P 1935	フク土	青磁	碗	黄緑色	灰白色	—	—	
45-2	—	P 1830	フク土	青磁	碗	緑色	褐色	—	—	
45-3	—	P 1892	フク土	青磁	碗	緑灰色	灰白色	—	—	
45-4	—	P 1848	フク土	青磁	碗	暗緑色	灰白色	—	—	
45-5	—	P 1845	フク土	青磁	碗	暗緑色	灰白色	—	—	
45-6	—	P 1821	フク土	美濃天竺	皿	黄灰～緑色	黄白色	—	—	
45-7	—	P 1812	フク土	白磁	皿	青白	白色	—	—	
45-8	—	P 1847	フク土	瓦器	手摺り	黒・褐色	灰色	—	—	
45-9	—	P 1846	フク土	須恵器	釜	—	—	—	—	
45-10	—	P 1860	フク土	無釉陶器	撞鉢	暗灰色	灰色	—	—	
45-11	—	P 1917	フク土	滑石物	—	—	—	—	—	

Ch. 61 SX-123 注記表

(a) 覆土層序

1	明暗褐色土。
2	明暗褐色土と黄褐色砂質土の混層に小ブロック状に黄褐色粘土混入。
3	暗褐色土と少量の黄褐色砂質土の混層に少量の炭化物、黄褐色粘土混入。
4	3より黄褐色砂質土が多い、しまりなし。
5	多量の褐色砂質土と少量の暗褐色土の混層。
6	暗褐色土と少量の灰色灰と黄褐色砂質土の混層に少量の白色パミスが混入。
7	暗褐色土と少量の黄褐色砂質土の混層に多量の黒炭を含む。
8	暗褐色土の中に多量の白色パミス含む。
9	暗褐色土に多量の乳白色砂質土と若干の白色パミス混入。
10	黒褐色土に少量の黄褐色砂質土、炭化物、黒色灰の混層。

11	暗褐色土と褐色砂質土の混層に若干の炭化物を含む。
12	多量の暗褐色粘土に暗褐色土と若干の黄褐色砂質土の混入。
13	黄白色砂質土。
14	12に若干の炭化物含む。
15	黄褐色砂質土(埴山)。

(b) 出土陶器注記表

Pl. No	Fig. No	遺物No	出土層	器種	器形	軸面・色調	胎土	文様	特徴	備考
45-12	—	P 2078	フク上	白磁	盥	灰・灰白色	灰白色	—		
45-13	—	P 2071	フク土	染付	皿	青白	灰白色	外：牡丹文 内：圓線		
45-14	—	P 2088	フク土	染付	盥	青白	灰白色	内：？		
45-15	—	P 2073	フク土	青磁	—	暗緑色	灰白色	—		
45-16	—	P 2072	フク上	青磁	碗	緑色	灰白色	外：割線文		
45-17	—	P 2074	フク上	細肉磁	描鉢	橙～灰色	黄～灰色	—		

Ch. 62 SX-124 注記表

出土陶器注記表

Pl. No	Fig. No	遺物No	出土層	器種	器形	軸面・色調	胎土	文様	特徴	備考
45-18	—	P 1545	フク土	染付	盥	青白	灰白色	？		
45-19	—	P 1531	フク土	美濃焼	盥	淡黄色	灰白色	—		
45-20	—	P 1540	フク土	美濃焼	盥	緑～緑灰色	灰色	—		
45 21	56-10	P 1538	フク土	美濃焼	盥	黒色	灰色	—		
45 22	—	P 1530	フク上	不詳器	—	緑・黒色	灰色	—		
45-23	56-12	P 1541	フク上	唐洋	盥	暗緑色	橙～灰色	—	足元にトナリ	

Ch. 63 SX-125 注記表

出土陶器注記表

Pl. No	Fig. No	遺物No	出土層	器種	器形	軸面・色調	胎土	文様	特徴	備考
46-1	—	P 1485	フク上	青磁	碗	緑色	灰白色	蓮井文		
46-2	—	P 2504	フク土	青磁	碗	暗緑色	灰白色	—		
46-3	56-6	P 1486	フク土	美濃焼	盥	淡黄色	灰白色	—		
46-4	—	P 1487	フク上	越前	盥	茶褐色	灰色	—		

Ch. 64 SX-129 注記表

(a) 層上層序

1	黄土。
2	暗褐色土に煤土を少量含む。
3	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。しまりあり。
4	暗褐色土に黄褐色砂質土を少量含む。しまりあり。
5	暗褐色土。
6	暗褐色土に黄褐色砂質土を若干含む。
7	3より黄褐色砂質土が少なく、炭化物が若干含まれる。
8	暗褐色土、煤土、黒灰、白灰の混層。しまり強。
9	暗褐色土。しまりなし。
10	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。しまり強。
11	暗褐色土に炭化物若干あり。

12	黒灰に多量の炭化米を含む。
13	暗褐色土に微量の黄白色砂質土を含む。しまりあり。産性あり。
14	黒灰。
15	黄白色砂質土。
16	暗褐色土。粘性あり。しまりあり。
17	黄白色砂質土に黒灰を少量含む。
18	暗褐色土で粘性強。黒灰と白灰少量含む。
19	黄褐色砂質土(地山)。
20	黄白色砂質土。しまり強。

(b) 井穴計測表

Pl. No	形状	長さ×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	30 × 31	57	
2	方	27 × 27	25	

(c) 出土陶器注記表

Pl. No	Fig. No	遺物No	出土層	器種	器形	軸面・色調	胎土	文様	特徴	備考
47-1	—	P 2027	フク上	染付	盥	青白	白色	外：圓線 内：圓線		
47-2	—	P 2017	フク土	染付	盥	灰白	灰白色	外：圓線 内：圓線		
47-3	—	P 2010	フク土	染付	盥	青白	白色	外：圓線 内：圓線		
47-4	—	P 2090	フク上	染付	盥	青白	灰白色	玉取獅子文		
47-5	—	P 2050	フク上	染付	盥	緑青・灰色	灰白色	？		
47-6	—	P 2032	フク上	青磁	盥	明青灰色	暗灰色	—	二次焼成	
47-7	—	P 2085	フク上	青磁	盥	明青灰色	灰色	割花文		
47-8	—	P 2015	フク土	青磁	盥	明青灰色	暗灰色	流水文		
47-9	—	P 2099	フク土	青磁	盥	緑青色	灰色	割花文		
47-10	—	P 2097	フク土	青磁	盥	緑青色	灰色	割花文		

47-11	—	P 2022	フクナ	青磁	皿	緑	青色	灰色	割花文	
47-12	—	P 2020	フクナ	青磁	皿	暗	緑色	暗灰色	—	
47-13	—	P 2037	フクナ	青磁	皿	暗	緑～灰色	暗灰色	—	
47-14	—	P 2038	フクナ	青磁	皿	暗	緑色	灰色	—	
47-15	—	P 2034	フクナ	青磁	皿	明	青灰色	灰色	—	
47-16	—	P 2026	フクナ	青磁	皿	明	青灰色	灰色	—	
47-17	—	P 2044	フクナ	青磁	皿	緑	青色	灰色	—	
47-18	—	P 2012	フクナ	青磁	皿	青	緑色	暗灰色	—	
47-19	—	P 2033	フクナ	青磁	皿	緑	青色	暗灰色	—	
47-20	—	P 2091	フクナ	青磁	皿	緑	青色	灰色	—	
47-21	—	P 2093	フクナ	青磁	皿	緑	青色	灰色	割花文?	
47-22	—	P 2094	フクナ	青磁	皿	緑	青色	暗灰色	—	
47-23	—	P 2100	フクナ	青磁	皿	明	青灰色	暗灰色	—	
47-24	—	P 2089	フクナ	青磁	皿	明	青灰色	暗灰色	—	
47-25	—	P 2096	フクナ	青磁	皿	緑	青色	暗灰色	—	
47-26	—	P 2098	床前上	青磁	碗	緑	青色	暗灰色	—	
47-27	—	P 2049	フクナ	青磁	碗	暗	青色	灰色	—	
47-28	—	P 2043	フクナ	青磁	碗	暗	青色	灰色	—	
47-29	—	P 2047	フクナ	青磁	碗	青	灰色	暗灰色	—	見込内無粘
47-30	—	P 2030	フクナ	青磁	碗	立	緑色	灰色	割花文	
47-31	—	P 2019	フクナ	青磁	皿	緑	青色	灰白色	蓮弁文	
47-32	55-13	P 2018	フクナ	青磁	皿	青	緑色	灰白色	蓮弁文	
47-33	—	P 2024	フクナ	灰青	碗	黄	緑色	灰白色	—	
47-34	—	P 2023	フクナ	灰青	碗	黒	～茶色	黄白色	—	
47-35	—	P 2095	フクナ	越前	樂	暗	緑～暗褐色	灰色	—	
47-36	—	P 2021	フクナ	越前	樂	青	灰～暗褐色	灰色	—	
47-37	—	P 2016	フクナ	越前	樂	青	緑～暗褐色	灰色	—	
47-38	—	P 2014	フクナ	越前	樂	青	緑～暗褐色	灰色	—	
47-39	—	P 2048	フクナ	不明	器	暗	灰色	暗灰色	—	二次焼成
47-40	—	P 2011	フクナ	細粒陶器	摺鉢	灰～暗	黒色	灰～褐色	—	越前系
47-41	—	P 2025	フクナ	細粒陶器	摺鉢	黄	褐色	黄褐色	—	越前系
47-42	—	P 2013	フクナ	細粒陶器	摺鉢	黄	褐色	黄～黄褐色	—	越前系
47-43	—	P 2092	フクナ	細粒陶器	摺鉢	暗	灰～褐色	暗灰～褐色	—	
47-44	—	P 2137	フクナ	埴輪	—	—	—	—	—	
47-45	—	P 2029	フクナ	浴解物	—	—	—	—	—	
47-46	—	P 2008	フクナ	瓦器	火鉢	黒	色	灰色	—	黒色研磨
47-47	58-13	P 2007	フクナ	瓦器	手摺り	黄	褐色	—	—	障子文

## Ch. 66 SX-132 注記表

## 出土須恵器注記表

PL. No	Fig. No	遺物No	出土器	器種	器形	輪郭・色調	胎土	文様	特徴	備考
48-1	62-11	P 1925	床前	須恵器	環	—	—	—	高書き(V)。 火ダスキ	
48-2	62-6	P 2157	床前	須恵器	環	—	—	—	高書き(井)。 火ダスキ	

## Ch. 66 SX-134 注記表

## 覆土層序

1	暗褐色土にブロック状の黄褐色砂質土混入。微量の炭化物を含む。
2	暗褐色土に多量の黒色灰とブロック状の黄褐色砂質土と微量の炭化物混入。
3	暗褐色土。
4	暗褐色土に黄褐色砂質土と炭化物の混入。
5	黄褐色砂質土に少量の暗褐色土混入。
6	黄褐色砂質土(地山)。

## Ch. 67 SX-135 注記表

## (a) 覆土層序

1	暗褐色土に少量の黄褐色砂質土と若干の黒色土と炭化物含む。
2	暗褐色土に多量の黒色土と少量の灰色灰が含まれる。
3	暗褐色土と黄褐色砂質土の混入。
4	黄褐色土。
5	黄褐色砂質土に少量の暗褐色土混入。しまりあり。
6	暗褐色土と黒色土に少量の黄褐色砂質土混入。しまりあり。
7	黄褐色砂質土(地山)。

(b) 出土白磁注記表

PL. No	Fig. No	遺物No	出土層	器種	器形	釉調・色調	胎土	文様	特徴	備考
48-3	54-12	P 2041	フタ上	白磁	小杯	白色	白色	—	—	

Ch. 68 SX-136 注記表

## 覆土層序

1	赤褐色土に黄褐色砂質土と炭化物を若干含む。
2	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。
3	黄褐色砂質土(堆山)。

Ch. 69 SX-142 注記表

## 出土天目注記表

PL. No	Fig. No	遺物No	出土層	器種	器形	釉調・色調	胎土	文様	特徴	備考
50-1	57-1	P 2228	フタ土	天目	碗	黒色	黄白色	—		

Ch. 70 SA-05 注記表

## 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	16 × 12	39	
2	円	23 × 20	42	
3	円	20 × 20	61	
4	円	26 × 23	44	
5	不	38 × 32	31	
6	方	38 × 35	30	
7	円	25 × 22	58	

Ch. 71 遺物外出土陶磁器注記表

PL. No	Fig. No	遺物No	出土区	出土層	器種	器形	釉調・色調	胎土	文様	特徴	備考
53-1	54-1	P 1162	I 43	I	白磁	皿	灰白色	灰白色	藤岡文		
53-2	53-15	P 1204	H 44	I	青磁	皿	緑色	黄白色	変化蓮弁文		
53-3	54-20	P 2192	F 49	Pit フタ土	染付	碗	青白色	灰白色	外; アラベスク 内; ?		
53-4	55-13	P 1978	H 42	Pit フタ土	染付	皿	青白色	黄白色	外; 牡丹唐草文 内; 獅子文		
33-5	56-7	P 891	C 52	II	瀬戸	加皿	片黄緑色	黄灰		糸切り足	
33-6	56-6	P 23	K 51	I	志野	皿	灰白色	黄白色	—		

Ch. 72 陶磁器出土区一覧表

Fig. No	PL. No	遺物No	出土区	出土層	出土層
53-1	26-7	P 1944	H 42	ST 184	フタ土
53-2	—	P 2242	E 49	SD 61	フタ土
53-3	36-6	P 1575	P 50	SE 68	フタ土
53-4	33-2	P 586	K 51	SE 61	フタ土
	33-3	P 585	K 51	SE 61	フタ土
	33-5	22-2	P 997	D 52	ST 178
53-6	17-19	P 1682	H 43	ST 173	フタ土
53-7	33-4	P 589	K 51	SE 61	フタ土
53-8	19-6	P 1454	H 46	ST 175	フタ土
	19-7	P 1609	H 45	ST 175	床面直上
53-9	7-1	P 247	J 50	ST 156	フタ土
53-10	19-3	P 1349	H 46	ST 175	フタ土
53-11	—	P 2244	E 49	SD 61	フタ土
53-12	30-4	P 309	J 48	SX 96	フタ土
53-13	47-32	P 2018	H 43	SX 129	フタ土
53-14	26-8	P 1946	H 42	ST 184	フタ土
53-15	53-2	P 1204	H 44	—	I
53-16	4-7	P 203	J 51	ST 153	フタ土
53-17	—	P 1942	H 44	SE 66	フタ土
53-18	33-6	P 540	K 51	SE 61	フタ土
33-19	26-6	P 1954	I 42	ST 184	床面直上

54-1	38-1	P 1162	I 43	—	I
54-2	35-2	P 1520	F 50	SE 68	フタ土
54-3	35-1	P 1580	F 50	SE 68	フタ土
54-4	35-3	P 1526	F 50	SE 68	フタ土
54-5	—	P 2103	H 43	ST 187	フタ土
54-6	17-15	P 1664	H 43	ST 173	フタ土
54-7	31-5	P 305	K 51	SE 60	フタ土
54-8	23-1	P 1844	I 45	ST 180	フタ土
54-9	39-17	P 641	J 50	SX 97	フタ土
54-10	—	P 2288	E 49	SD 61	フタ土
54-11	—	P 2344	E 49	SD 61	フタ土
54-12	48-3	P 2041	H 45	SX 135	フタ土
54-13	4-16	P 69	J 51	ST 153	フタ土
54-14	40-2	P 2206	G 50	SX 109	フタ土
54-15	33-11	P 1818	F 50	SE 68	フタ土
54-16	6-10	P 226	K 51	ST 155	フタ土
54-17	—	P 2241	E 49	SD 61	フタ土
54-18	17-2	P 1684	H 43	ST 173	灰面
54-19	7-4	P 289	K 50	ST 156	フタ土
54-20	53-3	P 2192	F 49	Pit	フタ土
55-1	4-13	P 204	J 51	ST 153	フタ土
55-2	31-7	P 320	K 51	SE 60	フタ土
55-3	33-12	P 590	K 51	SE 61	フタ土

55-4	-	P 1583	H 46	SX 127	フク土
55-5	6-12	P 283	K 51	ST 155	フク土
55-6	37-4	P 188	K 51	SX 93	フク土
55-7	33-9	P 637	K 51	SE 61	フク土
55-8	42-7	P 1604	H 43	SX 120	フク土
55-9	-	P 1868	H 44	SE 66	フク土
55-10	44-4	P 1790	H 43	SX 121	フク土
55-11	44-8	P 1645	H 43	SX 121	フク土
55-12	44-9	P 1494	H 43	SX 121	フク土
55-13	53-4	P 1978	H 42	SB 23Pt	フク土
55-14	33-1	P 581	K 51	SE 61	フク土
56-1	20-6	P 1443	H 45	ST 176	フク土
56-2	44-33	P 1780	H 43	SX 121	フク土
56-3	35-18	P 1518	F 50	SE 68	フク土
56-4	36-14	P 1577	F 50	SE 68	フク土
56-5	46-3	P 1486	H 46	SX 125	フク土
56-6	53-6	P 23	K 51		I
56-7	53-5	P 891	C 52		II
56-8	4-11	P 256	J 51	ST 153	フク土
56-9	6-23	P 199	K 51	ST 155	フク土
56-10	45-21	P 1538	E 49	SX 124	フク土
56-11	6-24	P 223	K 51	ST 155	フク土
56-12	45-23	P 1541	E 49	SX 124	フク土
56-13	35-30	P 1801	F 50	SE 68	フク土
56-14	37-8	P 222	K 51	SX 93	フク土
56-15	-	P 2230	F 49	SD 61	フク土
56-16	-	P 1895	H 44	SE 66	フク土
56-17	34-14	P 1489	I 44	SE 67	フク土
56-18	44-48	P 1596	H 43	SX 121	フク土
56-19	31-11	P 229	K 51	SE 60	フク土
56-20	44-49	P 1654	H 43	SX 121	フク土
56-21	8-30	P 207	J 49	ST 157	フク土
57-1	50-1	P 2228	F 49	SX 142	フク土
57-2	34-11	P 1381	I 44	SE 67	フク土
57-3	34-12	P 1610	I 44	SE 67	フク土
57-4	17-22	P 1798	H 43	ST 173	フク土
57-5	6-4	P 225	K 51	ST 155	フク土
57-6	-	P 2343	E 49	SD 61	フク土
57-7	8-9	P 202	K 51	ST 157	フク土

57-8	8-21	P 182	J 48	ST 157	フク土
	8-4	P 201	J 48	ST 157	フク土
	8-6	P 253	J 48	ST 157	フク土
	8-2	P 208	J 48	ST 157	フク土
	8-3	P 254	J 48	ST 157	フク土
8-5	P 294	J 48	ST 157	フク土	
57-9	17-23	P 1492	H 43	ST 173	フク土
57-10	35-22	P 1527	F 50	SE 68	フク土
57-11	6-7	P 287	K 51	ST 155	フク土
57-12	42-31	P 1570	H 43	SX 120	フク土
58-1	35-36	P 2433	F 50	SX 116	フク土
58-2	17-33	P 2105	H 43	ST 179	フク土
58-3	7-24	P 1735	H 43	ST 173	フク土
58-4	17-29	P 1793	H 43	ST 173	フク土
58-5	12-5	P 1008	D 50	ST 164	フク土
58-6	-	P 2227	F 49	SD 61	フク土
58-7	21-5	P 1483	E 50	ST 177	フク土
58-8	-	P 1433	H 44	SF 66	フク土
58-9	-	P 1608	I 44	SE 67	フク土
58-10	33-13	P 584	K 51	SE 61	フク土
58-11	44-37	P 1601	H 43	SX 121	フク土
58-12	44-36	P 1594	H 43	SX 121	フク土
58-12	17-30	P 1807	H 43	ST 173	フク土
58-13	47-47	P 2007	H 43	SX 129	フク土
62-1	36-1	P 638	J 51	SX 81	フク土
62-6	36-2				
62-6	60-8	P 542	J 51	SX 81	フク土
62-3	40-1	P 2453	G 50	SX 107	フク土
62-4	39-18	P 861	J 50	SX 97	フク土
62-5	-	P 998	D 51	ST 160	フク土
62-6	48-2	P 2157	H 42	SX 132	床面
62-6	60-7				
62-7	-	P 2351	D 51	ST 159	フク土
62-8	-	P 2388	E 50	SX 150	フク土
62-9	-	P 1852	H 43	SX 130	フク土
62-10	-	P 1851	H 43	SX 130	フク土
62-11	48-1	P 1925	H 42	SX 132	床面
62-11	60-6				
62-12	-	P 2389	E 50	SX 150	フク土

Ch. 73 鉄製品記表

PL.No	Fig.No	遺物名	名称	出土区	出土遺構	出土層	計測値(長さ×幅×厚さ)cm	特徴	備考
54-1	59-1	F 1138	不明鉄製品	H 42	ST 192	フク土	25.10 × 3.94 × 1.00		
54-2	59-2	F 181	刀	L 51	SX 94	フク土	25.97 × 3.33 × 0.36		
54-3	59-3	F 753	小 柄	I 43	SX 120	フク土	19.68 × 1.48 × 0.40		
54-4	59-4	F 567	小 柄	H 43	SX 120	フク土	18.37 × 1.62 × 0.69		
54-5	59-5	F 366	鏢	E 49	-	I	5.65 × 5.42 × 0.44		
54-6	-	F 921	不明鉄製品	H 42	-	II	5.63 × 4.73 × 0.32		
54-7	59-11	F 164	小 札	L 51	SX 94	フク土	6.49 × 2.12 × 0.36		
54-8	59-10	F 1134	小 札	G 49	SX 98	フク土	6.10 × 1.97 × 0.32		
54-9	59-9	F 441	小 札	F 50	SX 111	フク土	6.58 × 1.82 × 0.26		
54-10	59-8	F 163	小 札	L 51	SX 94	フク土	6.49 × 2.12 × 0.36		
54-11	59-15	F 67	小 札	J 48	ST 157	フク土	6.16 × 2.48 × 0.33		漆付否
54-12	59-14	-	小 札	-	-	-	5.92 × 2.24 × 0.43		漆付否
54-13	59-13	F 130	小 札	J 48	ST 157	フク土	6.00 × 2.24 × 0.46		漆付否
54-14	59-12	F 466	小 札	E 50	-	III	6.05 × 2.23 × 0.29		漆付否
54-15	59-7	F 332	鉄 鏢	D 52	-	II 下	9.04 × 1.66 × 1.54		
54-16	59-6	F 743	鉄 鏢	F 50	SE 68	フク土	6.52 × 1.25 × 1.25		
54-17	59-23	F 774	鉄 鏢	H 43	SX 121	フク土	12.53 × 2.92 × 0.77		
54-18	59-22	F 87	鉄 鏢	K 51	ST 155	フク土	8.93 × 2.78 × 0.70		

54-19	-	F 673	鋼	E	50	ST165	フク土	9.98 × 2.42 × 1.00		
54-20	59-21	F1093	角	釘	F	45	Pit	フク上	6.59 × 1.29 × 0.34	
54-21	59-20	F 277	角	釘	K	51	SE 61	フク上	7.81 × 1.38 × 0.83	
54-22	59-19	F 690	角	釘	E	50	ST177	フク上	7.50 × 1.30 × 1.23	
54-23	59-18	F 399	角	釘	F	50	ST161	フク上	8.05 × 1.20 × 1.03	
54-24	59-17	F 923	角	釘	H	42	-	II	8.42 × 1.66 × 0.93	
54-25	59-16	F 271	角	釘	K	51	SX 93	フク上	8.42 × 1.41 × 0.98	
54-26	-	F 126	角	釘	J	49	SX157	フク土	3.82 × 1.03 × 0.72	
54-27	-	F 477	角	釘	H	46	-	I	3.93 × 1.22 × 0.67	
54-28	-	F 915	角	釘	H	42	-	II	4.24 × 1.06 × 0.73	
54-29	-	F 975	角	釘	H	42	ST183	フク土	6.20 × 1.44 × 1.03	
54-30	-	F 816	角	釘	H	43	SX121	フク土	6.19 × 1.37 × 0.72	
54-31	-	F1103	角	釘	F	51	Pit	フク土	6.89 × 1.42 × 0.90	
54-32	-	F1123	不明鉄製品	G	50	SX107	フク土	8.90 × 0.73 × 0.71	網部空開	
54-33	-	F1030	不明鉄製品	H	43	SX129	フク土	6.08 × 1.42 × 0.82	木質物付着	
54-34	-	F50A	不明鉄製品	K	51	ST155	フク土	5.67 × 1.33 × 0.78	木質物付着	
54-35	-	F52	鉄	線	J	51	ST153	フク土	8.82 × 0.52 × 0.51	木部付着
54-36	-	F 793	角	釘	H	43	SX121	フク土	5.13 × 0.66 × 0.59	木付着
54-37	-	F 833	角	釘	H	43	SX121	フク土	5.0 × 1.32 × 0.73	木付着
54-38	-	F 789	角	釘	C	50	ST168	フク土	3.77 × 1.06 × 0.92	
55-1	-	F 685	不明鉄製品	H	46	SX125	フク土	13.20 × 4.96 × 0.50	多数の穿孔	
55-2	-	F 81	鉄	K	51	ST155	フク土	13.03 × 5.32 × 0.26		
55-3	-	F 206	鉄	線	J	48	SX 95	フク土	9.15 × 0.04 × 0.57	内耳部
55-4	-	F 980	鉄	線	I	42	ST184	フク土	10.36 × 0.20 × 0.48	口縁部
55-5	59-24	F1108	鉄	線	E	49	SD 61	フク上	11.36 × 0.88 × 0.66	
55-6	-	F 593	鉄	線	I	44	SE 67	フク土	10.52 × 6.20 × 0.59	脚部
55-7	-	F 198	鉄	線	J	48	Pit	フク土	9.68 × 6.98 × 0.50	弦部
55-8	-	F 368	鉄	線	F	50	SX111	フク土	13.94 × 1.30 × 0.70	
55-9	-	F 443	不明鉄製品	F	50	SX111	フク土	9.80 × 1.44 × 0.37		
55-10	-	F 883	火打金	F	50	SE 68	フク土	7.39 × 2.58 × 0.81		
55-11	-	F 19	火打金	J	49	-	IV	1.64 × 2.55 × 0.28		
55-12	-	F 517	火打金	H	44	-	II	9.94 × 3.77 × 0.37		
55-13	-	F 749	平引金	H	43	SX120	フク土	8.36 × 2.90 × 0.33		
55-14	-	F 63	鉄	線	J	51	ST153	フク土	18.66 × 0.80 × 0.70	木部付着
55-15	-	F 686	火	箸	H	46	SX125	フク土	22.06 × 0.50 × 0.50	おじれあり
55-16	-	F423B	火	箸	C	49	-	III	23.81 × 0.54 × 0.51	漆付着
55-17	-	F423A	火	箸	C	49	-	III	24.43 × 0.52 × 0.49	漆付着
55-18	-	F 48	火	箸	L	51	-	III	25.50 × 1.02 × 1.00	おじれあり

Ch.74 網製品注記表

PL.No	Fig.No	漬物名	名	材	出士区	出土遺構	出土層	計測値(長さ×幅×高さ) cm/g	特	徴	備考
56-1	60-1	F1121	カ	エ	50	SX104	フク上	2.29 × 2.77 × 0.38			
56-2	-	F 960	鉄	砲	I	44	SB25 Pit	フク上	1.32 × 1.28 × 1.28 (114)		
56-3	-	F1106	鉄	砲	E	49	SD 61	フク土	1.42 × 1.23 × 1.15 ( 63)		
56-4	-	F 69	鉄	砲	J	51	ST153	フク土	1.32 × 1.28 × 1.04 ( 92)		
56-5	-	F 943	小	網	H	44	SE 66	フク土	4.00 × 1.36 × 0.60		網の破損あり
56-6	-	F 851	小	網	H	43	ST173	フク上	8.73 × 1.34 × 0.52		
56-7	-	F 98	小	網	K	51	ST155	フク上	11.39 × 1.19 × 0.63		
56-8	60-2	F1088	不明鉄製品	H	45	SX140	フク土	4.60 × 1.37 × 0.19			
56-9	60-3	F 170	日置金具	L	51	SX 94	フク土	3.72 × 1.17 × 0.29			
56-10	-	F1158	鉄型鋼製品	C	50	ST168	フク土	2.61 × 2.61 × 0.11			金メッキ
56-11	60-4	F 798	鉄	F	50	SE 68	フク土	3.77 × 0.84 × 0.34			
56-12	-	F 182	銅製裝飾品	K	50	ST156	床	1.60 × 0.79 × 0.11			
56-13	-	F 566	銅	線	I	43	SX120	フク上	4.04 × 0.20 × 0.20		
56-14	-	F1115	銅	線	G	42	ST191	フク上	1.93 × 1.82 × 0.20		
56-15	-	F1073	銅	線	H	43	SX129	フク土	1.62 × 0.73 × 0.18		
56-16	-	F1034	不明銅製品	H	44	SX129	フク土	2.75 × 0.40 × 0.23			
56-17	-	F 15	銅	釘	L	51	ST138	フク土	3.65 × 0.52 × 0.50		
56-18	60-5	F 965	銅	I	46	-	III	4.67 × 2.49 × 0.28 (174)			
56-19	-	F1140	不明銅製品	F	50	SX104	フク土	1.55 × 1.46 × 1.43			

56-20	—	F 448	不明銅製品	F 50	ST 159	フク土	8.04 × 1.38 × 0.31		
56-21	—	F 482	不明銅製品	H 45	—	I	10.69 × 1.70 × 0.57		
56-22	—	F 202	銅 滓	J 43	ST 189	フク土	4.87 × 1.40 × 1.38		
56-23	—	F 501	銅 滓	H 45	—	I	5.14 × 4.54 × 0.49		
56-24	—	F 1076	銅 滓	I 45	Pit	フク土	5.01 × 1.60 × 0.34		
56-25	—	F 42	銅 滓	J 48	SX 88	フク土	4.59 × 3.58 × 0.97		
56-26	—	F 249	銅 滓	F 49	—	II F	5.16 × 2.67 × 1.56		
56-27	—	F 928	銅 滓	I 43	SX 122	フク土	7.50 × 1.81 × 0.32		
57-1	60-6	F 358	仏像 彫刻	E 51	—	III 上	4.22 × 1.46 × 1.08 (2.24)		
57-2	—	F 34	不明銅製品	J 51	ST 124	フク土	1.82 × 1.12 × 0.09	金メッキ	
57-3	60-7	F 155	八双 金具	L 51	SX 94	フク土	3.27 × 1.88 × 0.09	金メッキ	
57-4	—	F 650	銅製金飾品	H 46	ST 175	フク土	1.31 × 0.23 × 0.08	金メッキ	
57-5	—	F 777	銅製金飾品	H 43	SX 121	フク土	2.90 × 1.22 × 0.07	金メッキ	
57-6	60-8	F 513	銅製高台	H 44	—	II	4.48 × 1.59 × 0.16		
57-7	—	F 444	銅 針	F 50	SX 111	フク土	2.31 × 0.22 × 0.18		
57-8	—	F 944	不明銅製品	I 45	ST 180	フク土	4.06 × 3.38 × 0.22		
57-9	—	F384 B.A	銅 鈴	R 49	—	II 下	2.81 × 2.85 × 0.12		
57-10	—	F 681	銅 鈴	E 49	ST 166	漆の面上	1.46 × 1.44 × 1.12		
57-11	60-9	F 584	キセル	H 43	SX 120	フク土	6.04 × 1.52 × 0.12		産青
57-12	60-10	F 361	キセル	D 51	—	II 上	4.54 × 0.91 × 0.15		産青
57-13	60-11	F 1160	キセル	北 鏡	—	表 探	3.64 × 1.17 × 0.13		破口
57-14	—	F 957	盤	I 46	ST 182	フク土	6.56 × 2.30 × 0.25		
57-15	—	F 258	香 炉	G 30	—	I	9.85 × 0.88 × 0.25		

Ch. 75 石製品目録表

58-1	61-1	S 38	加工石製品	F 50	—	II 下	9.55 × 8.17 × 1.50		SX111 付属
58-2	61-2	S 37	加工石製品	F 50	—	II 下	8.09 × 7.26 × 1.44		SX111 付属
58-3	61-3	S 13	硯	K 51	ST 155	フク土	7.4 × 5.03 × 0.99		SX111 付属
58-4	61-4	S 119	硯	H 43	SX 129	フク土	4.46 × 3.42 × 0.76		
58-5	—	S 158	硯	H 44	SE 66	フク土	3.65 × 3.60 × 1.02		
58-6	61-5	S 19	硯	K 50	Pit	フク土	9.58 × 6.52 × 1.78		
58-7	61-7	S 50	硯	F 51	—	III	2.60 × 2.53 × 0.76		
58-8	61-8	S 36	硯	D 30	—	I	3.66 × 3.48 × 0.64		
58-9	—	S 156	油 石	H42,43	SX 121	フク土	3.32 × 3.03 × 1.50		
58-10	—	S 6	火打石	J 51	ST 124	フク土	3.54 × 3.45 × 2.01		
58-11	—	S 93	火打石	F 50	SE 68	フク土	5.09 × 4.22 × 2.16		
58-12	—	S 34	火打石	D 52	—	I	5.20 × 3.89 × 2.09		
58-13	—	S 149	油 石	H 42	ST 192	フク土	5.12 × 4.26 × 3.57		
58-14	61-9	S 150	砥 石	G 42	SX 152	フク土	5.57 × 2.96 × 2.05		
58-15	61-8	S 136	硯 石	E 49	SD 61	フク土	9.60 × 6.12 × 4.66		
58-16	61-12	S 57	硯 石	I 46	—	III	8.23 × 3.90 × 2.0		
58-17	61-11	S 90	砥 石	H 45	ST 176	フク土	10.21 × 8.41 × 4.65		
58-18	61-10	S 31	砥 石	K 51	SX 81	フク土	8.90 × 3.52 × 2.87		
58-19	61-13	S 127	砥 石	F 49	—	III	10.93 × 3.80 × 2.64		
58-20	61-14	S 20	砥 石	J 48	SX 96	フク土	5.55 × 2.99 × 0.56		
58-21	61-15	S 134	石 鏡	E 50	Pit	フク土	2.68 × 1.83 × 0.64		
58-22	61-16	S 30	石 鏡	K 51	SX 106	フク土	3.47 × 1.39 × 0.43		
58-23	61-17	S 43	石 滓	E 49	—	III	9.81 × 4.39 × 2.28		
59-1	—	S 27	石 臼	F 49	—	II 下	28.95 × 12.65 × 11.0		
59-2	—	S 28	石 臼	F 49	—	II 下	19.61 × 10.36 × 9.33		
59-3	—	S 35	石 臼	E 51	—	II	17.82 × 8.89 × 11.39		
59-4	—	S 87	石 臼	F 50	SE 68	フク土	16.32 × 11.42 × 8.62		
59-5	—	S 133	石 臼	E 51	SE 12 Pit	フク土	12.50 × 10.97 × 8.56		
59-6	—	S 110	石 臼	I 44	SE 66	フク土	15.10 × 11.54 × 9.70		
59-7	—	S 135	石 臼	F 49	—	III 上	17.45 × 10.95 × 8.25		
59-8	—	S 33	石 臼	K 51	SX 81 Pit	フク土	16.93 × 11.86 × 8.92		
59-9	—	S 23	石 臼	F 50	—	I	15.28 × 15.02 × 10.78		
59-10	—	S 24	石 臼	F 49	—	II	16.18 × 12.92 × 11.86		
59-11	—	S 102	石 臼	I 43	SX 122	フク土	19.36 × 6.25 × 8.31		
59-12	—	S 48	石 臼	C 49	—	III 上	17.24 × 19.18 × 6.70		

Ch. 76 古銭計測表

No	C-No	名称	出土区通稱	外径 外径(mm)	外径 内径(mm)	外径 厚さ(mm)	内径 外径(mm)	内径 内径(mm)	内径 厚さ(mm)	重量 (g)	備考
1	C 1	唐文銭	J51 I	2.34	0.66	0.15	1.97	0.59	0.07	3.1	
2	C 2	"	J51 ST153 フク上	1.74	0.76	0.07	--	--	--	0.4	
3	C 3	"	J51 ST153 フク上	--	--	3.70	0.10	--	--	3.4	
4	C 4	伊武通宝	J50 I	2.34	0.59	0.18	1.93	0.57	0.04	2.7	段銭
5	C 5	蕉文銭	J51 ST153 フク上	1.73	0.98	0.075	--	--	--	0.5	
6	C 6	"	J48 ビット内フク上	1.90	0.70	0.07	--	--	--	0.4	
7	C 7	熊宗元宝	J49 Ⅱ上	2.37	3.70	0.145	1.90	0.55	0.03	1.9	
8	C 8	無文銭	J51 ST153 フク上	1.77	1.04	0.06	--	--	--	0.3	
9	C 9	"	J51 ST153 フク上	1.82	0.82	0.09	--	--	--	0.5	
10	C 10	開元通宝	J51 ST124 フク上	2.41	0.63	0.15	1.97	0.6	0.08	3.3	
11	C 11	祀読不能	J51 ST124 フク上	--	--	0.17	--	0.43	0.1	1.3	
12	C 12	"	J51 ST124 フク上	--	--	0.145	--	--	0.07	0.6	
13	C 13	○○○空	J51 ST124 フク上	2.40	--	0.17	1.95	0.53	0.07	0.8	
14	C 14	元○通宝	K51 SX93 フク上	2.43	0.73	0.16	2.04	0.6	0.08	2.7	
15	C 15	開元通宝	K51 ST155 フク上	2.38	0.64	0.13	2.02	0.62	0.5	2.0	
16	C 16	治平元宝	J98・49 ST157 フク上	2.34	0.64	0.12	1.81	0.51	0.07	2.3	
17	C 17	無文銭	J51 ST153 フク上	1.62	0.97	0.08	--	--	--	0.3	
18	C 18	"	J51 ST153 フク上	1.72	1.12	0.085	--	--	--	0.3	
19	C 19	寛永通宝	J50 SE66 フク上	2.48	0.58	0.16	1.955	0.59	0.06	1.8	
20	C 20	無文銭	K51 E60 フク上	1.55	--	0.10	--	--	--	0.3	
21	C 21	元豐通宝	K51 ST155 フク上	2.48	0.68	0.13	2.00	0.58	0.08	3.3	
22	C 22	無文銭	K51 ST155 フク上	2.24	0.66	0.12	--	--	--	1.8	
23	C 23	熊宗元宝	K50 ST156 フク上	2.34	0.60	0.12	1.86	0.50	0.04	2.3	
24	C 24	無文銭	K51 SX93 フク上	1.70	0.93	0.18	--	--	--	0.4	
25	C 25	"	K51 ST155 フク上	--	0.65	0.08	--	--	--	0.1	
26	C 26	祀読不能	K51 ST155 フク上	2.14	0.74	0.12	1.73	0.42	0.03	1.0	
27	C 27	無文銭	K51 ST155 フク上	1.94	1.10	0.08	--	--	--	0.3	
28	C 28	"	"	1.675	0.80	0.07	--	--	--	3.1	
29	C 29	"	"	1.12	0.77	0.08	--	--	--	0.1	
30	C 30	"	"	--	--	0.06	--	--	--	0.1	
31	C 31	無文銭	K51 ST155 フク上	2.20	0.70	0.10	--	--	--	1.5	
32	C 32	"	"	1.06	0.86	0.10	--	--	--	0.1	
33	C 33	○○○空	K51 ST155 フク上	2.09	0.76	0.12	--	--	--	1.4	
34	C 34	無文銭	K51 ST155 フク上	2.10	0.81	0.1	--	--	--	1.1	
35	C 35	元和元宝	J50 ST156 フク上	2.43	0.755	0.13	1.83	0.82	0.05	3.5	
36	C 36	元祐通宝	K51 ST155 フク上	2.41	0.700	0.12	1.92	0.53	0.04	2.6	
37	C 37	永樂通宝	J50 SX89 フク上	2.47	0.57	0.15	2.06	0.7	0.03	3.0	
38	C 38	天禧通宝	J50 SX89 フク上	2.55	0.62	0.13	2.06	0.62	0.05	2.9	
39	C 39	淳化元宝	J51 ST153 フク上	2.46	0.74	0.12	1.82	0.48	0.03	1.9	
40	C 40	元豐通宝	J49 SD94 フク上	2.46	0.65	0.16	1.93	0.55	0.02	2.3	
41	C 41	開元通宝	J51 SX94 フク上	2.43	0.61	0.13	1.81	0.55	0.03	2.4	
42	C 42	天禧通宝	J50 SX90 フク上	2.53	0.68	0.12	1.99	0.595	0.03	2.6	
43	C 43	祀読不能	J50 SX90 フク上	--	--	--	--	--	--	0.6	
44	C 44	"	L51 SX94 フク上	2.48	0.67	0.15	1.94	0.57	0.05	2.3	
45	C 45	"	L51 SX94 フク上	--	--	0.11	--	0.55	0.03	0.2	
46	C 46	無文銭	J50 SX90 フク上	1.92	0.75	0.08	--	--	--	0.6	
47	C 47	元祐通宝	K51 ビット内フク上	2.395	0.68	0.13	1.93	0.55	0.02	2.2	
48	C 48	永樂通宝	J48 SX96 フク上	2.495	0.68	0.13	2.095	0.68	0.05	3.3	
49	C 49	祀読不能	L51 ST138 フク上	2.43	0.72	0.14	1.90	0.52	0.05	2.6	
50	C 50	元祐通宝	J49 Ⅱ上	2.49	0.7	0.12	2.11	0.61	0.02	1.9	
51	C 51	皇宋通宝	P50 I	2.38	0.67	0.13	1.91	0.50	0.02	2.8	
52	C 52	無文銭	F49 I	2.30	0.61	0.12	--	--	--	2.0	
53	C 53	○○○空	F50 Ⅱ下	--	--	0.14	--	0.65	0.07	1.1	
54	C 54	元豐通宝	K51 SE61 フク上	2.44	0.69	0.12	1.99	0.55	0.05	3.0	
55	C 55	聖宗元宝	K51 SE61 フク上	2.32	0.61	0.12	1.93	0.57	0.05	1.9	
56	C 56	景祐元宝	G50 Ⅱ下	2.35	0.63	0.11	1.99	0.63	0.05	2.3	
57	C 57	無文銭	G50 Ⅱ下	2.15	0.73	0.08	--	--	--	1.3	



58	C 58	無文鏡	G50H	1.82	0.78	0.09	—	—	—	0.4	
59	C 59	聖人通室	F50H	2.32	0.595	0.22	1.92	0.62	0.13	5.1	
60	C 60	無文鏡	K51 SX 93 フク上	1.48	1.02	0.06	—	—	—	0.1	
61	C 61	"	J48 ビット内フク上	2.28	0.62	0.1	—	—	—	2.1	
62	C 62	無文鏡	J51 SX 81 フク上	2.26	0.65	0.10	1.79	0.56	0.02	1.7	透鏡
63	C 63	〇〇室	"	—	—	0.13	—	0.62	0.07	0.9	
64	C 64	判読不能	J48 SX 96 フク上	—	—	0.14	—	—	—	0.8	
65	C 65	開元通室	J51 SX 81 フク上	2.43	0.67	0.17	2.09	0.59	0.06	2.2	
66	C 66	五十鏡	D52 I	2.36	—	0.18	—	—	—	4.5	
67	C 67	一鏡	E51 I	2.31	—	0.155	—	—	—	3.5	
68	C 71	寛永通室	E50 II	2.34	0.53	0.12	1.84	0.58	0.05	2.1	
69	C 72	洪武通室	D52 ST 104 フク上	2.29	0.54	0.16	1.85	0.58	0.06	2.3	透鏡
70	C 73	開元通室	D49H	2.48	0.6	0.14	2.04	0.68	0.05	2.3	
71	C 74	一鏡	D49 I	2.2	0.43	0.16	—	—	0.09	3.5	
72	C 75	判読不能	C50H	2.29	0.54	0.12	—	—	0.06	1.8	
73	C 76	〇〇通室	D51 ST 160 フク上	—	—	0.11	—	—	0.05	0.4	
74	C 77	無文鏡	F50 SX 111 フク上	—	—	0.07	—	—	—	0.1	
75	C 78	永楽通室	D50H	2.58	0.58	0.19	2.11	0.73	0.07	3.2	
76	C 79	無文鏡	E52 II 下	1.92	0.69	0.08	—	—	—	0.9	
77	C 80	洪武通室	"	2.21	0.62	0.15	1.78	0.54	0.05	2.3	透鏡
78	C 81	判読不能	"	2.25	0.64	0.13	—	—	—	1.8	
79	C 82	無文鏡	"	1.74	0.84	0.11	—	—	—	0.6	
80	C 83	判読不能	"	2.32	0.64	0.11	1.92	0.56	0.05	2.1	
81	C 84	無文鏡	"	1.90	0.78	0.06	—	—	—	0.7	
82	C 85	元祐通室	"	2.45	0.63	0.13	1.92	0.64	0.05	3.2	
83	C 86	洪武通室	"	2.29	0.58	0.21	1.89	0.62	0.05	2.8	透鏡
84	C 87	熙寧通室	"	2.31	0.7	0.11	1.89	0.555	0.05	2.3	
85	C 88	元祐通室	"	2.28	0.69	0.16	1.86	0.49	0.06	2.5	
86	C 89	熙寧通室	"	2.32	0.65	0.14	1.82	0.52	0.05	3.2	
87	C 90	無文鏡	"	1.88	0.69	0.09	—	—	—	0.7	
88	C 91	判読不能	"	2.32	0.69	0.16	—	—	—	3.4	
89	C 92	無文鏡	"	2.18	0.81	0.12	—	—	—	2.1	
90	C 93	咸平通室	"	2.43	0.64	0.13	1.75	0.47	0.05	2.9	
91	C 94	無文鏡	"	1.93	0.7	0.1	—	—	—	1.1	
92	C 95	崇寧通室	"	2.32	0.63	0.13	1.9	0.69	0.05	2.4	
93	C 96	洪武通室	"	2.2	0.57	0.14	1.82	0.52	0.03	2.6	透鏡
94	C 97	無文鏡	"	1.72	0.78	0.11	—	—	—	0.7	
95	C 98	"	"	1.88	0.69	0.08	—	—	—	0.8	
96	C 99	咸平通室	"	2.46	0.66	0.15	1.995	0.61	0.03	3.2	
97	C 100	元祐通室	"	2.40	0.63	0.14	1.82	0.495	0.05	3.4	
98	C 101	咸平通室	"	2.43	0.62	0.13	1.87	0.6	0.03	3.2	
99	C 102	元祐通室	"	2.43	0.68	0.15	1.98	0.54	0.06	3.7	
100	C 103	開元通室	"	2.4	0.69	0.12	2.08	0.59	0.13	3.0	
101	C 104	無文鏡	"	1.94	0.73	0.07	—	—	—	0.7	
102	C 105	"	"	1.46	0.8	0.11	—	—	—	0.4	
103	C 106	判読不能	F50 II 下	—	—	0.12	—	—	—	0.5	
104	C 107	元祐通室	C51H	2.48	—	0.17	1.8	0.58	0.05	1.5	
105	C 108	至和通室	D51 フク上	2.4	0.7	0.16	1.885	0.56	0.07	3.0	
106	C 109	判読不能	D51 ST 160 フク上	2.395	0.595	0.22	—	—	0.07	1.8	
107	C 110	"	E52 ビット内フク上	2.66	—	0.095	—	—	0.06	0.7	
108	C 111	東〇通室	I45 I	2.32	0.62	0.12	1.88	0.56	0.05	1.6	
109	C 112	無文鏡	E50 ST 165 フク上	—	—	0.06	—	—	—	—	
110	C 114	"	I43 I	1.75	0.92	0.12	—	—	—	0.8	
111	C 115	"	J43 I	—	—	0.07	—	—	—	0.1	
112	C 127	"	H46H	2.13	0.75	0.07	—	—	—	0.5	
113	C 128	〇〇〇室	H45H	—	—	0.12	—	0.57	0.05	0.6	
114	C 129	永楽通室	I45H	2.54	0.55	0.16	2.11	0.72	0.06	3.2	
115	C 130	判読不能	"	2.17	0.64	0.11	—	—	—	1.2	
116	C 131	"	"	—	—	0.18	—	—	—	0.8	
117	C 133	"	H44H上	2.33	0.56	0.2	—	—	—	1.5	

118	C 136	判読不能	H46 ST175 フタ上	—	—	0.12	—	—	—	0.1
119	C 136	無文銭	I43 SX120 フタ上	1.70	1.05	0.06	—	—	—	0.4
120	C 152	〃	〃	1.61	1.08	0.18	—	—	—	0.2
121	C 153	〃	〃	—	—	0.05	—	—	—	0.1
122	C 154	判読不能	〃	—	—	0.11	—	—	—	0.4
123	C 155	無文銭	〃	1.78	0.86	0.07	—	—	—	0.4
124	C 166	〃	〃	1.35	1.0	0.08	—	—	—	0.1
125	C 173	元豐通宝	I44 SE67 フタ上	2.41	0.68	0.16	0.84	0.5	0.07	2.9
126	C 184	判読不能	H44 SE66 フタ上	2.23	0.63	0.125	—	—	—	1.7
127	C 185	無文銭	H45 ST176 フタ上	—	—	0.09	—	—	—	0.1
128	C 191	判読不能	D50 ST163 フタ上	—	—	0.12	—	—	—	0.3
129	C 192	〃	〃	2.34	0.64	0.16	1.925	0.50	0.08	3.0
130	C 199	〇〇通宝	〃	2.43	—	0.18	—	0.43	0.04	1.1
131	C 194	判読不能	〃	2.09	0.63	0.12	1.73	0.455	—	1.4
132	C 196	無文銭	E50 ST165 フタ上	1.83	0.72	0.08	—	—	—	0.5
133	C 196	判読不能	E50 SE65 フタ上	—	—	0.16	—	—	0.13	0.6
134	C 197	洪武通宝	E49 SX124 フタ上	1.975	0.585	0.1	1.66	0.52	0.02	0.6
135	C 198	判読不能	E50 SX165 フタ上	—	—	0.09	—	—	—	0.1
136	C 199	〃	D50 ST163床面裏上	—	—	0.13	—	—	—	0.5
137	C 200	〃	D50 ST163 フタ上	2.05	0.695	0.07	—	—	—	0.9
138	C 201	〃	E50 ST165床面	2.13	0.68	0.1	—	—	0.04	1.2
139	C 202	無文銭	H43 SX120 フタ上	1.67	1.18	0.07	—	—	—	0.2
140	C 203	〃	〃	1.58	—	0.08	—	—	—	0.2
141	C 204	判読不能	I44 SE67 フタ上	2.46	0.63	0.13	—	—	0.08	0.7
142	C 205	〃	〃	2.47	0.75	0.21	—	—	0.07	1.1
143	C 205	〃	D50 SE65 フタ上	2.18	0.72	0.09	—	—	—	1.1
144	C 207	〃	〃	—	—	0.14	—	—	—	0.2
145	C 208	厚祐元宝	I44 SE67 フタ上	2.36	0.69	0.14	1.98	0.55	0.07	2.1
146	C 209	〇〇通〇	E49 ST166 フタ上	2.39	—	0.13	1.92	0.63	0.04	1.0
147	C 210	判読不能	F50 SE68 フタ上	—	—	0.12	—	—	0.07	0.3
148	C 211	〃	E50 ST165 フタ上	2.44	0.71	0.13	—	0.56	0.06	1.5
149	C 212	〇〇〇〇	I44 SE67 フタ上	—	—	0.13	—	—	—	0.1
150	C 213	元豐通宝	F50 SE68 フタ上	2.49	0.66	0.16	1.86	0.53	0.06	2.1
151	C 214	開元通宝	E50 SX126 フタ上	2.435	0.67	0.12	2.08	0.62	0.07	2.2
152	C 216	判読不能	H43 SX120 フタ上	—	—	0.12	—	—	0.08	1.0
153	C 217	無文銭	〃	0.98	0.72	0.08	—	—	—	0.1
154	C 218	〃	〃	1.52	1.0	0.085	—	—	—	0.1
155	C 219	〃	I43 SX120 フタ上	1.84	0.75	0.06	—	—	—	0.4
156	C 220	〃	〃	0.78	0.96	0.07	—	—	—	—
157	C 221	〃	〃	1.27	0.82	0.07	—	—	—	—
158	C 222	〃	H43 SX120 フタ上	1.74	0.77	0.08	—	—	—	0.5
159	C 223	〃	I43 SX120 フタ上	1.75	0.885	0.05	—	—	—	0.3
160	C 224	〇元〇〇	〃	—	—	0.11	—	—	0.06	0.5
161	C 225	無文銭	I53 SX120 フタ上	1.50	1.14	0.07	—	—	—	0.1
162	C 226	〃	I43 SX120 フタ上	1.7	0.68	0.05	—	—	—	0.4
163	C 227	〃	〃	1.87	0.74	0.08	—	—	—	0.5
164	C 228	〃	〃	1.54	1.05	0.04	—	—	—	0.1
165	C 229	〃	〃	2.43	1.08	0.08	—	—	—	0.1
166	C 230	〃	〃	1.57	1.04	0.075	—	—	—	0.2
167	C 231	〃	〃	1.56	1.185	0.05	—	—	—	0.1
168	C 232	判読不能	I44 SE67 フタ上	2.41	—	0.15	—	0.53	0.09	0.9
169	C 233	無文銭	I43 SX120 フタ上	1.80	0.68	0.065	—	—	—	0.2
170	C 234	〃	F50 SE68 フタ上	1.90	0.63	0.08	—	—	—	0.5
171	C 235	〃	I43 SX120 フタ上	1.6	1.03	0.05	—	—	—	0.2
172	C 236	判読不能	〃	—	—	0.13	—	—	—	0.5
173	C 237	無文銭	H43 SX120 フタ上	—	—	0.07	—	—	—	—
174	C 238	〃	〃	1.75	0.82	0.065	—	—	—	0.8
175	C 239	判読不能	I44 SE67 フタ上	—	—	0.26	—	—	—	0.5
176	C 240	無文銭	〃	—	—	0.07	—	—	—	0.2
177	C 241	洪武通宝	I43 SX120 フタ上	2.11	0.62	0.11	1.78	0.55	0.02	1.0

178	C 242	判読不能	H43 SX 121 フタ上	2.07	0.61	--	--	0.52	0.06	5.6	受け替して出土
179	C 243	"	"	--	0.64	--	--	--	--		受け替して出土
180	C 244	"	"	2.21	0.62	0.1	1.74	0.43	0.04	1.7	
181	C 245	無文銭	H43 SX 120 フタ土	1.80	1.98	0.68	--	--	--	0.4	
182	C 246	天智元宝	"	2.43	0.72	0.14	1.96	0.55	0.06	2.0	
183	C 247	無文銭	I43 SX 120 フタ土	2.185	0.72	0.12	--	--	--	1.1	
184	C 248	洪武通宝	H43 ST 171C フタ土	2.33	0.59	0.18	1.86	0.54	0.05	3.6	銭銭
185	C 249	天智元宝	H43 SX 121 フタ土	2.445	0.67	0.12	1.91	0.58	0.05	2.7	
186	C 250	景徳元宝	C50 ST 168 フタ土	2.48	0.62	0.14	1.72	0.54	0.05	2.6	
187	C 251	大定通宝	H43 SX 121 フタ土	2.63	0.595	0.17	2.20	0.70	0.07	2.8	
188	C 252	皇宋通宝	"	2.385	0.72	0.15	1.93	0.53	0.05	2.3	
189	C 253	無文銭	F50 SE 68 フタ土	--	--	--	--	--	--	--	計測不可能
190	C 254	"	H43 SX 121 フタ土	2.26	--	0.13	1.94	0.54	0.03	1.0	
191	C 255	聖宋元宝	E52 皿下	2.34	0.66	0.1	1.84	0.52	0.05	2.4	
192	C 256	元豊通宝	"	2.43	0.64	0.12	2.03	0.63	0.02	2.8	
193	C 257	無文銭	"	2.12	0.68	0.095	--	--	--	1.3	
194	C 258	祥符通宝	"	2.58	0.56	0.145	1.92	0.56	0.03	3.7	
195	C 259	無文銭	"	2.20	0.73	0.09	--	--	--	1.7	
196	C 260	祥符通宝	"	2.53	0.63	0.14	1.93	0.67	0.05	4.0	
197	C 261	政和通宝	"	2.43	0.67	0.13	2.16	0.63	0.05	3.3	
198	C 262	無文銭	"	1.73	0.79	0.1	--	--	--	1.0	
199	C 263	洪武通宝	"	2.14	0.67	0.12	1.75	0.52	0.06	2.0	銭銭
200	C 264	天祐通宝	"	2.38	0.64	0.13	1.86	0.55	0.06	3.6	
201	C 265	洪武通宝	"	2.29	0.66	0.14	1.91	0.56	0.05	2.0	銭銭
202	C 266	"	"	2.14	0.58	0.1	1.75	0.52	0.02	1.7	"
203	C 267	判読不能	"	2.23	0.63	0.08	--	--	0.03	1.7	
204	C 268	無文銭	"	1.94	0.70	0.06	--	--	--	0.7	
205	C 269	"	"	1.89	0.70	0.08	--	--	--	1.0	
206	C 270	洪武通宝	"	2.21	0.58	0.14	1.84	0.555	0.05	2.3	銭銭
207	C 271	祥符元宝	"	2.34	0.64	0.13	1.4	0.52	0.05	1.8	
208	C 272	洪武通宝	"	2.13	0.56	0.17	1.80	0.53	0.05	2.2	銭銭
209	C 273	"	"	2.04	0.65	0.12	1.76	1.53	0.03	1.7	"
210	C 274	無文銭	"	1.74	0.7	0.13	--	--	--	1.3	
211	C 275	政和通宝	"	2.48	0.62	0.13	2.05	0.65	0.05	3.2	
212	C 276	無文銭	"	2.12	0.76	0.11	--	--	--	1.9	
213	C 277	洪武通宝	"	2.26	0.62	0.12	1.85	0.52	0.05	1.9	銭銭
214	C 278	"	"	2.26	0.56	0.14	1.83	0.52	0.05	2.6	"
215	C 279	無文銭	"	1.88	0.71	0.06	--	--	--	0.6	
216	C 280	景徳元宝	"	2.39	0.59	0.14	1.895	0.62	0.07	3.8	
217	C 281	治平元宝	"	2.34	0.62	0.13	1.88	0.54	0.05	3.2	
218	C 282	洪武通宝	"	2.14	0.56	0.125	1.78	0.495	0.05	1.9	銭銭
219	C 283	祥符元宝	"	2.32	0.6	0.12	1.89	0.55	0.03	2.2	
220	C 284	洪武通宝	"	2.26	0.58	0.14	1.88	0.56	0.07	3.2	銭銭
221	C 285	"	"	2.14	0.58	0.13	1.78	0.495	0.07	2.4	"
222	C 286	"	"	2.27	0.57	0.14	1.85	0.55	0.03	2.6	"
223	C 287	無文銭	"	2.18	0.695	0.085	--	--	--	1.6	
224	C 288	"	"	1.87	0.74	-0.08	--	--	--	0.6	
225	C 289	〇宋元宝	H43 SX 121 フタ上	2.5	--	0.18	--	--	--	2.4	
226	C 290	判読不能	"	2.3	0.73	0.11	--	--	--	1.5	
227	C 291	無文銭	"	2.16	0.76	0.09	--	--	--	1.2	
228	C 292	判読不能	"	2.26	0.74	0.12	--	--	--	1.9	
229	C 293	至和元宝	E50 ビット内フタ土	2.37	0.695	0.12	2.03	0.56	0.04	1.7	
230	C 294	判読不能	"	1.995	0.62	--	--	0.46	--	0.9	次焼成あり
231	C 295	皇宋通宝	E50 ビット内フタ土	2.48	0.74	0.14	1.88	0.58	0.08	3.2	
232	C 296	無文銭	"	1.84	0.68	0.07	--	--	--	0.6	
233	C 297	治平元宝	H43 SX 121 フタ上	2.36	0.61	0.12	1.96	0.54	0.06	3.0	
234	C 298	洪武通宝	"	0.6	0.14	--	0.53	0.05	1.2	銭銭	
235	C 299	無文銭	E50 ビット内床面	--	--	0.16	--	--	0.07	0.2	
236	C 300	"	H43 SX 121 フタ上	1.86	0.69	0.09	--	--	--	0.4	
237	C 301	"	I43 SX 120 フタ上	1.62	1.14	0.07	--	--	--	0.2	

238	C 302	無文鉄	H43 SX 121 フタ土	1.94	0.7	0.07	—	—	—	0.6
239	C 303	"	I 43 SX 126 フタ土	1.62	1.07	0.06	—	—	—	0.2
240	C 304	"	I 43 SX 120 フタ土	1.64	1.11	0.07	—	—	—	0.2
241	C 305	"	H43 SX 121 フタ土	2.24	0.70	0.18	—	—	—	0.09 1.7
242	C 306	"	"	1.74	0.78	0.07	—	—	—	0.4
243	C 307	"	"	2.08	0.54	0.09	—	—	—	1.2
244	C 308	洪武酒室	"	2.32	—	0.14	—	0.58	0.05	1.1 錫鉄
245	C 309	無文鉄	"	—	—	0.1	—	—	—	0.1
246	C 310	"	I 43 SX 120 フタ土	1.94	0.65	0.12	1.66	0.40	0.02	0.7
247	C 311	天守元室	H43 ST 173 フタ土	2.37	0.58	0.12	1.97	0.56	0.06	2.9
248	C 312	判読不能	G50 SB 68 フタ土	2.42	0.725	0.15	1.93	0.55	0.03	1.9
249	C 313	"	F50 SB 68 フタ土	—	—	0.15	—	—	—	0.5
250	C 314	祥寿元室	H43 III	2.46	0.62	0.09	1.78	0.5	0.03	2.3
251	C 315	〇〇酒室	"	2.36	0.71	0.13	1.92	—	—	0.06 2.1
252	C 316	鉄 鉄	H43 ビット内フタ土	—	—	0.16	—	—	—	0.08 0.3
253	C 317	聖元室	I 43 ST 170 フタ土	2.36	0.65	0.16	1.86	0.53	0.05	3.1
254	C 318	無文鉄	I 43 ST 170 フタ土	1.74	1.10	0.10	—	—	—	0.4
255	C 319	判読不能	"	2.30	0.58	0.11	1.92	0.53	0.06	1.5
256	C 320	無文鉄	"	1.72	0.975	0.07	—	—	—	0.2
257	C 321	"	H43 III上	2.23	0.61	0.12	1.90	—	—	0.07 1.9
258	C 322	元豊通室	H45 ST 176 フタ土	2.44	0.70	0.17	2.00	0.58	0.04	2.3
259	C 323	"	I 46 ST 180 フタ土	2.35	0.64	0.12	1.89	0.47	0.05	2.2
260	C 324	無文鉄	F50 SX 128 フタ土	1.23	0.61	0.06	—	—	—	0.2
261	C 325	"	"	0.56	0.77	0.06	—	—	—	0.2
262	C 326	"	"	1.885	0.67	0.07	—	—	—	0.6
263	C 327	太平通室	"	2.485	1.84	0.12	1.88	0.56	0.05	2.2
264	C 328	判読不能	"	2.25	0.62	0.13	—	—	—	1.0
265	C 329	〇〇元〇	"	2.32	0.62	0.1	—	—	—	1.7
266	C 330	元豊通室	I 42 ST 184 フタ土	2.41	0.64	0.135	1.80	0.5	0.07	3.1
267	C 331	判読不能	I 43 SX 122 フタ土	—	—	0.17	—	—	—	0.4
268	C 332	元祐通室	H42 ST 183 フタ土	2.40	0.68	0.145	1.88	0.535	0.05	3.0
269	C 333	判読不能	"	2.38	0.68	0.115	—	—	—	1.2
270	C 334	〇〇〇室	"	—	—	0.13	—	0.5	0.05	0.8
271	C 336	熊〇〇室	"	2.39	—	0.15	—	—	—	1.1
273	C 336	開元通室	"	2.42	0.61	0.155	1.98	0.56	0.07	2.9
274	C 337	洪武通室	H42 ST 183 床面直上	2.18	0.5	0.14	1.73	0.53	0.05	2.6 錫鉄
275	C 338	〇〇〇室	I 45 ST 180 床面	2.30	0.755	0.10	1.98	0.45	0.05	1.4
276	C 339	判読不能	I 46 ST 181 フタ土	2.2	0.7	0.13	—	—	—	0.8
277	C 340	"	I 46 ST 180 フタ土	2.34	0.74	0.12	—	—	—	0.08 2.6
278	C 341	天〇〇〇	H42 ST 184 フタ土	2.54	0.65	0.18	1.95	0.52	0.08	2.9
279	C 342	無文鉄	I 46 ST 180 フタ土	2.32	0.57	0.13	1.80	0.53	0.03	3.0
280	C 343	皇本通室	"	2.46	0.6	0.12	1.95	0.6	0.05	3.1
281	C 344	元祐通室	H42 ST 184 フタ土	2.41	0.62	0.11	1.77	0.55	0.05	2.5
282	C 345	洪武酒室	H44 SX 137 フタ土	2.35	0.52	0.22	0.97	0.6	0.05	3.3 錫鉄
283	C 346	無文鉄	"	1.7	0.84	0.07	—	—	—	0.5
284	C 347	判読不能	H42 ST 184 フタ土	2.24	0.69	0.12	—	—	—	1.6
285	C 348	"	I 42 SB 23 フタ土	—	—	0.16	—	—	—	0.2
286	C 349	"	"	—	—	0.18	—	—	—	0.2
287	C 350	無文鉄	I 46 ST 186 フタ土	2.20	0.65	0.12	—	—	—	1.2
288	C 351	聖元室	I 45 ST 185 フタ土	2.38	0.68	0.14	1.86	0.52	0.06	3.0
289	C 352	朝鮮通室	I 44 SB 25 フタ土	2.24	0.52	0.17	1.95	0.63	0.07	2.6
290	C 353	判読不能	H43 ビット内フタ土	—	—	0.15	—	—	—	0.05 0.5
291	C 354	嘉祐元室	H44 ビット内フタ土	2.36	1.64	0.14	1.88	0.61	0.05	2.7
292	C 355	皇本通室	H43 SX 129 フタ土	2.27	—	0.15	—	0.595	0.08	1.2
293	C 356	天禧通室	"	2.33	0.62	0.16	1.87	0.52	0.05	2.2 二次模成あり
294	C 357	〇半〇〇	H42 ST 172 フタ土	2.37	—	0.14	—	0.68	0.08	1.7
295	C 358	判読不能	"	—	—	0.15	—	—	—	0.07 0.3
296	C 359	元豊通室	J 48 SX 96 フタ土	2.45	0.62	0.14	1.86	0.53	0.06	2.1
297	C 360	判読不能	I 45 ビット内フタ土	2.36	0.63	0.12	—	—	—	1.7
298	C 361	"	"	2.21	0.65	0.12	—	—	—	2.0

299	C 362	判読不能	145 ビット内フク土	—	—	0.12	—	0.44	0.08	0.3	
300	C 363	無文銭	"	1.78	1.12	0.085	—	—	—	0.3	
301	C 364	判読不能	"	2.20	0.79	0.12	—	—	—	1.6	
302	C 365	無文銭	H45 ビット内フク土	—	—	0.055	—	—	—	—	
303	C 365	判読不能	H43 ビット内フク土	2.46	0.12	0.18	—	—	0.09	2.7	
304	C 367	"	H45 SX140 フク土	2.40	0.55	0.3	—	—	—	2.7	
305	C 368	"	H46 ST186 床面	2.37	0.69	0.15	—	—	—	1.5	
306	C 369	無文銭	J43 ST188 フク土	—	—	0.07	—	—	—	0.2	
307	C 370	判読不能	"	—	—	0.07	—	0.41	—	0.3	
308	C 371	平大逆字	146 ST190 フク土	2.32	0.55	0.18	2.0	0.65	0.09	2.7	
309	C 372	○武○室	F49 ビット内フク土	2.22	—	0.12	1.81	0.57	0.03	0.6	
310	C 373	判読不能	"	2.34	0.67	0.13	—	—	—	1.4	
311	C 374	無文銭	F50 ビット内フク土	1.85	0.68	0.1	—	—	—	0.5	
312	C 375	景祐元室	D51 ST159 フク土	2.25	0.5	0.11	1.98	0.62	0.05	2.1	
313	C 376	朝元通室	F49 SF20 フク土	2.44	0.71	0.13	2.09	0.6	0.06	2.9	
314	C 377	判読不能	F49 SX142 フク土	2.25	0.73	0.1	—	0.45	0.06	1.9	
315	C 378	"	F49 SD61 フク土	1.96	0.71	0.16	—	—	—	1.0	
316	C 379	洪武通宝	C52Ⅲ	2.07	0.62	0.08	1.72	0.47	0.03	0.8	縁紙
317	C 380	"	"	2.13	0.68	0.12	1.83	0.52	0.03	1.1	"
318	C 381	無文銭	E49 SD61 フク土	1.86	0.855	0.095	—	—	—	0.6	
319	C 382	"	"	1.46	1.21	0.09	—	—	—	0.1	
320	C 383	判読不能	F42Ⅲ上	2.18	0.63	0.1	1.78	0.52	0.05	1.1	
321	C 384	"	G49 SD61 フク土	2.43	0.68	0.14	1.90	0.6	0.08	2.8	
322	C 385	元祐通室	E49 SD61 フク土	2.42	0.71	0.155	1.9	0.51	0.06	2.6	
323	C 386	判読不能	G49 SD61 フク土	2.32	—	0.12	1.84	0.52	0.05	1.3	
324	C 387	祥符元室	E49 SD61 フク土	2.17	0.61	0.10	1.76	0.47	0.04	1.6	
325	C 388	至道元上	G42 ST191 フク土	2.45	0.6	0.12	1.77	0.5	0.04	2.5	
326	C 389	判読不能	G49 SD61 フク土	2.51	0.64	0.17	1.85	0.595	0.07	1.9	
327	C 390	"	"	2.28	0.72	0.15	1.86	0.49	0.07	3.1	
328	C 391	無文銭	D49 SD61 フク土	—	—	0.06	—	—	—	0.1	
329	C 392	"	G50 SX108 フク土	1.76	1.16	0.095	—	—	—	0.3	
330	C 393	朝元通室	E51Ⅲ	2.42	0.65	0.15	2.05	0.62	0.06	2.6	
331	C 394	無文銭	F49Ⅲ	2.15	—	0.12	1.84	0.51	0.05	0.7	
332	C 395	阜宋通宝	F42 SX144 フク土	2.455	0.69	0.13	1.94	0.55	0.07	2.9	
333	C 396	判読不能	"	—	—	0.11	—	—	—	0.1	
334	C 397	無文銭	G49 SX98 フク土	2.19	0.64	0.11	1.84	0.54	0.02	1.1	
335	C 398	五 貫 引	G50 SD61 フク土	2.22	0.48	0.15	—	—	—	3.3	埋土と混入か?
336	C 399	永楽通宝	E52 ビット内フク土	2.54	0.58	0.13	2.195	0.73	0.03	2.7	
337	C 400	判読不能	E49 ビット内フク土	—	—	0.15	—	—	—	0.3	
338	C 402	永楽通宝	"	2.47	0.53	0.17	2.08	0.68	0.05	3.3	
339	C 403	洪武通宝	"	2.33	0.53	0.195	1.89	0.59	0.05	3.0	縁紙
340	C 404	寛永通宝	表 隆	2.46	0.62	0.15	2.04	0.58	0.07	2.8	
341	C 405	無文銭	D52 ST107 フク土	1.98	0.84	0.86	—	—	—	0.5	
342	C 406	十 貫	D52 ST104 フク土	2.35	—	0.15	—	—	—	4.3	表に裏と混入
343	C 407	一 貫	H42 I	2.34	—	0.16	—	—	—	3.6	
344	C 408	"	表 隆	2.29	—	0.13	—	—	—	3.0	
345	C 409	無文銭	"	2.13	0.74	0.13	—	—	—	1.6	

Ch. 77 鑄型・須恵器・土師器注記表

Pl. No	Fig. No	遺物No	出土区	出土遺構	出土層	器 種	器 形	特 徴	備 考
60-1	—	P 2193	F 50	—	Ⅲ	—	鑄型		
60-2	—	P 2194	F 50	Pit	フク土	—	鑄型		
60-3	—	P 1510	E 50	—	ST177	フク土	鑄型		
60-4	—	P 1467	E 50	—	ST165	フク土	鑄型	透かし鑄の鑄型	
60-5	—	P 2191	F 50	SB20Pit	フク土	—	鑄型		
60-6	62-11	P 1925	H 42	SX132	床 面	須恵器	環	需若き(V)、火ダスキ、 糸切り底	
60-7	62-6	P 2157	H 42	SX132	床 面	須恵器	環	需若き(井)、火ダスキ、 糸切り底	
60-8	62-2	P 542	J 51	SX81	フク土	土師器	環	内堀、糸切り底	

The Report on Research of Excavation about  
The Historic Spot, The Namioka Castle

The historic spot 'The Namioka Castle' is seated on Namioka-machi, Minamitsugaru-gun, Aomori-prefecture, in Japan. A group of warriors lived in 'The Namioka Castle' and they were prospered from the 15th century to the 16th century. People said they were a descendant of CHIKAFUSA KITABATAKE who was on a brain truster of the South Dynasty.

The area was 230,000 m<sup>2</sup> wide. So, it was composed by eight parts of castle and was surrounded by moats. They were called SHIN-DATE, HIGASHI-DATE, SARUGAKU-DATE, KITA-DATE, UCHI-DATE, NISHI-DATE, KENGYOH-DATE, MUMYOH-NO-TATE. Then, they have been preserving better than any other ruins.

The research of excavation has been proceeding by the following three organizations, 'The Cultural Department', 'The Educational comission of Aomori-prefecture', 'The Educational comission of Namioka-machi'. They are tied up with each other. This project began in 1977, and it will be continued to 1987. This project has two meanings.

1. When the research of excavation was ended, we are going to make the Castle to arrange for the historic park.
2. People who are joining to this project make regional people to have the idea of protecting the cultural assets and to spread the one more and more.

Now, we want to show you the following five results of our research.

1. House style of 15th or 16th century.
  2. Protective capability of the castle in those days.
  3. The tools of daily life.
  4. Relation of productivity.
  5. The style of religion, etc.
- For example, we suppose that people used to live in 'Hottatebashira tatemonoato (SB)'. 'Tateana site (ST)'<sup>\*1</sup> was used to simple house or store house or workroom systematically. In addition to that, artesian well was followed by a house that was made of wood frame. And the wood is named Japanese cypress.<sup>\*2</sup>

Then we talk about the moat and the parapet that accompanied with castle particularly. The moat was 'Hakoyagen shape' and it was showed of (∟). The depth of it was about six or seven meters. And the castle had the middle

moat into the main moat. It was about from three to five meters wide and three or four meters high. The out side of level ground had sometimes the fence or simply moat. As we already mentioned, you noticed the castle had excellent defensive capability.

Now we want to talk about the tools of daily life in those days. When we dug up the ground, we got plenty of ceramics. Most of them were related to a dietary life.

For example, Celadon, White Ware, Blue and White Ware, Akae (Enameled Ware), etc (They were made in China). Mino Ware, Seto Ware, Echizen Ware, Karatsu Ware, Suzu Ware and Bizen Ware, etc (They were made in Japan). Japanese pottery was named for old local name that was produced. And they have various kinds of shapes. For instance, bowl, plate, jar, pot, and mortar, etc. Particularly in many kinds of ceramics which were made in China were over to 50%. It is very interesting thing when we think about the trade in those days.

We preserved the following other remains. Pan, scissors, Japanese sword, armor, arrowhead, nail, sickle, and <sup>\*3</sup>Hiuchigane—were made of iron; mirror, ornamental hairpin, hair tweezers, an image of Buddha, Japanese sword guard, <sup>\*4</sup>Seppa and a knife attached to the sword sheath—were made of copper; bowl, chopsticks, pail, round chip box and clogs—were made of wood; hand mill, pot, inkstone and whetstone—were made of stone; and plenty of copper coins, human bones, animal bones, rope, etc.

As we already referred to the remains, we got many kinds of arms. Because we think this ruin was the castle of the middle ages.

In addition to that we had several facts.

1. We supposed that people had the custom of drinking tea, because Tenmoku bowls and hand mills were dug up.

2. We guessed that people believed in Buddhism because of digging up the image of Buddha, censer and bell. And then, when we took the crucible and the mold, we supposed that people had made some simple industrial products.

This report was described a part of archaeological research about 'The Namioka Castle'.  
(Translated by Makihito Munakata)

\*Notes

1. Hottatebashira-tatemono : The building which was dug some holes and planted the pillar directly in the ground.
2. Tateana site: The shed which was dug down the ground and was roofed over straw or something.
3. Iliuchigane : A tool of making fire. It was made of steel and was put in a piece of wood. When we make a fire, we rub it against a flint.
4. Seppa : A piece of metal was inserted into the part which was hitting with a Japanese sword guard and a sheath.



---

## 浪岡城跡 VI

昭和 59 年 3 月 25 日 印刷

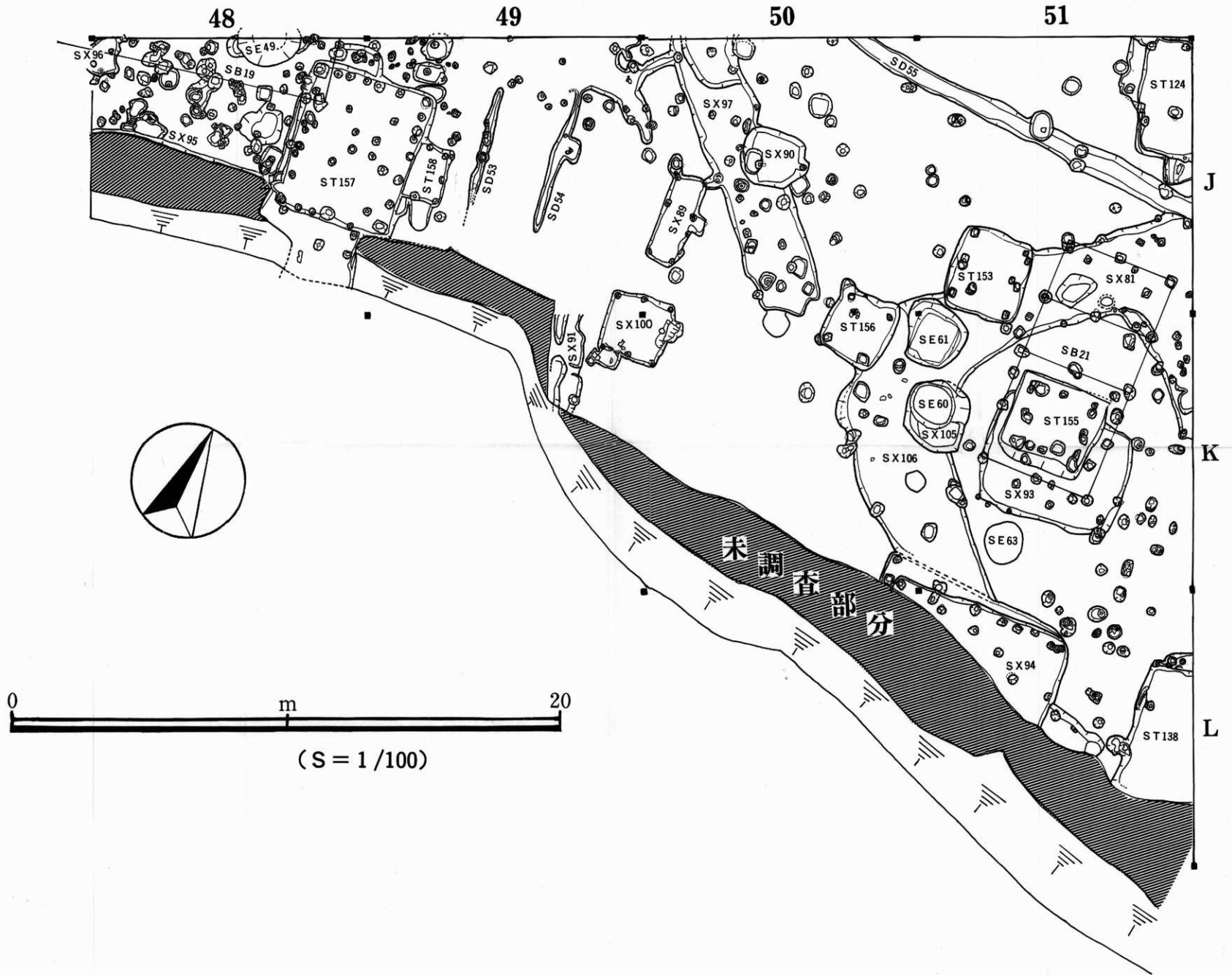
昭和 59 年 3 月 31 日 発行

発行 浪岡町教育委員会

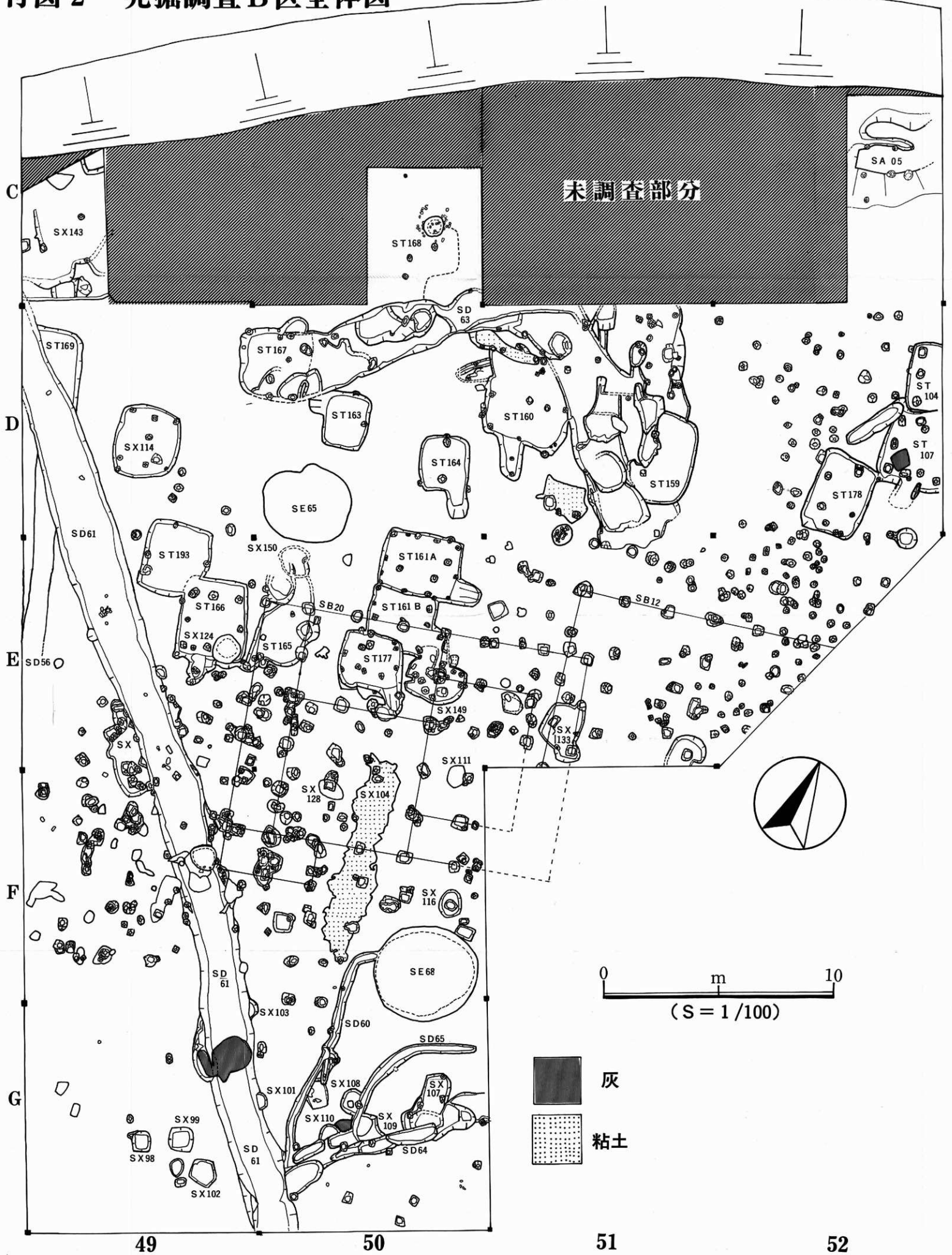
印刷 朝津軽新報社

---

付図1 発掘調査A区全体図



付図2 発掘調査B区全体図



未調査部分



0 m 10  
(S = 1/100)

- 灰
- 粘土

49

50

51

52

# 付図3 発掘調査C区全体図

41

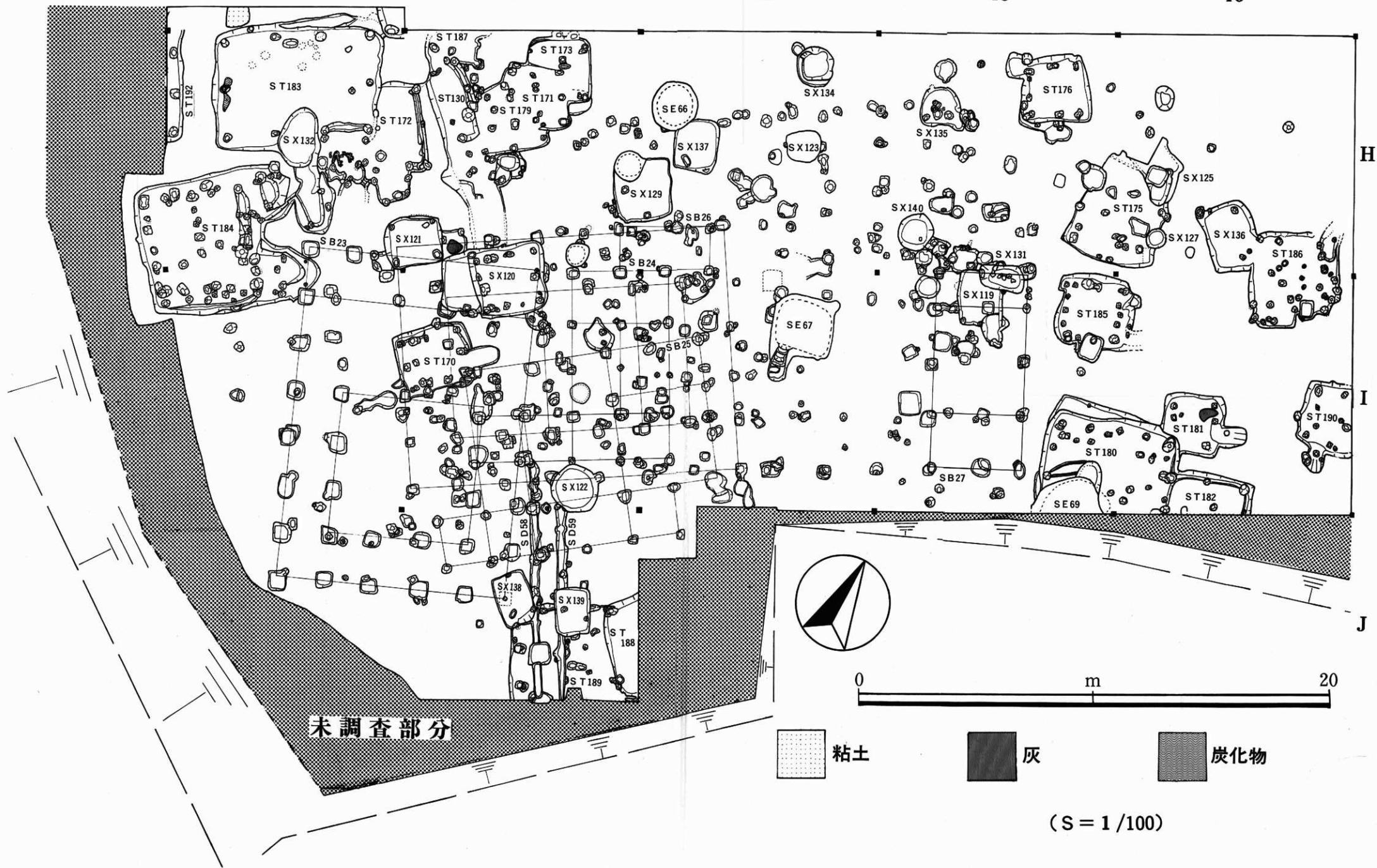
42

43

44

45

46



未調査部分



0 m 20

粘土 灰 炭化物

(S = 1/100)

